

博士論文

結果複合動詞の日中対照研究

陳慧萍

2019 年

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の目的及び意義	1
1.2 理論的な枠組み	3
1.2.1 生成語彙論 (Generative Lexicon)	3
1.2.2 因果関係と使役スキーマ	19
1.3 研究対象	24
1.4 研究データ	26
1.4.1 日本語の結果複合動詞リスト	26
1.4.2 中国語の結果複合動詞リストについて	29
1.5 本論文の構成	30
第2章 日中結果複合動詞の概観	32
2.1 結果複合動詞と結果構文	32
2.1.1 日英の結果構文と日本語の結果複合動詞	32
2.1.2 中国語の結果複合動詞について	34
2.2 日中結果複合動詞と英語の結果構文に関する分類及び意味制約	38
2.2.1 英語の結果構文に関する分類及び意味制約	38
2.2.2 中国語の結果複合動詞の分類及び意味制約	46
2.2.3 日本語の結果複合動詞の分類及び意味制約	57
2.3 日中結果複合動詞と英語の結果構文に関する比較	62
2.3.1 申・望月 (2009)	62
2.3.2 直接的な因果関係と間接的な因果関係	66
2.4 まとめ	71

第3章 目的語指向型の日中結果複合動詞	72
3.1 日中結果複合動詞の項構造	74
3.1.1 中国語の目的語指向型の分類	74
3.1.2 日本語の目的語指向型分類	85
3.2 生成語彙論における目的語指向型の結果複合動詞の分析	90
3.2.1 日中結果複合動詞におけるイベントとクオリアの融合	91
3.2.2 「踏む+V2」／“睬”+V2	97
3.2.3 「V1+破る・破く」／“V1+破”	107
3.3 中国語の結果複合動詞が取る疑似目的語の特徴	117
3.3.1 構文文法	119
3.3.2 “挖坏”（掘る－壊れる）“跑薄”（走る－薄い）	123
3.3.3 “滚破”（転がる－割れる）タイプ	129
3.4 文脈と目的語指向型の結果複合動詞	133
3.5 まとめ	137
第4章 主語指向型の日中結果複合動詞	139
4.1 主語指向型結果複合動詞の項構造	140
4.1.1 中国語の主語指向型結果複合動詞	140
4.1.2 日本語の主語指向型結果複合動詞	156
4.2 主語指向型結果複合動詞のクオリア構造	167
4.2.1 主語指向型日中結果複合動詞におけるイベントとクオリアの融合	167
4.2.2 V1+心理的・生理的变化の非対格動詞	174
4.2.3 「*走る+V2」／“跑”+V2	186
4.2.4 「V1+落ちる」／V1+“落”	188
4.3 まとめ	190

第 5 章 結論	192
5.1 論文内容のまとめ	192
5.1.1 直接的な因果関係と間接的な因果関係	192
5.1.2 目的語指向型の日中結果複合動詞	193
5.1.3 主語指向型の結果複合動詞	199
5.2 今後の課題	201
参考文献	203
謝辞	208
付録：日本語結果複合動詞リストと中国語結果複合動詞リスト	
日本語の結果複合動詞リスト	1
中国語の結果複合動詞リスト	9

第1章 序論

1.1 研究の目的及び意義

言語は複数の事象を一文にまとめて表現することがあり、原因となるできごとと結果のできごとが同時に表されることも珍しくない。ここでは、原因となる事象と結果事象がそれぞれいずれも動詞で表され、さらにそれらの動詞が複合語となった場合、それを結果複合動詞と呼ぶ。つまり、複合動詞において、原因となるできごとを前項動詞（以下 V1 で表す）が、結果状態を後項動詞（以下 V2 で表す）が示すことになる。日本語にも中国語にも結果複合動詞が存在する。英語には結果複合動詞がないが、結果構文が存在する。また、英語の結果構文は日中の結果複合動詞と同じ意味構造を持つので、日中の結果複合動詞と対応させることができる。そして、日中の結果複合動詞と英語の結果構文を比較すると、以下のような 3 つのタイプがある。

日中英で対応する型：

- (1) a. 猎人 打死 了 老虎。
liè rén dǎ sǐ le lǎo hǔ
ハンター 撃つ・死ぬ LE 虎
b. ハンターは虎を撃ち殺した。
c. The hunter shot the tiger dead.

中英で対応する型：

- (2) a 跑步者 跑-平 了 路面。
pǎo bù zhě pǎo-píng le lù miàn
ジョギングする人 走る・平らになる LE 路面
b. ジョギングする人が走って、路面が薄くなった。
c. The joggers ran the pavement thin.

中国語でのみ成立する型：

- (3) a. 新买的鞋子 不小心 在 下雨天 穿湿 了。
xīn mǎi de xié zǐ bú xiǎo xīn zài xià yǔ tiān chuān shī le
新しく買った の 靴 不注意 に 雨の日 履く・濡れる LE

- b. 雨の日にうっかり新しく買った靴を履いて、濡らしてしまった。
- c. *He wore his shoes wet on a rainy day.
- (4) a. ?长跑 狠 人 跑碎 肾结石 (新晚报 2013.1.8)
 chángpǎo hěn rén pǎo suì shèn jié shí
 長距離走 厳しい人 走る一砕ける 腎結石
- b. ストイックな長距離ランナーが走って腎臓結石が砕けた。
- c. *The person who is good at long distance race ran his kidney stone broken.

(1) では、中国語の“打死”（撃つー殺す）に、日本語の「撃ち殺す」と英語の shoot X dead が対応している。(2) の場合は中国語の複合動詞“跑平”（走るー平らになる）と英語の run X thin が成立するのに対し、日本語では複合動詞の形で容認されず、重文にして「走って、トラックが薄くなった」とせざるを得ない。さらに、(1) では、“老虎”（虎）は“打”（撃つ）／shoot の本来的な目的語であると同時に、結果複合動詞また結果構文の目的語にもなっている。その一方で、(2) にある“路面” pavement は“跑”（走る）／run の目的語ではないが結果複合動詞、結果構文の目的語である。そして、例 (3) (4) では、中国語では結果複合動詞が成立するものの、日本語の複合動詞は容認度が非常に低く、英語でも結果構文が非文となる。(3) の“穿湿”（履くー濡れる）を「*履き濡らす」、wear his shoes wet のように訳すことができない。(4) は中国語でのみ成立する例であるが、(3a) と比べ、その容認度はやや低い。(4a) は新聞の見出しから取った例であるが、記事の内容を読まないと、この結果複合動詞は理解しにくい。

上に述べたように、英語の結果構文、中国語の結果複合動詞と日本語の結果複合動詞には対応するタイプと対応しないタイプがある。さらに、同じ (1) と (2) のような対応するタイプあるいは (3) と (4) のような対応しないタイプであっても、それぞれの特徴も異なっている。従来、英語の結果構文、日本語の結果複合動詞と中国語の結果複合動詞に対する個別的な研究が盛んで、特に英語という個別言語における結果構文の基本的な特徴はほぼ解明されているかのように見える。ところが、日中結果複合動詞の対照研究に注目すると、解明されていない問題がたくさん存在している。例えば、日中結果複合動詞における意味制約については明らかになっていない部分がある。また、日中結果複合動詞に存在する差異はどのような原理的な理由から生じるのかなどの問題も解明されていない。

上記の問題を解決するため、本研究は生成語彙論の観点から考察を行う。Pustejovsky

(1995)の生成語彙論は、主に語の項構造、イベント構造、クオリア構造を体系的に示すことによって、語に含まれる意味を総合的に捉えることができる。本研究は、日中結果複合動詞の項構造、イベント構造、クオリア構造を分析したうえで、それらの動詞における意味制約、共通点と相違点、また日中結果複合動詞における様々な下位タイプの特徴を明らかにすることを目的とする。

その意義としては以下のようなになる。

1) 英語の結果構文に照らして、日中結果複合動詞における意味制約の新たな相違点を説明する。

2) 日中結果複合動詞を「目的語指向型」と「主語指向型」に分け、データベースから収集した多くの事例を通じて、日中結果複合動詞が対応しやすいタイプと対応しにくいタイプの特徴を記述し、その原因を解明する。

3) 中国語の結果複合動詞では、疑似目的語として現れる名詞の特徴を説明する。

1.2 理論的な枠組み

日中結果複合動詞の分析に入る前に、その理論的な根拠となる生成語彙論を説明する。

1.2.1 節で、Pustejovsky (1995)、小野 (2005) を中心に、生成語彙論の仕組みと意味を生成するシステムを紹介した後、1.2.2 節で、小野 (2005) が提案する使役スキーマに基づき、生成語彙論と英語の結果構文、及び結果複合動詞との関連性を説明する。

1.2.1 生成語彙論 (Generative Lexicon)

語の意味とは何か。従来の語彙論によると、辞書に載っている静的な意味の羅列だけが語義である。この場合、例えばケーキの意味は小麦粉に砂糖・卵・油脂類・牛乳・香料などを混ぜて焼いた洋菓子をベースにして、生クリームや果物を加えて作った菓子となろう。しかし、このような解釈は本当にケーキの意味を言い尽くしているだろうか。ケーキと言えば、「太りやすい食べ物」「誕生日を祝うもの」などのイメージを喚起することもできる。生成語彙論は辞書に載っている意味以外に、その喚起されたものも語彙の一部だと考えられる。小野 (2005 : 3) は言語使用者の頭の中に記憶された語彙をレキシコン (Lexicon) と呼ぶ。さらに、Pustejovsky (1995) は静的な意味論と異なり、生成語彙論は単語の創造的使用をより捉えることができると主張する。具体的には、(5) の *newspaper* で語義が文脈によって変化する現象を見てみよう。

- (5) a. The newspapers attacked the President for raising taxes.
 b. Mary spilled coffee on the newspaper.
 c. John got angry at the newspaper.

(Pustejovsky 1995 : 91-92)

(5a) の newspaper は新聞社をさしているが、(5b) の newspaper は新聞紙という実物を意味し、(5c) では新聞記事のことを表す。以上の現象に対し、従来の意味論はメトニミーの修辭的な技法として説明するが、それだけでは、なぜ同じ出版物であるはずの book に「出版社」の意味がないのかを説明できない。

- (6) a. *The book has raised the price of paperbacks.
 b. *The author is suing the book for breach of contract.

(Pustejovsky 1995 : 154)

(5a) と (6) の違いを説明するには、newspaper の動作主体 (Agent) は新聞社であり、book は執筆者であるという語用論的な知識を、辞書の中に記載しておく必要がある。単にメトニミーによる語義拡張と言うのでは不十分であり、どのような多義性が可能なのかを説明しなければ妥当な意味論とは言えない。Pustejovsky (1995) の生成語彙論では、語彙項目に演算的なシステムの特徴を与えることにより、語に含まれる意味を全般的に捉えるモデルなのである。この演算的なシステムには、Argument structure (項構造)、Event structure (イベント構造)、Qualia structure (クオリア構造)、Lexical inheritance structure (語彙階層構造) という 4 つのレベルの表現と、タイプ強制 (type coercion)、共合成 (co-composition)、選択束縛¹ (selective binding) という 3 つの生成手段がある。以下、順に説明していく。

1.2.1.1 項構造

述語が要求する要素が「項」である。一般には主語や目的語として実現する名詞句が項と呼ばれるが、Pustejovsky (1995) は項を以下の 4 種類に分ける。

¹ 選択束縛は、主に形容詞と名詞を組み合わせるときに用いられる方法であり、本論文と関係しないため、ここでは説明を省略する。

- (7) a. TRUE ARGUMENTS: Syntactically realized parameters of the lexical item;
e.g., “John arrived late,”
- b. DEFAULT ARGUMENTS: Parameters which participate in the logical expressions in the qualia, but which are not necessarily expressed syntactically;
e.g., John built the house out of bricks.
- c. SHADOW ARGUMENTS: Parameters which are semantically incorporated into the lexical item. They can be expressed only by operations of subtyping or discourse specification;
e.g., Mary buttered her toast with an expensive butter.
- d. TRUE ADJUNCTS: Parameters which modify the logical expression, but are part of the situational interpretation, and are not tied to any particular lexical item’s semantic representation. These include adjunct expressions of temporal or spatial modification;
e.g., Mary drove down to New York on Tuesday.

(Pustejovsky 1995 : 63-64)

(7a) は一般に項と呼ばれるもので、統語的にも意味的にも必要とされるものである。

(7b) のデフォルト項は実現しなくてもよいが、論理的に必要とされる項を指す。統語上では、PP として、あるいは真の項を修飾する位置に現れる。

- (8) a. Mary built a house with wood.
b. Mary built a wooden house.

(Pustejovsky 1995 : 66)

家を建てるためには何らかの建築資材を使うのは当然である。つまり、建築資材は論理的には必要とされるが、統語的に実現する必要はない。(8a) では、デフォルト項である wood は PP の位置に、(8b) では wooden は house を修飾する位置に現れている。

続いて、(7c) の影の項 (shadow argument) を見よう。影の項は語の意味に含まれており、特に新情報を伴わなければ、余剰的であり、出現しない。

- (9) a. Mary buttered her toast with margarine / *with butter.
 b. Harry kicked the wall with his gammy leg / *with his leg.

(Pustejovsky 1995 : 65)

Butter には動詞と名詞という 2 つの使い方がある。動詞としての butter は、「バターで塗る」という意味であるので、with butter は無駄である。同じく、kick には「足で蹴る」の意味があり、ただ足で蹴るというだけでは不自然であり、「不自由な足」などの情報を付加する必要がある。

(7d) の真の付加詞は時間や場所などの付加的な情報を表している。これらの情報は語の意味とは結びついていないが、状況解釈の一部をなす。つまり、個々の動詞ではなく、動詞が表す事象のタイプと関係している。(10) の動詞が時間表現で修飾できるのは、sleep というより、sleep の表すイベントと関わっている。

- (10) John slept late on Tuesday.

(Pustejovsky 1995 : 67)

以上の項を項構造で表すと、(11) のようになり、項はリストで表示される。なお、D-ARG はデフォルト項、S-ARG は影の項を表す。動詞 build の項構造は (12) の通りである。

$$(11) \left[\begin{array}{c} \alpha \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = \dots \\ \text{ARG}_2 = \dots \\ \text{D-ARG}_1 = \dots \\ \text{S-ARG}_2 = \dots \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(12) \left[\begin{array}{c} \text{build} \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = \text{animate_individual} \\ \text{ARG}_2 = \text{artifact} \\ \text{D-ARG}_1 = \text{material} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Pustejovsky 1995 : 67)

生成語集論では、各項の意味的な情報も記述されている。例えば、(12) では、すべてのも

のが自由に **build** の項になるわけではなく、 ARG_1 となるのは有生の個体であり、 ARG_2 は人工物である。

1.2.1.2 イベント構造

生成語彙論では、語彙の aspekto はイベント構造に表示される。動詞の aspekto には、もっとも代表的な分類方法として、Vendler (1967) や Dowty (1979) が提案した状態、活動、達成、到達という 4 つのタイプがある。

(13) States: know, believe, have, love

Activities: run, walk, swim, drive a car

Accomplishments: paint a picture, make a chair, draw a circle, push a cart

Achievements: recognize, spot, find, die

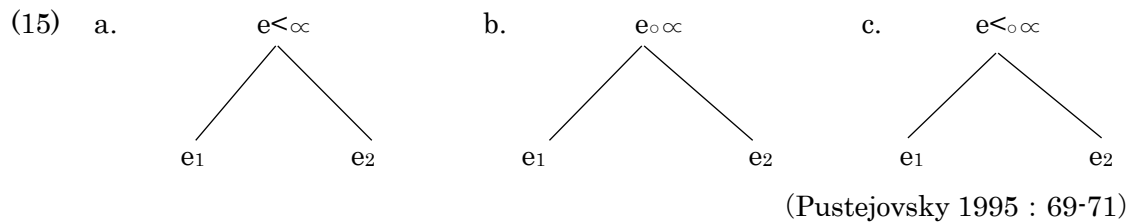
この 4 つのタイプの中では、活動と状態には完了性 (telicity) がないのに対し、達成と到達にはある。また、到達動詞は瞬間的な性質を持つが、動作動詞、状態動詞、達成動詞には継続的な性質がある。これに対して Pustejovsky (1991, 1995) は、完了性を持つ到達動詞と達成相違を一つのタイプにまとめ、state、process、transition という三つのカテゴリーで表示する。

(14) a. Processes: walk, run

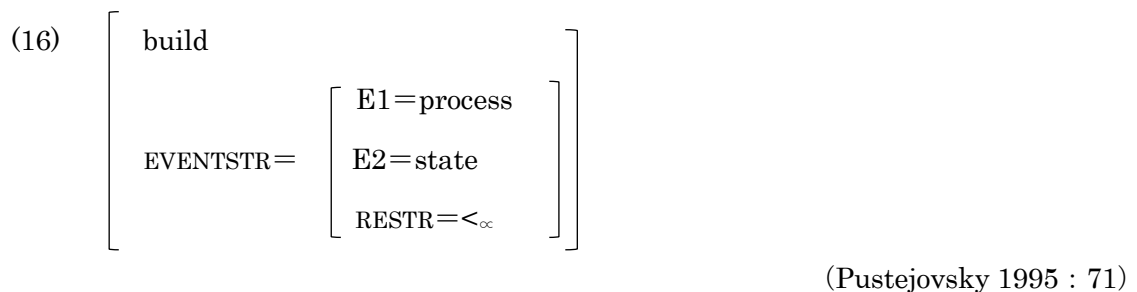
b. Transition: build, destroy, die, find, arrive

c. States: sick, know, love, resemble

(14) の processes と states に属する動詞には 1 つのイベントしかなく、単一の事象構造を持つ。一方、build や destroy などの transition に分類される動詞は二つのイベントを持つ複合事象であり、二つの事象がどのような時間関係を持つかによって、次の三つのパターンに分類される。



(15a) では、 e_1 と e_2 は連続しているが重複はない。(15b) では、 e_1 と e_2 が完全に重複している。(15c) では、 e_1 が先に生起するが、一部重複している。例えば、**transition** に属する **build** は以下のように表示される。



動詞 **build** には二つの下位イベントがある。 e_1 は「建てる」という動作を、 e_2 が建てたあとの結果状態を表す。**RESTR** は e_1 と e_2 が重複のない連続した時間関係を持つことを表している。

1.2.1.3 クオリア構造

生成語彙論の最も特徴的な表示がクオリア構造である。クオリア構造は “that set of properties or events associated with a lexical item which best explain what that word means” (Pustejovsky 1995 : 77) (語彙項目に関連した、その語を最もよく説明する属性や事象の集合) (小野 2005 : 24) と定義される。

クオリア構造には、主に 4 つの面がある。(訳および説明は小野 2005 : 24 による)

- (17) a. **CONSTITUTIVE**: the relation between an object and its constituents, or proper parts. (構成クオリア : 物体とそれを構成する部分の関係)
- i : Material
- ii : Weight

- iii : Parts and component elements
- b. FORMAL: That which distinguishes the object within a larger domain.
(形式クオリア : 物体を他の物体から識別する関係)
 - i . Orientation
 - ii . Magnitude
 - iii . Shape
 - iv . Dimensionality
 - v . Color
 - vi . Position
- c. TELIC: Purpose and function of the object
(目的クオリア : 物体の目的と機能)
 - i . Purpose that an agent has in performing an act.
 - ii . Built-in function or aim which specifies certain activities,
- d. AGENTIVE: Factors involved in the origin or bringing about of an object.
(主体クオリア : 物体の起源や発生に関する要因)
 - i . Creator
 - ii . Artifact
 - iii . Natural Kind
 - iv . Causal Chain

(Pustejovsky 1995 : 85-86)

構成クオリアは物体を構成する部分あるいは物体の材料や重量を表す。例えば「箸」の構成クオリアには、その箸を作る材料の木が考えられる。語義の部分・全体関係 (metonymy) も構成クオリアの情報の一部であり、“An X is a part of a Y” または、“An X consists of Y(s)” のような公式で捉えられる (小野 2005 : 27)。Finger であれば hand の一部分であるため、その構成クオリアは (18) のように表示できる。

$$(18) \quad \left[\begin{array}{l} \text{finger} \\ \text{QUALIA} = [\text{CONST} = \text{part_of}(x, y: \text{hand})] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 27)

Pustejovsky (1995) で述べられている構成クオリアは主に名詞を対象にしており、そのままでは動詞に応用しにくい。本研究は小野 (2005) に従い、動詞の構成クオリアはその動詞を指し示すイベントの参与者を含んでおり、動詞の項構造と連動すると考える。具体的にフレームの例としてよく挙げられる「売買フレーム」で説明しよう。フレームとは、意味の理解を動機づけるある特定の経験基盤のことを言う (小野 2005 : 44)。「売買フレーム」は主に「売り手」「買い手」「品物」「代金」という 4 つの要素から構成される。小野 (2005) は buy, sell, pay, charge などの動詞はすべてこのフレームに関連するが、各要素の視点、動機、意図などから、フレームのどの部分を焦点化するかによって、選ばれる動詞が異なると述べている。「売買フレーム」を生成語彙論の枠組みに組み込むと、フレームの事象参与者は構成クオリアにより、物を売買する目的は目的クオリアにより示すことができる。

$$(19) \left[\begin{array}{c} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{c} \text{CONST} = \left[\begin{array}{c} \text{x=seller,} \\ \text{y=buyer} \\ \text{z:goods} \\ \text{w:money} \end{array} \right] \\ \text{TELIC=commercial transaction} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 45)

上記のクオリアは動詞の項構造と連動しつつ、各参与者に関する情報をより詳しく記述している。さて、(19) で示されている参与者がどの項として言語的に現れるのかは動詞により異なる。(20a) の sell では、主語は「売り手」で、目的語が「品物」であるが、(20b) の pay では、主語は「買い手」に、目的語は「金」に変わっている。

$$(20) \text{ a. } \left[\begin{array}{c} \text{sell} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = \text{x:seller(subject)} \\ \text{ARG}_2 = \text{y:goods(object)} \\ \text{ARG}_3 = \text{z:buyer(oblique)} \\ \text{D-ARG} = \text{w:money(adjunct)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$b. \left[\begin{array}{c} \text{pay} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = y: \text{buyer}(\text{oblique}) \\ \text{ARG}_2 = w: \text{goods}(\text{object}) \\ \text{ARG}_3 = x \\ \text{D-ARG} = z \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 45)

sell を例として、その構成クオリアと項構造を組み合わせると、(21) のようになる。

$$(21) \left[\begin{array}{c} \text{sell} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = x: \text{seller}(\text{subject}) \\ \text{ARG}_2 = y: \text{goods}(\text{object}) \\ \text{ARG}_3 = z: \text{buyer}(\text{oblique}) \\ \text{D-ARG} = w: \text{money}(\text{adjunct}) \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{c} \text{CONST} = \left[\begin{array}{c} x = \text{seller}, \\ y = \text{buyer} \\ z: \text{goods} \\ w: \text{money} \end{array} \right] \\ \text{TELIC} = \text{commercial transaction} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

「泣く」という動詞も同じように記述できる。「泣く」の語彙的意味フレームは以下のように表示される。

表 1 「泣く」の語彙的意味フレーム

[naku] _v	
背景フレーム：＜感情フレーム＞	
中心事象	【泣く人】：ある【目】から【涙】を出す
事象参与者 ²	【泣く人】：ある【刺激】によって【涙】を出す

² 陳・松本 (2018 : 64) によると、事象参与者には中心的・周辺のという区別があり、中心的な事象参与者は動詞が指し示す事象を表すために必要な要素を指し、周辺の事象参与者

	【刺激】：【泣く人】のある感情引き起こすもの
	【涙】：ある【刺激】によって【泣く人】の【目】から出る液体
	【目】：【涙】を出す【泣く人】の身体部位
	(【周りの人】)：【泣く人】が【涙】を出すのを見ている周囲の人
	(【頬】)
	(【鼻】)
原因	(ある【刺激】によって【泣く人】が強い悲しみを感ずる； ある【刺激】によって【泣く人】が強い喜びを感ずる；…)
様態	(静かに；激しく；体を震わせて；狂ったように；…)
目的	(つらいことを忘れるため；ストレスを発散するため；…)
結果	(【周りの人】に影響を与える；【泣く人】が疲れる；【泣く人】の【目】から腫れる；【涙】で【頬】などが濡れる； すっきりする；…)
共起事象	(叫びながら；喘ぎながら；【鼻】をすすりながら；…) ⋮

(陳・松本 2018 : 65)

表 1 の参加者が「泣く」の構成クオリアに含まれるが、動詞「泣く」の項は「泣く人」のみで、「目」「涙」などの参加者は「泣く」の項とはならない。

$$(22) \left[\begin{array}{l} \text{泣く} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{彼女}] \\ \text{QUALIA} = \left[\text{CONST} = \left[\begin{array}{l} x : \text{彼女} \\ y : \text{目} \\ z : \text{涙} \end{array} \right] \right] \end{array} \right]$$

構成クオリアを項と連動させることは複合動詞の記述において非常に有効であるので、第 3 章で改めて説明を行う。

はそのベースとなる要素を指す。【 】は事象参加者を表す。周辺の参加者は () に入っている。

形式クオリアとは、物の大きさや形、色などの特徴であるが、小野（2005）は “An X is a Y” あるいは “An X is a kind/type of Y” という包摂関係（hyponymy）も名詞の形式クオリアであるとする。たとえば **apple** の形式クオリアは **fruit** である。

$$(23) \left[\begin{array}{l} \text{apple} \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{fruit}(x)] \end{array} \right]$$

（小野 2005 : 29）

目的クオリアは物体が作られた目的やその機能などを指す。例えば、食品の目的は「食べる」こと、ナイフの目的は「何か（y）を切る」ことにあるので、**knife** の目的クオリアは以下のように表される。

$$(24) \left[\begin{array}{l} \text{knife} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x:\text{tool}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = x \\ \text{TELIC} = \text{cut}(e, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

（Pustejovsky 1995 : 100）

最後の主体クオリアとは、事物の起源や発生の要因についての基本的な情報である。車を例にとると、車という乗り物が存在するのは、メーカー（z）が製造したからであり、主体クオリアは（25）のように表示される。

$$(25) \left[\begin{array}{l} \text{car} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x:\text{vehicle}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = x \\ \text{TELIC} = \text{drive}(e, y, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{create}(e, z, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

（Pustejovsky 1995 : 113）

クオリア構造について、注意すべきは次の二点である。

- (26) a. Every category expresses a qualia structure;
 b. Not all lexical items carry a value for each qualia role.

(Pustejovsky 1995 : 76)

(26a) において、すべての品詞にはクオリア構造があると強調されている。影山 (2005) は Pustejovsky (1995) を受けて、次の動詞のクオリア構造を提案している。

(27) 動詞のクオリア構造

- a. 形式役割³=その動詞が表す事象 (eventuality) のタイプ (activity、state、process、transition)
 b. 構成役割=その動詞の語彙概念構造 (LCS) (影山 (1996) で想定したような構造化された意味表示)
 c. 目的役割=その動詞が含意する行為の目的・目標・機能
 d. 主体役割=その動詞表現が成立するための前提 (presupposition) やフレーム (場面や背景状況)

(影山 2005 : 83-84)

影山 (2005) は、Pustejovsky (1995) や小野 (2005) と異なり、動詞の事象タイプはある動詞を他の動詞から区別する一つの重要な特徴であり、これを形式クオリアとすれば、イベント構造を別に設ける必要がなくなるという。構成クオリアは対象とその対象を構成する部分との関係を指すので、動詞の構成クオリアに最もふさわしいのは、動詞の意味述語と項を構造化して表示する語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) であると主張する。動詞の目的役割とは、動詞が表す行為の目的ということになる。例えば「部屋を掃除する」目的は「部屋をきれいにする」ことである。目的を持たない動詞の場合は、目的役割は空欄となるが、この点は (26b) 「すべての語彙項目が4つのクオリア構造をすべて持つわけではない」ため、問題とはならない。最後の主体クオリアは動作が発生する前提あるいは背景などのことを指す。「探す」であれば、今は所有していないという想定がある。これが主体クオリアである。動詞のクオリア構造の具体例を (28) に示す。

³ 影山 (2005) では、小野 (2005) と異なり、Qualia を「役割」と訳しているが、本論文では、引用以外では訳語を「クオリア」で統一する。

(28) 「(山の中をあちこち) 埋蔵金を探す」

形式役割＝過程 (process)

構成役割＝[]x CONTROL [GAZE-[]x MOVE[Route]]

目的役割＝**find** (e,x,y)

主体役割＝**not-have** (x,y)

(影山 2005 : 85)

影山の主張は簡潔で見通しもよいが、問題も多い。

まず名詞の形式クオリアが「物体を他の物体から識別する関係」であるとするならば、動詞の形式クオリアは「動詞の表す事象を他の事象から識別する関係」となるはずである。しかし、activity、state、process、transition の 4 タイプだけでそれを表すのは不可能である。Activity ならばその様態、transition ならばその結果状態も含めて表示しなければ、他の事象と区別することはできない。

第二に、影山は事象構造を動詞のクオリアとするが、イベント構造を持つ名詞も存在するから、やはり形式クオリアとは別にイベント構造は必要である。たとえば (29) の examination は「試験」という結果名詞と、「試験をすること」という事象名詞の二つの用法があるが、形式クオリアとイベント構造が独立して存在することによってはじめて、この語の意味全体を表示したことになる。

$$(29) \left[\begin{array}{l} \text{examination} \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E1} = \mathbf{process} \\ \text{E2} = \mathbf{state} \\ \text{RESTR} = <_{\infty} \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \mathbf{animate_ind} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{physobj} \end{array} \right] \\ \text{ARG2} = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \mathbf{physobj} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{entity} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \mathbf{examine_result} (e_2, \boxed{2}) \\ \text{AGENTIVE} = \mathbf{examine_act} (e_1, \boxed{1}, \boxed{2}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Pustejovsky 1995 : 171)

1.2.1.4 生成語彙論の生成手段

Pustejovsky (1995) や小野 (2005) は項構造、イベント構造とクオリア構造がただ語の意味をリスト化するものではなく、特にクオリア構造には語の意味を豊かにする生成的な仕組みがあると主張している。その具体的の方法として、タイプ強制 (type coercion)、共合成 (co-composition)、選択束縛 (selective binding) (Pustejovsky 1995) がある。以下では、本論文と関わらない選択束縛 (selective binding) を除く二つの操作をみていく。まず、動詞 **begin** を例に、タイプ強制の特徴を説明する。

- (30) a. John began a book.
 b. John began reading a book.
 c. John began to read a book

(Pustejovsky 1995 : 115)

動詞 **begin** は (31) に示すように、ある事象の開始を表すから、その目的語は何らかの事象を含んでいるはずである。(31a) では、**begin** の目的語は **book** という物質名詞であるにもかかわらず、(30a) は (30b,c) と同様に、「本を読み始める」という意味である。このように、物質名詞を事象と結びつけて解釈することをタイプ強制と呼ぶ。しかし、なぜ **book** と **read** を結びつけることができるのであろうか。

$$(31) \left[\begin{array}{l} \text{begin} \\ \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \mathbf{transition} \\ E_2 = \mathbf{transition} \\ \text{RESTR} = <_{\circ} \infty \end{array} \right] \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \mathbf{x : human} \\ \text{ARG}_2 = \mathbf{e_2} \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \mathbf{P(e_2, x)} \\ \text{AGENTIVE} = \mathbf{begin_act(e_1, x, e_2)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Pustejovsky 1995 : 116)

先に述べたように、**book** の形式クオリアは印刷物であり、これは動詞が要求するイベントとマッチしないが、目的クオリアの **read** という情報は **begin** が要求する事象と一致する。

このような場合はタイプ強制により、動詞が名詞の目的のクオリア情報を読み取ることができ。このようにして (30a) は、(30b,c) と同様に、「本を読み始める」という解釈が可能となるのである。

$$(32) \left[\begin{array}{c} \text{book} \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{c} \text{CONST}=\text{bound_pages}(x) \\ \text{FORMAL}=\text{print_matter}(x) \\ \text{TELIC}=\text{read}(e,w,y) \\ \text{AGENTIVE}=\text{write}(e,x,y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 49)

次に共合成 (co-composition) をみる。共合成とは、複数の語のクオリア構造を統合することによって新しい意味を生成し、語が多義的に見える現象を説明する操作である。たとえば (33) の動詞 **bake** は「何かを焼く」という意味と、「焼くことによって何かを作り出す」という二つの意味があるように見える。つまり、**bake** は動作動詞と創造動詞 (creation verb) で多義的であるかのように振る舞う。

- (33) a. John baked the potato.
b. John baked the cake.

(Pustejovsky 1995 : 122)

この **bake** の意味は目的語との共起によって生じたものである。創造動詞としての意味は、**cake** との組み合わせによるのであり、目的語の人工物であるという意味が動詞の意味に影響を与え、結果として動詞と目的語全体で新しい意味表示ができ、あたかも動詞が創造動詞であるかのように見えるのである。まず **bake** と **cake** の語彙構造表示を以下に示す。

$$\begin{array}{l}
(34) \left[\begin{array}{l} \text{bake} \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ \text{HEAD} = e_1 \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \text{animate_ind} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{ARG}_2 = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \text{mass} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{state_change_lcp} \\ \text{AGENTIVE} = \text{bake_act}(e_1, \boxed{1}, \boxed{2}) \end{array} \right] \end{array} \right] \\
(35) \left[\begin{array}{l} \text{cake} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \mathbf{x} : \text{food_ind} \\ \text{D-ARG}_1 = \mathbf{y} : \text{mass} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \mathbf{y} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{x} \\ \text{TELIC} = \text{eat}(e_2, \mathbf{z}, \mathbf{x}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{bake_act}(e_1, \mathbf{w}, \mathbf{y}) \end{array} \right] \end{array} \right]
\end{array}$$

(Pustejovsky 1995 : 123)

ここで **cake** の主体クオリアを見ると、**bake** と共通していることが分かる。これが **cake** の **potato** とは異なる点で、これにより **cake** が **bake** の目的語となったときに、動詞句 VP 全体でクオリアの統合が可能となる。これを共合成と呼ぶ。共合成の結果は VP レベルの意味表示であるが、以下のように **build** のような創造動詞の意味表示と同じである。

$$\begin{array}{l}
(36) \quad \left[\begin{array}{l} \text{bake a cake} \\ \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1:\text{process} \\ E_2 = e_1:\text{state} \\ \text{RESTR} = <_{\infty} \\ \text{HEAD} = e_1 \end{array} \right] \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \text{animate_ind} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{ARG}_2 = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \text{artifact} \\ \text{CONST} = \boxed{3} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{D-ARG}_1 = \boxed{3} \left[\begin{array}{l} \text{material} \\ \text{FORMAL} = \text{mass} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{create-lcp} \\ \text{FORMAL} = \text{exist}(e_2, \boxed{2}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{bake_act}(e_1, \boxed{1}, \boxed{3}) \end{array} \right] \end{array} \right]
\end{array}$$

(Pustejovsky 1995 : 125)

$$\begin{array}{l}
(37) \quad \left[\begin{array}{l} \text{build} \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_2 = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \text{artifact} \\ \text{CONST} = \boxed{3} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{D-ARG}_1 = \boxed{3} \left[\begin{array}{l} \text{material} \\ \text{FORMAL} = \text{mass} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{create-lcp} \\ \text{FORMAL} = \text{exist}(e_2, \boxed{2}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{build_act}(e_1, \boxed{1}, \boxed{3}) \end{array} \right] \end{array} \right]
\end{array}$$

(Pustejovsky 1995 : 103)

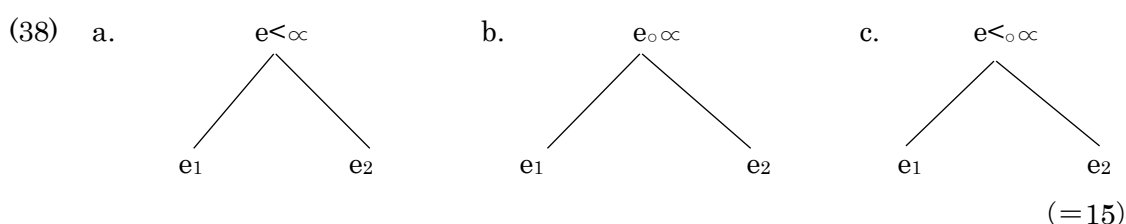
1.2.2 因果関係と使役スキーマ

本論文の研究対象は日本語と中国語の結果複合動詞である。これは原因事象と結果事象からなる複合事象が一つの複合動詞として実現する構文である。そこでこの節では、因果関係を表す使役事象を中心に見ていく。まず Pustejovsky (1995) による単一動詞内の使役表示

を見たあとで、小野（2005）による結果構文の使役表示を見る。

Pustejovsky (1995: 185) によれば、使役関係を持つイベントの間には二つの制約がある。一つは原因事象と結果事象の時間関係で、もう一つは事象の一貫性である。

まず時間関係であるが、当然ながら、原因事象は結果事象に先行しなければならない。このとき、原因事象が完全に終わってから、結果イベントが発生してもよいし、原因事象が完了しないうちに、結果イベントが発生してもよい。すなわち、(38a) または (38c) で表される時間関係のいずれかでなければならない。



次に、原因事象と結果事象には一貫性がなければならない。この点については、Pustejovsky (1995) は「項の一貫性 (argument coherence)」を提案し、原因事象と結果事象の間に、共通する項がなければならないとする。

(39) ARGUMENT COHERENCE

The relation expressed by the causing event and that expressed by the resulting event must make reference to at least one parameter in common.

(Pustejovsky 1995 : 186)

具体例として (40) の kill の意味構造を見て見よう。

$$\begin{aligned}
(40) \quad & \left[\begin{array}{l} \text{kill} \\ \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \mathbf{e_1 : process} \\ E_2 = \mathbf{e_2 : state} \\ \text{RESTR} = <_{\infty} \\ \text{HEAD} = \mathbf{e_1} \end{array} \right] \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \mathbf{ind} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{physobj} \end{array} \right] \\ \text{ARG}_2 = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \mathbf{animate_ind} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{physobj} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \mathbf{cause_lcp} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{dead(e_2, \boxed{2})} \\ \text{AGENTIVE} = \mathbf{kill_act(e_1, \boxed{1}, \boxed{2})} \end{array} \right] \end{array} \right] \\
& \hspace{15em} (\text{Pustejovsky 1995 : 102})
\end{aligned}$$

動詞 **kill** は、動作主と対象という 2 つの項を持つ。そして、原因イベントである E_1 は動作主が対象を殺すという動作を表し、結果イベント E_2 は「対象が死んでいる」という状態を示している。このとき、 E_1 は主体クオリアに、 E_2 は形式クオリアに対応している。また、この 2 つのイベントでは、対象が共有されているので、項の一貫性がある。

以上のように、Pustejovsky (1995) は単一動詞に含まれている因果関係を考察した。小野 (2005) は (41) の使役事象スキーマを用いて、動詞だけではなく、構文で表される因果関係も同様に扱えることを示している。

$$\begin{aligned}
(41) \quad & \left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ E_2 = e_2 : \text{state} \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \alpha_result (e_2, y) \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act (e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right] \\
& \hspace{15em} (\text{小野 2005 : 111})
\end{aligned}$$

(40,41) いずれも、使役事象は起因事象 (E_1) と結果事象 (E_2) からなる複合事象であ

り、E1 は主体クオリアに、E2 は形式クオリアに対応している。二つの事象は制約条件 (RESTR) に表されているように、E1 は必ず E2 に先行する。さらに、使役事象スキーマにおいても、項を共有することによって起因事象と結果事象の使役関係が保証される。

事象スキーマは (38) の kill では語彙化であるとするれば、英語の結果構文は使役事象スキーマの構文化である。具体的な例として (42) を見よう。

(42) John hammered the metal flat.

(42) はハンマーで、金属を叩く行為により、金属が flat の状態へ変化するという使役的な意味を表すが、hammer はただの動作動詞であり、結果の状態まで表すことができない。ここで小野 (2005) は (42) では使役スキーマを構文に適用することにより動詞の本来の事象タイプ「活動」を「達成」へ拡張することを提案する。つまり、動詞のクオリアと結果述語のクオリアとの共合成により、動詞は構文という事象スキーマのコード化に組み込まれると考えるのである。構文がどのような事象スキーマをコード化するかは、その中に含まれるスキーマ核 (他の構文から区別する中核的な要素) によって決まる。使役の事象スキーマが構文にコード化される場合は、結果述語がスキーマ核に対応する (小野 2005 : 154-155)。

$$(43) \left[\begin{array}{l} \text{flat} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x] \\ \text{EVENTSTR} = [E = e : \text{state}] \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{flat} (e, x)] \end{array} \right]$$

(44) 使役事象スキーマ

$$\left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ E_2 = e_2 : \text{state} \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{\alpha_result (e_2, y)} \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act (e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 155)

形容詞 flat の形式クオリアと、四角で囲った事象スキーマの形式クオリアを同定すること

により、結果構文の事象スキーマがコード化される。この構文に動詞を組み込む際には、結果述語と動詞の共合成が生じる。その結果、この構文の意味構造は以下のように表示される。

$$(45) \quad \left[\begin{array}{l} \text{hammer the metal flat} \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : (x, \text{metal}) \\ E_2 = e_2 : (\text{metal}) \\ \text{RESTR} = <\infty \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{flat_result} (e_2, \text{metal}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{hammer_act} (e_1, x, \text{metal}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 156)

以上が典型的な結果構文の表示であるが、これだけでは説明できない現象も存在する。たとえば、(46a) のような疑似目的語⁴を持つ英語の結果構文では、動詞と結果述語の間に共有する項が存在しない。

$$(46) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \text{They drank the pub dry.} \\ \text{b.} & \left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : (\text{they}) \\ E_2 = e_2 : (\text{the pub}) \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{dry_result} (e_2, \text{the pub}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{drink_act} (e_1, \text{they}) \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array}$$

(小野 2005 : 159)

(46) において、E1 の項は **they** であるのに対し、E2 の項は **the pub** である。これら二つの事象は明らかに項を共有していない。そのため、上記の結果構文では、項の結束性条件に違反している。小野 (2005) では推論による結束性が提案されているが、本研究では目的クオリアにおける項の共有があると主張する。詳細は第 3 章と第 4 章で述べる。

以上、本節では、分析の基礎となる生成語彙論の枠組について説明した。特に中心となる

⁴ 本来 **drink** の目的語は飲み物のはずであるが、結果構文では **the pub** のような目的語が取れるようになる。このようにある構文でのみ現れる目的語を「疑似目的語」という。

のは、以下の三点である。

- (i) 使役事象は原因事象と結果事象からなる複合事象であり、原因事象は主体クオリアに、結果事象は形式クオリアに対応する。
- (ii) 原因事象は必ず結果事象に先行する。
- (iii) 項を共有することによって起因事象と結果事象の使役関係が保証される。

1.3 研究対象

本研究が分析対象とするのは日中結果複合動詞であるが、日中両言語における「結果複合動詞」の定義や特徴は若干異なる。統一した基準で日中結果複合動詞を研究するため、本研究は以下のような例を結果複合動詞とする。

- (47) a. 原因 : V1の結果、V2
泣きぬれる、溺れ死ぬ、焼け死ぬ、崩れ落ちる、飲み潰れる
- b. 手段 : V1することによって、V2
切り倒す、叩き壊す、泣き落とす、言い負かす
- (48) 砍倒（切る－倒れる）、踢坏（蹴る－壊れる）、哭肿（泣く－腫れる）、
玩累（遊ぶ－疲れる）、淹死（溺れる－死ぬ）、烧死（焼ける－死ぬ）

(47a) では、V1 と V2 には原因－結果という意味関係を持つのに対し、(47b) では V1 と V2 の間に手段－目的という関係がある。さらに、先行研究によれば、日本語では (47a) のような原因意味関係だけではなく、(47b) の手段意味関係を持つ複合動詞も結果複合動詞である。両者違いは主語にある。(47a) の主語は非意図的なものであるが、(47b) の主語は意図的な動作主である。

一方、中国語の結果複合動詞では、ほとんどの場合、V1 と V2 の間に原因－結果の意味関係を持つ。そして、(48) 以外に、梁 (2006) と申 (2007) は、(49a) と (49b) も中国語の結果複合動詞であると主張する。梁 (2006) によると、(49a) の語は日常で使われているうちに、その意味がだんだんと固定化され、一語として辞書に収録されたものである。それに対し、申 (2007) は (49b) の例は補文関係を持つ複合動詞であり、V1 が表す出来事が先に発生してから、その出来事に対して、V2 がある結果性を加える。V2 が結果性を表してい

ることから、このような複合動詞を結果複合動詞と同様に扱っている。

- (49) a. 克服（克服する）、革新（革新する）、改良（改良する）、扩大（拡大する）、
加强（強化する）、推翻（覆す）、延长（延長する）、压缩（圧縮する）、
说明（説明する）、提高（高める）
- b. 看漏（見る－漏れる）、写错（書く－間違える）、挖潜（掘る－浅い）、
铺薄（敷く－薄い）、吃晚（食べる－遅い）

しかし、(49a)にある例はすでに一語になっており、V1 と V2 を分離することができない。(49a)の“克服”（克服する）を(50b)のような複文に書き換えると非文になってしまう。V1 “克”（克する）と V2 “服”（服する）がすでに元の意味を失っているからである。

- (50) a. 他 克服 了 那 个 困难。
tā kè fú le nà gè kùn nán
彼 克服する LE その 量詞 困難
「彼はその困難を克服した。」
- b. *他 克 了 那 个 困难, 那 个 困难 服 了。
tā kè le nà gè kùn nán nà gè kùn nán fú le
彼 克する LE その 量詞 困難 その 量詞 困難 服する LE
「彼はその困難と闘い、その困難は乗り越えられた。」

また、(49b)では、V2 は V1 の状態変化を修飾しており、(49)にある複合動詞を“因为……所以……”（…だから…である）に言い換えることはできない。(51a)の“看漏”（見る－逃す）を“因为……所以……”（…だから…である）を用いて表すことはできないのである。逆に、(52b)が示しているように、“砍倒”（切る－倒す）などの複合動詞を同じ表現で言い換えても、非文とはならない。

- (51) a. 他 看漏 了 两 个 字。
tā kàn lòu le liǎng gè zì
彼 見る－逃す LE 二 量詞 字

「彼は二つの字を見逃した。」

- b. *因为 他 看 了, 所以 他 漏 了 两 个 字。

yīn wéi tā kàn le suǒ yǐ tā lòu le liǎng gè zì

だから 彼 見る LE である 彼 逃す le 二 量詞 字

「彼は見たので、二文字を逃した。」

- (52) a. 他 砍倒 了 那 颗 树。

tā kǎn dǎo le nà kē shù

彼 切る－倒す LE その 量詞 木

「彼はその木を切り倒した。」

- b. 因为 他 砍 了 那 棵 树,

yīn wéi tā kǎn le nà kē shù

だから 彼 切る LE その 量詞 木

所以 那 棵 树 倒 了。

suǒ yǐ nà kē shù dǎo le

である その 量詞 木 倒れる LE

「彼はその木を切ったので、その木は倒れた。」

本研究は(48)に挙げられる V1 と V2 はそれぞれに元の意味を持ち、自然に“因为……所以……”(だから…である)という複文に言い換えられる中国語複合動詞を研究対象として扱い、(47)のような日本語の結果複合動詞と比較しながら、考察する。

1.4 研究データ

多くの先行研究では、日本語あるいは中国語の複合動詞に関するデータベースを使って分析されているが、日中結果複合動詞に関するデータベースは非常に少ない。そこで筆者は様々なデータベースを参照した上で、「日本語の結果複合動詞リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」を作成した。本節では、これらのリストの作成方法と特徴を説明する。

1.4.1 日本語の結果複合動詞リスト

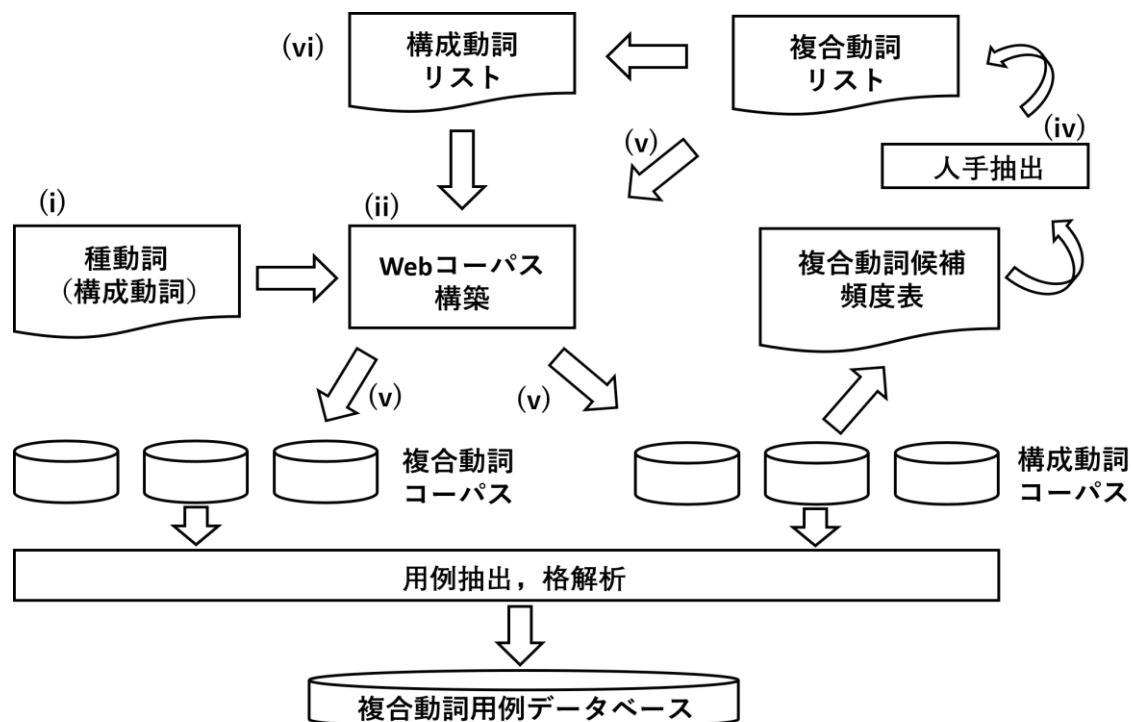
「日本語の結果複合動詞のリスト」にある例は、主に陳(2015)「日本語複合動詞リスト」と国立国語研究所による「複合動詞レキシコン」から取ったものである。また、陳(2015)

の「日本語複合動詞リスト」は国立国語研究所の山口（2013）が作った「日本語複合動詞リスト（ver.1.3）」に基づき、作成されたものである。陳（2015）の「日本語結果複合動詞リスト」、山口（2013）の「日本語結果複合動詞リスト（ver.1.3）」と「複合動詞レキシコン」この三つのコーパスにはそれぞれの特徴があり、以下、順に紹介する。筆者が作成した「日本語結果複合動詞リスト」の特徴についてはその後で説明する。

まず、「日本語複合動詞リスト（ver.1.3）」は山口昌也氏が開発した「Web データに基づく複合動詞データベース」に集められた日本語語彙的複合動詞をリスト化したものである。山口（2013）によれば、このデータベースの一番の特徴は Web データを活用し、漸進的に用例データベースを構築することである。その具体的な方法は以下のようになる。

- A) まず、複合動詞の構成要素になりやすい、「種」となる構成動詞（以後、「種動詞」）を用意する。今回は、『複合動詞資料集』（野村・石井 1987）から上位 10 語を選択した。
- B) 次に、Baroni らの方法（Baroni et al. 2009）を応用して、種動詞に対する Web コーパスを構築する。具体的には、種動詞とランダムな語のペアをキーとして、Web 検索エンジンに与え、得られた URL の Web ページをダウンロードする。ランダムな語をキーに加えているのは、収集する Web ページの偏りを防ぐためである。種動詞は、終止形、連用形の 2 種類用意する。そして、それぞれ 5000 ページずつ収集し、それぞれ独立した Web コーパスとする。終止形で検索するのは、種動詞を後項に持つ複合動詞を発見するため、連用形で検索するのは、前項に種動詞を持つ複合動詞を発見するためである。
- C) 構築した Web コーパスを形態素解析したのち、「動詞（連用形）＋動詞」の並びを複合動詞候補として、頻度を計測する。
- D) 得られた複合動詞候補のうち、頻度 5 以上のものを目視で確認し、複合動詞であれば、複合動詞リストに追加する。
- E) 複合動詞リスト中の複合動詞の Web コーパスを作成する。収集する Web ページは、2000 ページである。それぞれの Web コーパスを形態素解析し、当該の複合動詞を含む文を抽出する。抽出した文は、格解析、および、同一文削除などのクリーニングをしたのち、用例データベースに追加する。ただし、格要素を一つ以上持つ用例が 50 例未満の場合は、登録しない。また、登録した場合は、その構成動詞の用例も用例データベースに登録する。

F) (v)の複合動詞リスト中の複合動詞の構成動詞のうち、種動詞でないほうの構成動詞を種動詞として、(i) ～ (v) を繰り返す。



(山口 2013 : 62－63)

以上の方法を用いて山口が収集した複合動詞 3912 語から、陳 (2015) は同じ動詞の表記の違いにすぎないもの (「換える」と「替える」など)、可能形 (「踏み込める」など) を削除した上で、V1 と V2 が持つ「手段—目的」「原因—結果」「並列関係」などの意味関係も追加して、3487 語の「日本語複合動詞リスト」を作成している。

一方、同じ複合動詞のデータベースとしての「複合動詞レキシコン」は、主に研究者たちの判断で、辞書や先行文献からデータを 2700 語以上集めている。このデータベースでは、各複合動詞の格要素はないが、語構造の情報を提供している。しかも、複合動詞の対照の研究のため、英語、中国語と韓国語の訳文も付けられている。

陳 (2015) の「結果複合動詞リスト」も国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」も「日本語の複合動詞」に関するデータベースであるが、本研究の研究対象である結果複合動詞はその一部に過ぎない。本研究は「日本語複合動詞リスト」と「複合動詞レキシコン」を比較しながら、「手段—目的」と「因果関係」の意味関係を持つものを収集し、604 語からなる「日

本語の結果複合動詞リスト」を作成した。

また、本研究では、「日本語の結果複合動詞リスト」以外に、日中の対応状況を明確にするため、一部の作例も扱っている。これらの作例の実際の使用状況を検証するため、「朝日新聞データベース」(1985)、「読売新聞データベース」(1986～2018.9.18)、「河北新報データベース」(1991.8.1～2018.9.18)、「毎日データベース」(1989.10～2018.9.18)を用いて、実例を探した。

1.4.2 中国語の結果複合動詞リストについて

「中国語の結果複合動詞リスト」は、主に北京大学の詹衛東研究室と早稲田大学の砂岡和子研究室が共同で作成した「現代汉语述补结构用法数据库」(現代中国語動補構造用法データベース)から、因果関係を持つ結果複合動詞 1,532 語を抽出したものである。

中国語の「動補構造」とは、動詞と補語により構成された複合述語を指す。「補語」とは動詞の直後に置かれて、動詞の表す動作行為の結果、方向、程度、可能などを表す成分をいう。上記の「現代中国語動補構造用法データベース」では、結果補語のみならず、その他の補語を持つ構文が含まれており、各例のピンイン、意味解釈、述語と補語の意味関係、例文まで示されている。さらに、一部の例について、日本語と英語の訳文と「CCL 現代漢語語料庫」における出現頻度も付け加えられている。

このデータベースでは、「動補構造」の辞書や中国の教育部が認定する国際的な中国語の語学検定試験(HSK)で要求される語彙リストに現れたものを中心として収録している。ただし、「CCL 現代漢語語料庫」に現れる頻度が非常に低い、あるいは容認度があまりに低い構造はデータベースから省かれている。

このようにして収集された 25,190 項目の中には、V2 が結果を表す結果複合動詞が 12,101 項目(全体の 48.04%)ある。ただし、本研究では中国語の結果複合動詞リストを作る際に、データベースに現れる以下の 3 種類を除外した。

1) V1 と V2 が複合した後、V1 あるいは V2 の本来的な意味が薄れ、抽象的な意味を表すようになった複合動詞。例えば: “扒住”(つかまるー固定する)の“住”は単独で使われる際には、「住む」「止まる」などの意味を持つが、V1 と複合して複合動詞の V2 となると、「動

作の結果が安定あるいは固定する」という意味になってしまう⁵。

2) V1 の動作行為の後、V2 の状態であることに気がついたという評価の意味を表す場合。一般的には、結果複合動詞は因果関係を表すので、“因为 A 所以 B” (A なので B) と言い換えられるが、V2 が状態の認識を表す複合動詞であれば、そのような言い換えはできない。例えば、“吃晚” (食べる一遅い) は「食事をした後、時刻がずいぶん遅くなったことに気づいた」という意味で、“因为吃了，所以晚了。” (食べたので、遅くなった。) とすることはできない。“大” (大きい)、“小” (小さい)、“快” (速い)、“慢” (遅い)、“肥” ((服などが) 大きい)、“瘦” ((服などが) 小さい)、“轻” (軽い)、“重” (重い)、“咸” (しょっぱい)、“淡” (薄い)、“长” (長い)、“短” (短い)、“多” (多い)、“少” (少ない)、“粗” (太い)、“细” (細い)、“宽” (広い)、“窄” (狭い)、“高” (高い)、“低” (低い) などは、V2 として使われると、V1 の後の評価を表すものになりやすい。

3) V1 か V2 のいずれかが方言である場合。例えば、“镡透” (蒸して温めるー最大限に達する) において、V1 である“镡” (蒸して温める) は北方標準語ではよく使われているが、南方ではあまり使用されない。

本研究では、ほとんどの例は「中国語の結果複合動詞リスト」から集めているものであるが、日中の対応状況を明確にするため、一部の作例も使用している。これらの作例の実際の使用状況を検証するため、中国語では、「中華数字苑」(500 種類の電子新聞が含まれるデータベース) を用いて、実例を探した。

1.5 本論文の構成

本研究は全部で 5 章からなる。第 1 章では、研究目的と意義、理論枠組み、研究の対象、及び、研究データについて論じた。本研究が枠組みとする生成語彙論 (Generative Lexicon) の構成及び生成手段を説明した後、この理論は英語の結果構文と日中結果複合動詞に適応する理由を述べた。

⁵ “扒住” (つかまるー固定する) 以外に、(1) のような例もある：

- (i) a. 看见了(見えた) → “见”：知覚することを表す
b. 卖光了(売り切れた) → “光”：何もないことを表す
c. 看完了(見終わった, 読み終わった) → “完”：動作行為を終えることを表す
d. 找着了((探して) 見つかった) → “着 zháo”：目的に達することを表す
(東京外国語大学言語モジュール
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/zh/gmod/contents/explanation/047.html>)

第2章では、英語の結果構文と日中結果複合動詞の関連性を分析し、英語、中国語と日本語に分け、英語の結果構文と日中結果複合動詞のそれぞれの分類と制約に関する先行研究を概観し、日中結果複合動詞を目的語指向型と主語指向型に分類する。さらに、その詳しい分析を第3章と第4章で行う。そして、本章の最後に、英語の結果構文にある制約を参考にしながら、一部の日中結果複合動詞が対応しない理由を明らかにする。

第3章では、目的語指向型の日中結果複合動詞を中心に分析する。まず、先行研究に基づき、生成語彙論の枠組で、日中結果複合動詞の項構造の特徴を分析する。次に、「日本語の結果複合動詞リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」から実例を集めた上で、イベント構造とクオリア構造の観点から日中結果複合動詞を考察する。また、中国語の結果複合動詞が疑似目的語を取る際に現れる問題点に触れる。最後に文脈が日中結果複合動詞に与える影響について述べる。

第4章では、主語指向型の日中結果複合動詞を考察する。第3章と同様に、主語指向型の日中結果複合動詞の項構造の特徴を見る。その後、集めた日中結果複合動詞の例を通じて、日中結果複合動詞のイベント構造とクオリア構造の融合過程を説明する。

第5章では、第1章から第4章までの内容を改めてまとめ、日中結果複合動詞が対応するタイプと対応しないタイプの理由及びそれぞれの特徴を述べる。最後に、本研究で解決されない問題点を今後の課題として記す。

第 2 章 日中結果複合動詞の概観

本論文は生成語彙論の理論的な枠組を用いて、日中結果複合動詞を詳細に分析することを目的とするが、その前提として、本章では日本語の結果複合動詞、中国語の結果複合動詞、英語の結果構文を比べることにより、それらの特徴を述べる。

本章の構成は次の通りである。2.1 節では、英語の結果構文と日中結果複合動詞を比較する。2.2 節では、英語の結果構文や日中結果複合動詞の分類および制約に関する先行研究を概観した上で、日中結果複合動詞を 2 種類に分類する。2.3 節では、英語の結果構文を参考にしながら、日中結果複合動詞を比較する。

2.1 結果複合動詞と結果構文

序論で述べたように、英語の結果構文と日中結果複合動詞は同じ意味関係を持つので、本研究は英語の結果構文を参考にした上で、日中結果複合動詞を比較していきたい。

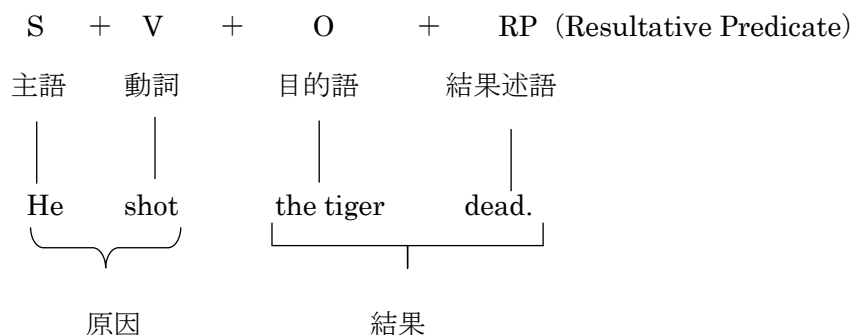
まず日本語には、結果複合動詞だけでなく、英語に似た結果構文もある。2.1.1 節では、日本語の結果複合動詞、日本語の結果構文と英語の結果構文の間に、どんな関係があるのかを見る。本研究では中国語の「動詞＋動詞／形容詞」という構造を語彙的な複合動詞とするが、2.1.2 節ではその根拠について述べる。また、V2 の位置に現れる動詞または形容詞の特徴についても触れる。

2.1.1 日英の結果構文と日本語の結果複合動詞

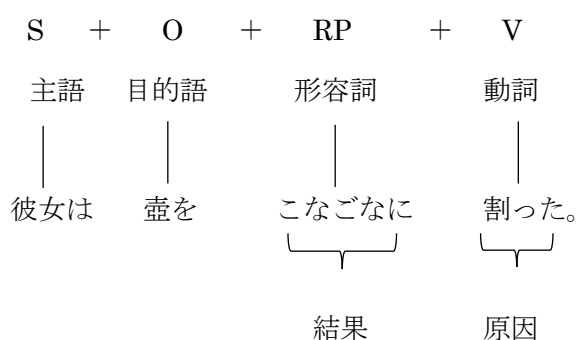
英語の典型的な結果構文では、主語＋動詞＋目的語の後に結果述語が現れ、動詞の表す行為が原因となって、対象物に何らかの変化をもたらし、その結果、形容詞句で表された状態に至るという意味関係が表現される。

語順は異なるものの、日本語にも英語の結果構文に相当するものがある。それぞれの構造は (1) と (2) のように示される。

(1) 英語の結果構文の統語構造



(2) 日本語の結果構文の統語構造



日本語の結果述語は英語より限られ、英語を日本語に直訳できないことが多い。その具体的な例は (3) と (4) である。

- (3) a. the roses growing on it were white, but there were three gardeners at it, busily painting them red. (L. Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*)
 b. 三人の庭師が白いバラを赤く塗っていた。

(影山 1996 : 209 (2))

- (4) a. He pounded the metal flat.
 b. *金属を平らにたたいた。(cf. 平らにたたき延ばした。)

(影山 1996 : 209 (3a))

(3) の paint X red は「赤く塗る」と直訳できるが、pound X flat を「*平らにたたく」とはできない。Paint や「塗る」は物の表面にペンキなどをつけて、色を変えることを意味し、red「赤い」はペンキがついた後の変化した色の状態を具体的に描写している。それに対して (4) の pound「叩く」は、金づちなどの道具である対象物を打つことを意味するが、大

将の状態変化までは意味しておらず、flat「平ら」のような具体的な結果が描写できないため、日本語では結果構文の形で表現できない。影山（1996）と Washio（1997）は（3）のような結果構文をそれぞれ「本来的結果構文（inherent resultatives）」「弱い結果構文（Weak resultatives）」、（4）のタイプを「派生的結果構文（derived resultatives）」「強い結果構文（Strong resultatives）」と呼ぶ。英語にはどちらの結果構文も存在するが、日本語には前者の構文しかない。しかし、一部の派生的結果構文は結果複合動詞で表現することができる。たとえば（4）の pound X flat は「叩き延ばす」と訳することができる。

英語の派生的結果構文に対応する日本語の結果複合動詞としては、（5）のような例も挙げられている。（5）の結果複合動詞では、V1である「押す」「揺る」「殴る」「蹴る」は結果構文のVに相当し、行為を表す。V2である「開ける」「起こす」「倒す」「殺す」は結果構文の結果述語に対応し、V1の行為に伴う目的語の状態変化を表す。ほとんどの日本語結果構文は英語の「本来的結果構文」「弱い結果構文」と対応し、英語の「派生的結果構文」「強い結果構文」の一部は日本語の結果複合動詞と対応する。

- (5) a. ドアを押し開けた。
He pushed the door open. (John Gardner “Redemption”)
- b. 彼は、片手で彼女を揺り起こし始めた。
He started shaking her awake with one hand.
(Steven Spielberg, *Close Encounters of the Third Kind*)
- c. マイクも殴り倒した。
He knocked Mike down, too. (E.Hemingway, *The Sun Also Rises*)
- d. ボクは彼を蹴り殺してやりたいくらいだ。
I could kick him to death. (LOB:N23116)

(影山 1996 : 208)

2.1.2 中国語の結果複合動詞について

結果構文に相当する中国語の形式は日本語と同じく複合動詞である。中国語の結果複合動詞には“摆整齐”（並べて、きちんとそろえる）、“关严实”（しっかり閉める）のような三音節以上のものもあるが、多くは“打碎”（叩く－壊れる）、“吃饱”（食べる－お腹がいっぱい）などのように二音節からなる。

中国語の複合動詞をめぐっては、語彙レベルの語形成なのか、統語レベルの派生なのかについて、これまで活発な議論が行われてきた。本論文では中国語の結果複合動詞が語彙的複合動詞であるのか統語的複合動詞であるのかについては問わないが、Thompson (1973)、朱 (1981)、Li (1990, 1993, 1995)、Gu (1992)、沈力 (1993)、Cheng & Huang (1994) などに従い、単一動詞であるという立場を取る。以下では、主な根拠を二つ見ておく。

第一に、朱 (1981) によれば、結果複合動詞は文法機能と意味のどちらの面でも 1 つの動詞に相当する。まず、結果複合動詞の後ろに動詞接尾辞の“了” (動詞の直後に付き、動詞の表す動作行為が発生、実現した段階にあることを表す) や“过” (動詞の後ろに置き、経験を表す。日本語では「…したことがある」という意味を表す) を伴うことができる。

- (6) a. 打碎 了 盘子。
 dǎ suì le pán zi
 叩くー壊れる LE 皿
 「お皿を叩き壊した。」
- b. 从来 没 喝醉 过。
 cóng lái méi hē zuì guò
 今まで 否定 飲むー酔う GUO
 「飲んで酔ったことがない。」

第二に、結果複合動詞にも単純動詞のように自他の区別があるが、朱 (1981) は中国語の複合動詞の自他性は、V1 が他動詞であるか自動詞であるかということと必然的な関連がないと述べている。例えば“哭” (泣く) は自動詞であるのに、“哑” (かすれる) と複合して、“哭哑” (泣くーかすれる) になると、後ろに目的語が付けられ、“哭哑了嗓子” (泣いて、声がかすれた。) のよう文を作ることができる。逆に、“看” (見る) は他動詞であるが、“看哭” (見るー泣く) という複合動詞において、目的語を付けて“*看哭了电影。” (映画を見て、泣いた) とは言うことはできない。

また、英語の結果構文とは異なり、中国語の結果複合動詞の目的語は動詞と結果述語の間に挿入することはできない。この点は日本語の結果複合動詞と共通しており、日本語でも目的語を二つの動詞の間に挿入することはできない。

- (7) a. The dog barked the chickens awake. (Shi 2002 : 30)
- b. *老王 叫 小张 醒 了。
lǎo wáng jiào xiǎo zhāng xǐng le
王さん 呼ぶ 張さん 醒める LE
「王さんは張さんと呼んで、起こした。」
- c. 老王 叫醒 了 小张。 (Shi 2002 : 30)
lǎo wáng jiào xǐng le xiǎo zhāng
王さん 呼ぶ－醒める LE 張さん
「王さんは張さんと呼び起こした。」
- (8) a. 田中さんが花瓶をたたき壊した。
- b. *田中さんが叩き、花瓶を壊した。

次に意味については、朱（1981）は結果複合動詞が一つの動詞に言い換えられることを指摘している。例えば北京方言では“打碎”の代わりに“甑cèi”（割る）を使い、“我把花瓶甑了。”（私が花瓶をたたき壊した。）のようにいうことができる。

以上のように、中国語の結果複合動詞は語彙的なレベルで形成されたのか、統語的派生であるのかはともかく、単一動詞として振る舞う。

さて、中国語の結果複合動詞は日本語の結果複合動詞とは異なり、英語の弱い結果構文のみならず、強い結果構文にも対応する。(9a) の freeze は「低温で、液体が固体の状態に変わる」という意味であり、結果述語の意味をすでに含んでいることから、弱い結果構文である。(10a) の water は花に水をやることを表し、花が潰れるという結果を含意しておらず、強い結果構文である。中国語では、(9a) と (10a) と同じ意味を持つ“冻硬”（凍る－硬い）、“浇塌”（浴びせる－崩れ落ちる）があることから、中国語の結果複合動詞は英語の「弱い結果構文」と「強い結果構文」のいずれにも対応する。

- (9) a. 冰箱 里 的 东西 都 冻硬 了。
bīng xiāng lǐ de dōng xī dōu dòng yìng le
冷蔵庫 中 の もの 皆 凍る－硬い LE
「冷蔵庫の中のものは、かちかちに凍ってしまった。」（申・望月 2009 : 438)
- b. All foods in the fridge froze solid.

(10) a. 他们 把 花 浇塌 了。

tā men bǎ huā jiāo tā le

彼達 BA 花 浴びすー崩れ落ちる LE

「彼らは、花に水をやりすぎて、ぺしゃんこにってしまった。」

(申・望月 2009 : 439)

b. They watered the tulip flat.

また、中国語の結果複合動詞では、形容詞も V2 になることが可能である。Xu (2006)によれば、中国語では V2 の位置に現れる動詞の特徴は以下のようにまとめられる。

(11) a. 動詞：走（居なくなる、立ち去る）、跑（走る）、动（動く）、

倒（倒れる）、翻（ひっくりかえる）、病（病む）、死（死ぬ）

b. 形容詞（1）：红（赤い）、白（白い）、宽（広い）、窄（狭い）

c. 形容詞（2）：饿（お腹が空く）、哑（かすれる）、饱（お腹がいっぱい）、

累（疲れる）

中国語において、形容詞と動詞を区別する基準は二つある。第一に、後ろに目的語が付けられれば動詞である。第二に、副詞“很”（とても）と共起すれば形容詞である。(11a)の動詞はほとんど非能格自動詞であり、目的語が付けられないが、副詞“很”（とても）とは共起できないので、動詞である。(11b,c)の語は、副詞“很”（とても）と共起するので形容詞である。なお、(11b)の形容詞は名詞を修飾することもできるが、(11c)の形容詞は叙述用法しか持たないため、名詞を直接に修飾すると非文になってしまうが、結果複合動詞の V2 は結果述語であるため、(11c)の形容詞も結果複合動詞に問題なく現れる。

(12) a. 红（的）花 白（的）墙 宽（的）桥

「赤い花」 「白い壁」 「広い橋」

b. *饿（的）肚子 *哑（的）嗓子 *饱（的）肚子

「空いたお腹」 「かすれた喉」 「いっぱいになったお腹」

以上をまとめると、日本語にも中国語にも英語のような結果構文に対応する結果複合動詞があるが、日本語の結果複合動詞は英語のすべての結果構文と対応するわけではないのに対し、中国語の結果複合動詞は弱い結果複合動詞のみならず、強い結果構文にも対応できる。さらに、中国語結果複合動詞では、動詞も形容詞も V2 として取ることができる。

2.2 日中結果複合動詞と英語の結果構文に関する分類及び意味制約

前節は日中結果複合動詞と英語の結果構文の関係を簡単に説明した。本節では、日中結果複合動詞と英語の結果構文に関する分類及び意味制約について考察を行う。

2.2.1 英語の結果構文に関する分類及び意味制約

英語の結果構文をめぐるのは、多くの考察がなされてきた (Goldberg 1991 ; 影山 1996 ; Washio 1997 ; Rappaport Hovav & Levin 2001 ; Lee 2009 ; 小野 2007, 2009, 2012 など)。これらの研究によると、様々な視点から結果構文を分類できる。例えば、範疇の違いに基づく AP (Adjective Phrase) 結果構文と PP (Preposition Phrase) 結果構文、意味の違いに基づく本来的結果構文 (弱い結果構文) と派生的結果構文 (強い結果構文) という分類がある。それ以外に、小野 (2009) によると、英語の結果構文では、構文のベースになる動詞が自動詞であるか他動詞であるかによって、結果構文を 2 つのタイプに分けることが一般的に行われている。また、動詞の自他によって、動詞に後続する名詞句の有無、特に疑似目的語の義務的選択などの構文の研究も注目される。以上の分類をまとめてみると、以下の表 1 のようになる。

表 1 結果構文の分類

(A)	(B)		(C)
他動詞	弱い	a. He painted the house blue.	本来の目的語
	強い	b. He wiped the dirt off.	疑似目的語
自動詞	弱い	c. The river froze solid.(状態変化)	目的語なし
		d. John danced into the room.(位置変化)	
	強い	e. He laughed himself hoarse.	疑似目的語
		f. He laughed the singer off the stage.	

(森藤 2011:1)

(A) は、主動詞が他動詞か自動詞かにより結果構文を分類している。それに対して、(B) は前節で説明したように、Washio (1997) に則ったものである。(C) は目的語から見た分類で、例文 e, f では **laugh** という元々目的語が取れない非能格動詞が、結果構文では目的語が取れるようになる。結果構文で現れる目的語を本来の目的語と区別して、「疑似目的語」という。それに対し、疑似目的語を取らない文とは目的語が現れないか、あるいは、主動詞の本来の目的語を取る文である。

以下では具体的な例を用いて、疑似目的語を取る結果構文と取らない結果構文の区別を論じる。(13) のような例は最も典型的な結果構文である。これらの例において、**shot**、**paint**、**kick** は他動詞であり、他動詞ベースの結果構文と思われる。また、これらの結果構文は、「Jesse は彼を撃った」「彼女は家を塗った」や「彼女はドアを蹴った」という行為によって、「彼が死んだ」「家が赤くなった」「ドアが開いた」のような結果になったことを表しており、すべての目的語は動詞と意味関係があり、動詞に意味選択される名詞句である。従って、これらは本来の目的語である。このとき、結果述語は削除されても、(14) に示すように、文として成立する。

- (13) a. Jesse shot him dead.
b. She painted the house red.
c. She kicked the door open.

(小野 2009 : 2)

- (14) a. Jesse shot him.
b. She painted the house.
c. She kicked the door.

一方、「疑似目的語」(fake object) と動詞との間には意味関係がない。疑似目的語を取る動詞は他動詞でも非能格自動詞でもよいが、他動詞の場合は結果述語がないと、(15b) のように奇妙な意味になってしまう。

- (15) a. She wiped the dust off.
b. She wiped the dust.

(影山 1996 : 246)

Laugh や run のような非能格自動詞は、元々は目的語を伴わないが、結果構文の中では himself、the pavement のような目的語が取れる。また逆に、結果述語があるときには、必ず目的語が現れなければならない。つまり、動詞が非能格自動詞であれ他動詞であれ、結果述語はその主語に当たる NP が直接目的語として実現することを要求するのである。

(16) Dora shouted *(herself) hoarse. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 35)

(17) In the small hours of the nextmorning, when they were back at La Gracieuse, after dancing *(her feet) raw with Sam, ... (Boas 2003: 5-6)

ここまでは、英語の結果構文についての様々な分類を簡単に説明してきた。次に、結果述語の出現に必要な条件について、見ていこう。

Goldberg (1995) は結果構文に対する制約を、以下のようにまとめている。

- (18) a. Two argument resultatives must have an (animate) instigator argument.
b. The action denoted by the verb must be interpreted as directly causing the change of state: no intermediary time intervals are possible.
c. The resultative adjective must denote an end of scale.
d. The resultative must be interpreted as a metaphorical path and is, therefore, subject to the Unique Path Constraint
e. Resultative phrases cannot be headed by deverbal adjectives.

(Goldberg 1995 : 193)

(18a) は、多くの英語母語話者にとって、二つの項をとる結果構文を使用するにあたり、主語の位置に出現できるのは、有生の instigator のみであり、道具などの名詞は主語として不適格であることを述べている。(19a) は彼女が咳をしたことにより、sick の状態になることを表すのに対して、道具であるハンマーは結果構文の主語になれず、(19b) は成立しない。

- (19) a. She coughed herself sick.
b. *The hammer pounded the mental flat.

(Goldberg 1995 : 193)

次に、(18b) によれば、動詞によって示される行為が状態変化を直接引き起こすと解釈されなければならない、行為と状態の間に時間的間隔があってはならない。

この制約は以下のような図 1 と図 2 で表される。

Allowed

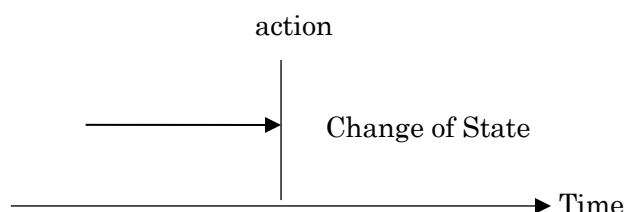


図 1

Disallowed:

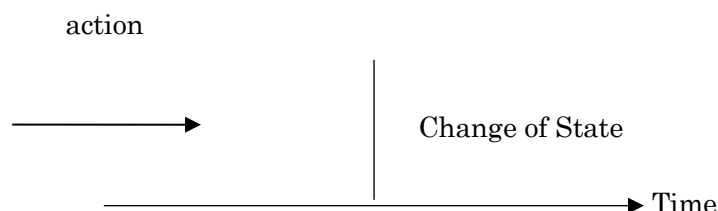


図 2

(Goldberg 1995 : 194)

図 1 は動詞が表す行為の終点と同時に状態変化が起こっていることを示すのに対し、図 2 はその行為が終わった後、少し時間が経ってから、状態変化が起きていることを表す。Goldberg (1995) によれば、行為と状態変化の間に時間差がある図 2 の場合には、結果構文は成立しない。たとえば (20) では、Goldberg (1995) によると、必ず気持ち悪くなるという状態変化するまでずっと食べ続けたと解釈される。つまり、最後の結果状態に至る原因は食べ続けるという動作にあり、食べ物ではない。

(20) He ate himself sick.

(Goldberg 1995 : 194)

同じことが (21) にも当てはまる。(21a) の Sam は自分の自由を妨げているあらゆる足かせを断ち切り、そのことによってすぐに自由を得たという意味である。Sam が自分を切り

つけたあと、捕らえた人たちが彼を自由にしたという解釈にはならない。(21b) の Sue が死んだのは Sam に撃たれた直後であり、Sam が Sue を撃ち、Sue がその後病院で死んだという意味では用いられない。

- (21) a. Sam cut himself free.
b. Sam shot Sue dead.

(Goldberg 1995 : 194-195)

Rappaport Hovav & Levin (2001) は、主動詞が状態変化を直接的に引き起こすという点には賛成するが、英語の結果構文、とりわけ疑似目的語を取る結果構文には行為と状態変化の間に時間差がある例も見られることを指摘している。

- (22) Sam sang enthusiastically during the class play. He woke up hoarse the next day and said, 'Well, I guess I've sung myself hoarse.'

(Rappaport Hovav & Levin 2001:775)

(22) では、歌を歌ったあと、すぐ声がかすれた状態になったわけではなく、ある程度の時間が経過したあとでも、I sung myself hoarse が問題なく成立している。

この例に対して Goldberg (2004 : 546) は、sing は直接的に働く実物がなく、動作が直接的にあるいは直ちに結果を引き起こさないように見えるが、実はそうではないと反論する。

(22) では、歌を歌うと同時に、声が少しずつかすれていき、歌い終わったときに、声の調子がもう悪くなったかもしれない。ところが、実際の状況を考えると、人がそれぞれ、かすれるということに気が付く時間が異なっている。換言すれば、Sam は歌を歌った後に、喉がすでにかすれていたが、本人が気付いたのは次の日であるので、(22) のような発話をした。さらに、行為と結果状態の間に、本当に時間的な間隔があるだと考えられれば、(23) のような文は成立するはずであるが、(23) のように、一週間後になって、歌いすぎたことが原因で声がかすれたとは考えにくい。

- (23) * Sam sang enthusiastically during the class play. One week later, his throat became to be bad and he said 'Well, I guess I've sung myself hoarse.'

したがって、英語の結果構文において、主動詞は直接的に動作を引き起こさなければならず、かつ動詞と結果の間には時間的な継続性も存在する。すなわち、英語の結果構文には「直接的な因果関係」と「時間的な継続性」の両方が必要である。

続いて、(18c) の制約を見て見よう。この制約によれば、形容詞結果述語は尺度上の終点を示さなければならない。尺度上の終点を示さない形容詞では、(24) のように結果述語とはなれない。Funny、happy、damp、dirty のような形容詞は明瞭な基準または最大値を持たないためである。

(24) a. *He drank himself funny/happy.

b. *He wiped it damp/dirty.

(Goldberg 1995 : 195)

ではどのような形容詞が尺度上の終点をもつのであろうか。Wechsler (2005) は三つの基準で形容詞を分類する。それを踏まえて、三原 (2009) は Klein (1980)、Hay et al. (1999)、Kennedy (1999)、Kennedy & McNally (2005) を参照したうえで、Wechsler の分類を以下のように論述している。

まず、第一に段階性 (gradability) の有無に基づいて、形容詞が段階的形容詞と非段階的形容詞に区別される。さらに、量を示す句 a little と一緒に現れるかどうかにより、形容詞はどちらのタイプであるかが分かる。段階的形容詞は a little と一緒に現れるのに対して、非段階的なものは現れない。

(25) a. 段階的形容詞 (gradable adjectives)

long/flat/full/straight/expensive

b. 非段階的形容詞 (non-gradable adjectives)

dead/triangular/invited/sold

(三原 2009 : 156)

三原 (2009) によると、段階的形容詞は文脈や世界に関する知識から推論される「基準」に従って解釈される。例えば、「PRADA's bag is expensive」という文では、高級なブランドの商品として値段が高いのか、普通のバックとして高いのかによって、高さの基準が異なる

といった具合である。高級なブランドの商品として考えるとき、30 万のプラダのバックは 20 万の LV より高いかもしれないが、百万円のエルメスと比べると、高いとは言えない。しかし普通のバックの値段と比べれば、一番安いプラダのバックとしても、高いと思われる。その一方、「expensive」と異なり、「The box is empty.」という場合は、empty についての基準は 1 つしかない。それは empty に最大値（極点）がデフォルトとして内在化しているである。したがって、第二の分類基準で、最大値を持つかどうかにより、段階的形容詞を (26) のように分けられる。最大値を持つ形容詞つまり閉じたスケールの形容詞は totally や completely と共起できるが、expensive、long などの開いたスケールの語は共起できない。

- (26) a. 閉じたスケールの形容詞 (closed scale adjectives)

totally/completely {full/empty/dry}

- b. 開いたスケールの形容詞 (open scale adjectives)

??totally/completely {long/wide/short/cool}

(三原 2009 : 157)

閉じたスケールの形容詞はさらに下位分類することができる。

- (27) a. 最大極点を有する閉じたスケール (maximal end-point closed scale adjectives)

full/empty/straight/dry

- b. 最小極点を有する閉じたスケールの形容詞 (minimal end-point closed scale adjectives)

wet/dirty

(三原 2009 : 157)

上記の第三の分類について、三原 (2009 : 157) は、極点とは銘打たれてはいるものの、その極点が極めて少量でもよいことから、開いたスケールの形容詞と類似する振る舞いを見せると述べている。

いじょうをまとめると、尺度上の終点という性質がある形容詞は (27b) の非段階的あるいは (27a) の最大極点を有する閉じたスケールのようなものである。これらの形容詞は結果述語になりやすい。そして、Goldberg (1991) に従えば、(26b) や (27b) のような形容

詞は尺度上の終点がなく、結果述語になりにくいはずであるが、実際には、疑似目的語を取る結果構文では、結果述語は開いたスケールの形容詞や最小極点を有する閉じたスケールの形容詞の場合もある。

小野（2007）によれば、それらの形容詞が結果述語になる理由は、*sick*、*hoarse*、*wet* のような開放スケールと考える形容詞が疑似目的語を取る結果構文で用いられると、閉鎖スケールの性質にシフトするからである。*a little* は元々 *sick* を修飾できるが、(28a) の結果構文では、彼がもうこれ以上食べることができないほど食べたことを含意するので、*a little* と共起できなくなる。

- (28) a. He ate himself sick.(=20a)
b. *He ate himself a little sick.

(20d) には英語の結果構文は一義的経路の制約（Unique Path Constraint）を受けなければならない。小野（2009）に基づき、この原則は移動構文における経路概念には、移動主体に対応する経路が必ず 1 つに限られるという制限があるのである。(29) では対象としての Sue が結果述語 *black and blue* と移動経路の表現 *down the stairs* と同時に叙述関係を結んでいるため、一つの事象の中に二つの経路が含まれることになり、上記の制約に反する。

- (29) *Bob kicked Sue black and blue down the stairs.

(Goldberg 1991 : 85)

最後の条件 (18e) は現在分詞あるいは過去分詞派生の形容詞が結果述語になれないということである。*dead* は本来的な形容詞であるのに対し、*killed* は *kill* から、*dying* は *die* から派生した形容詞である。英語の結果構文では、派生された形容詞が結果述語になると、(30b) (30c) が示しているように容認されない。

- (30) a. She shot him dead.
b. *She shot him killed.
c. *She shot him dying.

(Goldberg 1991 : 87)

日中結果複合動詞との比較で重要な点をまとめると、英語では、典型的な結果構文では主動詞が他動詞で、主動詞の目的語がそのままに結果構文の目的語になる。さらに以下のような制約に従う。

- 1) 主動詞は項を 2 つ取る場合、その中の 1 つは必ず有生の主導者である。
- 2) 英語の結果構文は「直接的な因果関係」「時間的な継続性」「一義的経路の制約」という三つの制約に従う。
- 3) Goldberg (1991,1995) によれば、尺度上の終点を持たない形容詞は英語の結果述語になりにくい。ただし、小野 (2009) によれば、開放スケール形容詞が結果述語の位置に現れれば、その形容詞は閉鎖スケールの性質にシフトし、容認される⁶。

次節では中国語の結果複合動詞及び意味制約を見ていく。

2.2.2 中国語の結果複合動詞の分類及び意味制約

中国語の複合動詞について、湯 (1989) は複合動詞の内部構造から、(31) の五つのタイプに分類している。

- (31) a. 述賓式复合动词 (「動詞+目的語」型) :
唱歌 (歌を歌う)、生气 (怒る)、干杯 (乾杯する)
- b. 述补式复合动词 (「動詞+結果補語」型) :
打倒 (打ち倒す)、压碎 (押しつぶす)、走疲 (走り疲れる)
- c. 偏正式复合动词 (「副詞+動詞」型) :
暗杀 (暗殺する)、合唱 (合唱する)、偷看 (覗き見る)
- d. 并列式复合动词 (並列型) :
解放 (解放する)、收割 (刈り取る)、剥削 (搾取する)
- e. 主谓式复合动词 (「主語+述語」型) :
地震 (地震がある)、头痛 (頭痛がする)、嘴硬 (強硬に言い張る)
- (湯 1989 : 154-160 をもとに作成)

⁶ 結果述語が形容詞となるのは中国語の結果複合動詞であるが、残念ながら以下では特に英語と中国語の結果述語形容詞について、詳しく見当する余裕がなかった。詳細は今後の可だとするが、事実としては、次節の例文から分かるように、中国語は尺度上の終点を持たない形容詞であっても、結果述語として何ら問題は無い。

申・望月（2009）、望月・申（2011）によれば、中国語の結果複合動詞は（31b）の「動詞＋結果補語」型に属する。上記の五つのタイプにおいて、「動詞＋結果補語」型、つまり結果複合動詞の卓越性と生産性が最も高い。中国語の結果複合動詞を分類する場合、英語の結果構文と日本語の結果複合動詞よりやや複雑な分類が必要である。太田（1958）、望月（1990）、山口（1991）、申（2007）や石村（2011）などの多くの研究者たちも中国語の結果複合動詞を様々な角度から分類している。本論文は望月（1990）、山口（1991）、申（2007）の分類を中心に比較しつつ、紹介する。その後は中国語結果複合動詞における意味制約に触れる。

望月（1990）は V2 の指向対象の違いにより、（32）のように結果複合動詞を四種類に分けている。（32 i）の「主語指向型」では、V2 “累”（疲れる）が主語“我”（私）の状態を表しているのに対し、（32 ii）の「目的語指向型」の V2 は目的語“他”（彼）について述べている。（32 iii）の“完”（終わる）が V1 “吃”（食べる）を叙述していることから、望月（1990）は「動詞語幹指向型」と呼ぶが、研究対象からは外している。最後の（32 iv）の V1 の目的語である“那顿饭”（そのご飯）は結果複合動詞の前に移動し、無標型の「V1+V2+対象」という語順ではなく、「O1+V1+V2+O」となり、「有標型」とする。

（32） i. 主語指向型：

我 走累 了。

wǒ zǒu leì le

私 歩く－疲れる LE

「私は歩き疲れた。」

ii. 目的語指向型：

我 踢伤 了 他。

wǒ tī shāng le tā

私 蹴る－怪我する LE 彼

「私は彼を蹴って怪我をさせた。」

iii. 動詞語幹指向型：

我 吃完 了 饭。

wǒ chī wán le fàn

私 食べる－終わる LE ご飯

「私は御飯を食べ終わった。」

iv. 有標型：

那 頓 飯 吃 坏 了 我 的 肚子。

nà dùn fàn chī huài le wǒ de dù zǐ

その 量詞 ご飯 食べる－壊れる LE 私 の お腹

「(言わんとする意味は) あの御飯を食べて私はお腹を壊した。」

(望月 1990 : 129)

有標型の(32iv)は石村(2011)では「原因型」と呼ばれる。石村(2011)によれば、この型は再帰的意味構造を具える<自動型>が「原因主語の導入」によって、派生されたものである。「再帰的意味構造」とは「自分で自分がある結果状態にする」(石村 2011 : 166)ということで、(33a)では、複合動詞の“喝醉”(飲む－酔っ払う)には張三という1つの項しかなく、張三が酒を飲むことにより、自分を酔わせた状態にしたので、“喝醉”(飲む－酔っ払う)は再帰的意味構造を持つ自動型の複合動詞である。(33a)で、V1の目的語である“酒”(そのお酒)を原因として、主語の位置に導入すれば、(33b)の<原因型>になる。

(33) a. 张三 喝醉 了。<自動型>

zhāng sān hē zuì le

張三 飲む－酔っ払う LE

「張三は飲んで、酔っ払った。」

b. 那 瓶 酒 喝醉 了 张三。<原因型>

nà píng jiǔ hē zuì le zhāng sān

その 量詞 お酒 飲む－酔っ払う LE 張三

「張三はそのお酒を飲んで酔っ払った。」

(石村 2011 : 5)

(32iv)の例も(34)から派生したものと考えられる。(34)は私が食べて、私のお腹を壊したという意味である。そこで、“吃”(食べる)の目的語である“那顿饭”を具体的な原因として(34)に組み込むと、(32iv)の形になる。(33a)(34)のV2の“醉”(酔っ払う)、“坏”(壊れる)は主語の状態を修飾しているので、本研究でも「有標型／原因型」は「主語指向型」から派生されるものとする。

(34) 我 的 肚子 吃坏 了。

wǒ de dù zǐ chī huài le

私 の 腹 食べる－壊れる LE

「私のお腹は（食べて）壊れた。」

山口（1991）は中国語の結果複合動詞を（35）のような A タイプ（V2 が主語や目的語を指向するタイプ）と（36）のような B タイプ（V2 がアスペクト辞、また修飾語として働く）に分類しているが、望月（1990）と同じく、B タイプを研究対象としては扱わない。

(35) A a. 他 跑累 了。

tā pǎo lèi le

彼 走る－疲れる LE

「彼は走り疲れた。」

b. 张三 推到 了 李四。

zhāng sān tuī dào le lǐ sì

張三 押す 倒れる LE 李四

「張三は李四を押し倒した。」

(36) B a. 他 睡着 了。

tā shuì zháo le

彼 寝る－着く LE

「彼は寝ついた。」

b. 我 看清 了 那 个人。

wǒ kàn qīng le nà gè rén

私 見る－はっきり le その 量詞 人

「私はあの人をはっきり見た。」

（山口 1991 : 115）

山口（1991）は上の A タイプについて、V1 と V2 がそれぞれ自動詞か他動詞か、複合動詞全体が自動詞になるか他動詞になるかを基準に、四種類に分類している。（37 i）では、“冻”（凍る）も“病”（病気になる）も自動詞であり、この二つの動詞を組み合わせた複合

動詞全体も自動詞である。(37 ii) の V1 “喝” (飲む) は他動詞にもかかわらず、複合動詞全体は自動詞である。(37 iii) の “哭” (泣く) は自動詞、“湿” (湿った) は形容詞であるのに、複合動詞では目的語を取る他動詞になる。最後の (37 iv) の “削尖” (削る-とがる) は、他動詞と自動詞から構成され、V1 の目的語がそのまま複合動詞全体の目的語となる。このように、複合動詞全体が自動詞であれば、V2 は主語について述べる主語指向型であり、複合動詞全体が他動詞の場合、V2 は目的語の状態を叙述する目的語指向型となるのが普通である。

(37) i 自 + 自 / 形 → 自

我 冻病 了。

wǒ dòng bìng le

私 凍る-病気になる LE

「私はこごえて病気になった。」

ii 他 + 自 / 形 → 自

他 喝醉 了。

tā hē zu le

彼 飲む-酔っ払う LE

「彼は (お酒を) 飲んで酔っ払った。」

iii 自 + 自 / 形 → 他

她 哭湿 了 手帕。

tā kū shī le shǒu pà

彼女 泣く-濡れる LE ハンカチ

「彼女はハンカチを泣き濡らした。」

iv 他 + 自 / 形 → 他

弟弟 削尖 了 铅笔。

dì dì xuē jiān le qiān bǐ

弟 削る-とがる LE 鉛筆

「弟は鉛筆をけずってとがらせた。」

申 (2007) は中国語の複合動詞を 5 種類に分類した後、『汉语动词—结果补语搭配词』から結果複合動詞を 1866 個集め、それぞれの種類の分布状況を調べた。申 (2007) の調査結

果を見ると、目的語志向型に属するものの数が一番多く、次に補文関係であり、主語志向型の結果複合動詞には 322 例しかいない。申（2007）はさらに V1 及び V2 から項を受け継ぐ状況を基準として、(38) のように中国語の結果複合動詞を細かく分けている。

(38) 結果複合動詞の分類とその生起数	1866 例	
①目的語志向型	816 例	44%
②主語志向型	322 例	17%
③前項述語の項が具現化しない場合	73 例	4%
④後項述語の項が具現化しない場合	0 例	0%
⑤補文関係	655 例	35%

(38) の①と②では、複合動詞の項は V1 と V2 両方から受け継がれるのに対し、③④⑤では、複合動詞の項は V1 か V2 から受け継がれる。以下では例を挙げて説明する。

申（2007）は V1 の主語と目的語をそれぞれ 1 と 2、V2 の主語と目的語をそれぞれ 1' と 2' で表す。(39) と (40) は同じ目的語志向型であり、結果複合動詞の主語が V1 の主語、結果複合動詞の目的語が V2 の主語に当たる。ただし、(39) は (37iv) と同様に V1 は他動詞であるが、(40) は (37iii) と同じく、V1 は自動詞である。

(39) a. 推开 (押す－開く) : <1, 2>+<1'> → <1, 2-1'> (745 例 40%)

b. 她 推开 了 沉重 的 大 门。
tā tuī kāi le chén zhòng de dà mén
彼女 押す－開く LE 重い の 大きい 扉
「彼女は重い扉を押し開けた。」

(40) a. 哭走 (泣く－行く) : <1>+<1'> → <1, 1'> (62 例 3%)

b. 黛玉 哭走 了 很多 客人。
dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén
黛玉 泣く－行く LE 沢山 お客様
「黛玉は、泣いて、沢山のお客様を帰らせてしまった。」

(申 2007 : 204)

(41) から (44) までの例文はすべて主語志向型の結果複合動詞である。V1 の外項と V2 の内項が同定され、結果複合動詞の主語になっている。また、結果複合動詞は V1 の内項あるいは V2 の内項から目的語を選ぶ。

- (41) a. 跳烦 (踊る+飽きる) 及び跌倒 (転ぶ+倒れる) :

$\langle 1 \rangle + \langle 1' \rangle \longrightarrow \langle 1-1' \rangle$ (161 例 8.6%)

- b. 小丑 跳烦 了。

ピエロ 踊る - 飽きる 完了

「ピエロは踊り飽きた。」(Li 1990:189)

- (42) a. 吃腻 (食べる+飽きる) : $\langle 1, 2 \rangle + \langle 1' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2 \rangle$ (149 例 7.9%)

- b. 凤姐 吃腻 了 好 东西。

鳳姐 食べる - 飽きる 完了 良い もの

「鳳姐は美味しいものを食べ飽きた。」(Li 1990:187)

- (43) a. 下输 (将棋をさす+負ける) :

$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle$ (16 例 0.8%)

- b. 宝玉 下输 了 棋。

宝玉 (将棋を) さす - 負ける 完了 将棋

- (44) a. 玩忘 (遊ぶ+忘れる)⁷ : $\langle 1 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2' \rangle$ (0 例 0%)

- b. 他 玩忘 了 自己 的 职责。

彼 遊ぶ - 忘れる 完了 自分 の 職責

「彼は遊びすぎて、自分の職責を忘れてしまった。」

(45) では、V1 が二つの項を取るものの、複合動詞の項として具現化する項は一つだけである。“写酸” (書く - 疲労して痛い) では、“写” (書く) は“我” (私) と“字” (字) という 2 つの項、“酸” は“手” (手) という 1 つの項をとる。(45b) において、V1 の目的語の“字” (字) は現れず、申 (2007) は“写酸” (書く - 疲労して痛い) のような結果複合動詞を V1 の項が具現化しない型に分類している。しかしながら、(45b) は実は (45c) から受

⁷ 「非能格自動詞+他動詞」という組み合わせについて、申 (2007) は『汉语动词-结果补语搭配词典』にある 1866 例から“玩忘” (遊ぶ+忘れる) のような V2 が二項述語を取る例を見つけられなかったが、Li (1990 : 188) から (45b) の例を引用している

動化によって派生した文だと考えられる。(45c) では、V2 が“手”(手)の状態を叙述するから、本論文は“写酸”(書く－疲労して痛い)は目的語指向型であり、(45b)のような派生文については論述しない。詳しくは 3.1 節で述べる。

(45) a. V1 の項が具現化しない場合: <1, 2>+<1'> → <1-1'> (73 例 4%)

b. 我 写 了 一 天 字, 手 都 写 酸 了。

wǒ xiě le yī tiān zì shǒu dōu xiě suān le

私 書く LE 一日 字 手 殆ど 書く－疲労して痛い LE

「私は一日中ずっと字を書いていたから、手を書き疲れて痛くなった。」

(《汉语动词—结果补语搭配词典》: 225)

c. 我 写 了 一 天 字, 写 酸 了 手。

wǒ xiě le yī tiān zì xiě suān le shǒu

私 書く LE 一日 字 書く－疲労して痛い LE 手

「私は一日に字を書いて、手を書き疲れた。」

申 (2007) が最後に挙げているのは、補文関係を持つタイプである。(46b) の“起晚”(起きる－遅い)では、V2 が V1 の修飾語として働いている。本論文ではこのタイプのものを結果複合動詞としては扱わない。

(46) a. 補文関係の複合動詞 655 例 35%

b. 我 因为 起晚 了, 所以 没 赶上 汽车。

wǒ yīn wéi qǐ wǎn le suǒ yǐ méi gǎn shàng qì chē

私 ために 起きる－遅い LE だから 否定 間に合う バス

「起きるのが遅かったから、私はバスに間に合わなかった。」

以上、中国語の結果複合動詞について、三つの分類方法を紹介した。本研究は中国語の結果複合動詞を「目的語指向型」と「主語指向型」と大きく二種類に分け、第 3 章と第 4 章で各タイプの下位分類及び特徴をさらに論述する。第 1 章で述べたように、(46) のような補文関係の結果複合動詞では、V1 と V2 の間に因果関係がないので、このタイプの複合動詞は

扱わない。また、望月（1990）の「有標型」も、(45b) のような V1 の項しか具現化しないタイプも別のタイプから派生されたものであるから、この二つのタイプも扱わない。

次に、中国語の結果複合動詞に関する意味制約を見て見よう。最近 20 年の中国語学では、中国の結果複合動詞について、Li (1990) をはじめ、複合動詞の項構造の組み合わせに関する研究は多いが、中国語の結果複合動詞の形成条件について、体系的に論じた研究はそれほど多くない。その中で、詹（2010）は中国語の複合動詞におけるイベントの語彙構造及び成立する条件を中心に論述し、中国語の典型的な結果複合動詞における意味制約を以下のようにまとめている。

- (47) a. V1 と V2 がそれぞれ独立するイベントであり、この 2 つのイベントの間に原因と結果という意味関係を持つ。
- b. 原因イベントである V1 と結果イベント V2 の間に適切な語彙的距離を持たなければならず、近すぎても遠すぎても不適切な距離となる。

(47a) の因果関係について、詹（2010）は V1 と V2 の間に因果関係が成り立つためには、V1 が動作あるいは状態を、V2 は状態を表す動詞また形容詞でなければならないと述べる。(48) では“警察抓小偷”（警察は泥棒を捕まえる）と“小偷躲”（泥棒は身を隠す）という 2 つのイベントの間に因果関係があるが、“抓”（捕まえる）と“躲”（隠れる）を複合することができないのは、V2 “躲”（隠れる）が状態動詞ではないからである。

(48) *警察 抓躲 了 小偷。

jǐng chá zhuā duǒ le xiǎo tōu

警察 捕まえる－隠れる LE 泥棒

「警察が泥棒を捕まえようとして、泥棒が身を隠した。」

さらに V1 と V2 のイベント参加者の間には、ある繋がりが必要である。例えば、“我推开了门”（私はドアを押し開いた。）では、“推”（押す）は「私」と「ドア」という二つの項を、“门”（開く）は「ドア」のみを項に持ち、V1 と V2 の間に「ドア」が共有される。一方、“她哭肿了眼睛。”（彼女は目を泣き腫らした。）では V1 の項「彼」と V2 の項の間に共通する項がないものの、「目」は「彼女」の一部であり、この二つの項は間接的に関連している。

次に、(48b) の意味条件を見る。ここでは、“哭湿了眼睛”（目を泣き濡らした）と“唱病”（歌う一病気になる）という 2 つの例で説明する。最初に、V1 と V2 の語彙的距離が近い場合を見る。詹（2010）によれば、もし V1 から V2 を完全に予測できれば、V1 と V2 の間の語彙的距離はゼロで、適切ではない。中国語では、“哭湿”（泣く一濡れる）自体は問題なく言えるが、(49a) に示すように、目的語が「目」とであると容認度がやや下がる。これは“哭”（泣く）にはすでに「目から涙を出て、目が濡れる」という意味が含まれており、V2 は V1 から完全に予測できるため、「目が濡れる」という情報は聞き手に対して新情報ではないからである。

- (49) a. ? 张三 哭湿 了 眼睛。
zhāng sān kū shī le yǎn jīng
張三 泣く一濡れる LE 目
「張三は目を泣き濡らした。」
- b. 张三 哭肿 了 眼睛。
zhāng sān kū zhǒng le yǎn jīng
張三 泣く一腫れる LE 目
「張三は目を泣き腫らした。」

他方、“唱病”（歌う一病気になる）では、“唱”（歌う）と“病”（病気にある）の語彙的距離は遠いので、この複合動詞の使用頻度は低い。詹（2010）は Google で“唱累”（歌う一疲れる）、“累病”（疲れる一病気になる）と“唱病”（歌う一病気になる）という三つの結果複合動詞の出現頻度を調査した。その中で、“累病”（疲れる一病気になる）の頻度が一番高く、4,930,000 件である。2 番目の“唱累”（歌う一疲れる）は 460,000 件、“唱病”（歌う一病気になる）の頻度が一番低く、用例は 3,140 件しかない。それは「歌を歌う」から「病気になる」までの間に、「疲れる」状態があり、V2 に示される結果状態は実現しにくいからだという。それ以外に、詹（2010）は V1 と V2 の間に共通する項がないか、V1 と V2 の間に共通する部分が項ではないという二つの状況でも V1 と V2 の語彙的距離は遠いと述べている。例えば (50) の“写脏”（書く一服）は小明が服の上に字を書いて、服が汚れると解釈されるため、V2 の項である「服」は V1 の項ではなく、字が書かれる場所であるから、V1 の付加部と V2 の内項が共通することになる。一般的には、服の上に何かを書くことはあまりない

ので、(50) のような文に他に説明がなければ、聞き手にとって想像しにくく、“写”（書く）と“脏”（汚れる）の間に語彙的距離が遠くなるという。

- (50) 小明 写脏 了 衣服。
xiǎo míng xiě zāng le yī fú
小明 書く－汚れる LE 服
「小明は書いて、服が汚れた。」

以上が詹（2010）の説明であるが、これには多くの問題がある。

まず、V1 と V2 の間に因果関係が成り立つためには、V1 が動作あるいは状態を、V2 は状態を表す動詞また形容詞でなければならないというが、動詞のアスペクトと因果関係は全く別の概念であり、一つの条件とするのは無理がある。

次に語彙的距離について、詹（2010）は V1 が表す事象と V2 が表す事象が近すぎても遠すぎてもいけないという。つまり、V1 から V2 を完全に予測できれば、語彙的距離はゼロで不適切であり、逆に V1 から V2 が全く予想できなくても容認できないという。しかし、語彙的距離のない (49a) はそれほど悪くない。

また、語彙的距離が遠すぎてもいけないと言うことはない。“唱累”（歌い－疲れる）と比べ、“唱病”（歌う－病気になる）の用例数が少ないのは確かであるが、非文ではなく、言えないわけではない。さらに次の例を見て頂きたい。

- (51) a. Lady Gaga 唱病 了 （東方早報 2009.7.1）
Lady Gaga chàng bìng le
レディーガガ 歌う－病気になる LE
「レディーガガは歌って、病気になった。」
b. 她 家 的 洗衣机 反而 把 衣服 洗脏 了。
tā jiā de xǐ yī jī fǎn ér bǎ yī fú xǐ zāng le
彼女 家 の 洗濯機 逆に BA 服 洗う－汚れる LE
「彼女のお家の洗濯機は逆に服を洗って、服が汚れた。」

（海峡都市报 2013.12.3）

c. 黛玉 哭走 了 很多 客人。 (申 2007 : 204)

dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén

黛玉 泣く一行く LE 沢山 お客様

「黛玉は、泣いて、沢山のお客様を帰らせてしまった。」

(51a) は新聞の見出しから取った例で、Lady Gaga はコンサートで歌を歌って、病気になったということを意味する。(51b) では、“洗” (洗う) の目的は対象をきれいにすることであり、洗った結果汚れるという状態は考えにくい、それにもかかわらず“洗” (洗う) と“脏” (汚れる) は一つの複合動詞になっている。最後に、詹 (2010) にしたがえば、“哭” (泣く) と“走” (行く) には項の共有がなく、語彙的距離は遠いはずであるが、“哭走” (泣く一行く) は問題なく成立する。

したがって、詹 (2010) の論は成り立たないと言うべきであるが、中国語の結果複合動詞が無制限に形成できるというわけでもない。この点については、2.3.2 節、第 3 章と第 4 章で日本語の結果複合動詞を比較しながら見ていくことにする。

2.2.3 日本語の結果複合動詞の分類及び意味制約

本節では、日本語の結果複合動詞を説明する前に、その上位タイプである複合動詞を見ておきたい。影山・由本 (1997) は複合動詞を語彙的なものと統語的なものに分けている。この二種類の動詞は形態上が同じに見えるが、実は様々な相違点がある。影山・由本 (1997) によれば、第一に、意味の透明さと生産性の高さに違いが見られる。意味の透明さという点で、語彙的な「飲み歩く」と統語的な「飲みかける」と比べると、前者では「飲む」対象は酒類に限定されているが、後者ではどのような液体でもよい。このように、語彙的複合語は様々な程度に意味が慣習化されているが、統語的複合語は意味的に透明である。

(52) a. 語彙的複合動詞

飛び上がる、沸き立つ、押し開ける、書き込む、吸い取る、受け取る、
貼り付ける、探し歩く、飲み歩く、恋い慕う、誉め讃える、語り明かす、
遊び暮らす、泣き叫ぶ、泣きはらす、勝ち抜く

b. 統語的複合動詞

話し終わる、払い終える、話し始める、しゃべり続ける、歩き過ぎる、

食べそこなう、しゃべりまくる、飲みかける、読み直す、見慣れる、
書き忘れる、乗りそこねる、鍛え抜く

(影山・由本 1997 : 68)

さらに、統語的複合動詞の V1 と V2 は補文関係があると捉えることができるのに対し、語彙的な複合動詞は、より複雑である。影山 (1993) は V1 と V2 の間にある意味関係の種類を、(53) の「並列」「手段」「様態」「原因」「補文関係」という五つのタイプに分ける。

- (53) a. 手段 : V1 することによって、V2
切り倒す、踏み潰す、押し開ける、折り曲げる、切り分ける、
むしり取る
- b. 様態 : V1 しながら V2
尋ね歩く、転げ落ちる、遊び暮らす、忍び寄る、舞い上がる、
語り明かす、持ち去る、探し回る
- c. 原因 : V1 の結果、V2
歩き疲れる、抜け落ちる、溺れ死ぬ
- d. 並列 : V1 かつ V2
泣き喚く、忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ
- e. 補文関係 : V1 という行為/出来事を (が) V2
見逃す、死に急ぐ、聞き漏らす、晴れ渡る、使い果たす、呼び交わす

これらの複合動詞において、「手段」複合動詞と「原因」複合動詞が結果複合動詞である。松本 (1998) や陳 (2015) によれば、(53a) のような「手段」複合動詞は V1 が V2 の結果状態を達成する手段を表す。また、このタイプで最も典型的な組み合わせは「他動詞+他動詞」である。一方、(53c) にある「原因」複合動詞では、V1 は V2 を引き起こす原因であり、V2 は V1 の無意志的な結果であるため、V2 は非対格動詞のみを取る。

日本語では、統語構造も形態構造も「右側主要部の規則」(Righthand Head Rule) に従う。影山 (1993) によれば、「並列」複合動詞を除いて、他の四つのタイプの複合動詞もすべて右側の V2 が主要部で、V2 の項構造が複合動詞全体の項構造を決める。この点について、V1 と V2 が異なる目的語を取る例を見て見よう。

- (54) a. 彼をだます、お金を取る
 → お金をだまし取る *彼をだまし取る
- b. どら焼きを焼く、菊の模様を付ける
 → 菊の模様を焼き付ける *どら焼きを焼き付ける

(54a) の「だます」の目的語は「彼」であり、「お金」ではないが、「だます」と「取る」を複合して、「だましとる」になると、複合動詞全体は「お金」を目的語として取る。「焼き付ける」においても、V1 と V2 はそれぞれに「どら焼き」と「菊の模様」をとり、複合動詞全体も V2 と同じ目的語を取る。「手段」複合動詞の V2 は状態変化あるいは位置変化の使役を表す動詞つまり他動詞であるから、「手段」複合動詞全体も (55a) のように他動詞になる。それに対し、「原因」複合動詞の V2 は非対格自動詞であり、「原因」複合動詞も (55b) のように自動詞になる。また、「手段」複合動詞は目的語指向型、「原因」複合動詞は主語指向型と対応する。したがって、中国語と同じく、日本語結果複合動詞も主語指向型と目的語指向型に分類できる。

- (55) a. 彼は木を切り倒す。
 b. 彼は歩き疲れる。

ここまで日本語の結果複合動詞の分類を簡単に紹介したが、以下では語彙的複合動詞の成立にかかる制約を見ていきたい。これまで提案されてきた制約の中で、最も重要なのは影山 (1993) の「他動性調和の原則」と松本 (1998) の「主語一致制約」の二つである。

影山 (1993) によれば、語彙的複合動詞を構成する単純動詞の項構造は以下のような三つのタイプがあるが、V2 が「付く」「込む」である場合を除き、ほとんどの語彙的複合動詞で、項構造に関する制限がある。

- (56) a. 他動詞 : (x<y>)
 b. 非能格自動詞 : (x<>)
 c. 非対格自動詞 : <y>

他動詞は外項 *x* と内項 *y* の両方を持つが、非能格自動詞と非対格自動詞はそれぞれ外項と内項の片方しか持たない。Jacobesen (1991) は語彙的複合動詞では、他動詞と他動詞、自動詞と自動詞の組み合わせが多いことを指摘しているが、影山 (1993) は他動詞と非能格動詞という組み合わせの複合動詞の数も少なくないことを指摘している。

(57) a. ～回る (非能格自動詞)

非能格＋回る：暴れ回る，歩き回る，動き回る，逃げ回る，這い回る，はね回る，走り回る，泳ぎ回る，はいずり回る

他動詞＋回る：探し回る，買い回る，荒し回る，ふれ回る，しゃべり回る，持ち回る

非対格＋回る：(風が) *吹き回る，*落ち回る，*流れ回る，*つまずき回る

～暮らす (非能格自動詞)

他動詞＋暮らす：嘆き暮らす，待ち暮らす，眺め暮らす

非能格＋暮らす：泣き暮らす，遊び暮らす，行き暮らす，降り暮らす

非対格＋暮らす：*明け暮らす (cf. 明け暮れる)，*倒れ暮らす，*痛み暮らす

b. ～落とす (他動詞)

他動詞＋落とす：打ち落とす，振り落とす，切り落とす，突き落とす

非能格＋落とす：泣き落とす，競り落とす

非対格＋落とす：* (子供が砂山を) 崩れ落とす，*揺れ落とす，*振れ落とす，*こぼれ落とす

c. ～落ちる (非対格自動詞)

非能格＋落ちる：*走り落ちる，*跳び落ちる，* (スキーで) 滑り落ちる，

他動詞＋落ちる：*洗い落ちる，*ぬぐい落ちる，*切り落ちる

非対格＋落ちる：こぼれ落ちる，崩れ落ちる，剥げ落ちる，焼け落ちる，ころげ落ちる，(段階から) 滑り落ちる

(影山 1993 : 121-122)

(57a,b) が示しているように、非能格動詞「回る」と他動詞「落とす」は非能格動詞または他動詞と複合できるのに、非対格動詞とは組み合わせられない。また、(57c) の V2 は非対格自動詞であり、V1 は非対格自動詞のみ可能である。つまり、「他動詞＋他動詞」「他動詞

＋非能格自動詞」「非対格自動詞＋非対格自動詞」の組み合わせはよいが、「非能格＋非対格自動詞」「他動詞＋非対格自動詞」はできない。他動詞と非能格自動詞は外項があるという共通点を持ち、「非対格自動詞＋非対格自動詞」はどちらも内項のみを持つことから、日本語の語彙的複合動詞は、原則として、外項を持つか否かの基準により、外項をもつ動詞同士（他動詞・非能格動詞間）か、外項を持たない動詞同士（非対格動詞同士）の間での複合しかおこらない（申・望月 2009 : 412）といえる。影山（1993）はこれを「他動詞調和の原則」と呼んでいる。

ほとんどの日本語の語彙的複合動詞は、影山（1993）の「他動性調和の原則」に従うが、反例がないわけではない。松本（1998）によれば、「原因」複合動詞では、(58a)のような典型的なものを除き、(58b)の「非能格動詞＋非対格自動詞」と(58c)「他動詞＋非対格自動詞」の組み合わせをもつものは「他動性調和の原則」に反している。

- (58) a. 降り積もる、溺れ死ぬ、焼け死ぬ、抜け落ちる
b. 歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣きぬれる、泣き沈む
c. 読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食い潰れる、聞きほれる、見惚れる

(松本 1998 : 48)

(59a) では、「私」は「歩く」の外項であり、「疲れる」の内項でもある。非能格自動詞と非対格自動詞の組み合わせであり、「他動性調和の原則」に違反しているが、この二つの動詞は一項動詞であり、唯一の項はどちらも主語となるはずの項である。同じく、(59b) は他動詞と非対格自動詞の組み合わせであり、「他動性調和の原則」に反しているが、「読む」の主語と「疲れる」の主語は同一である。

- (59) a. 私が歩き疲れた。
b. 太郎が本を読み疲れた。

このことから、松本（1998）は「他動性調和の原則」より緩い「主語一致の原則」を提案している。

- (60) 主語（卓立項）一致の原則：二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者（通例、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならない。

（松本 1998 : 72）

日本語の結果複合動詞では、まず「他動性調和の原則」あるいは「主語一致の原則」を守らなければならない。しかし、この二つの原則だけではまだ不十分である。本研究は日本語の結果複合動詞において、上記の二つの原則以外に、他の制約も必要であるが、この点については第 3 章と第 4 章で詳しく述べる。

2.3 日中結果複合動詞と英語の結果構文に関する比較

2.2 節は英語、中国語と日本語に分けて、結果構文と結果複合動詞の分類及び意味制約を重点的に説明した。この節では英語の結果構文と日中結果複合動詞を比べながら、日中結果複合動詞にある意味制約を明らかにする。2.3.1 節は申・望月（2009）が中国語の結果複合動詞、日本語の結果複合動詞、英語の結果構文を比較した結果を紹介する。それを踏まえ、2.3.2 節は申・望月（2009）で解決されていない問題点を英語の結果構文にある意味制約を参考にしながら、考察する。

2.3.1 申・望月（2009）

申・望月（2009）は中国語の結果複合動詞を日本語の結果複合動詞、英語の結果構文と比較しながら、中国語の結果複合動詞の特徴を明らかにしている。二人によれば、日中結果複合動詞と英語の結果構文の具体的な対応関係には以下の 5 種類がある。

第一の型では、中国語の結果複合動詞に対して、日本語の結果複合動詞も英語の結果構文も対応する。(61) では、中国語の“踩扁”（踏む—平らになる）に、日本語の「踏み潰す」と英語の *step X flat* が対応している。これらの結果複合動詞および結果構文は、(62) のような因果関係を表す典型的な語彙概念構造をもつ。

- (61) a. 他 一脚 把 掉 在 地上 的 馒头 踩扁 了。
tā yī jiǎo bǎ diào zài dì shàng de mán tóu cǎi biǎn le
彼 一踏み BA 落ちる 〜に土の上 の 蒸しパン 踏む—平らになる LE

b. 彼は足で地面に落ちていた蒸しパンを平らに踏みつぶした。

c. He stepped the steamed bun flat with one stomp of his foot.

(62)	[x	ACT ON	y]	CAUSE	[BECOME	[y	BE	AT-	z]]
		↓	↓	↓	使役	起動	↓			↓
		原因	行為	対象			対象			結果状態
		他	踩	馒头			馒头			扁
		彼	踏み	蒸しパン			蒸しパン			つぶれる
		He	step	the steamed bun			the steamed bun			flat

(申・望月 2009 : 410-411)

第二の型は、中国語の結果複合動詞に対して、英語には対応する結果構文があるが、日本語では二文に分けてしか表せない型である。(63)の各文において、「彼が目覚める」という結果を引き起こした原因は「涼しい風が吹く」というできごとである。この場合、中国語は「吹醒」(吹く・目覚める)という複合動詞で表すことが可能であるが、日本語では「*吹き起こす」「*吹き覚ます」「*吹き起きる」「*吹き覚める」といった複合動詞で表せず、二文でしか表現できない。その理由は、申・望月(2009)が指摘しているように、日本語には「他動性調和の原則」(影山 1993 : 117)という制限があるからである。それに従えば、「*吹き起こす」「*吹き覚ます」はいずれも非対格動詞「吹く」と他動詞「起こす/覚ます」の複合であり、「他動性調和原則」に違反してしまう。「*吹き起きる」「*吹き覚める」という非対格動詞の組み合わせは「他動詞調和の法則」は満たすが、由本(1996)や松本(1998)の「主語一致の原則」に違反している。「吹く」の項は「風」であり、「起きる」「覚める」の主語項は「彼」である。この二つの動詞が唯一持つ項が異なっているために、主語も一致せず、非文となってしまうのである。

- (63) a. 一阵凉风把他吹醒了。
yī zhèn liáng fēng bǎ tā chuī xǐng le
一 類別詞 涼風 BA 彼 吹く 一眼覚める LE
- b. 涼しい風が吹いて、彼を目覚めさせた。
- c. A cool wind blew him awake.

(申・望月 2009 : 412)

第三の型では、文の主語と結果述語の主語が一致する。中国語にも日本語にも、主語と V2 が叙述関係をもつ「主語叙述型結果述語」がある。例えば、“吃膩”（食べ飽きる）の「～飽きる」は直接目的語が存在するにも関わらず、主語の結果状態を表している。これ対し、英語の結果構文には「直接目的語制約」があり、結果述語は目的語としか叙述関係を持つことができない。

- (64) a. 他 吃膩 了 好 东西。
 tā chī nì le hǎo dōng xī
 彼 食べる - 飽きる LE 良い もの
- b. 彼は美味しいものを食べ飽きた。
- c. He is tired from eating too much good food.

（申・望月 2009：415）

「飽きる」以外に、中国語の V2 が“累”（疲れる）や“慣”（慣れる）である場合、日本語の V2 は「～疲れる」、「～慣れる」となる複合動詞が対応する。この理由としては、申・望月（2009）が述べているように、日中いずれの言語においても、複合動詞の V1 が表す原因事象に結果事象を引き起こす意図性がないものの、V2 が表す結果事象は人間が現実世界で頻繁に遭遇する自然現象としての生理的・心理的状态変化であるので、V1+V2 を「先行事象—結果事象」として合成可能となるのである。

続いて、第四の型では、中国語では結果複合動詞で表せる複合事象が、日本語も英語も重文で表されている。(65a) では、V1 “洗”（洗う）の意味には“袖子湿”（袖が濡れる）という偶発的結果が含まれていないにもかかわらず、中国語では複合動詞として成立する。申・望月（2009）によれば、英語の結果構文も中国語の結果複合動詞も Washio（1997）の「弱い結果構文」、影山（1996）の「派生的結果述語」を許容するが、(65) の現象から、中国語の結果複合動詞は、日本語の結果複合動詞や英語の結果構文と比べ、かなり広い範囲の因果関係を表すことが分かる。この点について申・望月（2009：442）は中国語の複合動詞をこう特徴付けている。第一に、中国語の複合動詞は、時間順原則にさえ違反していなければ、広い範囲の派生的結果述語を柔軟に許す。第二に、中国語の複合動詞は構文のレベルの形式ではなく、使役化や脱使役化といった操作を語レベルで行うため、様々な V1 と V2 の組み合わせが可能となる。

- (65) a. 洗 衣服 前 先 把 袖子 挽起来,
 xǐ yī fu qián xiān bǎ xiù zǐ wǎnqǐ lái
 洗濯する 衣服 前 先ず BA 袖 巻き上げる
 不然 把 袖子 都 洗湿 了。
 bú rán bǎ xiù zǐ dōu xǐ shī le
 さもなければ BA 袖 全部 洗うー濡れる LE
- b. 洗濯する前に袖を巻き上げて、そうでないと袖が濡れてしまうから。
- c. Roll up your sleeves before washing, or else you will wet them.

(申・望月 2009 : 418)

最後の五番目の型では、中国語の結果動詞に日英語では一つの動詞のみが対応する。中国語では、“杀”（殺す）のような動詞は結果を含まない動作動詞であり、「殺す」や kill のような達成動詞ではない。したがって、動作対象の状態変化を保証する「完結性」を内包するために、結果複合動詞という形式を取らなければならない。

- (66) a. 这 种 杀虫剂, 能 杀死 很多种类 的 害虫。
 zhè zhǒng shā chóng jì néng shā sǐ hěn duō zhǒng lèi de hài chóng
 この 種 殺虫剤 できる 殺す・死ぬ 沢山の種類 の 害虫
- b. この殺虫剤は様々な種類の害虫を殺すことができる。
- c. This new insecticide can kill many different kinds of insects.

(申・望月 2009 : 419)

この五種類の対応関係のうち、日中の結果複合動詞が対応しているのは第一と第三のタイプであり、対応していないのは第二、第四、第五のタイプである。後者について、申・望月 (2009) は次のように述べている。まず、日本語の結果複合動詞には「他動性調和の原則」、「主語一致の原則」があるが、中国語の結果複合動詞にはない。次に、中国語の結果複合動詞は、日英語に比べると、V2 で表される状態が、V1 の事象から意図せず生じてしまうような非常に偶発的な結果でよく、かなり広い範囲の因果関係を表すことができる。さらに、日本語、英語において、1 つの達成動詞で表現できる事象に対し、中国の“杀”（殺す）のような単音節活動動詞は結果性を保証していないため、結果述語が必要となる。

しかしそれだけではない。日本語の「*履き濡らす」において、「履く」も「濡らす」も他動詞であり、「他動性調和の法則」に反しておらず、また、「履きつぶす」のように、「履く」を V1 とする結果複合動詞は不可能ではないにもかかわらず、「*履き濡らす」は複合動詞として成り立たない。さらに、日本語には「*粉々にたたく」のような派生的結果構文は存在しないが、影山（2004）や石村（2011）は、「撃ち殺す」「たたき壊す」のように、結果複合動詞が派生的結果構文に相当することがあると述べている。ではなぜ“穿湿”（履く・濡れる）という派生的結果複合動詞に、「*履き濡らす」が対応できないであろうか。次節ではその原因について、詳しく考察する。

- (67) a. 新买的鞋子不小心在下雨天穿湿了。
 xīn mǎi de xié zǐ bú xiǎo xīn zài xià yǔ tiān chuān shī le
 新しく買ったの靴不注意に雨の日履く・濡れる LE
- b. 雨の日にうっかり新しく買った靴を履いて、濡らしてしまった。

2.3.2 直接的な因果関係と間接的な因果関係

2.2.1 節で述べたように、英語の結果複合動詞では、行為と状態の間に直接的な因果関係がなければならない。さらに、Goldberg（1995）は（69）を挙げ、彼女が sick になる直接的原因はその状態になるまでずっと食べ続けることであると主張している。

- (68) a. The action denoted by the verb must be interpreted as directly causing the change of state: no intermediary time intervals are possible. (=18b)
- b. There is no intervening event between the causing subevent and the result subevent; that is, causation is direct.

(Rappaport Hovav & Levin 2001 : 783)

- (69) He ate himself sick. (=20)

しかしながら、中国語の結果複合動詞では必ずしもそうでなくてもよい。（70a）では、服を洗ったせいで服が破れたのではなく、服が破れたのはねじが服にあたったためである。つまり“洗”（洗う）は“破”（破れる）の直接的な原因ではない。同じく、（70b）でも、靴が汚れたのは走っている間に靴に付いた水や泥であるから、「走る」と直接的に関連してない。

- (70) a. 投 幣 洗 衣 卡 螺絲釘 洗破 衣
 tóu bì xǐ yī kǎ luó sī dīng xǐ pò yī
 入れる コイン 洗う 服 挟まる ねじ 洗う-破れる 服
 只 賠 800 元。
 zhǐ péi 800yuán
 ただ 賠償 800 元
 「コインランドリーにねじがあり、服を洗って破れたが、800 元しか賠償されない。」
- b. 所以 下 雨 也 不会 影响 心情，
 suǒ yǐ xià yǔ yě bú huì yǐng xiǎng xīn qíng
 だから 降る 雨 も できない 影響する 気持ち
 虽然 鞋子 都 跑脏 了，但 仍 很 开心，
 suī rán xié zǐ dōu pǎo zāng le dàn réng hěn kāi xīn
 けれども 靴 までも 走る-汚れる LE でも やはり とても うれしい
 所以 笑 得 很 美。
 suǒ yǐ xiào dé hěn měi
 だから 笑う DE とても 綺麗
 「雨が降っても、気分が悪くならず、走って靴が汚れてしまっても、やはりうれしい。だから、その笑顔は美しい。」

(貴州都市報 2012.5.31)

結果複合動詞は基本的に原因事象と結果事象という二つの下位事象から構成される複合事象構造を表す。つまり、V1 と V2 それぞれを原因イベントと結果イベントと見なすことができる。よって、(69) から、原因イベントと結果イベントの間にはもう一つのイベントを挿入することはできないはずである。しかしながら、(70a) の中国語の結果複合動詞“洗破”では「洗っている間にねじが服に当たったので、服が破れた」という意味解釈を取る場合は、V1 の“洗”(洗う)と V2 の“破”(破れる)の間にはもう一つのイベント「ねじが服に当たる」が挿入されることになる。そのため、中国語では、英語の結果構文に働いている「直接的な因果関係」制約を満たす必要がないと考えられる。これを図 3 と図 4 で示す。

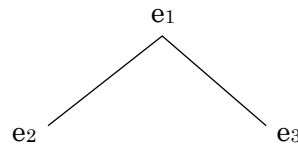


図3 直接因的な因果関係：動作自体の力で結果を引き起こす

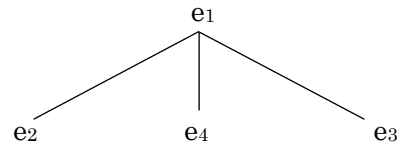


図4 間接的な関係

上記の図では、 e_1 は結果複合動詞で表される複合イベントを、 e_2 と e_3 はそれぞれV1とV2が担う原因イベントと結果イベントを表す。図3のように、 e_2 と e_3 が隣接しているとき、「直接的な因果関係」があるという。これに対し、図4のように、 e_2 と e_3 の間に e_4 という新しいイベントが挿入されると、 e_2 は e_3 と間接的な因果関係をもつことになる。

日本語には「*洗い破る」という結果複合動詞は成立しないが、存在している結果複合動詞において、V1とV2の間に、新しいイベントを挿入することは可能であろうか。日中結果複合動詞を考察するために、日本語と中国語で、それぞれ「食べる」「吃」（食べる）をV1とする複合動詞を調べた。例(71)は「食べる」か「吃」（食べる）をV1にした上で成立する日中結果複合動詞である。(72)は中国語でだけ成立する例である。

- (71) 食べ飽きる—吃膩（食べる—飽きる）、
 食べ疲れる—吃累（食べる—疲れる）、
 食べ慣れる—吃慣（食べる—慣れる）

- (72) 吃脏（食べる—汚れる）、吃哭（食べる—泣く）、吃穷（食べる—貧しい）、
 吃贵（食べる—高い）

(71)の「飽きる」「疲れる」「慣れる」は心理的・生理的变化を表す動詞であり、主語とV2が叙述関係をもつことができるので、申・望月（2009）がいう中国語と日本語が対応する第三の対応型に属する。つまり、人間が現実世界で頻繁に遭遇する自然現象としての生理的・心理的状态変化であるので、「食べる」と「飽きる／疲れる／慣れる」ことの間に緊密な

因果関係が想定され、「先行事象—結果事象」として合成可能となる。(73-75) では、絶えずたくさん食べることによって、「飽きた」「疲れた」「慣れた」という結果状態が生じている。

(73) a. 私はケーキを食べ飽きた。

b. 我 吃膩 了 蛋糕。
wǒ chī nì le dàn gāo
私 食べ飽きる LE ケーキ
「私はケーキを食べ飽きた。」

(74) a. ヒマワリの種を食べ疲れた。

b. 我 吃 瓜子 吃累 了。
wǒ chī guā zǐ chī lèi le
私 食べる ヒマワリの種 食べ疲れる LE
「私は四川料理を食べ疲れた。」

(75) a. 彼は四川料理を食べ慣れた。

b. 他 吃慣 了 四川菜。
tā chī guàn le sì chuān cài
彼 食べる—慣れる LE 四川料理
「彼は四川料理を食べ慣れた。」

その一方で、対応する日本語のない場合もある。(76) “吃穷”（食べる-貧しい）という複合動詞を例にとると、食べれば、食べ物がなくなるという結果は生じるかもしれないが、食べるというイベントだけで、貧しくなることはない。しかし、食べものを商品として考えれば、日本料理のような値段の高い食事の代金を払うために、お金を使い過ぎて貧しくなったという結果状態を引き起したというのは十分考えられることである。ここでは、“吃”（食べる）は“穷”（貧しい）という結果の間接的な原因である。

(76) 昨天 去 吃 日料 把 我 吃穷 了。

zuó tiān qù chī rì liào bǎ wǒ chīqióng le
昨日 行く 食べる 日本料理 BA 私 食べる—貧しい LE
「昨日、日本料理を食べに行ったことが私を貧乏にした。」

“吃穷”（食べる・貧しい）以外にも、(77) のすべての中国語の“吃”（食べる）に関する結果複合動詞において、V1 と V2 は、直接因果関係を持たない。(77a) において、食べるだけでは、汚れるという結果状態に至らないが、火鍋を食べている間に、食べ物をテーブルに落としたために、テーブルが汚れることはあるだろう。同様に (77b) の“吃贵”（食べる・値段が高い）、(77c) の“吃哭”（食べる・泣く）では、食べるという動作だけで、“贵”（値段が高い）、“哭”（泣く）という結果に至るとは考えにくい。ヒッコリーが高くなった理由は需要が増えたからである。また、ボランティアは貧乏地域の教育局が用意した豪華な料理を食べている間に、地方政府の腐敗問題に気付いて、泣いたのである。

(77) a. 他 吃 火锅 把 饭桌 吃脏 了。

tā chī huǒ guō bǎ fàn zhuō chī zāng le

彼 食べる 火鍋 BA テーブル 食べる・汚れる LE

「彼は火鍋を食べて、テーブルが汚れた。」 (楊 2016)

b. 中国人 吃贵 了 美国 山核桃。

zhōng guó rén chī guì le měi guó shān hé táo

中国人 食べる・高い LE アメリカ ヒッコリー

「中国人がアメリカのヒッコリーをたくさん食べて、ヒッコリーの値段が高くなった。」 (http://blog.sina.com.cn/s/blog_5d6ef2f40100r4dh.html)

c. 贫困 县 教育 部门 设 宴 吃哭 志愿者…

pín kùn xiàn jiāo yù bù mén shè yàn chī kǔ zhì yuàn zhě

貧困 県 教育 部門 催す 宴会食べる・泣く ボランティア

「貧乏県の教育局は宴会を催し、ボランティアは食べて、泣いた。」

(春城晩報 2010.8.20)

上に挙げた (71) と (72) を比較すると、V1 と V2 の間の繋がりや度合いが異なる。「食べる」という動作で頻繁に起きる結果状態を引き起こす場合は日本語も中国語も結果複合動詞という形で表せるが、そうでなければ、日本語では複合動詞として成立しにくい。2.1.1 節で、日本語では、一部の派生的結果構文に相当する状況を表現するには結果複合動詞が可能であると述べたが、その場合でも、これらの複合動詞は「直接的な因果関係」という制約に違反してはならない。

また、中国語の“穿湿”（履く・濡らす）の例を以上の制約に当てはめてみると、“穿”「履く」と“湿”「濡れる」の間には「雨に降られた」などのイベント e_4 を挿入することができるから、V1 と V2 の間の因果関係は間接的である。例文 (67) を (78) として再掲する。

- (78) a. 新买的鞋子不小心在下雨天穿湿了。
 xīn mǎi de xié zǐ bú xiǎo xīn zài xià yǔ tiān chuān shī le
 新しく買ったの靴不注意に雨の日履く・濡れる LE
- b. 雨の日にうっかり新しく買った靴を履いて、濡らしてしまった。(=67)

“穿湿”（履く・濡らす）という複合動詞は、単に「靴が雨で濡れた」というのではなく、「雨の中を、靴を履いて歩いたために、靴が濡れた」という背景となる原因まで表すことができる。これに対して日本語では、V1 と V2 の間には緊密な関係がなければならず、「*履き濡らす」のような複合動詞は「直接的な因果関係」の制約に違反するため、容認されない。

2.4 まとめ

本章ではまず英語の結果構文と日中結果複合動詞の関係を中心に考察し、日本語の結果複合動詞は英語の弱い結果構文と対応するのに対し、中国語の結果複合動詞は弱い結果構文と強い結果構文の両方にも対応することをみた。次に、日中結果複合動詞に関する先行研究に基づき、日中結果複合動詞を「目的語指向型」と「主語指向型」という 2 種類に分けた。

最後に英語の結果構文にある「直接的な因果関係」制約を参考にしながら、日中結果複合動詞の対応関係を考察した。中国語と対応しない日本語の結果複合動詞が多く存在することから、中国語は日本語より広い因果関係を表すことができることを明らかにした。中国語では「直接的な因果関係」を必要としないのに対し、日本語には英語と同様に、「直接的な因果関係」を満たさなければならないのである。したがって、「*履き濡らす」などのような間接的な因果関係を表す結果複合動詞は、「他動性調和原則」「主語一致の原則」に違反していても、結果複合動詞としては成立しないのである。

しかしながら、上述の制約ではすべての日中結果複合動詞が対応できない原因を説明することができない。例えば“踩湿”（踏む・濡らす），“摸破”（触る・破れる）などの結果複合動詞では、V1 は V2 の直接的な原因として考えられるものの、日本語では、「*踏み濡らす」や「*触り破る」などの複合動詞は非文である。第 3 章ではこれらの例について考察を行う。

第3章 目的語指向型の日中結果複合動詞

第2章で見たように、多くの研究者が様々な観点から日中結果複合動詞を分類してきた。本論文では、日本語と中国語の結果複合動詞を比較するため、便宜上複合動詞を目的語が状態変化を起こす目的語指向型と、主語が状態変化を起こす主語指向型に分ける。

本章ではまず目的語指向型の日中結果複合動詞を中心に考察する。このタイプは動作主が対象に作用することにより、対象をある状態へ変化させるという意味構造を持つ。英語には結果複合動詞はないが、目的語指向型の日中結果複合動詞と同じ意味構造を持つ結果構文がある。例えば、(1a,b)の日中結果複合動詞も(1c)の結果構文も「ハンターが虎を撃ち、その結果として虎は死んだ」という意味を表す。中国語のV1“打”(撃つ)は、英語の主動詞shotと対応し、V2“死”(死ぬ)は結果述語deadと対応する。さらに、「虎」はいずれの言語においても目的語の位置に現れている。ただし結果状態を表す述語は、中国語が自動詞、日本語は他動詞、英語は形容詞が用いられているという違いがある。

- (1) a. 猎人 打死 了 老虎。
liè rén dǎ sǐ le lǎo hǔ
ハンター 撃つ-死ぬ LE 虎
b. ハンターは虎を撃ち殺した。
c. The hunter shot the tiger dead.

上に述べたように(1)の中国語“打死”(撃つ-死ぬ)に、日本語の「撃ち殺す」と英語のshoot X deadが対応し、その目的語はV1や主動詞の真の目的語と一致する。しかし、結果複合動詞の種類はこれだけではない。

- (2) a. 跑步者 跑-薄 了 路面。
pǎo bù zhě pǎo-báo le lù miàn
ジョギングする人 走る-薄い LE 路面
b. ジョギングする人が走って、路面が薄くなった。
c. The joggers ran the pavement thin.

- (3) a. 新买的鞋子不小心在下雨天穿湿了。
 xīn mǎi de xié zǐ bú xiǎo xīn zài xià yǔ tiān chuān shī le
 新しく買ったの靴不注意に雨の日履く・濡れる LE
- b. 雨の日にうっかり新しく買った靴を履いて、濡らしてしまった。
- c. * He wore his shoes wet on a rainy day.
- (4) a. ? 长跑狠人跑碎肾结石 (新晚报 2013.1.8)
 chángpǎo hěn rén pǎo suì shèn jié shí
 長距離走 厳しい 人 走る一碎ける 腎結石
- b. ストイックな長距離ランナーが走って、腎臓結石が砕けた。
- c. * The person who is good at long distance race ran his kidney stone broken.

(2) から (4) までの例を見ると、日本語では複合動詞が容認されず、重文で表現せざるを得ない。(2) では、中英両言語は対応し、その目的語である“路面”「路面」、pavement は“跑”(走る)やrunの真の目的語と一致しない。つまり疑似目的語である。(3) と (4) では、中国語のみ結果複合動詞の形を取ることができる。ただし、中国語の複合動詞にも制限はある。(3) の“穿湿”(履く一濡れる)と比べ、例 (4) の複合動詞の容認度はそれほど高くない。この例は新聞の見出しから採ったものであるが、記事の本文を読まないと、“跑碎”(走る一碎ける)の意味を解釈することは非常に難しい。読者の注目を集めるための臨時的複合動詞と考えられる。しかし、逆にいえば文脈さえ与えられれば容認度は高まるのである。

このように、なぜ同じ目的語指向型であっても、日中結果複合動詞と英語の結果構文において、対応が全く異なるのであろうか。上のような対応するタイプと対応しないタイプの特徴は何であろうか。V1 及び結果構文の主動詞に選択されない目的語(疑似目的語)にはどのような特徴があるのか。文脈は中国語の結果複合動詞の成立に対して、どのような影響を与えているのか。本章では生成語彙論の枠組を用いて、英語の結果構文を参考にしながら、以上の問題を考察していきたい。

以下、3.1 節は目的語指向型の結果複合動詞の項構造を中心に特徴を示す。3.2 節は、データベースから集めた日中両言語の実例を比較しながら、生成語彙論の枠組でイベントとクオリアの融合関係を明らかにする。3.3 節では中国語の結果複合動詞が取る疑似目的語の範囲を見る。3.4 節は文脈が目的語指向型の日中結果複合動詞に与える影響について述べる。最後に、3.5 節は本章のまとめである。

3.1 日中結果複合動詞の項構造

本節では、先行研究に従い、目的語指向型の結果複合動詞が持つ特徴を一つずつ紹介し、その後、項構造と意味関係からそれらの下位タイプを改めて分類する。

3.1.1 中国語の目的語指向型の分類

中国語の結果複合動詞について、申（2007：198）は主に項の受け継ぎに基づき、《汉语动词—结果补语搭配词典》から集めた 1866 例を五つに分けている。

(5)	結果複合動詞の分類とその生起数	1866 例	
	①目的語志向型	816 例	44%
	②主語志向型	322 例	17%
	③前項述語の項が具現化しない場合	73 例	4%
	④後項述語の項が具現化しない場合	0 例	0%
	⑤補文関係	655 例	35%

申（2007）によれば目的語指向型の複合動詞には二種類ある。(6a) と (7a) の 1 及び 1' はそれぞれ V1 と V2 の主語を、2 は V1 の目的語を表す。“推开”（押す－開く）では、V1 “推”（押す）は“她”（彼女）と“门”（扉）という二項をとり、V2 “推”（開く）は「扉」という内項のみをとる。さらに V1 と V2 が複合動詞化する際に、項の合成が行われる。このとき V1 の主語「彼女」が複合動詞全体の主語になり、共通している「扉」が結果複合動詞の目的語になる。(7) の“哭走”（泣く－行く）では、“哭”（泣く）も“走”（行く）も 1 項述語で、項の合成により、V1 の項“黛玉”が複合動詞の主語に、V2 の項“客人”が複合動詞の目的語になる。

- (6) a. 推开（押す－開く）：<1, 2>+<1'> → <1, 2-1'>
- b. 她 推开 了 沉重 的 大 门。
tā tuī kāi le chén zhòng de dà mén
彼女 押す－開く LE 重い の 大きい 扉
「彼女は重い扉を押し開けた。」

- (7) a. 哭走 (泣く - 行く) : <1>+<1'> → <1, 1'>
 b. 黛玉 哭走 了 很多 客人。
 dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén
 黛玉 泣く - 行く LE 沢山 お客様
 「黛玉は、泣いて、沢山のお客様を帰らせてしまった。」

(申 2007 : 204)

申 (2007) と異なり、石村 (2011) は複合動詞の意味特徴から、目的語指向型 (石村 (2011) は、目的語指向型の中国語の結果複合動詞を<他動型>と呼ぶ) を (8) と (9) のように大きく二種類に分け、さらに V1 が 1 項述語の場合は三つに下位分類する。

(8) V1 が 2 項述語の場合

- 武松 打死 了 老虎。(石村 2011 : 76)
 wǔ song dǎ sǐ le lǎo hǔ
 武松 殴る - 死ぬ LE 虎
 「武松は虎を殴り殺した。」

(9) V1 が 1 項述語の場合

- a. V1=非能格動詞
 他 喊哑 了 嗓子。(石村 2011 : 85)
 tā hǎn yǎ le sǎng zi
 彼 叫ぶ - かれる LE 喉
 「彼は叫んで喉をからした。」
- b. V1=非対格動詞
 西瓜 滚破 了 皮。(石村 2011 : 89)
 xī guā gǔn pò le pí
 スイカ 転がる - 割れる LE 皮
 「スイカが転がって皮が割れた。」
- c. V1=目的語を伴わない他動詞
 他 吃坏 了 肚子。(石村 2011 : 87)
 tā chī huài le dù zi

彼 食べる－壊れる LE お腹

「彼は食べてお腹を壊した。」

石村（2011）によれば、(8) の“打死”（殴る－死ぬ）の V1 には動作主と対象という 2 つの項を持ち、複合動詞全体は「武松が虎を打ち、その結果として、虎を死なせた」という意味構造を表す。

例 (9) の V1 はすべて一項述語である⁸。(9a) の“喊”（叫ぶ）は非能格的動詞で、(9b) の V1 “滾”（転がる）は非対格動詞である。(9c) の“吃坏”（食べる－壊れる）の V1 は他動詞であるが、その目的語は統語上具現化していない。つまり、例 (9) の目的語“嗓子”

（喉）、“头”（頭）、“肚子”（お腹）はすべて、V1 ではなく V2 の内項である。つまり、(8) の“打死”（殴る－死ぬ）の目的語“老虎”（虎）は V1 と V2 の共通の項であるが、(9) の目的語は V2 のみの項である。

このような違いはあるが、いずれも「複合動詞＋目的語」という構造を持つことから、石村（2011）はこれらの複合動詞を“他動型”と呼ぶ。

これら以外に、申（2007）は (10b) の例を挙げ、V1 の項が具現化しないタイプがあると主張する。この例では、“写酸”（書く－疲労して痛い）の V1 “写”（書く）の項が実現していない。

(10) a. 写酸（書く－疲労して痛い）：<1, 2>+<1'> → <1-1'>

⁸ このタイプの複合動詞について、石村（2011：88-89）は(i)のように V1 が“热”（熱い）、“忙”（忙しい）、“饿”（空腹だ）のような形容詞を取る場合もあると主張する。しかしこれらの語の品詞には、なお検討の余地があるので、ここではこのタイプの複合動詞は扱わないこととする。

- (i) a. 我 热晕 了 头。
wǒ rè yūn le tóu
私 暑い－くらくらする LE 頭
「私は暑さで頭がくらくらした。」
b. 老李 忙昏 了 头。
lǎo lǐ máng hūn le tóu
李さん 忙しい－くらくらする LE 頭
「李さんは忙しくて頭がくらくらした。」
c. 老王 饿坏 了 身体。
lǎo wáng è huài le shēn tǐ
王さん 空腹だ－壊れる LE 身体
「王さんは飢えて体を壊した。」

b. 我 写 了 一天 字, 手 都 写酸 了。

wǒ xiě le yī tiān zì shǒu dōu xiě suān le

私 書く LE 一日 字 手 殆ど 書くー疲労して痛い LE

「私は一日中ずっと字を書いて、手が書き疲れて痛くなった。」

(《汉语动词—结果补语搭配词典》: 225)

(10b) のような“手写酸了”(疲労して、手が痛い) のような構文は本稿では取り上げない。その理由は次の通りである。(10b) の“写酸”(書くー疲労して痛い) では、V1 の外項も内項も複合動詞の項構造に現れず、状態変化を起こす V2 の項“手”(手) のみが出現している。その理由について、申(2007)は V1 の項が背景化される一方、V2 の項及び V2 が表す結果状態が前景化され、(10a) のような項構造となるためであるとする。しかしながら、この説明には二つの問題がある。第一に、目的語指向型において、項の同定があるのは V1 の項と V2 の項が一致する場合のはずであるが、(11) が示しているように、“写”(書く)の主語は“我”であって、“手”ではないのに、“写”(書く)の主語と“酸”(疲労して痛い)の主語が同定されている。つまり、“我”と“手”で異なるはずの項が同定されてしまっているのである。

(11) a. 我 写 字。

wǒ xiě zì

私 書く 字

「私は字を書く。」

b. *手 写 字。

shǒu xiě zì

手 書く 字

「手は字を書く。」

第二に、申(2007)は V1 の項が統語上に現れない原因は背景化されたためであると主張するが、なぜ背景化できるのか、どの項がいつ背景化できるのか、一切説明していない。

では(10b)はどのように派生されるのであろうか。まず注意しなければならないのは、“写酸”(書くー疲労して痛い)には、(12a) のような、石村の言う「他動型」が存在すると

いうことである。その項構造は (12b) のように表すことができる。

- (12) a. 我 写酸 了 手。
 wǒ xiě suān le shǒu
 私 書く一疲労して痛い LE 手
 「私は（字を）書くことにより、手が痛くなった。」
- b. $\langle 1, 2 \rangle + \langle 1' \rangle \longrightarrow \langle 1, 1' \rangle$

V1 “写”（書く）の内項が実現しないことについてはすぐ後で見ることにして、まず (12) の主語を削除し、目的語“手”（手）を主語にすれば (10b) ができるとに注目したい。これは中国語によく見られるパターンである。なぜかという、中国語では、受動標識“被”を使わずに、動詞の目的語を主語の位置に移動することにより、受動化ないし他動詞から自動詞へ転換することが可能である。

- (13) a. 我们 已经 解决 了 那个 问题。
 wǒ men yǐ jīng jiě jué le nà gè wèn tí
 我々 すでに 解決する LE その 問題
 「我々はすでにその問題を解決した。」
- b. 那个 问题 已经 解决 了。
 nà gè wèn tí yǐ jīng jiě jué le
 その 問題 すでに 解決する LE
 「その問題はすでに解決された。」
- (14) a. 我 刚刚 删除 了 那 个 错字。
 wǒ gāng gāng shān chú le nà gè cuò zì
 私 たった今 削除する LE その 量詞 誤字
 「私はたった今、その誤字を削除した。」
- b. 那 个 错字 刚刚 删除 了。
 nà gè cuò zì gāng gāng shān chú le
 その 量詞 誤字 たった今 削除する LE
 「その誤字はたった今削除された。」

例えば、(13a, 14a) では、動詞“解決”（解決する）及び“删除”（削除する）は目的語をとり、文全体は SVO の構造を持つ。ここで、主語を削除し、目的語の“那个问题”（その問題）と“那个错字”（その誤字）を主語の位置に置くことができる。これを受動化とみるか能格化とみるかは議論の余地はあるが、いずれにせよ (10b, 13b, 14b) はそれぞれ (12a, 13a, 14a) から派生したものと考えられる。

(9c) も同様に、(15b) が示すように、受動化／能格化が可能である。

- (15) a. 他 吃坏 了 肚子。 (=9c)
 tā chī huài le dù zǐ
 彼 食べる－壊れる LE お腹
 「彼は食べてお腹を壊した。」
- b. 肚子 吃坏 了。
 dù zǐ chī huài le
 お腹 食べる－壊れる LE
 「お腹が食べて壊れた。」

以上から、申 (2007) が挙げた (10b) の V1 の項が実現しない“写酸”（書く－疲労して痛い）の例は、他動型の結果複合動詞の受動化／能格化であると考えるのが妥当である。本稿ではこのような派生形は扱わないこととする。

では、受動化／能格化する前の“写酸”（書く－疲労して痛い）や“吃坏”（食べる－壊れる）について、V1 “写”（書く）及び“吃”（食べる）の目的語が実現しない理由について考察しよう。

V1 と V2 を合わせて考えると、全部で三つの項がある。中国語では三項述語はごく限られており、いずれか一つの項が出現できないことになるが、ではなぜそれが V1 の内項なのであろうか。他動詞とその目的語の間には二種類の関係がある。一つは目的語が動詞の意味に含まれているものであり、もう一つは動詞の意味に含まれていないタイプである。例えば、“写”（書く）、“吃”（食べる）であれば、“字”（字）、“食物”（食べ物）が論理的に含意される。それに対して、“敲”（叩く）の目的語は論理的に含意されず、限定されない。第1章で述べたように、動詞の意味に論理的に含意される項はデフォルト項である。そのため必ずしも実現する必要はない。V1 の“写”（書く）や“吃”（食べる）の内項も、V2 と複合する際

に実現できる項を減らさなければならぬため、情報量が最も少ないデフォルト項が抑制されるのだと考えられる。

実際、V1 が“敲”（叩く）の場合、(16a) のように、その目的語が統語上に出現しなければ、文全体の容認度がやや落ちる。“敲”（叩く）は“桌子”（テーブル）という目的語を含意しておらず、「叩く」の対象をデフォルト項とするのが難しいからである。そのため、叩く対象は現れざるを得ないが、複合動詞の項としては実現すべき位置がない。そのため、デフォルト項として抑制しつつ、かつ、実現させなければならないという矛盾を解決する必要に迫られる。1.2.1 節でみたように、デフォルト項は統語上、付加部（PP、あるいは真の項を修飾する位置）に現れる。崔（2018）によれば、動詞コピー構文⁹では、前置されている動詞述語文は文全体の修飾要素であることから、(16b) に示すとおり、デフォルト項はここであれば出現することができる。つまり“敲”（叩く）の目的語である“桌子”（テーブル）は複合動詞の項の位置ではなく、動詞コピー構文の付加部の中に現れなければならない。本論文では、“桌子”（テーブル）のような項は真の項とデフォルト項の中間的な存在であると考えられる。

- (16) a. ? 他 敲疼 了 手。
 tā qiāo téng le shǒu
 彼 叩くー痛い LE 手
 「彼は叩いて、手が痛くなった。」
- b. 他 敲 桌子 敲疼 了 手。
 tā qiāo zhuō zǐ qiāo téng le shǒu
 彼 叩く テーブル 叩くー痛い LE 手
 「彼はテーブルを叩いて、手が痛くなった。」

ここまで見てきたさまざまな中国語の目的語指向型の結果複合動詞を項構造の観点から整理しておこう。まず、V1 と V2 の間に共通する項があるかどうかで二つのグループに分けられる。(17) の“推开”（押すー開く）は項が共有されるタイプの典型例で、V1 の目的語と

⁹ (16b) のような「V1+O+V1+V2」という組み合わせを持つものは動詞コピー構文だと考えられる。すなわち、崔（2018：173）により、V1 が2回繰り返して出現し、前方の動詞が目的語を伴い、後方の動詞が V2 を伴う構文形式である

V2 の項が同定される。

- (17)
$$\left[\begin{array}{l} \text{推 (押す)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{我 (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{门 (ドア)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- $$\left[\begin{array}{l} \text{开} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{门 (ドア)}] \end{array} \right]$$
- $$\left[\begin{array}{l} \text{推开} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{我 (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{门 (ドア)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

これに対して、(18) “哭走” (泣く - 行く) や (19) の “滚破” (転がる - 破れる) では、V1 も V2 も項を一つしか持たず、また共通する項もなく、(20) のようにそれぞれの項がそのまま複合動詞の項となる。

- (18) 黛玉 哭走 了 很多 客人。 (申 2007 : 204)

dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén

黛玉 泣く - 行く LE 沢山 お客さん

「黛玉は、泣いて、沢山のお客様を帰らせてしまった。」 (=7)

- (19) 西瓜 滚破 了 皮。 (石村 2011 : 89)

xī guā gǔn pò le pí

スイカ 転がる - 割れる le 皮

「スイカが転がって皮が割れた。」 (=9b)

- (20) a.
$$\left[\begin{array}{l} \text{哭} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{黛玉 (黛玉)}] \end{array} \right]$$
 b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{滚} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{西瓜 (西瓜)}] \end{array} \right]$$
- $$\left[\begin{array}{l} \text{走} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{客人 (客)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{破} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{皮 (皮)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{哭走} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{黛玉 (黛玉)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{客人 (客)} \end{array} \right] \end{array} \right] \quad \left[\begin{array}{l} \text{滚破} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{西瓜 (西瓜)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{皮 (皮)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

二項動詞と一項動詞の組み合わせの場合、複合動詞は三項動詞になってしまうが、中国語では三項動詞はごく一部の動詞に限られるため、三項すべては出現できない。(12)の“写酸”(書くー疲労して痛い)や(15)“吃坏”(食べるー壊れる)では、V1の内項はデフォルト項であるので現れなくても問題は無い。それに対して(16)の“敲疼”(叩くー痛い)では、“敲”(叩く)の内項は最後の手段として緊急避難的にデフォルト化された項であり、真の項とも典型的なデフォルト項とも異なるので、D-ARG'で表すことにする。

(21) a. $\left[\begin{array}{l} \text{写} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{我 (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{字 (字)} \end{array} \right] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{酸} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = z : \text{手 (手)}] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{写酸} \\ \text{ARGSTRE} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{我 (私)} \\ \text{D-ARG}_1 = \text{字 (字)} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{手 (手)} \end{array} \right] \end{array} \right]$

b. $\left[\begin{array}{l} \text{敲} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{他 (彼)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{桌子 (テーブル)} \end{array} \right] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{疼} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = z : \text{手 (手)}] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{敲疼} \\ \text{ARGSTRE} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{他 (彼)} \\ \text{D-ARG}' = \text{桌子 (テーブル)} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{手 (手)} \end{array} \right] \end{array} \right]$

ここまですを改めてまとめておこう。中国語では、V1 と V2 の間に、“推开”（押す－開く）のように、共通する項「ドア」があり、項の同定を行ったうえで、複合動詞の項になる。それに対して、共通する項がない場合はいくつかのパターンがある。まず、“哭走”（泣く－行く）や“滚破”（転がる－破れる）のように、一項動詞のペアであれば、V1 と V2 の項がそのまま複合動詞全体の項となる。しかし V1 と V2 の項が合わせて三つになるときは、V1 の目的語がデフォルトの項であれば出現しない（例えば、“写酸”（書く－疲労して痛い）、“吃坏”（食べる－壊れる））。最後の手段として無理にデフォルト化された内項は、動詞コピー構文や副詞節に現れる（例えば、“敲疼”（叩く－痛い））。

しかし、項構造だけでは本節の冒頭に挙げた 4 つの中国語の複合動詞の特徴を説明するには十分ではなく、前章で述べた V1 と V2 の間の意味関係、すなわち、「直接的な因果関係」制約を受けるかどうか併せて考える必要がある。

前章では、中国語の結果複合動詞は、必ずしも「直接的な因果関係」である必要はないと述べた。(16) の“推开”（押す－開ける）は直接的な因果関係であるが、それと同じ項構造を持つ“穿湿”（履く－濡れる）では、E1 と E2 の間にもう一つのイベントを挿入することができ、間接的因果関係を持つ。同様に、直接的な因果関係を持つ(19) の“滚破”（転がる－破れる）と同じ構造を持つ“跑碎”（走る－砕ける）は、間接的な因果関係を持つ。(22b) では、“鞋”（靴）が共有されるのに対し、(23b) では“长跑狠人”（長距離に強い人）と“肾结石”（腎臓結石）はまったく異なる項であり、V1 と V2 の間に共有される項がない。

- (22) a. 新买的鞋子不小心在下雨天穿湿了。
 xīn mǎi de xié zǐ bú xiǎo xīn zài xià yǔ tiān chuān shī le
 新しく買ったの靴 うっかり に 雨の日 履く・濡れる LE
 「雨の日にうっかり新しく買った靴を履いて、濡らしてしまった。」(=3a)

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{穿 (履く)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : (\text{我}) (\text{私})^{10} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{鞋 (靴)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

¹⁰ (22) には動作主“我”（私）が現れていないが、有生主語を志向する副詞“不小心”（うっかり）があること、“鞋子”（靴）と副詞の間に主語“我”を挿入できることから、“我”が音声上実現していないだけであると考えられる。

$$\left[\begin{array}{l} \text{湿} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{鞋 (靴)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{穿湿} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{(我) (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{鞋 (靴)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(23) a. ? 长跑 狠 人 跑碎 肾结石

chángpǎo hěn rén pǎo suì shèn jié shí

長距離走 厳しい 人 走る一碎ける 腎結石

「ストイックな長距離ランナーが走って、腎臓結石が碎けた。」 (=4a)

b. $\left[\begin{array}{l} \text{跑} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{长跑狠人 (ストイックな長距離ランナー)}] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{碎} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{肾结石 (腎臓結石)}] \end{array} \right]$

$\left[\begin{array}{l} \text{跑碎} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{长跑狠人 (ストイックな長距離ランナー)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{肾结石 (腎臓結石)} \end{array} \right] \end{array} \right]$

上記のすべての目的語指向型の中国語の結果複合動詞は、表1のように表すことができる。

項構造 意味関係	内項の共有	項の共有なし
直接的因果関係	推开 (押すー開く) 打死 (撃つ-死ぬ)	哭走 (泣く - 行く) 热晕 (暑いーくらくらする) 写酸 (書くー疲労して痛い)
間接的因果関係	穿湿 (履くー濡れる)	跑碎 (走るー碎ける)

表1 目的語指向型中国語結果複合動詞における意味関係と項構造

3.1.2 日本語の目的語指向型分類

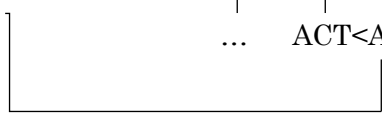
中国語と比べ、日本語の語彙的複合動詞や結果複合動詞に対する分類はそれほど複雑ではないが、いくつかの分類が提案されている（影山 1999、由本 1996、松本 1998 など）。たとえば影山（1999：195）は日本語の語彙的複合動詞を「手段」「様態」「原因」「並列」「補文関係」の五つに分けている。このうち、結果複合動詞は「手段」と「原因」のいずれかである。

- (24) a. 手段：V1 することによって、V2 eg.：切り倒す、踏み潰す
 b. 様態：V1 しながら V2 eg.：尋ね歩く、遊び暮らす
 c. 原因：V1 の結果、V2 eg.：歩き疲れる、溺れ死ぬ
 d. 並列：V1 かつ V2 eg.：泣き喚く、忌み嫌う
 e. 補文関係：V1 という行為/出来事を（が）V2 eg.：見逃す、聞き漏らす

まず「手段」結果複合動詞の検討から始めよう。

陳奕庭（2015）によれば、「日本語複合動詞のリスト」の 3514 例を調べた結果、手段の複合動詞には 1732 語があり、全体の 49.29%を占めるという。松本（1998：52）は、(23a) の手段複合動詞の V1 は動作主的動詞であり、V2 は何らかの状態及び位置変化の使役を表す動詞であるとする。これらの複合動詞の意味構造は (25b) のように表示できる。

- (25) a. 手段：押し倒す、叩き落とす、打ち上げる、押し出す、掃き集める、投げ飛ばす、切り抜く、だまし取る、取り除く、焼き付ける、折り曲げる、たたき壊す、踏み固める、蹴り崩す、殴り殺す、洗い清める

- b. ‘ACT<Actor, Acted-upon>Result, Means’


（松本 1998：52－53）

(25b) の意味構造では、V2 は上位の ACT と対応し、V1 は意味的付加詞の Means と対応すると共に、V2 の意味構造に埋め込まれる。松本（1998：53）に従えば、手段とは、使役者がその使役を達成させるための一段階として行う具体的行為である。そのため、手段の意

味を表す V1 は使役行為を表す V2 と行為者が同じでなければならない。例えば「押し倒す」の意味構造を見ると、上位構造である「倒す」は、Result の ACT であり、手段として V2 の意味構造に埋め込まれる「押す」も ACT を述語とする。つまり、手段複合動詞の場合は、他動詞同士¹¹を組み合わせたものだと考えられる。

これに対して陳（2015）は（26a）のような非対格動詞＋他動詞の組み合わせの例を挙げている。

- (26) a. 絡みつける、滑り落とす、揺れ動かす、酔い潰す、沸き起こす
b. 絡み付く、滑り落ちる、揺れ動く、酔い潰れる、沸き起こる

（26a）の V1 は「絡む」「滑る」「酔う」「沸く」のような非対格動詞、V2 は「付ける」「落とす」「潰す」「起こす」のような他動詞である。これらの動詞は（25b）の意味構造に合わないだけでなく、V1 には V2 の内項と対応する項があるが、V2 の外項つまり主語と対応する項がなく、「主語一致の原則」にも違反している。なぜ（26a）の手段複合動詞が（25b）の意味構造を持たず、「他動性調和の原則」や「主語一致の原則」に違反しても容認されるのかについては、第 4 章でその意味特徴と合わせて詳しく分析するが、ここでは（26a）と対応する（26b）のような例も存在することを指摘しておこう。（26b）の例では、V1 も V2 も内項のみを持つ非対格動詞であり、「主語一致の原則」に従っている。また、「付く」と「付ける」、「落ちる」と「落とす」、「動く」と「動かす」、「潰れる」と「潰す」、「起こる」と「起こす」の間に自他交替の関係にある。（26b）の複合動詞が自他交替によって（26a）が派生することが、（26a）が可能となると考えられる。

よって、前節の中国語の結果複合動詞と同様に、項を共有するかどうかという観点から日本語の「手段」結果複合動詞を分類すると、「外項も内項も共有」、「外項のみ共有」、「内項のみ共有」と「外項も内項も共有しない」という 4 つのタイプに分けることができるが、（25b）から外項の共有は必須であり、日本語の結果複合動詞には（27）の二つのタイプしかないことになる。「日本語の結果複合動詞リスト」において、数が最も多いのは（27a）タイプの結果複合動詞である。次は、「だまし取る」のような「外項のみ共有」のタイプである。

¹¹ 松本（1998）は他動詞/非能格動詞の組み合わせと述べているが、非能格動詞の組み合わせの例を挙げておらず、定義上、動作主と被動者が必要であるため、非能格動詞が現れる余地はないはずである。「泣きぬらす」や「乗り潰す」は一見、非能格動詞＋他動詞の組み合わせに見えるが、V1 は「手段」とは言いがたい。この点については後述する。

- (27) a. 外項も内項も共有：叩き壊す
 b. 外項のみ共有：だまし取る、(皿に絵を) 焼き付ける、(模様を) 打ち出す

(27a) 型の (28) では、V1「叩く」も V2「壊す」も同じ項「従業員」「壁」をとることにより、項の共有が行われる。

- (28) a. 作業員は壁をハンマーで叩き壊した。(複合動詞レキシコン)
 b. 叩き壊す

$$\left[\begin{array}{l} \text{叩く} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{作業員} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{壁} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{壊す} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{作業員} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{壁} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{叩き壊す} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{作業員} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{壁} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(27b) 型の「だまし取る」では、V1「騙す」の目的語「女性 5 人」は V2「取る」の直接内項ではないが、間接内項（起点）である。その一方で、「騙す」と「取る」の主語は同じであり、外項は共有される。

- (29) a. 男は、女性 5 人から金をだまし取った。(複合動詞レキシコン)
 b. だまし取る

$$\left[\begin{array}{l} \text{だます} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{男} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{女性 5 人} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{c} \text{取る} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = x : \text{男} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{お金} \\ \text{ARG}_3 = z : \text{女性 5 人} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{c} \text{だまし取る} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{c} \text{ARG}_1 = x : \text{男} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{お金} \\ \text{ARG}_3 = z : \text{女性 5 人} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

同様に、「皿に絵を焼き付ける」であれば、V1「焼く」の直接内項「皿」とV2「付ける」の間接内項（着点）「皿」が一致している。「板金に模様を打ち出す」であれば、V1「打つ」の直接内項「板金」とV2「出す」の間接内項（場所）「板金」が一致している。このように、一見すると外項のみの共有に思われても、実際には外項だけでなく、内項も共有していると考えられる。ただしこのような例は、V2が三項動詞でなければならないこと、直接内項と間接内項で完全な一致とは言えないことから、数は非常に少ない。

さて、「手段」の結果複合動詞は、手段と結果が緊密に結びついており、手段とは目的となる「結果」状態を実現するための行為である。すなわち、上で述べたとおり、手段とは、使用者がその使役を達成させるための一段階として行う具体的行為である。しかし必ずしもそのような解が可能ではない場合もある。それが次に挙げる動詞である。

(30) （目を）泣き腫らす、（喉を）歌い潰す

目を腫らす目的で泣いたり、喉を潰す目的で歌ったりすることもあり得ないわけではないが、そのような解釈は必要ではない。文脈がなければ、泣くという行為が原因となって目が腫れるという結果を引き起こした、あるいは、歌うという行為が原因となって、喉が潰れるという結果を引き起こしたと解釈されるのが普通であろう。つまり、(30)の動詞は「手段」の結果複合動詞にもなれるが、通常は「原因」の結果複合動詞である。

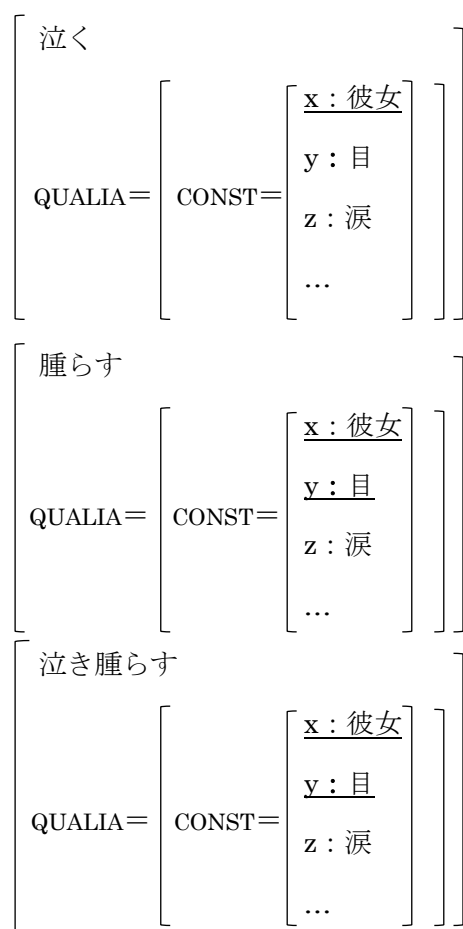
また注目すべきは、V1は非能格自動詞または他動詞で、V2と外項は共有しているものの、内項は共有していないという点である。すなわち、「目」は「泣く」の項ではなく、「喉」も「歌う」の項ではない。とはいえ全くの無関係でもない。泣けば目から涙が出るし、歌を歌

うには喉を使わなければならない。つまり、「目」や「喉」は項ではないが、イベントの参与者ではある。

1.2.1.3 で詳しく述べたが、項構造はイベントの参与者と連動している。つまり、イベントの参与者のすべてまたは一部が項となる。(30) の動詞について言えば、項の共有ではなく、イベント参与者の共有なのである。以下、簡略化した表記を用い、項構造と連動した参与者には下線を付しておく。

(31) a. 彼女は目を泣き腫らしていた。

b. 泣き腫らす



(31b) では、「目」は「泣く」イベントの参与者であるため、小野 (2005) に基づいて、この参与者は「泣く」の構成クオリアに含まれている。それと共に、「目」も「腫らす」の構成クオリアだと考えられ、「泣き腫らす」では、「泣く」イベントの参与者と「腫らす」イベントの参与者は共有している。

「切り倒す」や「だまし取る」に比べると、「泣きはらす」の V1 と V2 の関係は緩やかで、使役関係よりも広い因果関係と呼ぶべきである。これは V1 と V2 が構成クオリアでのみ関連付けられており、項構造までは共有していないことに由来するのであろう。

以上から、目的語指向型の日本語の結果複合動詞は表 2 のように分類できる。なお、日本語の結果複合動詞は直接的な因果関係を必要とする。

表 2 目的語指向型日本語結果複合動詞における意味関係と項構造

項構造 意味関係	項の共有 (外項と直接内項の共有)	項の共有 (外項と内項の共有)	参与者の共有
直接因果関係	叩き壊す ほか、多数	だまし取る 焼き付ける 打ち出す	泣き腫らす 歌い潰す

日本語の結果複合動詞は V1 と V2 の外項と直接内項が共通していなければならない。例外的に V1 の外項と直接内項および V2 の外項と間接内項が共通している場合、参与者が共通している結果複合動詞も若干存在するが、非常に少ない。

しかし、V1 と V2 が直接的な因果関係で結ばれ、外項と直接内項が共通しているだけでは成立しない場合もある。例えば、「*踏み濡らす」では、V1 の「踏む」は V2 の「濡らす」の直接の原因であると同時に、外項も直接内項も共有するが、中国語“踩湿”（踏む－濡れる）と異なり、容認度が非常に低い。これはなぜであろうか。表 2 の条件以外に、他の要因があるのか。次節では、このようなタイプの日中結果複合動詞を比較する。

3.2 生成語彙論における目的語指向型の結果複合動詞の分析

小野（2005）によれば、英語の結果構文は使役事象スキーマの構文化したものである。中国語の結果複合動詞も原因事象と結果事象から構成される複合事象であり、同じく使役事象スキーマによって分析できる。それに対して、目的語指向型の日本語の結果複合動詞は、V2 がすでに使役関係を持つので、英語の結果構文や中国語の結果複合動詞とは構造が異なるはずである。

本節では、まず生成語彙論に基づき、典型的な日中結果複合動詞を分析した後に、「日本語の結果複合動詞リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」から収集した実例を通じて、

日中結果複合動詞が対応するタイプとしないタイプの特徴を明らかにする。

3.2.1 日中結果複合動詞におけるイベントとクオリアの融合

これまでに説明してきたように、目的語指向型の日中結果複合動詞において、プロトタイプであれば、V1 と V2 の間に必ず直接因果関係があり、項も共有する。ただし、中国語は英語の結果構文と同じく、内項のみ共有するのに対し、日本語では内項も外項も共有する。さらに複合動詞の形成には、項の共有だけではなくイベントの融合も伴い、複雑である。

1.2 節の理論的な枠組では、すでに述べたように、Pustejovsky (1995) は主に kill のような単一動詞に含まれる因果関係を考察している。それに基づき、小野 (2005) は (32) の使役事象スキーマを利用して、動詞だけでなく、構文によって表される因果関係まで論述している。(32) では、起因事象 (E1) と結果事象 (E2) はそれぞれ主体クオリアと形式クオリアに対応し、E1 が必ず E2 の前に発生するという制約条件 (RESTR) を受ける。それ以外に、E1 と E2 の使役関係が項の共有により、保証される。

$$(32) \quad \left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ E_2 = e_2 : \text{state} \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \alpha_result(e_2, y) \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act(e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 111)

英語の強い結果構文では、動詞は結果状態を含まず、動作のみを表す。にもかかわらず、動詞事象は拡張され、結果状態が構造上に表現される。小野 (2005) は、動詞のクオリアと結果述語のクオリアとの共合成により、動詞は構文に組み込まれるという。またこのとき、結果構文には、使役スキーマがコード化される。具体的な形成方法を **hammer the metal flat** を用いて説明する。小野 (2005) に従い、まず、(33) の構文では、(34) が示しているように、結果構文の中核的要素（ここでは **flat** という結果述語）の形式クオリアが使役スキーマの形式クオリアと同定され、結果構文に使役事象スキーマがコード化される（小野 2005 : 154–155）。

(33) hammer the metal flat

$$(34) \text{ a. } \left[\begin{array}{l} \text{flat} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \text{x}] \\ \text{EVENTSTR} = [\text{E} = \text{e} : \text{state}] \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{flat}(\text{e}, \text{x})] \end{array} \right]$$

b. 使役事象スキーマ

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \boxed{\alpha_result(e_2, y)} \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act(e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 155)

次に、結果述語 flat と hammer の共合成によって、hammer は構文に組みこまれる。結果構文の語彙構造は (35) のようになる。

$$(35) \left[\begin{array}{l} \text{hammer the metal flat} \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E}_1 = \text{e}_1 : (\text{x}, \text{metal}) \\ \text{E}_2 = \text{e}_2 : (\text{metal}) \\ \text{RESTR} = \text{e}_1 < \text{e}_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{flat_result}(\text{e}_2, \text{metal}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{hammer_act}(\text{e}_1, \text{x}, \text{metal}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(小野 2005 : 156)

しかし、動詞は結果述語との共合成が自由に行われるわけではない。第 1 章では、bake と cake の主体クオリアが共通するため、bake と cake のクオリア構造を統合することができることをみた。結果構文でも、動詞のクオリアと結果述語のクオリアとの共合成が行われる時に、動詞の慣習的な結果が結果述語の形式クオリアと共通する必要がある。Levin & Rappaport Hovav (2013) によると、様態動詞は常に慣習的結果（ここでは FORMAL conventional=B で表す）を含んでいる。動詞の慣習的な意味は、本質的に、動詞を通じて記述されるイベントのプロトタイプの実例によって表される (Levin & Rappaport Hovav 2013 : 52)。例えば、wipe には「紙や布などで物の表面をこすり、汚れや水分などを取り去ってきれいにする」という意味を持ち、wipe の慣習的結果は「汚れを取る、きれいにする」と推測できる。hammer はハンマーで何かを叩くという意味を持ち、その慣習的な結果は

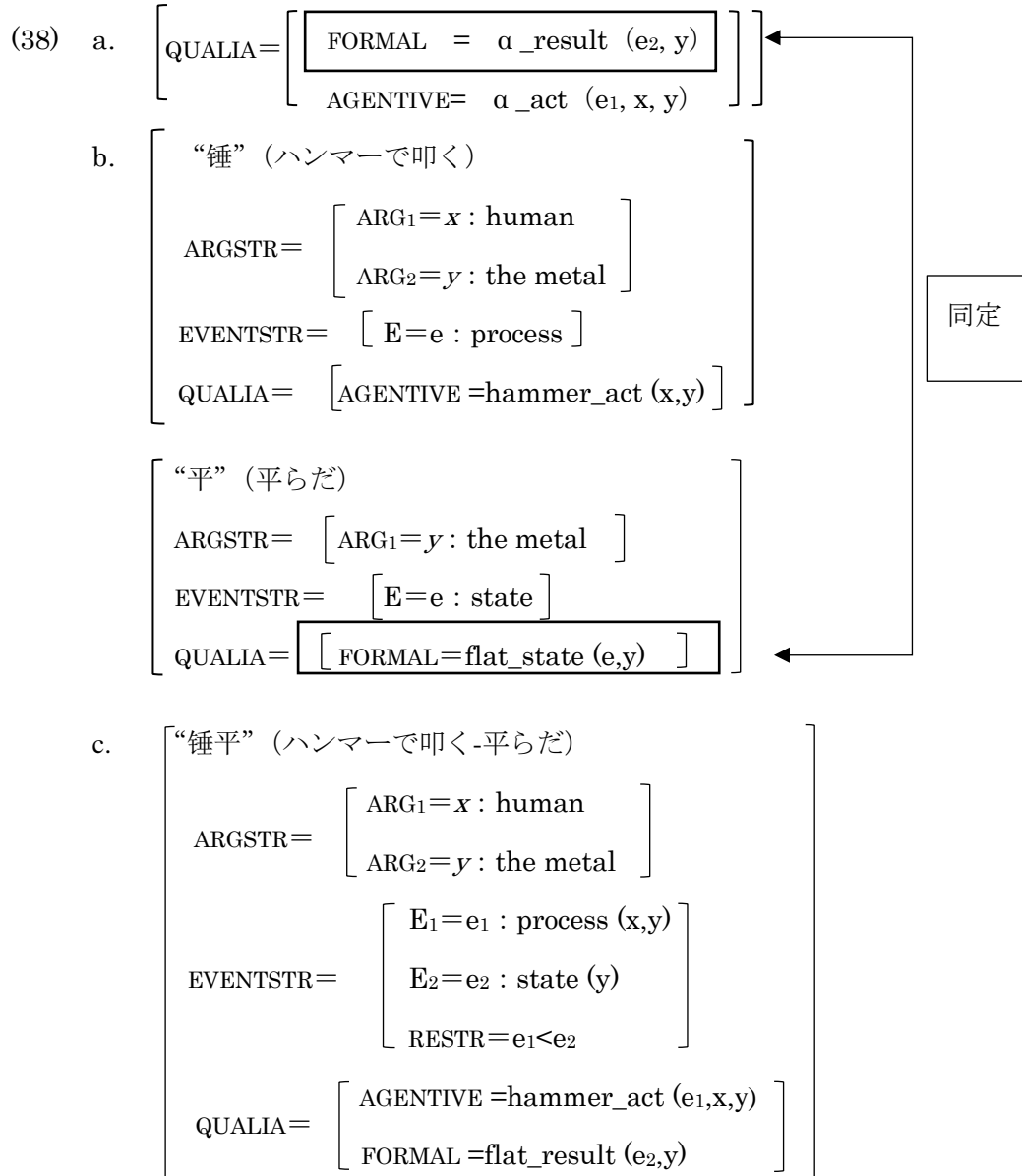
対象の形の変化である。これは **flat** の形式クオリアと矛盾しない。(37) では、**V2** の形式クオリアが **V1** の慣習的な結果に含まれないので、非文となる。

$$(36) \quad \left[\begin{array}{l} \text{hammer} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{human} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{object} \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = [E = e : \text{process}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \text{hit_act}(e, x, y) \\ \text{FORMAL}_{\text{CONVENTIONAL}} = \beta_state(e, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{flat} \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{flat_state}(e, y)] \end{array} \right]$$

- (37) a. *wash/wipe the metal flat
b. *hammer the metal beautiful/cool

続いて、中国語の結果複合動詞について分析する。**hammer the metal flat** と同じ意味を表す“锤平了铁块”（鉄塊をハンマーで叩いて、平らにした）では、**V1** “锤”（ハンマーで叩く）は動作主と被動作主の二つの項を持ち、事象構造は **process** で、主体クオリアは **x** が **y** をハンマーで叩くことを表す。**V2** “平”（平らだ）の構造を見ると、項が 1 つしかなく、事象構造は **state** であるとともに、形式クオリアは鉄塊が平らな状態を示す。**V1** と **V2** の語彙構造はそれぞれ **hammer** と **flat** の構造と同じなので、中国語の複合動詞の形成過程は英語の結果構文と同じだと考えられる。まず使役事象スキーマの形式クオリアは“平”（平らだ）と同定される。それに基づき、“锤”（ハンマーで叩く）のクオリアと“平”（平らだ）のクオリアの間に、共合成が行われた後に、**V1** をその複合動詞に組み込む。意味構造を (38c) に示す。



ただし、英語の結果構文と異なり、中国語の結果複合動詞では、V1 と V2 のクオリアの合成が行われる際に、V1 の慣習的な結果は V2 の形式クオリアと必ずしも一致しない。この点については、3.2.2 節と 3.2.3 節で説明する。

一方、前節で述べたように、目的語指向型の日本語の結果複合動詞では、V2 自身がすでに使役関係を持つ。したがって、中国語の結果複合動詞や英語の結果構文と異なり、日本語の結果複合動詞のクオリア構造は V1 のクオリア構造と V2 のクオリア構造を合成するのではなく、V1 の主体クオリアをそのまま V2 の主体クオリアと同定することになる。ただし、同定に際して、1 つの条件を満たさなければならない。つまり英語の結果構文と同様に、同定される V1 の慣習的な結果の一つが V2 の形式クオリアと一致しなければならないのである。

具体的に「叩き壊す」を例として説明する。

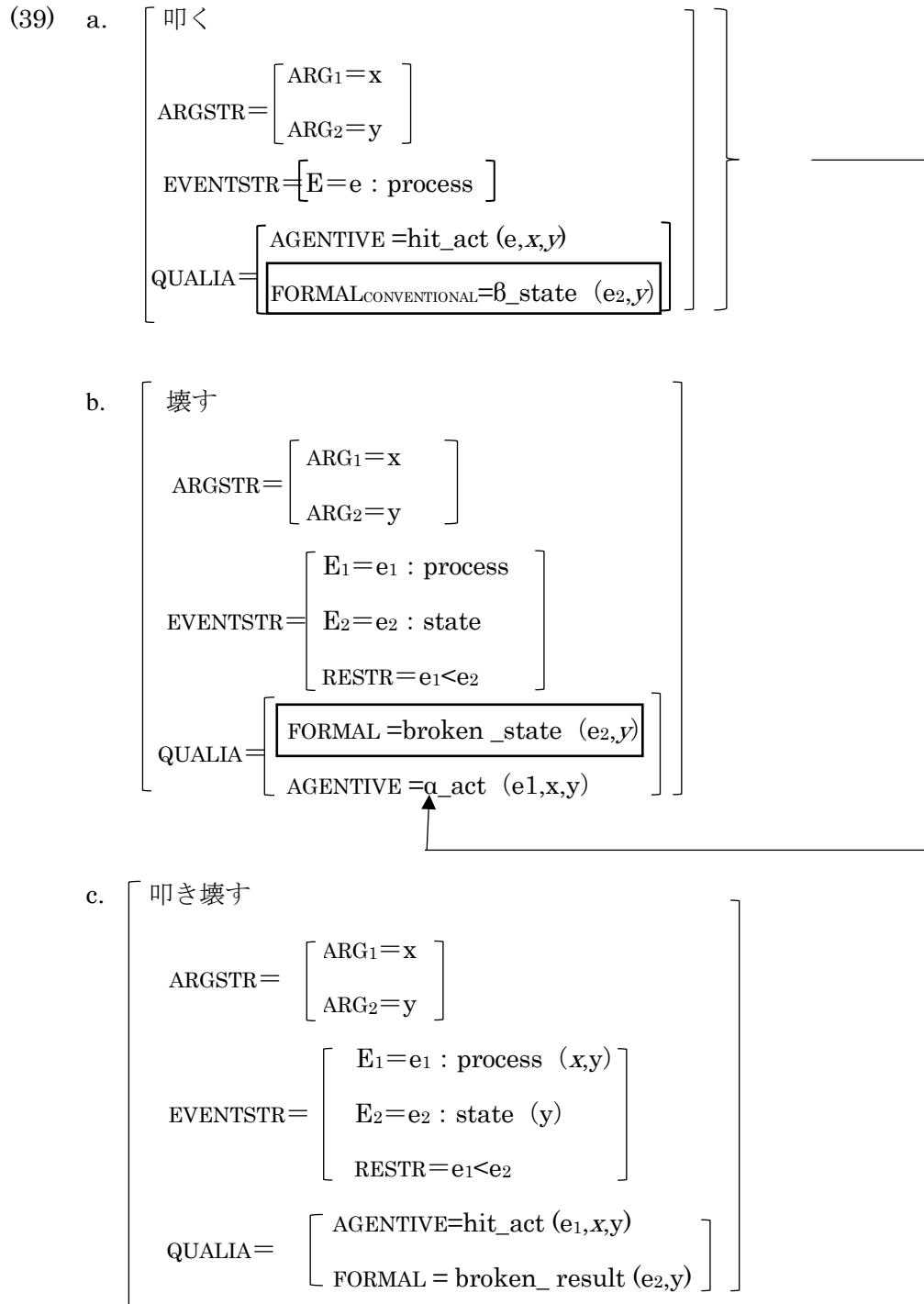
「叩く」は「棒や手で打つ」という意味を持ち、対象物の形あるいは位置の変化を引き起こす可能性が高い。さらに、「叩く」の慣習的な結果をより明らかにするために、『日本語基本動詞用法辞典』から 500 個単純動詞を選び、「叩いて、V」という形で、グーグルで検索し、「x が y₁ を叩くことにより y₂ を V (y₁=y₂) する」と言い換えられるものを選んだ。つまり、継起 (eg: 朝起きて顔を洗う)、付帯情況 (eg: 黙って付いて行く)、様態 (eg: あの人は老けて見える) などの意味関係を除き、V1 と V2 の間に方法・目的、原因・結果の関係があるものだけをピックアップした。その結果は表 3 のようになる。

表 3

順位	動詞	用例数	順位	動詞	用例数
1	飛ばす	658000	11	壊す	37900
2	入れる	119000	12	切る	37300
3	出す	115000	13	消す	32200
4	殺す	81000	14	鳴らす	28300
5	外す	79700	15	曲げる	26500
6	落とす	61200	16	開く	25000
7	潰す	55600	17	割る	24700
8	倒す	49700	18	開ける	24300
9	抜く	44500	19	固める	11700
10	延ばす	43800	20	崩す	3750

表 3 にある動詞は、「飛ばす」「入れる」「出す」「落とす」のように、目的語の位置の移動を意味するものと、「殺す」「潰す」「壊す」のように目的語の状態や形の変化を示すものに分けられる。よって、「叩く」の慣習的な結果は「力の作用で対象位置及び形などの変化」である。ここでは、 $\text{FORMAL}_{\text{CONVENTIONAL}}=\beta$ で表す。

一方、V2「壊す」の事象構造は process と state を組み合わせる複合事象構造である。その中で、「壊す」の形式クオリアでは broken が指定されているが、どのように壊すかという「様態」が指定されていない (これを α で示す)。そのため、様態を指定することが可能である。前に述べたように、「叩く」の慣習的な結果の一つは「物の形を変化させる」であり、これは「壊す」の形式クオリアと矛盾しないため、「叩く」は「壊す」と複合することができる。



以上、生成語彙論に基づき、英語の結果構文を参考にして、典型的な目的語指向型の日中の結果複合動詞を分析した。3.2.2 節と 3.2.3 節では「日本語の結果複合動詞リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」から集めた実例を比較しながら、日中目的語指向型の結果複合動詞の対応状況及び複合動詞自体のイベントとクオリアのそれぞれの融合関係を考察する。

3.2.2 「踏む+V2」／“踩”+V2

「日本語の結果複合動詞リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」を調査した結果によると、目的語指向型の日中結果複合動詞について、V1が「打つ」「打」、「押す」「推」、「こする」「擦」、「切る」「切」、「叩く」「敲」、「蹴る」「踢」、「踏む」「踩」などの項を2つ持つ動作動詞の場合は、対応する複合動詞の数が多いが、このタイプの複合動詞は対応するものがある場合もない場合も、その特徴はほぼ同じであるため、ここではケーススタディとしてV1が「踏む」「踩」を取る日中結果複合動詞を取り上げる。

「日本語の結果複合動詞リスト」、「中国語の結果複合動詞リスト」から集めたV1が「踏む」と“踩”（踏む）の結果複合動詞を(40)に示す。

- (40) a. 踏み荒らす、踏み固める、踏み砕く、踏み消す、踏み殺す、踏み壊す、
踏み倒す、踏み潰す、踏み均す、踏み抜く、踏み割る、踏み破る
(日本語の結果複合動詞リスト)
- b. 踩坏（踏む－壊れる）、踩扁（踏む－平たく薄い）、踩破（踏む－破れる）、
踩折（踏む－折れる）、踩死（踏む－死ぬ）、踩瘪（踏む－ぺしゃんこ）、
踩倒（踏む－倒れる）、踩断（踏む－切れる）、踩实（踏む－詰まる）、
踩烂（踏む－ボロボロになる）、踩碎（踏む－砕ける）、踩疼（踏む－痛い）、
踩脏（踏む－汚れる）、踩掉（踏む－落ちる）、踩肿（踏む－腫れる）、
踩塌（踏む－倒れる）、踩灭（踏む－消える）、踩湿（踏む－濡れる）、
踩平（踏む－平ら）、踩爆（踏む－爆発する）、踩黑（踏む－黒い）、
踩裂（踏む－割れる）、踩翻（踏む－ひっくり返る）、踩漏（踏む－漏れる）、
踩劈（踏む－分ける）、踩动（踏む－動く）、踩垮（踏む－壊れる）、
踩硬（踏む－硬い）、踩痛（踏む－痛い）、踩伤（踏む－傷つける）
(中国語の結果複合動詞リスト)
- (41) a. 踏み固める－踩实（踏む－詰まる）、踩硬（踏む－硬い）
踏み消す－踩灭（踏む－消える）
踏み砕く－踩碎（踏む－砕ける）
踏み倒す－踩倒（踏む－倒れる）、踩塌（踏む－倒れる）
踏み壊す－踩坏（踏む－壊れる）、踩垮（踏む－壊れる）

踏み潰す―踩扁（踏む―平たく薄い）、踩爛（踏む―ボロボロになる）、

踩瘪（踏む―ぺしゃんこ）

踏み割る―踩裂（踏む―割れる）、踩折（踏む―折れる）、踩断（踏む―切れる）、

踩劈（踏む―分ける）

踏み均す―踩平（踏む―平ら）

踏み破る―踩破（踏む―破れる）

踏み抜く―踩漏（踏む―漏れる）

踏み殺す―踩死（踏む―死ぬ）

b. 踏み落とす―踩掉（踏む―落ちる）

踏み動かす―踩动（踏む―動かす）

踏み痛める―踩伤（踏む―痛む）

c. 踏み汚す―踩脏

(41a) と (41b) にある例はすべて日本語と中国語が対応する結果複合動詞である。(41b) の「踏み落とす」と「踏み動かす」は「日本語の結果複合動詞リスト」にないが、日本語の新聞データベースに用例が見つかった。具体的用例 (42)、(43) と (44) を見て見よう。

(42) a. 上流側から鉄製のかんじきが付いた長靴を履いた漁師が、石などを踏み動かして石底に生息するザザ虫をはがし、下流に置いた専用の四つ手網で捕まえる。

(毎日新聞 2018.02.04)

b. 乗客 只 需要 踩动 踏板 就 能 划 船。

chéng kè zhī xū yào cǎi dòng tà bǎn jiù néng huá chuán

乗客 ただ 必要 踏む―動く ペダル すぐ できる 漕ぐ 船

「乗客はペダルを踏み動かささえすれば、船を漕ぐことができる。」

(現代漢語述補結構用法データベース)

(43) a. 「中日のことは気にしない。きょうは絶対完投してやろうと思っていたよ」と言いながら、スパイクについた泥を踏み落とした。

(河北新報 1993.10.1)

b. 那 个 女生 的 鞋 被 踩掉 了。

nà gè nǚ shēng de xié bèi cǎi diào le

その 量詞 女子 の 靴 BEI 踏むー落ちる LE

「その女性の靴は彼に踏み落とされた。」

- (44) a. しかし、入園者が増えて木の根を踏み痛め、池の汚濁など荒廃が進んだこと
もあり、(略)

(朝日新聞 2001.12.22)

- b. 我 不小心 踩伤 了 她 的 脚。

wǒ bú xiǎo xīn cǎi shāng le tā de jiǎo

私 不注意 踏むー痛める le 彼女 の 足

「私は不注意で彼女の足を踏んで痛めた。」

(42a) では、日本語の「踏み動かす」は石を踏むことにより、石を動かしたという意味を表す。同様に、(42b) 中国語の“踩动”(踏むー動く)もペダルを踏んで動かすことを意味している。(43a)の「踏む」の対象は「泥」で、(43b)の動詞の目的語は“鞋”(靴)であるが、「踏み落とす」、「踩掉」(踏むー落ちる)どちらも何かを「踏む」ことにより、その対象を落としたという意味を表す。(44a)の動作対象は「木の根」で、(44b)の動作対象は「足」である。「踏み痛める」と“踩伤”(踏むー痛める)の対象が異なるが、「踏む」「踩」ことにより、動作対象を傷つけることを意味しており、両者は対応していると考えられる。

(41c)の「踏み汚す」については、「日本語の結果複合動詞のリスト」になく、「新聞コーパス」から例文も見つからないが、母語話者に対する調査によると、以下のような例文では、「踏み汚す」も容認される。そのため、「踏み汚す」も“踩脏”(踏むー汚れる)と対応すると思われる。ただし、「泥が付いた靴で」のような文脈を加えないと、容認度は低い。この点については後ほど改めて触れる。

- (45) a. 子供たちは新雪を踏み汚した。(作例)

- b. 孩子们 踩脏 了 新 下 的 雪。

hái zǐ men cǎi zāng le xīn xià de xuě

子供たち 踏むー汚れる LE 新しい 降る DE 雪

「子供たちは新雪を踏み汚した。」

- c. 子供たちは ??(泥が付いた靴で) 床を踏み汚してしまった。

(46a) と (46b) の例はすべて日中で直訳できない結果複合動詞であるが、できない理由は異なる。

- (46) a. 踩爆 (踏む－爆ぜる) —*踏み爆ぜる、踩黒 (踏む－黒い) —*踏み黒い、
踩翻 (踏む－ひっくり返る) —*踏みひっくり返す、
踩疼 (踏む－痛い)、踩痛 (踏む－痛い) —*踏み痛い
踏み荒らす—*踩破坏
- b. 踩湿 (踏む－濡れる) —*踏み濡らす、踩肿 (踏む－腫れる) —*踏み腫らす

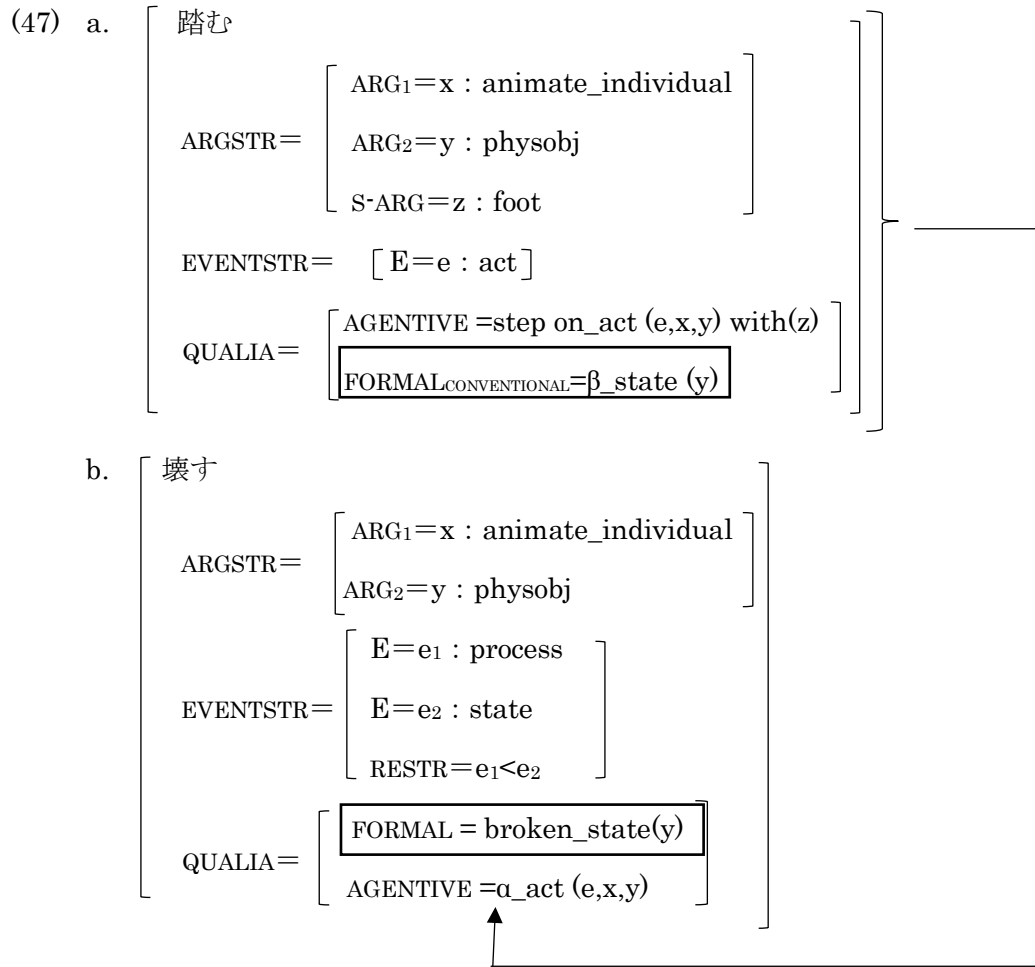
(46a) の“爆” (爆ぜる)、“黒” (黒い)、“翻” (裏返る)“疼”・“痛” (痛い) には、対応する日本語の他動詞がない。同じく「荒らす」に対応する中国語の自動詞や形容詞もない。直訳できないのはそのためである。しかしながら、(46b) では、“湿” (濡れる) は「濡らす」、
“肿” (腫れる) は「腫らす」と対応させることができる。つまり、「踏む」の外項と内項は「濡らす」「腫らす」の外項と内項と一致するにもかかわらず、日本語で「*踏み濡らす」や「*踏み腫らす」の容認度が低いのはなぜであろうか。その原因を解明するため、上記の 2 つの語を 1 つずつ分析していきたい。まず、「踏み壊す」と比較しながら、「*踏み濡らす」が成立しない理由を考察する。

「踏む」の意味は「足で体重をかけて上から押さえる」であり、動作主に対応する項が有生の個体でなければならない。「足」は「踏む」の意味に含まれるが、統語構造上に表示される必要はなく、影の項である。クオリア構造に関しては、主体クオリアは動作主が被動者に対して行う行為であることを表す。次いで、「踏む」の慣習的な形式クオリアを探し出すため、「叩く」と同じ方法を用い、「踏んで」と『日本語基本動詞用法辞典』にある 500 個の単純動詞の組み合わせ状況を調べた。用例数が高い動詞は表 4 のようになる。表 4 にある動詞は強い力の作用で、物体の形や状態が変化することを表している。そのため、「踏む」の慣習的な結果は「足からの強い力の作用で生じた形または状態の変化」である。(42a) では、それを $\text{FORMAL}_{\text{CONVENTIONAL}}=\beta$ で示す。

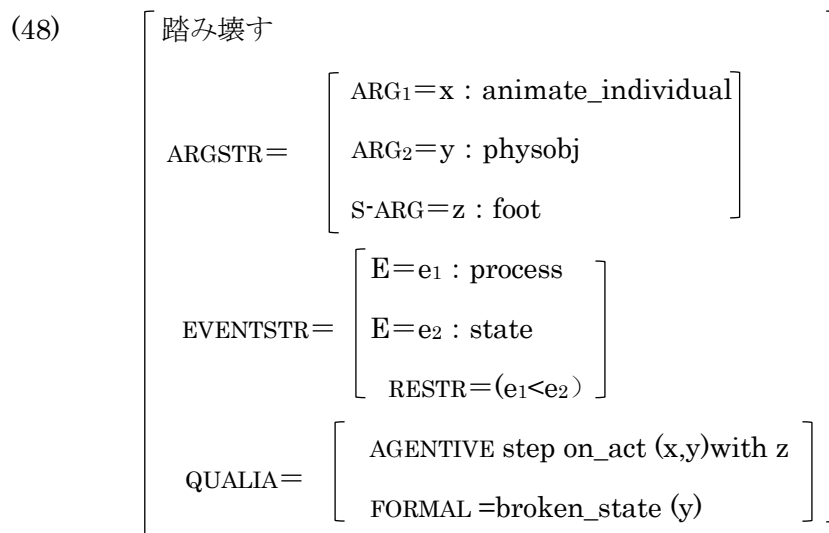
順位	動詞	用例数
1	倒す	59500
2	消す	37900
3	割る	32800
4	潰す	28700
5	固める	26500
6	壊す	15400
7	鳴らす	14800
8	延ばす	11200
9	曲げる	4250

表 4

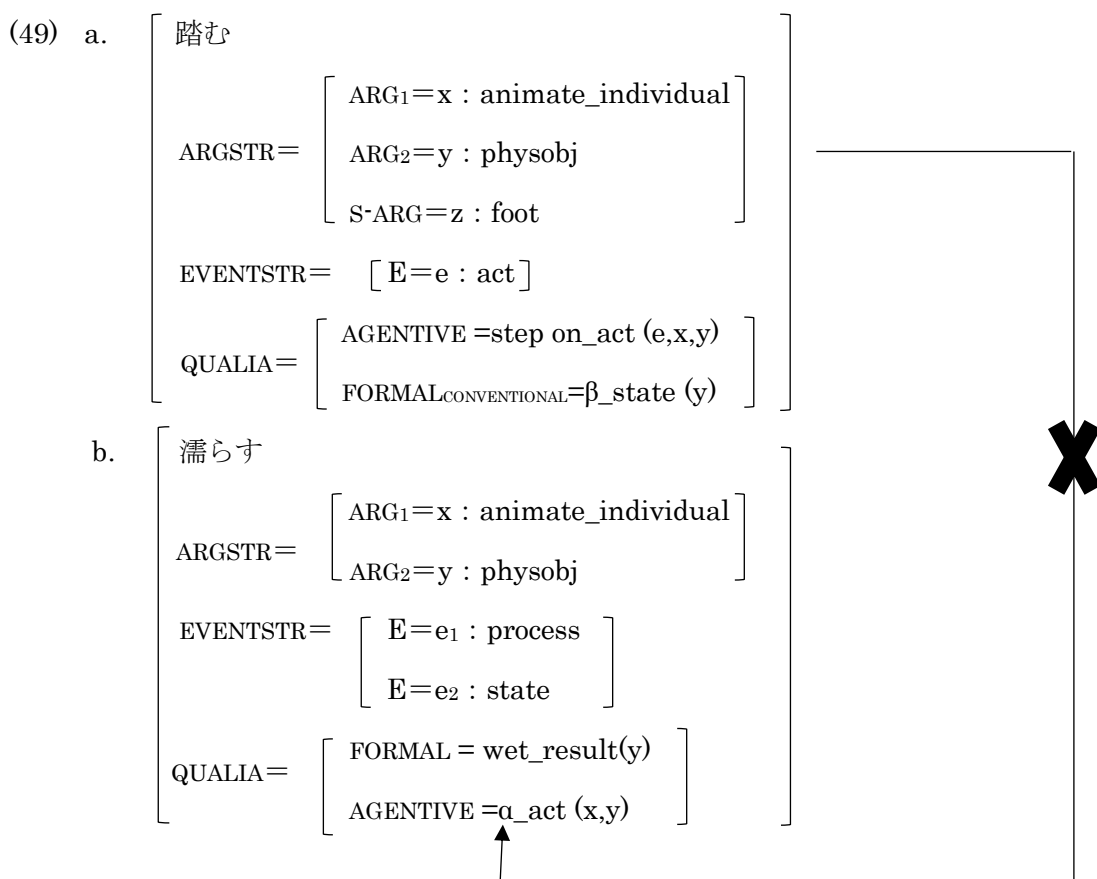
「壊す」については 3.2.1 節で詳しく分析したが、下に (47b) として再掲する。(47b) が示しているように、「壊す」の主体クオリアが指定されていないので、動作を表す V1 をそこに代入することができる。ここで、「壊す」の形式クオリア構造が「踏む」の慣習的な結果のひとつとして考えれば、V1 を V2 の意味構造に代入することができる。



(47b) で示した通り、「壊す」の形式クオリアは y が **broken** の状態になることを示す。これは「踏む」の慣習的な結果の 1 つとして矛盾しない。すなわち、ある物が動作主の足から力を受け、形などを崩すことは推測できるので、「踏む」と「壊す」を組み合わせることができる。よって、「踏み壊す」の意味構造は以下ようになる。

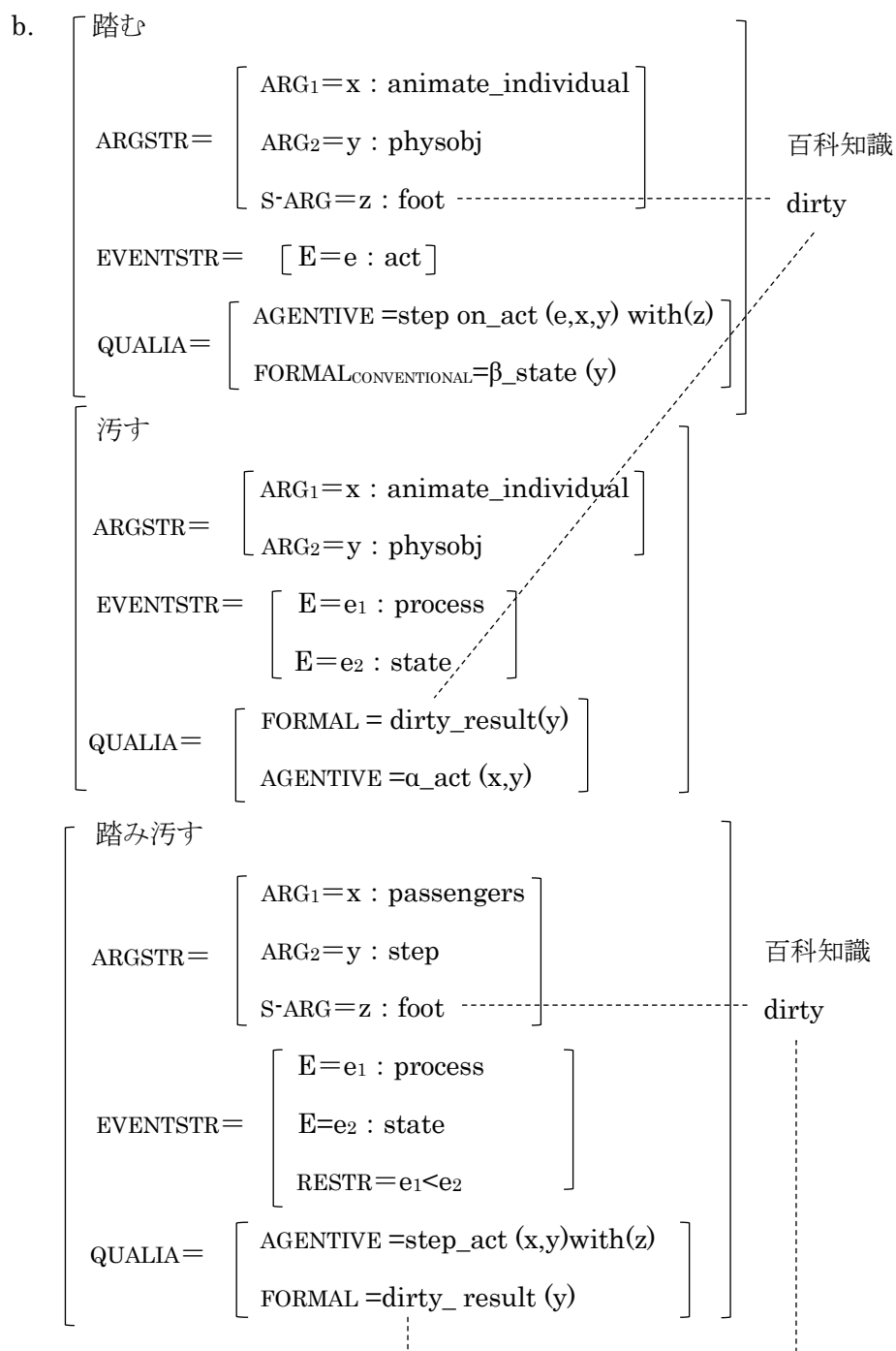


一方「濡らす」は、 x が y に作用することによって、 y が濡れた状態に変化することを意味する。上述の通り、「踏む」ことから予想される結果、つまり「足からの強い力の作用で行われた形また状態の変化」とは明らかに異なるから、「踏む」と「濡らす」を複合することはできない。



ここで問題になるのが上述の「踏み汚す」である。「汚す」の形式クオリアも「濡らす」のように「踏む」の慣習的結果として考えにくいのに、なぜ「踏み汚す」の容認度は「踏み濡らす」より高いのであろうか。それは「踏む」の影の項に「足」があるからである。足は地面に接しているので、汚いとか汚れているという百科事典的な知識やイメージがある。つまり、「踏む」と「汚す」は「足」を介して繋がるため、「踏み汚す」は容認されやすいのである。また、(50a) が示すように、文中に「汚い足」をより明確にすれば、「踏み汚す」の容認度は上がってくる。一方で、足が濡れているというのは特殊な状況でのみ成り立ち、百科的な知識ではない。日本語の結果複合動詞では、V1 の慣習的な結果が V2 の形式クオリアを含まなくても、文脈や百科事典的な知識により、影の項を介して容認度が上昇するのである。

(50) a. 子供たちは ??(泥が付いた靴で) 床を踏み汚してしまった。(=45c)



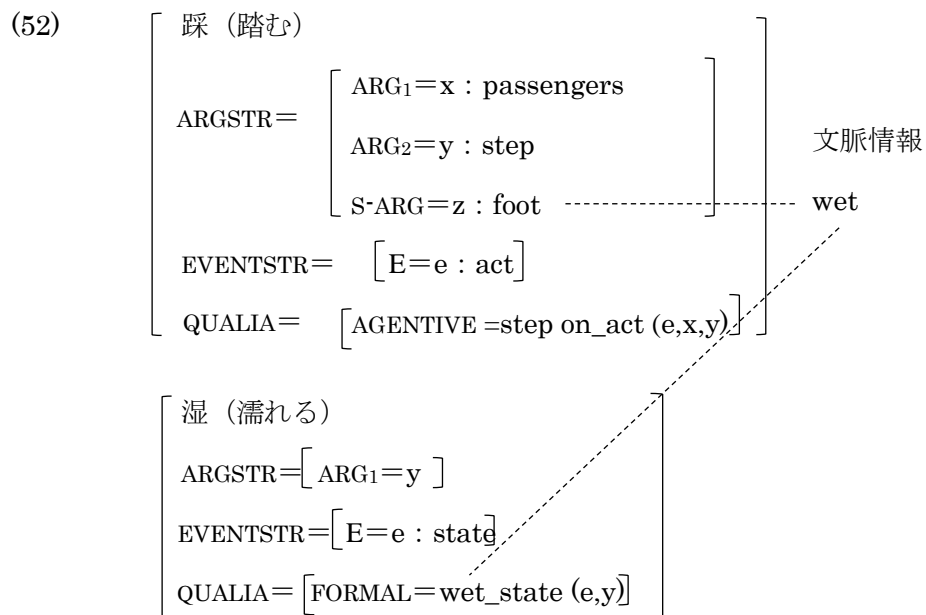
中国語では“踩湿”（踏む－濡れる）は問題なく言える。それは中国語の目的語指向の複合動詞において、複合動詞の V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果として考えにくい時には、中国語では、原因イベントと結果イベントの間に文脈情報を媒介することで、この二つのイベントを結びつけることができるからである。

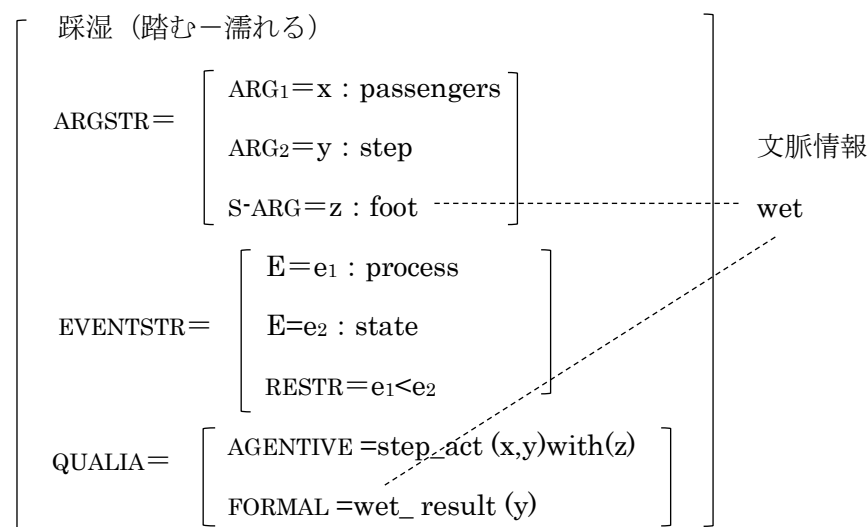
(51) 卢忠娟 老人 说, 2009 年 冬天, 下 雪 天,
 lú zhōngjuān lǎo rén shuō, 2009 nián dōngtiān, xià xuě tiān
 盧忠絹 年寄り 言う 2009 年 冬 降る 雪 日
 乗客 上 車 踩湿 了 车 门 踏板…
 chéng kè shàng chē cǎi shī le chē mén tà bǎn
 お客さん 乗る 車 踏む・濡れる LE 車 ドア ステップ

「2009 年の冬、ある雪の日、乗客はバスに乗る時に、ステップを踏んで、ステップを濡らしてしまった…と盧忠絹さんが言った。」

(齐鲁晚报 2012.3.2)

普通の状況では、何かを踏んで、それが濡れることはない。足や靴が濡れているという文脈依存の特殊な状況が必要である。(51) の文では、雪の日に乗客がステップを踏んで、ステップを濡らしたと書いているので、濡れた靴で踏めば濡れるという文脈と百科事典的な知識を組み合わせることで初めて、「踏んで濡らす」というイベントを理解することができる。つまり、影の項である「足」に文脈情報から推論される「濡れている」という状況を“踩湿”（踏む・濡れる）の項構造に挿入することによってのみ、複合動詞全体の容認度は高くなる。

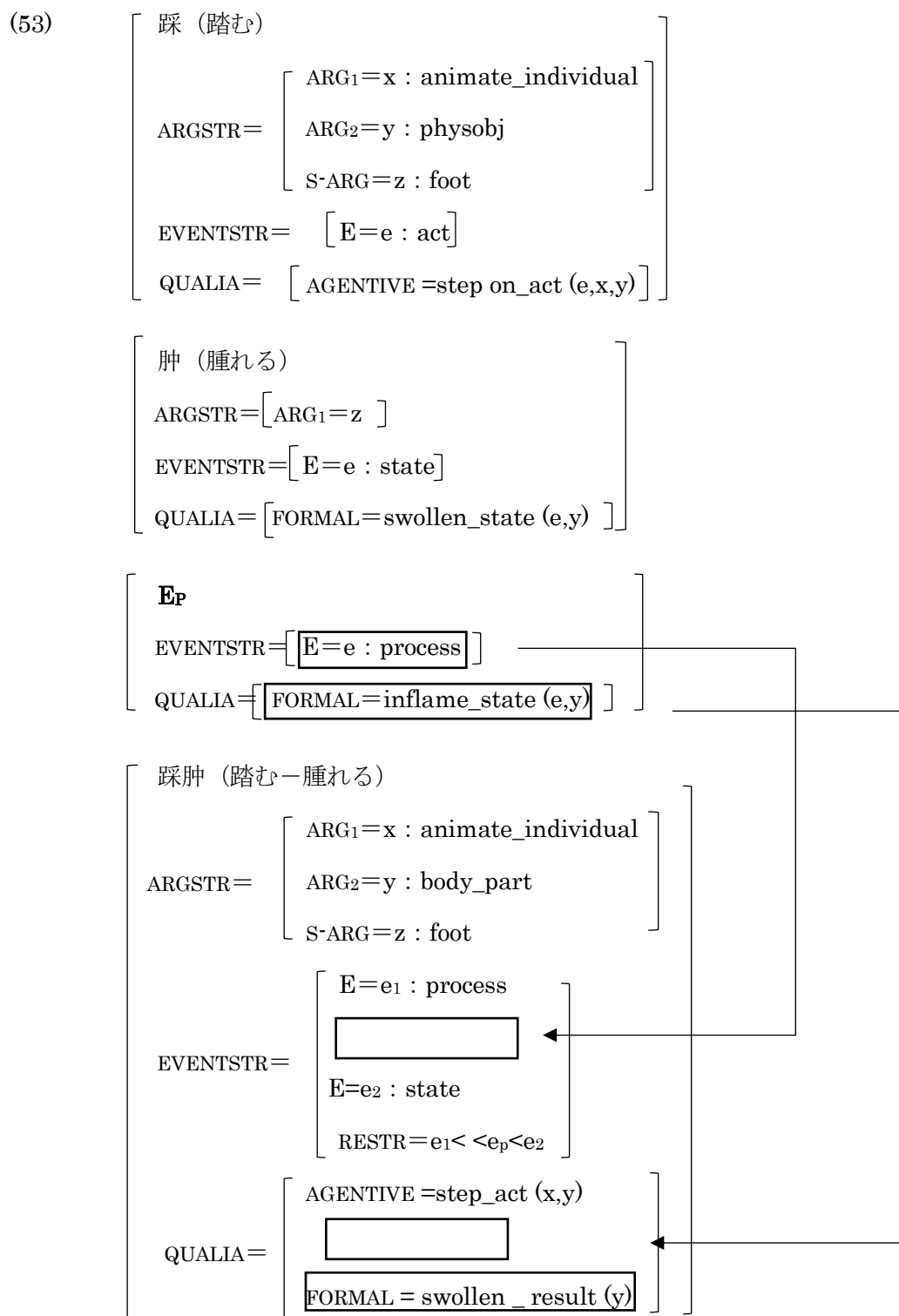




以上のように、複合動詞の V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果と一致する場合が最も自然であるが、影の項の一般的な百科的知識により、V1 と V2 のイベントを結びつけることができれば容認度は上昇するが、文脈情報だけでは複合動詞にできない。これに対して中国語では、複合動詞の V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果と一致しない場合、影の項に関わる文脈情報で、V1 と V2 のイベントを結びつけることが可能である。

日本語と中国語で対応しない例には、“踩湿”「*踏み濡らす」以外に、“踩肿”「*踏み腫らす」も存在する。前に述べたように、日本語では、「踏む」の慣習的な結果はその対象物の位置や状態の変化である。「腫らす」は「踏む」の慣習的な結果の一つとしては考えにくく、「踏む」と「腫らす」は複合動詞を作ることができない。その原因は「踏む」と「腫らす」の関係が間接的だからである。第 2 章で説明したように、ほとんどの日本語複合動詞では、V1 と V2 の間に直接的な因果関係が必要である。「体の部分を踏んだ結果、炎症や出血を起こすことで腫れる」のであり、直接的な因果関係を想定しづらいために、「*踏み腫らす」の容認度は非常に低い。

それに対し、中国語では V1 と V2 の間に介在する想定し、両者を結びつけることで複合動詞にすることができる。つまり、“踩”（踏む）と“肿”（腫れる）の間に、イベント（ここでは Ep で表す）を挿入することにより、この二つの動詞が 1 つの動詞になっている。中国語では、因果関係が間接的であっても構わないのである。



3.2.3 「V1+破る・破く」／“V1+破”

3.2.2 節では、V1 が“踩”「踏む」で共通する日中結果複合動詞の対応状況について述べ

た。本節は V2 が“破”「破る」¹² で共通する日中結果複合動詞の対応状況を分析する。日本語の「破る」も中国語の“破”も 2 つ以上の意味を持つが、ここでは「破る」の意味を「引き裂いたり、傷をつけたり、穴をあけたりして、物の形をこわす」に、“破”の意味を“破壊、损坏、使破裂”（破壊、壊す、破裂させる）に限定して調べたところ、「日本語の結果複合動詞リスト」には 9 例あるのに対し、中国語には 62 例¹³あった。これらの例を分析するとすべての日本語の結果複合動詞には対応する中国語の結果複合動詞があるが、中国語の結果複合動詞には対応する日本語複合動詞が無いことが多い。

- (54) a. 打ち破る、押し破る、噛み破る、食い破る、蹴破る、蹴り破る、突き破る、引き破る、踏み破る

(日本語の結果複合動詞リスト)

- b. 撑破（はちきれほど詰める一破れる）、踹破（蹴る一破れる）、
 烧破（焼く一破れる）、切破（切る一破れる）、咬破（噛む一破れる）、
 挠破（掻く一破れる）、剪破（切る一破れる）、穿破（着る・履く一破れる）、
 炸破（爆発する一破れる）、扇破（扇ぐ一破れる）、吹破（吹く一破れる）、
 搅破（かき混ぜる一破れる）、顶破（（頭や角で）突く一破れる）、
 拉破（引く一破れる）、捶破（たたく一破れる）、轰破（爆撃する一破れる）、
 割破（割る一破れる）、碰破（ぶつける一破れる）、刺破（突く一破れる）、
 搓破（揉み洗いする一破れる）、崩破（破裂する一破れる）、
 撕破（裂く一破れる）、洗破（洗い一破れる）、挤破（押す一破れる）、
 踩破（踏む一破れる）、蹭破（する一破れる）、扯破（引く一破れる）、
 磕破（ぶつける一破れる）、捣破（（棒の先などで）叩く一破れる）、
 抠破（ほじくる一破る）、晒破（日に当てる一破れる）、压破（押す一破れる）、
 砍破（切る一破れる）、敲破（叩く一破れる）、踢破（蹴る一破れる）、
 煮破（煮る一破れる）、刮破（刮く一破れる）、打破（打つ一破れる）、
 勒破（強く縛る一破れる）、划破（傷つける一破れる）、扎破（刺す一破れる）、

¹² 「破る」「破」以外に、「固める」「硬」「砕く」「碎」「壊す」「坏」「殺す」「死」などの動詞も V2 として現れるが、どの動詞であっても、対応するタイプとしないタイプの特徴は同じであるため、ここでは、V1+「破る・破く」／“破”を代表として、考察を行う。

¹³ 中国語の複合動詞の数は日本語より多いが、複数の中国語の結果複合動詞が 1 つの日本語の複合動詞と対応する場合も少なくない。

凿破（掘る－破れる）、戳破（突く－破れる）、摔破（投げつける－破れる）、
 铲破（こすり取る－破れる）、翻破（めくる－破れる）、抓破（搔く－破れる）
 挂破（ひっかける－破れる）、擦破（する－破れる）、砸破（打つ－破れる）
 砸破（叩く－破れる）、啄破（啄む－破れる）、漲破（膨張する－破れる）、
 踏破（踏む－破れる）、摸破（触る－破れる）、冲破（突破する－破れる）、
 磨破（こする－破れる）、硌破（傷がつく－破れる）、捅破（突く－破れる）、
 震破（振動する－破れる）、挖破（掘る－破れる）、撞破（ぶつかる－破れる）、
 （中国語の結果複合動詞リスト）

(55) の例はすべて日本語と中国語で対応するものであるが、(55a) が日本語と中国語の
 「結果複合動詞のリスト」に現れた例であるのに対し、(55b) は「日本語の結果複合動詞リ
 スト」にはないが、新聞コーパスでは見つかった例である。本節は主に V2 が“破”と「破
 る」の対応を考察するため、(55c) のような V2 が「破る」ではない動詞は扱わない。なお、
 (55a) と(55b)において、1 つの日本語に複数の中国語が対応する現象が見られる。例えば
 (55b) の“割”“切”“剪”“砍”は日本語の「切る」と訳されるが、「切る」時に使う道具
 や対象などが異なる。“割”は「全体から部分を切る」という意味を表し、“剪”は「はさみ
 で切る」という意味を持つ。“砍”も“切”も「刃物で切る」という意味であるが、それぞ
 れの対象が異なる。“切”の対象となるのは野菜などの小さいもので、“砍”の場合は、まき
 のような硬いものを動作対象として取る。そのため、「切り破る」には“砍破”が相応しい。

- (55) a. 蹴破る、蹴り破る－踹破（蹴る－破れる）、踢破（蹴る－破れる）
 噛み破る、食い破る－咬破（噛む－破れる）
 引き破る－拉破（引く－破れる）、撕破（裂く－破れる）、扯破（引く－破れる）、
 挂破（ひっかける－破れる）
 踏み破る－踩破（踏む－破れる）、踏破（踏む－破れる）
 押し破る－磕破（ぶつける－破れる）、碰破（ぶつける－破れる）、
 挤破（押す－破れる）、压破（押す－破れる）、撞破（ぶつける－破れる）
 打ち破る－打破（打つ－破れる）、砸破（打つ－破れる）
 突き破る－抠破（ほじくる－破る）、顶破（（頭や角で）突く－破れる）、
 啄破（つつく－破れる）

戳破（突く－破れる）、捅破（突く－破れる）、扎破（突く－破れる）、
刺破（刺す－破れる）

- b. 切り破る－割破（切る－破れる）、切破（切る－破れる）、剪破（切る－破れる）、
砍破（切る－破れる）

着破る、履き破る－穿破（着る・履く－破れる）

吹き破る－吹破（吹く－破れる）、刮破（吹く－破れる）

叩き破る－敲破（叩く－破れる）、捶破（叩く－破れる）、

捣破（棒の先などで叩く－破れる）、

焼き破る－烧破（焼く－破れる）

- c. 掻きむしる－挠破（掻く－破れる）、抓破（掻く－破れる）

煮崩す－煮破（煮る－破れる）

擦り切る－磨破（こする－破れる）、蹭破（擦る－破れる）、

擦破（擦る－破れる）

(56) では、「切り破る」も“砍破”（切る－破れる）も、刃物でドアを切ることによって、
ドアや小麦粉の袋が破れた状態へ変化したという意味を表すので、日中両言語で対応する例
である。同様に、(57) から (60) までの例では、「焼く」「烧」、「吹く」「吹」、「叩く」「敲」、
「履く・着る」「穿」などの動作によって、対象が破れた状態へ変化したことを表す。

- (56) a. 木製の入り口ドアを刃物で切り破り、内側のカギをあけて侵入する方法が、県
内などでたびたび起きた窃盗事件の手口に似ていた。

(朝日新聞朝刊 1999.05.19)

- b. 一 刀 下 去, 把 面 口 袋 砍 破 了。

yī dāo xià qù bǎ miàn kǒu dai kǎn pò le

一 刀 方向動詞 BA 小麦粉 袋 切る－破れる LE

「刃物で一回切って、小麦粉の袋を切り破った。」

(「現代汉语述补结构用法数据库」(現代中国語動補構造用法データベース))

- (57) a. 中村署によると、滝沢容疑者は3日午前11時59分ごろ、名古屋市中村区の家
電量販店で、持ってきたガスバーナーを使ってショーケースを焼き破り、カメ

ラレンズ 2 個（計約 59 万 5 千円）を盗んだ疑いがある。

（朝日新聞 2013.10.04）

- b. 他 从 邻 居 家 借 来 炊 具, 因 不
tā cóng lín jū jiā jiè lái chūfǔ jù yīn bú
彼 から 近所 家 借りる 方向動詞 調理器具 接続詞 否定
会 使用, 把 锅 烧破 了。

huì shǐ yòng bǎ guō shāo pò le
できる 使用 BA 鍋 焼く一破れる LE

「彼は近所の家から調理器具を借りてきて、使用法が分からないので、鍋を焼き破ってしまった。」

（「現代汉语述补结构用法数据库」（現代中国語動補構造用法データベース））

- (58) a. 1 隻はスタート直後に主帆を吹き破られて油壺に戻り、もう 1 隻はマストを折って八丈島に避難、そして残る 2 隻が犠牲者を出した。

（朝日新聞 1992.1.21）

- b. 他们 的 风筝 被 风 吹破 了。

tā men de fēng zhēng bèi fēng chuī pò le
彼達 の 風 BEI 風 吹く一破れる LE

「彼達の風は風に吹き破られた。」

（「現代汉语述补结构用法数据库」（現代中国語動補構造用法データベース））

- (59) a. 首まで水に浸かりながら、剣道四段の体育の教師は、それでも天井を手で、頭で、叩き破った。屋根裏に這い上がる。

（朝日新聞 1993.7.27）

- b. 在 车祸 现场 附近 的 行人 敲破 车窗,
zài chē huò xiàn chǎng fù jìn de xíng rén qiāo pò chē chuāng
前置詞 交通事故 現場 付近 の 通行人 叩く一破れる 車窓

把 受伤 的 乘客 从 车门 卡死 的
bǎ shòu shāng de chéng kè cóng chē mén kǎ sǐ de
BA ケガをする の 乗客 から 車ドア 動かない の

出租车 里 救 了 出来。
chū zū chē lǐ jiù le chū lái

タクシー 中 助ける LE 方向動詞

「交通事故現場付近にいた人が車窓を叩き破り、タクシーの動かないドアから、ケガをした乗客を助け出した。」

(「現代汉语述补结构用法数据库」(現代中国語動補構造用法データベース))

(60) a. 旅をする時のワラジは、一日に一足は必要だった。草履は三日に一足は履き破るから、一年で一人百足以上が必要になる。 (読売新聞 2003. 11. 03)

b. 何度も継ぎはぎを当て、着破るまで愛用された仕事着や着物など約 75 点を展示。 (読売新聞 2017.10.14)

c. 她们的鞋都穿破了。

tā men de xié dōu chuān pò le

彼女 の 靴 副詞 履く一破る LE

「彼女たちすべての靴は履き破いた。」

(「現代汉语述补结构用法数据库」(現代中国語動補構造用法データベース))

下の (61) では、中国語の複合動詞の V1 を日本語に訳すと、同じ形で対応する動詞がないため、日本語では複合動詞で表現できない。例えば“炸”は漢語動詞「爆発する」にあたる。また、“搅”と同じ意味を持つ日本語動詞「掻き混ぜる」が複合動詞で、新しい結果複合動詞を作れない。それに対して (62) では、日本語の複合動詞の V1 は対応する単純動詞は存在するが、それにもかかわらず、V2 の「破る」と組み合わせられない。その原因は 2 つある。それぞれの理由について、(62a) の「*掘り破る」と「*詰め破る」、(62b) 「洗い破る」「裂き破る」で見よう。

- (61) 炸破 (爆発する-破れる) — *爆発し破る、
搅破 (かき混ぜる-破れる) — *かき混ぜ破る
轰破 (爆撃する-破れる) — *爆撃し破る
铲破 (こすり取る-破れる) — *こすり取り破る
涨破 (膨張する-破れる) — *膨張し破る
咯破 (傷がつく-破れる) — *傷がつき破る
崩破 (破裂する-破れる) — *爆裂し破る
震破 (振動する-破れる) — *振動し破る

冲破（突破する-破れる） — *突破し破る

摔破（投げつく-破れる） — *投げ付き破る

划破（傷つける-破れる） — *傷つけ破る

搓破（揉み洗いする-破れる） — *揉み洗いし破る

(62) a. 凿破（掘る-破れる）、挖破（掘る-破れる） — *掘り破る

撑破（はちきれほど詰める - 破れる） — *詰め破る

b. 洗破（洗う-破る） — *洗い破る

翻破（めくる-破る） — *めくり破る

扇破（扇ぐ - 破る） — *扇ぎ破る

摸破（触る-破る） — *触り破く

晒破（さらし-破れる） — *さらし破る

裂破（裂ける - 破れる） — *裂き破る

勒破（きつく縛る-破れる） — *縛り破る

(63) “挖破”（掘る-破れる）では、“挖”（掘る）の対象は鉱物であるが、状態変化を起こすのは「服」である。つまり複合動詞“挖破”（掘る-破れる）の内項は V1 ではなく、V2 の内項である。3.1 節で述べたように、中国語の目的語指向型の結果複合動詞において、外項は V1 の外項、内項は V2 の内項であってもよい。これに対して日本語では、V1 と V2 で外項も内項も共通していなければならない。一般に、V1 の項構造と V2 の項構造が一致しなければならないのである。「*掘り破る」が言えないのはそのためである。

(63) a. 矿工们 挖 矿 很 辛苦, 把 衣服 都 挖破 了。

kuàng gong men wā kuàng hěn xīn kǔ bǎ yī fu dōu wā pò le

坑夫たち 掘る 鉱物 とても 苦労する Bǎ 服 までも 掘る-破れる LE

「坑夫たちはとても苦労して鉱物を掘り、服までも破れた。」

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{挖 (掘る)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{miners} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{mineral} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{破 (破れる)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = z : \text{clothes}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{挖破 (掘る - 破れる)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{miners} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{clothes} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

「*掘り破る」と同様に「*詰め破る」でも、「詰める」の内項は「リンゴ」、「破る」の内項は「袋」を取るなので、この二つの動詞は複合できない。

(64) *買い物袋にリンゴをたくさん詰めて、その袋を詰め破った。

次に、(62b) の「洗い破る」「裂き破る」などの複合動詞が成り立たない原因を考える。これらの複合動詞では、V1 と V2 の項構造は一致しているので、成立しない理由は別にある。これまでの説明によれば、日本語では、V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果の一つと一致しなければならない。では「洗う」の慣習的な結果とは何であろうか。

「洗う」とは「x が液体を使い、y から z (汚れ) を落としてきれいにする」ことであり、このとき y は (65) のように「汚れたもの」を表す。

(65) シャツ／食器／手を洗う

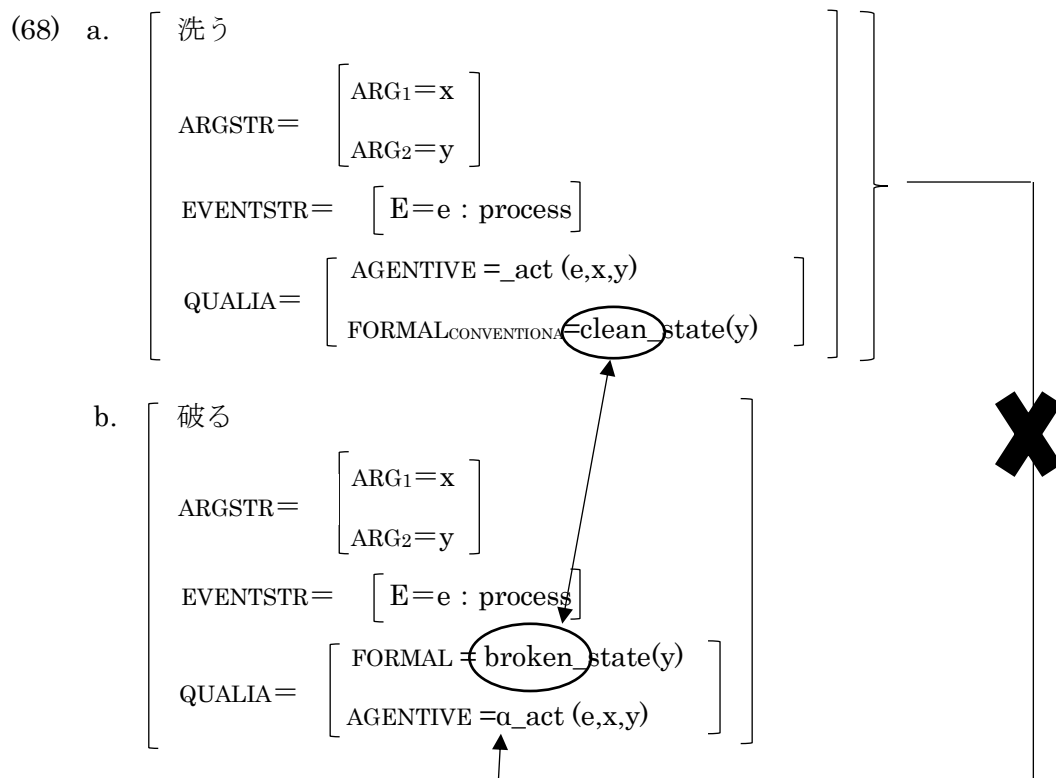
しかし、「洗う」は「汚れ」を動作対象として取り、「x が液体を使い、z (汚れ) を y から取る」という意味になることがある。このとき「洗い流す」「洗い落とす」のような結果複合動詞が可能となる。汚れ z が y から移動するという結果が「落ちる」「流れる」と一致するからである。実際、「洗う」のテ形が手段を表す場合、「流す」「落とす」が後続することが多い。

表 5

番号	用例	用例数
1	流す	147000
2	落とす	74300

- (66) a. 1 プッシュを手に取り、しっかり泡立ててから髪を中心に汚れを洗って流す
(<https://www.natsumikan-diary.net/entry/chapup-shampoo>)
- b. 1 プッシュを手に取り、しっかり泡立ててから髪の汚れを洗い流す
- (67) a. 超音波で汚れを強力に洗って落とす小型クリーナー
(<https://ent.smt.docomo.ne.jp/article/951612>)
- b. 超音波で強力に汚れを洗い落とす小型クリーナー

どちらの意味の「洗う」であっても、その慣習的な結果は「破れる」とは一致しない。項構造が一致したとしても「*洗い破る」が言えないのはこのためである。



これに対して中国語の動詞複合では、クオリア構造が一致しなくても、百科事典的な知識や文脈の情報を持ちいて、V1の主体クオリアとV2の形式クオリアを強制的に合成することができる。

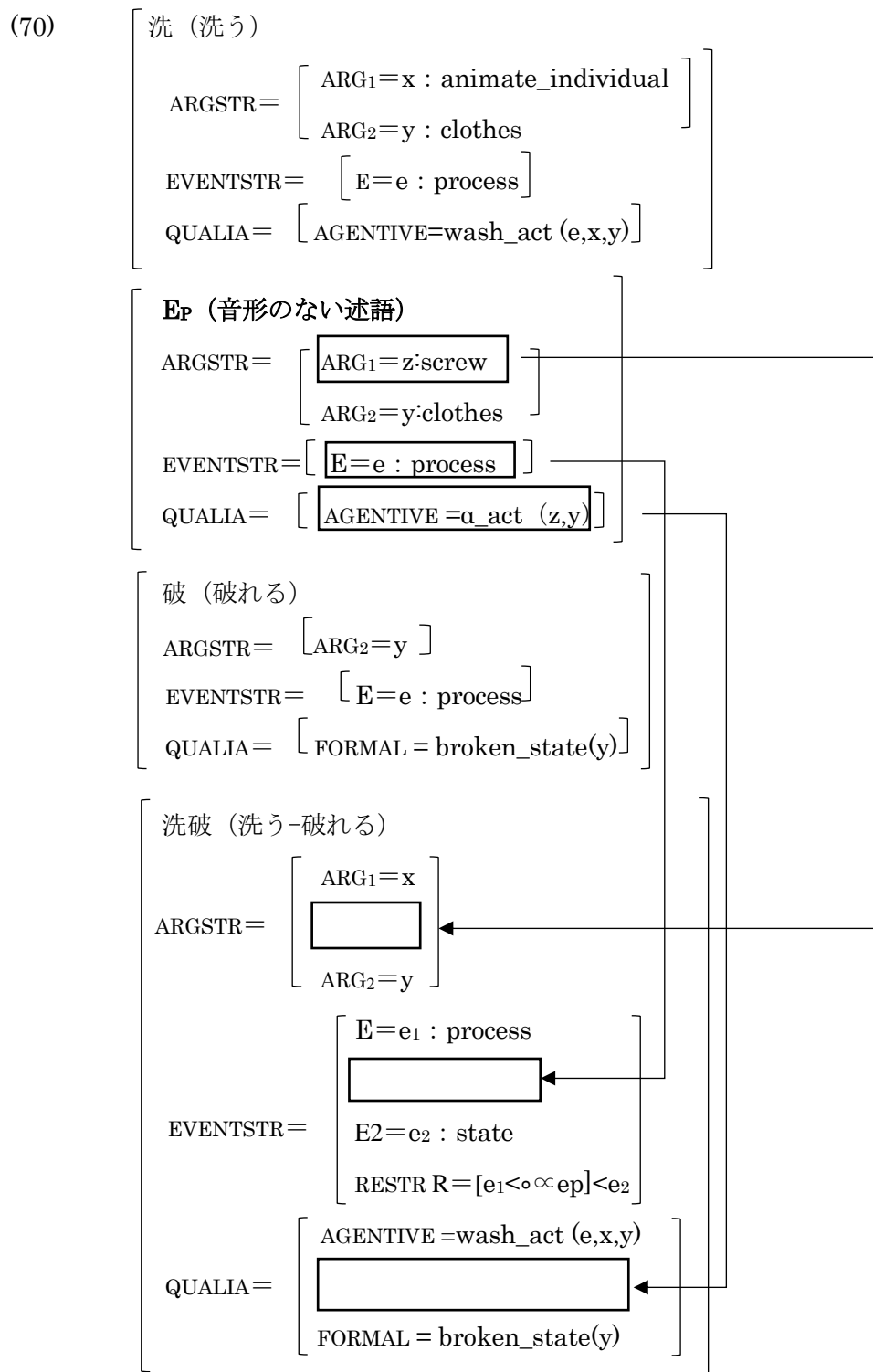
(69) 投 幣 洗 衣 卡 螺絲釘 洗破 衣 只 賠 800 元。

tóu bì xǐ yī kǎ luó sī dīng xǐ pò yī zhǐ péi 800 yuán

入れる コイン 洗う 服 挟まる ねじ 洗う-破れる 服 ただ 賠償 800 元

「コインランドリーにねじがあり、服を洗い破ったが、800 元しか賠償されない。」

(<https://news.tvbs.com.tw/life/618678>)



服を洗うと服が破れてしまうには、(63) のような特殊の状況が必要である。“洗破” (洗う－破れる) の意味構造を見ると、V1 と V2 の間にもう一つのイベント **Ep** が挿入されている。ここでは、服を洗う時に (E1)、洗濯機にあるねじが服に作用し (Ep)、服を破ってしまう (E2) という事象の連続が生じていることを表している。

同様に、「破れる」は「めくる」「扇ぐ」「触る」「晒す」「縛る」「裂く」の慣習的な結果とは考えられないので、「*めくり破る」「*扇ぎ破る」「*触り破る」「*晒し破る」「*縛り破る」「*裂き破る」とは言えない。

以上、V1 が“踩”／「踏む」の結果動詞、V2 が“破”／「破る」である結果複合動詞の対応の分析は、以下の2点にまとめられる。

日本語の目的語指向型の結果複合動詞において、V1 と V2 の項構造が一致し、かつ V1 の慣習的な結果と V2 の形式クオリアが一致すれば、結果複合動詞として成立する。

中国語では、V1 と V2 の内項が一致せず、また V1 の慣習的な結果と V2 の形式クオリアが一致しなくても、百科事典的な知識や文脈情報を利用し、結果複合動詞として成立する。

3.3 中国語の結果複合動詞が取る疑似目的語の特徴

Jackendoff (1990)、Goldberg (1995) など多くの研究者が、英語の結果構文に疑似目的語が現れることを指摘している。疑似目的語とは、第2章ですでに述べたように、結果構文において、主動詞に選択されていないが、結果構文全体の目的語となる名詞句を疑似目的語という。日本語の結果複合動詞では、V1 と V2 の目的語は同じでなければならないので、疑似目的語は存在しない。一方、3.1.1 節で説明した通り、中国語には疑似目的語を取る結果複合動詞がある。また (71) と (72) のように、「他動詞／非能格動詞＋形容詞＋目的語」また「他動詞／非能格動詞＋目的語＋形容詞」という組み合わせは中国語も英語も存在するが、(73b) の「非対格動詞＋形容詞＋目的語」という組み合わせは、英語にはない。

(71) a. 我 挖坏 了 两 把 镐。 (石村 2011 : 87)

wǒ wā huài le liǎng bǎ gǎo

私 掘る－壊れる LE 2 量詞 くわ

「私は掘って2丁のくわをだめにした。」

b. * I digged two picks broken.

- (72) a. 跑步者 跑-薄 了 路面。
 pǎo bù zhě pǎo -báo le lù miàn
 ジョギングする人 走る-薄い LE 路面
 「ジョギングする人が走って、路面が薄くなった。」
- b. The joggers ran the pavement thin. (=2)
- (73) a. 西瓜 滚破 了 皮。 (石村 2011 : 89)
 xī guā gǔn pò le pí
 スイカ 転がる-割れる LE 皮
 「スイカが転がって皮が割れた。」 (=9b)
- b. *The watermelon rolled its rind broken.

(71) では、V1 “挖” (掘る) と主動詞 eat が他動詞であるものの、“*挖搞” (*くわを掘る)、*eat himself とは言えないので、“搞” (くわ) および himself は疑似目的語である。

(72) の非能格動詞“跑” (走る)、run と、(73) の非対格動詞“滚” (転がる) は元々目的語を取ることができないので、“路面” (路面)、the pavement、“皮” (皮) も疑似目的語である。ただし、“挖” (掘る) と“跑” (走る) は意志性動詞であるのに対し、“滚” (転がる) は非意志性動詞である。V1 も V2 も意志を持つ動作主のない非対格動詞が他動的結果複合動詞になれるのは、日中英三言語の中では、中国語のみである。

中国語の結果複合動詞は様々な疑似目的語を取れるが、制限がないわけではない。例えば、(71) から (73) までの中国語結果複合動詞の目的語を他の名詞句に変えると、非文になることがある。以下のように、(71) の“搞” (くわ) を“鞋” (靴) に、(72) の“路面” (路面) を“地板” (床) に、(73) の“皮” (皮) を“袋子” (袋) に換えると、すべて非文になる。

- (74) a. *我 挖坏 了 两 双 鞋。
 wǒ wā huài le liǎng shuāng xié
 私 掘る-壊れる LE 2 量詞 靴
 「私は掘って 2 足の靴をだめにした。」
- b. *跑步者 跑薄 了 地板。
 pǎo bù zhě pǎo báo le dì bǎn
 ジョギングする人 走る-薄い LE 床

「ジョギングする人が走るにより、床が薄くなった。」

- c. *西瓜 滾破 了 塑料袋。
 xī guā gǔn pò le sù liào dài
 スイカ 転がる－割れる LE ビニール袋
 「スイカが転がって、ビニール袋が割れた。」

ではなぜ“路面”（路面）は“跑”（走る）、“皮”（皮）は“滾”（転がる）の疑似目的語になることができるのに対して、“地板”（床）、“袋子”（袋）はできないのであろうか。疑似目的語は一体どのようなプロセスを経て現れるのか。(74a)、(74b) と (74c) の疑似目的語の特徴は同じであろうか。本節では、以上の問題を中心に議論を進める。3.3.1 節では、英語の結果構文と中国語の複合動詞の疑似目的語に関する先行研究を紹介する。3.3.2 節は (62) (71) の“挖坏”（掘る－壊れる）、(72) の“跑平”（走る－平らだ）タイプの疑似目的語について、3.3.3 節は (64) の“滾破”（転がる－割れる）タイプの疑似目的語について考察を行う。

3.3.1 構文文法

Goldberg (1995) によれば、個々の動詞とは別に、意味と形式を持つ「構文」が存在する。つまり、構文は文中の動詞から独立した意味と形式を持つのである。Goldberg (1995) はさらに、英語の疑似目的語は動詞ではなく、構文によって役割を与えられた目的語であると主張する。つまり、図 1 のように「構文」の一種である英語の結果構文において、構文は動詞が選択していない項を付加することができる。

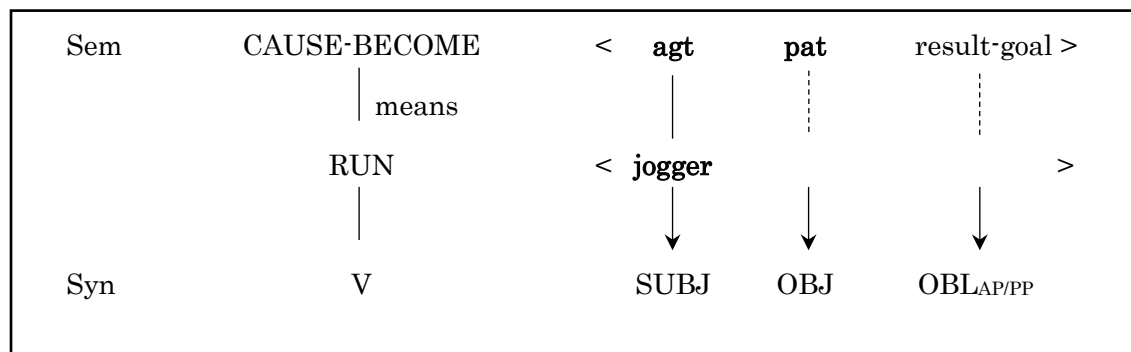


図 1

一般に、動詞がある構文に現れるとき、動詞の参与者役割は構文の意味役割と融合しなければならない。図 1 では、動詞 **run** の参与者が構文の動作主項 **agent** と融合し、主語として実現する。また、被動作主項 **patient** である **pavement** と結果着点項 **result-goal** である **thin** も動詞ではなく構文によって付与され、それぞれ直接目的語、斜格の形容詞句として具現化する。意味に関しては、「何かを変化させる」という意味が動詞 **run** の意味と結合し、「走ることによって、何かを変化させる」という意味になる。

Zhang (2011) は中国語の目的語指向の結果複合動詞を、次の三種類に分類している。

表 6 Three types of patient-oriented construction

Compound	Participants (confirmed by <i>ba</i> -test)	Constructional semantics	Semantic features
打死（他打死了小偷）	Agent (beater) and patient (beatee)	The agent acts on the patient and leads to the change of the state of the patient	The patient of the causative event corresponds to the patient of V1
哭湿（他哭湿了手帕）	Agent (crier) and patient (napkin)	The action of the agent (on himself) leads to the change of state of the patient.	The patient of the causative event participates in V1, although not subcategorized. It is determined by the constructional semantics of the causation.
吻瘫（留学生吻瘫机场）	Agent (kisser) and patient (airport)	The action of the agent (on a third participant/the patient of V1) leads to the change of the patient (the patient of the causative event)	

(Zhang 2011 : 41)

Zhang (2011) は“打死”（打つ－死ぬ），“哭湿”（泣く－濡れる）と“吻瘫”（キスする－麻痺する）を例として取り上げ、三種類の複合動詞の共通点と相違点を説明している。Zhang (2011) によれば、上記のすべての結果複合動詞に動作主と被動作主があるが、これ

らの構文的な意味はそれぞれ異なる。“打死”（打つ－死ぬ）タイプでは、動作主が被動作主に直接作用することによって、被動作主の結果状態変化を起こす。これに対して、“哭湿”（泣く－濡れる）と“吻癱”（キスする－麻痺する）では、動作主が直接的に被動作主に作用するのではなく、動作主から影響を受け、状態変化が起こる。また、“打死”（打つ－死ぬ）の目的語と“打”（打つ）の目的語は同じであるのに対し、“哭湿”（泣く－濡れる）と“吻癱”（キスする－麻痺する）の目的語と“哭”（泣く）と“吻”（キスする）の目的語は一致しない。英語の結果構文の疑似目的語と同様に、“手帕”（ハンカチ）と“机场”（空港）は結果複合動詞の時に限り、この構文の目的語になる。

Zhang (2011) は中国語の結果複合動詞も形式と意味を併せ持ち、V1 と V2 が組み合わさった以上の意味が生じるので、英語の結果構文と同様にひとつの「構文」であり、“手帕”（ハンカチ）と“机场”（空港）はそれぞれ構文から付与される項であると主張する。ただし、Goldberg (1995) とは異なり、Zhang (2011 : 44) は動作主と被動作主の間には制約があることを指摘している。

- (75) a. 他 喊哑 了 嗓子。
 tā hǎn yǎ le sǎng zǐ
 彼 叫ぶ－かすれる LE 喉
 「彼が叫んで、喉がかすれた。」
- b. 他 走酸 了 腿。
 tā zǒu suān le tuǐ
 彼 歩く－だるい LE 足
 「彼は歩き疲れた。」
- c. 他 哭湿 了 手帕。
 tā kū shī le shǒu pà
 彼 泣く－濡れる LE ハンカチ
 「彼がハンカチを泣き濡らした。」

Zhang (2011) によれば、(75) に属するすべての V1 は自動詞であり、動作主がある動作を始めたとき、直接的な影響を受けるのは動作主自身である。そのため、被動作主と動作主の間に緊密な関係がなければならない。例えば、被動作主は (75a,b) のように動作主の身体

の一部分であるか、あるいは (75c) のように所有物である。Zhang (2011) はこのことを活性領域 (active zone) という概念を用いて、説明を試みている。

活性領域とはあるドメインまたは関係に関与する事物の中で、直接的に相互作用する部分のことをいう (中野 (他) 2015 : 308)。例えば「トランペットが聞こえる」であれば、実際に聞こえるのは目的語の「トランペット」ではなく、活性領域である「トランペットの音」であり、「私はまばたきをした」であれば、「まばたき」に直接関係する「瞼」が活性領域となる (Langacker 1987 : 273)。

(75a, b) では、“喊” (叫ぶ) と“走” (歩く) の活性領域はそれぞれ“嗓子” (のど) と“腿” (足) であり、それが V2 “哑” (かすれる) および“酸” (だるい) というイベントの参与者にもなっている。(75c) については、「泣くときには、ハンカチで涙を拭く」という、いわゆる「百科事典的知識 (encyclopedic knowledge)」を利用して、“手帕” (ハンカチ) が活性領域となり、V2 “湿” (濡れる) の項ともなるという。

このように、活性領域の概念はある程度有効であるが、問題はどのような場合に何が活性化されるのか、はっきりとしない点にある。

- (76) a. 他 跑烂 了 他 的 鞋。
 tā pǎo làn le tā de xié
 彼 走る一破れる LE 彼 の 靴
 「彼は走って、靴をボロボロにした。」
- b. ?? 他 跑烂 了 他 的 裤子。
 tā pǎo làn le tā de kù zǐ
 彼 走る一破れる LE 彼 の ズボン
 「彼は走って、ズボンが破れた。」

(76) の“跑” (走る) は (75) の“喊” (叫ぶ)、“走” (歩く) と同じく自動詞であると共に、被動作主の靴もズボンも動作主の所有物である。そして Zhang (2011) のいう活性領域の観点から見ると、“鞋” (靴) も“裤子” (ズボン) も“手帕” (ハンカチ) のように「百科事典的知識」を利用して、“跑” (走る) の活性領域に入るはずである。「走る」とときには靴を履き、ズボンをはくのが普通だからである。したがって (76a) と (76b) は同じように可能であることが予測されるが、(76b) の容認度はそれほど高くない。(76a) と (76b) の

差は、“跑”（走る）と“穿鞋”（靴を履く）の間に常識的な関連性があるのに対し、“跑”（走る）と“穿裤子”（ズボンを履く）の間にはそれが弱いことにある。だが、動詞と目的語の間にある関連性の強さはどのように計ればよいのか、はっきりしない。

以上を踏まえ、本稿では、Zhang (2011) と異なり、一部の結果複合動詞において、疑似目的語を取る時に、動詞の意味を考慮する必要があることを主張する。

3.3.2 “挖坏”（掘る－壊れる）“跑薄”（走る－薄い）

上記の (76) と同じく、3.3 節の最初に挙げた“跑薄”（走る－薄い）の例を Zhang (2011) の理論を用いて解釈しようとしても、うまくいかない。(77) にある“路面”（路面）だけではなく、“地板”（床）の上も走れるから、百科事典的な知識で見ると、二つの目的語は“跑”（走る）と関連付けられるはずであるが、(77b) の容認度は低い。その原因を考えるため、“跑薄”（走る－薄い）の意味構造を見てみよう。

- (77) a. 跑步者 跑-薄 了 路面。
 pǎo bù zhě pǎo-báo le lù miàn
 ジョギングする人 走る-薄い LE 路面
 「ジョギングする人が走って、路面が薄くなった。」
- b. * 跑步者 跑-薄 了 地板。
 pǎo bù zhě pǎo-báo le dì bǎn
 ジョギングする人 走る-薄い LE 床
 「ジョギングする人が走って、床が薄くなった。」

中国語の結果複合動詞“跑薄”（走る－薄い）において、E₁である“跑”（走る）には走る人という項があり、E₂の“薄”（薄い）には“路面”（路面）という項がある。この二つの事象の項は明らかに異なるから、V1 の項構造と V2 の項構造は重ならない。しかしながら、(78a) が示しているように、“路面”（路面）の目的は人が通ることであり、“路面”（路面）の目的クオリアには V1 の run が含まれる。“跑平了路面”（走って、路面が平らになった）が問題なく言えるのは、“路面”の目的クオリアと V1 が一致し、かつ“路面”が V2 の項であることから、V1 と V2 の事象が“路面”を介して一つの複合事象として解釈できるからである。

それに対し、(77b) の容認度が低い理由は床の目的がその上を走ることではないからである。つまり“地板”（床）という名詞の目的クオリアに V1 である“跑”（走る）が含まれていないため、V1 と V2 の事象を一つの複合事象として解釈するのが難しいからである。実際、“这条新铺的路面很适合跑步。”（この新しくできた道路は走りやすい。）という文は可能だが、“??这块地板很适合跑步”（この床は走りやすい）は非常に不自然である。

$$\begin{aligned}
 (78) \quad & \left[\begin{array}{l} \text{跑 (走る)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\text{ARG}_1 = x : \text{human} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[E = e : \text{process} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\text{AGENTIVE} = \text{run_act}(e, x) \right] \end{array} \right] \\
 & \left[\begin{array}{l} \text{薄 (薄い)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\text{ARG}_1 = y : \text{the pavement} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[E = e : \text{state} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\text{FORMAL} = \text{thin_state}(e, y) \right] \end{array} \right] \\
 & \left[\begin{array}{l} \text{跑薄 (走る－薄い)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{human} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{pavement} \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process}(x) \\ E_2 = e_2 : \text{state}(y) \\ \text{RESTR} = [e_1 < e_2] \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \text{run_act}(e_1, x) \\ \text{FORMAL} = [\text{thin_result}(e_2, y)] \end{array} \right] \end{array} \right]
 \end{aligned}$$

$$(79) \text{ a. } \left[\begin{array}{l} \text{路面 (路面)} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{consit_of}(x : \text{pavement}, y : \text{stones}) \\ \text{FORMAL} = \text{road}(x) \\ \text{TELIC} = \text{walk/run on}(x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{pave_act}(z : \text{human}, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$b. \left[\begin{array}{c} \text{地板 (床)} \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{consit_of}(x : \text{pavement}, \\ \quad y : \text{wooden or other material}) \\ \text{FORMAL} = \text{road}(x) \\ \text{TELIC} = \text{walk on}(x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{pave_act}(z : \text{human}, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(76) の違いも同じように説明できる。“鞋” (靴) と “裤子” (ズボン) のクオリア構造を見ると、“鞋” は歩いたり走ったりするための道具であり、目的クオリアに **run** が含まれると言えるが、単なる “裤子” の目的に走ることがあるとは考えにくい。事実、走るためのシューズは中国語で “跑鞋” と言うのに対し、走る時に履くズボンは “*跑步裤” また “*跑裤” (走りのズボン) と言わない。運動をするためのズボンであれば、“运动裤” (運動のズボン) となる。つまり「走る」ことを目的とするのは “鞋” (靴) あるいは “运动裤” (運動のズボン) であり、単なる “裤子” (ズボン) では不十分であることは、次の例からも分かる。

- (80) a. 这 双 鞋 很 适合 跑步。
zhè shuāng xié hěn shì hé pǎo bù
この SHUANG 靴 とても 適する ジョギングする
「この靴はとても走りやすい。」
- b. 这 条 {运动裤/?裤子} 很 适合 跑步。
zhè tiáo {yùn dòng kù/? kù zǐ} hěn shì hé pǎo bù
この TIAO 運動ズボン/ズボン とても 適する ジョギングする
「この運動ズボンはとても走りやすい。」

目的語の目的クオリアと V1 が一致し、かつ目的語が V2 の項であれば、V1 と V2 の事象がその目的語を介して一つの複合事象として解釈できる限りにおいて複合動詞が容認されるのであれば、ズボンを運動用のズボンとすればよくなることが予測されるが、事実、容認度は高い。

- (81) 他 跑-烂 了 他 的 运动裤。
tā pǎo-làn le tā de yùn dòng kù

彼 走る-破れる LE 彼 の 運動ズボン

「彼は走って、運動ズボンが破れた。」

次の例も全く同様で、「くわ」は石などを掘る道具であり、その目的クオリアは V1 “挖” 「掘る」を含んでおり、文法的である。

(82) a. 我 挖坏 了 两 把 镐。

wǒ wā huài le liǎng bǎ gǎo

私 掘る-壊れる LE 2 量詞 くわ

「私は掘って 2 丁のくわをだめにした。」 (=71a)

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{镐 (くわ)} \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{tool}(x) \\ \text{TELIC} = \text{dig the soil}(x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{make_act}(z : \text{human}, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

ここまで、目的語の目的クオリアが V1 と一致することが複合動詞形成の条件であることを見てきた。しかし、目的クオリアに「走る」が含まれない“裤子”（ズボン）であっても、“跑烂了裤子”（走ってズボンがボロボロになった）が完全に排除されるわけではない。ある語用論的条件が整えば、容認度が上昇することがある。(83) が示すように、V1 と V2 の間に、間接的な因果関係を持つので、この二つのイベントの間に、新しいイベント Ep が想定される必要がある。具体的に説明すると、V1 の「走る」が発生すると共に、ズボンが枝に引っかかったというような状況 (Ep で示す) があれば、ズボンが破れることがあり得る。このように、目的クオリアではなく、別の事象を介して V1 と V2 が結びつけられ、一つの複合事象として解釈できれば、“跑烂了裤子”（走ってズボンがボロボロになった）という文の容認度が上がる。

(83) a. 他 从 山 上 跑 下来 时, 挂 到 了

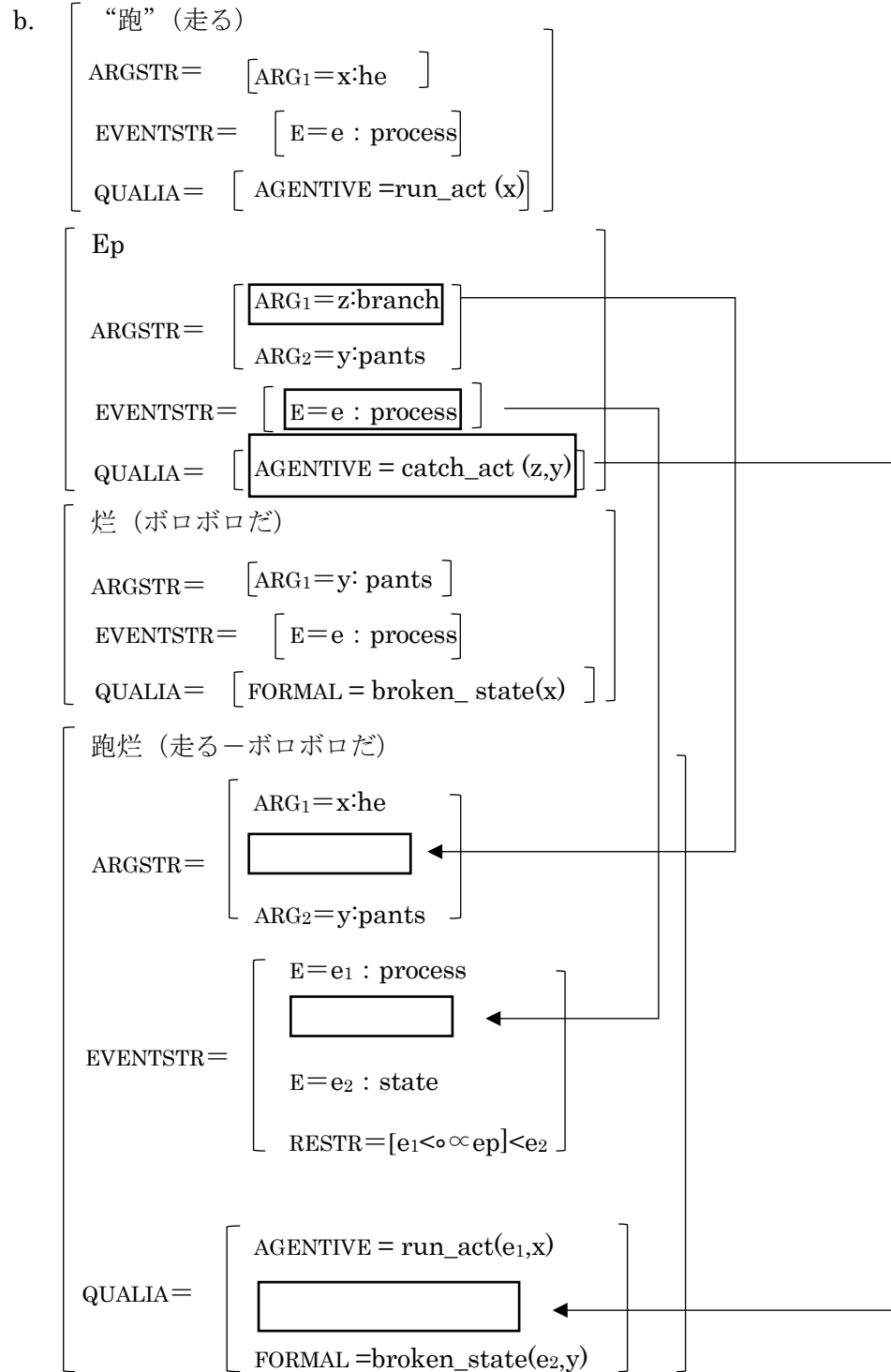
tā cóng shān shàng pǎo xià-lái shí, guà dào le

彼 から 山 上 走る 助詞 時に 引っかかる DAO LE

树枝, 跑-烂 了 他 的 裤子。

shù zhī pǎo-làn le tā de kùzǐ
 枝 走る-ボロボロ LE 彼 の ズボン

「彼は山の上から走ってきた時に、枝に引っかかったので、ズボンがボロボロになった。」



同様に、“吃脏了衣服”（食べて、服を汚す）などの例において、疑似目的語である「服」の目的クオリアは明らかに“吃”（食べる）とは関連がないが、別のイベントを挿入することにより、「服」も疑似目的語として複合動詞の後ろに現れることができる。

- (84) 他 吃 饭 吃脏 了 衣服／地毯／那本书
 tā chī fàn chī zāng le yī fú dì tǎn nà běn shū
 彼 食べる ご飯 食べる－汚れる LE 服 絨毯 その本
 「服／絨毯／その本を食べて、汚した」

(83) の疑似目的語である「服」「絨毯」「本」の目的は食べることではない。つまりそれぞれの目的クオリアは V1 の「食べる」と一切関係がない。それにもかかわらず、“吃脏”（食べる－汚れる）の目的語になっている。その理由は、「食べる」と「汚れる」に間接的な因果関係が想定できるからである。すなわち、「食べる」ことにより、食べ物が服に落ち、それによって服が汚れたというイベントの連続が成り立つからである。この挿入イベントにより、服は複合動詞の疑似目的語になることが可能となる。

“*跑薄了地板”（走って床が薄くなった）という例について、(84) のようにバスケットボール選手や育館内の床などの文脈があっても、現実的ではないので非常に不自然ではあるが、オーバーな表現あるいは冗談としてなら、容認される。

- (85) ??篮球 运动员 们 长年 在 体育馆 内
 lán qiú yùn dòng yuán men zhǎng nián zài tǐ yù guǎn nèi
 バスケットボール 運動員 たち 長年 で 体育館 中
 训练, 跑薄 了 体育馆 内 的 地板。
 xùn liàn pǎo báo le tǐ yù guǎn nèi de dì bǎn
 訓練する 走る－薄い LE 体育館 内 の 床

「バスケットボール選手たちは長年にわたって体育館内で訓練をしたせいで、体育館内の床は薄くなった。」

“挖坏了镐”（掘って、くわが壊れた）などの V1 が他動詞または非能格動詞で、V2 と直接的な因果関係を持つ中国語の結果複合動詞において、疑似目的語である名詞の目的クオリ

アは V1 と一致する。一方、“跑烂了裤子”（走って、ズボンがボロボロになった）のような間接的な因果関係を持つものでは、挿入されるイベントが働き、疑似目的語が取れる範囲はより広く、名詞の目的語クオリアは V1 と一致しなくても、複合動詞の疑似目的語として機能しうる。

3.3.3 “滚破”（転がる一割れる）タイプ

今まで述べてきたように、V1 が他動詞または非能格動詞で、直接な因果関係を持つ結果複合動詞において、複合動詞の疑似目的語として出現できるかどうかは、その目的語名詞の目的クオリアに V1 が含まれるかどうかによって決まる。

しかし、V1 が非対格動詞の場合はどうであろうか。(86) の疑似目的語“皮”（皮）の目的クオリアつまり機能はもちろん「転がる」ことではないから、V1 “滚”（転がる）と関連しない。にもかかわらず、“皮”（皮）は“滚破”（転がる一割れる）の疑似目的語になっている。その理由は“皮”（皮）が“西瓜”（スイカ）と部分—全体関係を持つからである。“皮”は統語的には目的語であるが、意味の上では主語の一部であり、この文は主語の“西瓜”（スイカ）が転がって、主語“西瓜”（の一部）が割れたことを表している。つまり、他動詞文にみえても、非対格動詞の自動詞文の一種であると考えられる。

(86) a. 西瓜 滚破 了 皮。 (石村 2011 : 89)

xī guā gǔn pò le pí

スイカ 転がる一割れる LE 皮

「スイカが転がって皮が割れた。」 (=9b,73(c))

b. $\left[\begin{array}{l} \text{皮} \\ \text{QUALIA} = [\text{CONST} = \text{part_of}(x : \text{rind}, y : \text{watermelon})] \end{array} \right]$

部分と全体が一体であることを示すのが次の自動詞文の例である。(87) は二義的で、スイカ全体から分離した皮（たとえば、食べ終えて捨てられたスイカの皮）が、転がって割れた、という解釈も可能であるが、分離不可能所有の部分—全体関係をもつ解釈も可能である。その場合、スイカの一部が転がったのではなく、スイカ全体が転がってその皮が割れたという意味になる。つまり、部分が全体と一体となった読みになるのである。

(87) 西瓜皮 滚破 了。

xī guā pí gǔn pò le

スイカの皮 転がる一割れる LE

「スイカが転がって皮が割れた。」

(86) と (87) は項の実現の仕方や、文の主題が「スイカ」と「スイカの皮」で異なり、完全な同義ではないが、複合動詞の構造的意味としては同一と考えられる。すなわち、外項と内項を持つ他動詞文に見えて、二つの項が同一視できるため、意味上は非対格自動詞文とみなすことができるのである。

(88)
$$\left[\begin{array}{l} \text{滚} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{watermelon}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{破} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{rind} [\text{const} = \text{part_of}(y, x : \text{watermelon})]] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{滚破} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{watermelon} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{rind} [\text{const} = \text{part_of}(y, x)] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この現象はもちろん“滚破”（転がる一割れる）だけに限られない。(89) では、V1 は「彼女」と「子供」という 2 つの項を、V2 は「子供の顔」という 1 つの項を持つ。さらに、V2 の内項は V1 の内項との間に部分—全体関係があり、V2 の内項から V1 の内項の部分と解釈される。すなわち、彼女が子供の体を冷やすということは、子供の体の一部である顔も冷えることが含意される。つまり「子供」が現れていないように見えても、「子供の顔」が「子供」全体の存在を表しており、「彼女」「子供」「子供の顔」の三項があるのではなく、「子供」と「子供の顔」が同一項と解釈されるのである¹⁴。

¹⁴ 分離可能所有の解釈も可能である。その場合、子供の顔だけ冷やして、その顔が赤くなったという意味になる。ここで重要なのは、子供の体全体を冷やして、顔が赤くなるという、部分—全体解釈が可能だという点である。

- (89) a. 她 冻红 了 孩子 的 脸。
 tā dòng hóng le hái zǐ de liǎn
 彼女 凍えさせるー赤い LE 子供 の 顔
 「彼女は子供を凍えさせ、子供の顔が赤くなった。」

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{冻} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{she} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{child} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{红} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = z : \text{child's face } [\text{const} = \text{part_of}(z, y : \text{child})]] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{冻红} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{she} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{child's face } [\text{const} = \text{part_of}(z, y)] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

“冻红”（凍るー赤い）の外項が出現しない場合も、同じ現象が見られる。(90a) には分離可能所有の解釈もあるが、部分ー全体解釈の場合、(90b) とは「子供」全体を背景化するか前景化するかの違いはあるが、ほぼ同義である。

- (90) a. 孩子 的 脸 冻红 了。
 hái zǐ de liǎn dòng hóng le
 子供 の 顔 凍らせるー赤い LE
 「子供が冷えて、顔が赤くなった。」
- b. 孩子 冻红 了 脸。
 hái zǐ dòng hóng le liǎn
 子供 凍らせるー赤い LE 顔
 「子供が冷えて、顔が赤くなった。」

“冻红”（凍え（させ）るー赤い）以外に、(91) の“摔伤”（落とす・落ちるー怪我する）や (92) の“吓破”（驚かす・驚くー破れる）などの例も同様である。(91a) と (92a) の他動詞文は、「子犬を落とした結果、子犬は足を怪我した」、「彼を驚かした結果、彼の胆を潰した」という意味である。自動詞文の (90b) は (90c) と、(91b) は (91c) とほぼ同じ意味を

持つ。「子犬」と「子犬の足」、「彼」と「彼の胆」が実質的に同じ項として解釈されるからである。なお、これらの例文では、語用論的に分離可能解釈は難しい。

- (91) a. 老李 摔伤 了 小狗 的 腿。
lǎo lǐ shuāi shāng le xiǎogǒu de tuǐ
李さん 落とす - 怪我する LE 小犬 の 足
「李さんが子犬を落として、子犬の足を怪我させてしまった。」
- b. 小狗 的 腿 摔伤 了。
xiǎogǒu de tuǐ shuāi shāng le
子犬 の 足 落ちる - 怪我する LE
「子犬が転んで、足を怪我した。」
- c. 小狗 摔伤 了 腿。
xiǎogǒu shuāi shāng le tuǐ
子犬 転ぶ - 怪我する LE 足
「子犬が転んで、足を怪我した。」
- (92) a. 我 吓破 了 他 的 胆。
wǒ xià pò le tā de dǎn
私 驚く - 破れる LE 彼 の 胆
「私は彼を驚かして、彼の胆を潰した。」
- b. 他 的 胆 吓破 了。
tā de dǎn xià pò le
彼 の 胆 驚く - 破れる LE
「彼が驚いて、胆が潰れた。」
- c. 他 吓破 了 胆。
tā xià pò le dǎn
彼 驚く - 破れる LE 胆
「彼が驚いて、胆が潰れた。」

最後に、部分－全体解釈が不可能な場合を確認しておこう。“滚破”（転がる－割れる）の目的語を「皮」ではなく“塑料袋”（ビニール袋）にすると、そのままでは容認度が非常に低

い。成立させるためには、スイカを持っている人物が不注意で転び、袋の中に入っているスイカがデコボコの道を転がったなどの文脈を追加する必要がある。文脈の影響を受け、複合動詞の容認度が高くなるという点については、次節で詳しく見ていくことにする。

(93) a *西瓜 滚破 了 塑料袋。

xī guā gǔn pò le sù liào dài

スイカ 転がる一割れる LE ビニール袋

「スイカが転がって、袋が破れた。」 (=74(c))

b. 他 不小心 滑倒 了, 装 在 塑料袋 里 的 西瓜

tā bú xiǎo xīn huá dǎo le zhuāng zài sù liào dài lǐ de xīguā

彼 不注意 滑り倒れる LE 入れる に ビニール袋 中 の スイカ

在 凹凸不平 的 路 上 滚 了 起来, 滚破

zài āo tū bù píng de lù shàng gǔn le qī lái gǔn pò

で デコボコ の 道 上 転がる LE QILIAI 転がる一破れる

了 塑料袋。

le sù liào dài

LE ビニール袋

「彼は不注意で滑って転び、ビニール袋の中に入った西瓜がデコボコの道を転がって、ビニール袋が破れた。」

本節では、中国語の結果複合動詞の疑似目的語について分析を行った。その結果は次の二点に要約される。第一に、V1 が他動詞または非能格動詞で、直接的な因果関係を表す場合、疑似目的語の目的クオリアに V1 が含まれている必要がある。第二に、V1 が非対格動詞の場合は、疑似目的語の構成クオリアは主語の分離不可能な一部でなければならない。

3.4 文脈と目的語指向型の結果複合動詞

中国語の結果複合動詞は、日本語の結果複合動詞や英語の結果構文より、広い範囲の因果関係を表すことができる。すなわち、V1 と V2 の間に、形式クオリアが一致せず、共通する項がなくても、あるいは因果関係が間接的であっても、中国語では結果複合動詞という形で表現できる。前に述べたように、間接的因果関係を持つ中国語の結果複合動詞には、百科事

典的知識に依存するタイプとコンテクストに依存するタイプという 2 種類がある。(94a) から (94d) までの例は主語、複合動詞と目的語さえあれば、特に文脈が無くても我々がもっている世界に関する知識だけで理解できるが、(94e) から (94g) までの例は、特定の文脈でのみ、成立する。

- (94) a. 踩湿了双脚 ((水) を踏んで、両足を濡らした)
 b. 洗破了衣服 (服を洗って、服が破れた)
 c. 翻破了书 (本をめくって、本が破れた)
 d. 摸破了纸 (紙を触って、破れた)
 e. 跑哑了嗓子 (走って、喉がかすれた)
 f. 跑碎了肾结石 (走って、腎臓結石が砕けた)
 g. 吻瘫了机场 (キスをして、空港が麻痺した)

(95a) であれば、我々の常識のみで、何かの液体を踏んで、両足を濡らしたのであろうと推測でき、ほかの特殊な背景情報などは一切必要ない。しかしながら、(94e) から (94g) までの例については、常識的には、“跑” (走る) と “哑” (かすれる)、あるいは “碎” (砕く)、また、“吻” (キスする) と “瘫” (麻痺する) の間には関連性はない。走っても、喉がかすれたり、腎結石が砕けたりするわけではなく、恋人同士がよく空港でキスをしたとしても、それで空港が閉鎖されることも考えにくい。以下の例は原文の引用であるが、これだけでもなお、理解は難しい。特にいくつかの述語には引用符がついており、特殊な表現であることが示唆されている。

- (95) a. 胡茜 的 声音 有些 沙哑, 与 其他 志愿者 喊破
 hú qiàn de shēng yīn yǒu xiē shā yǎ yǔ qí tā zhì yuàn zhě hǎn pò
 胡茜 の 声 すこし かすれる と 他の ボランティア 叫ぶー破れる
 嗓子 不同, 她 的 嗓子 是 “跑哑 的”。
 sāng zǐ bú tóng tā de sāng zǐ shì pǎo yǎ de
 喉 違う 彼女 の 喉 SHI 走るー掠れる DE
 「胡茜の声が少しかすれている。他のボランティアが叫んで、声がかすれたの
 と異なり、彼女は走って、声がかすれた。」(焦作日报 2009. 10.12)

- b. 长跑 狠 人 跑碎 肾结石 (= (4))
 chángpǎo hěn rén pǎo suì shèn jié shí
 長距離走 厳しい 人 走る一砕ける 腎結石
 「ストイックな長距離ランナーが走って、腎臓結石が砕けた。」
- c. 中国 留学生 “吻癱” 美 机场
 zhōng guó liú xué shēng wěn tān měi jī chǎng
 中国 留学生 キスする一麻痺する アメリカ 空港
 「留学生がキスをして、アメリカの空港を麻痺させた。」

(春城晚报 2010.1.11)

以上の例文はすべて新聞記事からの引用であるが、いずれも記事全体を見なければこれらの複合動詞の意味を理解することはできない。(95a)の胡茜の喉がかすれたのは、オリンピックのボランティアとして、あちこち走り回り、各試合の結果を皆に知らせたためである。(95b)の記事は、ランナーは腎結石にかかった後、科学的なランニングときちんとした栄養管理により、手術をせずに結石が砕けたことを伝えている。最後の(95c)では、アメリカで生物学を勉強している留学生がニューヨーク空港で彼女を見送ったときの事件である。彼は恋人が保安検査を通過した後、彼女とキスをするために、通路の隔離テープをこっそりと乗り越えてしまった。警察は安全のため、空港のターミナルビルを6時間に渡り閉鎖し、数千人の乗客が改めて保安検査を受けることになり、その影響で、100便の飛行機に遅れが生じることになった。これら三つの結果複合動詞は、臨時的に作られたものであり、意味の理解や容認度は文脈に完全に依存する。

英語の結果構文についても、Boas (2003, 2005, 2011) は文脈の重要性を強調している。Boas (2011) の調査によれば、多くのネ母語話者は(96a)を結果構文として認めない。なぜなら、hammer という動作が直接的に safe という結果状態を引き起こさないからである。しかし、(97) のような適切な文脈を与えると、容認度が上がる。

- (96) a. ?? Ed hammered the metal safe.
 b. Ed hammered the metal flat.

(Boas 2011 : 1271)

- (97) The door of Ed's old Dodge had a piece of metal sticking out. When getting out of

the car, Ed had cut himself on the metal and had to go to the hospital to get stitches.
The next day, Ed hammered the metal safe.

(Boas 2011 : 1272)

Boas は以下のような例も挙げている。

- (98) a. Lars blew/sneezed the napkin off the table. (Boas 2003:271)
b. ?? Lars panted/wheezed the napkin off the table (Boas 2005 : 455)

(98b) の容認度は (98a) より低い。その理由は、blow と sneeze とは異なり、pant や wheeze が排出する空気の量が少なく、ナプキンに移動させる力を持たないからである。しかし、(98b) の文に「救急の場合など、喘息で予想以上に激しく息をすることがある」という背景情報を加えると、容認度が上がる。

中国語の結果複合動詞や英語の結果構文では、文脈により容認度が上がるとしたら、日本語の結果複合動詞でも同じ現象が起こるだろうか。この点を確認するため、以下の例文で容認度の調査を行った。

- (99) 体重 100 キロを超えた人がそのベビーチェアを座り壊した。
(100) 彼は急いで資料を調べるため、持っていた本をめくり破ってしまった。
(101) その子は濡れている手でその和紙を触り破いてしまった。

文脈など何もない場合では、「*座り壊す」と「*めくり破る」「*触り破く」について、調査した母語話者全員がまったく容認できないと答えた。しかし、同じ結果複合動詞でも状況を加え (99) (100) (101) としたところ、完全に文法的とはいいがたいが、容認度は確かに上昇した。しかしながら、「*走り砕く」は、中国語の“跑碎”（走る一砕ける）と同じ文脈を加えても、容認されない。したがって、「百科事典的な知識」に基づいて解釈できる結果複合動詞なら、日本語でも中国語でも、文脈次第では理解しやすくなるが、文脈のみで成り立つ結果複合動詞の場合はいくら文脈を与えても、日本語では、結果複合動詞として成立しにくいと言えよう。

3.5 まとめ

先行研究に基づき、本論文は日中結果複合動詞を主に目的語指向型と主語指向型に分けて分析をしているが、本章は目的語指向の日中結果複合動詞を生成語彙論の枠組みで考察し、以下の3つの結論を得た。

まず、V1 と V2 の間に、内項が共有され、またクオリア構造も一致するという二つの特徴を持つ結果構文と結果複合動詞は、日中の結果複合動詞と英語の結果構文のほとんどが対応し、プロトタイプと思われる。もし、クオリア構造が一致しなければ、項を共有しても、日本語では結果複合動詞とはなりにくい。

中国語の結果複合動詞の疑似目的語については、V1 が他動詞または非能格動詞で、直接的な因果関係を表す場合、疑似目的語の目的クオリアに V1 が含まれている必要がある。V1 が非対格動詞である場合は、疑似目的語は主語の部分でなければならない。ただし、間接的な因果関係を持つ複合動詞では、挿入されるイベントにより、疑似目的語として認可される。

さらに、英語の結果構文と日本語の結果複合動詞は直接的な因果関係を持たなければならないが、中国語では百科事典知識や文脈を通して、間接的な因果関係を持つ結果複合動詞を作ることができる。日本語でも、百科事典知識に依存する中国語の結果複合動詞と対応するものに文脈を加えれば、容認度が上昇する可能性がある。以上の内容は、表 8 のようにまとめられる。

表 8 英語の結果構文と日中目的語指向型の対応状況

	クオリア	項構造	中国語	日本語	英語
直接的因果関係	一致	一致	踩扁（踏む－平になる）	踏み潰す	step it flat
		不一致	挖破（掘る－破る）	*掘り破る	run the pavement thin
	不一致	一致	摸破（触る－破れる）、 翻破（めくる－破れる）、 扇破（扇ぐ－破れる）	*触り破る *扇ぎ破る *めくり破る	*touch it broken
間接的因果関係	不一致	一致	洗破（洗う－破れる） (文脈)	*洗い破る	*wash the clothes broken
		不一致	踩湿（踏む－濡れる） (百科事典) 吻癱（キスする－麻痺する）、 跑碎（走る－砕く） (文脈)	*踏み濡らす *走り砕く	*step it wet

“踩扁”、「踏み潰す」、step it flat はプロトタイプの複合動詞あるいは結果構文として、直接的な因果関係、クオリアの一致、項の一致という三つの条件を満たす。項の一致あるいは、クオリア構造の一致、この二つの条件のうちの1つでも満足しないと、日本語の結果複合動詞は成立しにくくなる。ただし、V1 と V2 の間で、項が一致すれば、クオリア構造が不一致になっても、文脈を加えることによって、容認度が上がることがある。

最後に、“洗破”（洗う－破れる）と“吻癱”（キスする－麻痺する）のような間接的な因果関係を持つ中国語の結果複合動詞において、“洗破”などの百科事典的な知識に依存するものはどんな文においても成立できるが、“吻癱”（キスする－麻痺する）のようなものは、特殊な文脈に限り成立する。

以上、目的語指向型の日中結果複合動詞の対応するタイプとしないタイプの特徴を分析してきた。第4章では、日中結果複合動詞のもう一つのタイプである主語指向型の対応状況を考察する。

第4章 主語指向型の日中結果複合動詞

第3章は主に目的語指向型の日中結果複合動詞について分析したが、本章では日中結果複合動詞のもう一つのタイプである主語指向型に焦点をあてて考察する。目的語指向型の日中結果複合動詞と同じく、主語指向型にも日中で対応するタイプと、対応しないタイプがある。なお、英語の結果述語は主語の状態変化を表すことができず、主語指向型と対応する英語の結果構文は存在しない。

- (1) a. 约翰 吃腻 了 馒头。 (Shibagaki 2013 : 14)

yuē hàn chī nì le mán tóu

ジョー 食べる-飽きる LE マントウ

- b. ジョーはマントウを食べ飽きた。

- c. Joe is tired of eating steamed bread.

- (2) a. 巨大 的 岩石 崩落 到 了 道路 上。

jù dà de yán shí bēng luò dào le dào lù shàng

巨大 の 岩 崩れる-落ちる に LE 道路 上

- b. 大きな岩が道路に崩れ落ちた。

- c. A large boulder fell onto the road.

(複合動詞レキシコン)

(1) と (2) は日中で対応する例であるが、(1) の V1 が他動詞であるのに対し、(2) の V1 は非対格自動詞である。(1) の“吃腻”(食べる-飽きる)と「食べ飽きる」はジョーがマントウを食べ、ジョーがマントウに飽きた状態へ変化したことを表している。(2) の“崩落”(崩れる-落ちる)と「崩れ落ちる」は、岩が崩れて落下する変化を表す。

- (3) a. 他 跑瘦 了 10 斤。 (作例)

tā pǎoshòu le shí jīn。

彼 走る-痩せる LE 10 量詞

- b. 彼は走って、5キロ痩せた。

- c. He lost 10 kilograms by running.
- (4) a. 单位 迎 新 聚餐 酒 后 去
dān wèi yíng xīn jù cān jiǔ hòu qù
会社 歓迎 新人 会食する 酒 後 行く
K 歌 四句 壮 汉 醉死 了
Kgē sì xún zhuàng hàn zuì sǐ le
カラオケ 40代 壮健 男 酔っ払う-死ぬ LE
- (扬州时报 2010.1.04)
- b. 会社の歓迎会でお酒を飲んだ後に、カラオケに行った 40 代の健康な男が酔っ払って、死んでしまった。
- c. After drinking some wine at the welcome dinner party organised by his company, a man in his forties went to karaoke and died later.

一方、(3) と (4) の中国語結果複合動詞は日本語には直訳できない。“跑瘦”（走る－痩せる）、“醉死”（酔っ払う－死ぬ）は、日本語では「走って、5 キロ痩せた」、「酔っ払って、死んだ」のようなテ形で表現せざるを得ない。また、(3) の“跑瘦”（走る－痩せる）では、走ることにより、5 キロ痩せた結果状態を引き起こしたので、V1 と V2 の間に直接的な因果関係を持つのに対し、(4) の“醉死”（酔っ払う－死ぬ）では、“醉”（酔っ払う）は“死”（死ぬ）の直接な原因ではなく、文脈がないと、複合動詞の意味は理解しがたい。

4.1 節では、上記の主語指向型の日中結果複合動詞の項構造を重点的に考察する。それを踏まえて、4.2 節では生成語彙論の枠組で、多くの実例を分析する。

4.1 主語指向型結果複合動詞の項構造

目的語指向型と同様に、主語指向型の結果複合動詞にもいくつかの下位タイプがある。本節は先行研究を参考にしつつ、主語指向型の日中結果複合動詞の各下位類の特徴を見た後に、項構造と意味関係からそれらの下位タイプを再分類する。

4.1.1 中国語の主語指向型結果複合動詞

申（2007）によれば、主語指向型の結果複合動詞には四つの下位タイプがあるが、本研究

は (5) と (6) のような二つの下位タイプのみを考察する¹⁵。以下の例では、1 及び 1' はそれぞれ V1 と V2 の主語を、2 及び 2' はそれぞれ V1 と V2 の目的語を表すことによって示している。まず、(5) の“跳烦”（踊る-飽きる）と“跌倒”（転ぶ-倒れる）において、V1 も V2 も一項動詞であり、V1 と V2 の間に項の合成が行われた後に、その項がそのまま複合動詞の主語となる。なお、(5b) の“跳烦”（踊る-飽きる）は非能格動詞と非対格動詞から作られる複合語であるのに対し、(5c) “跌倒”（転ぶ - 倒れる）は非対格自動詞の組み合わせである。

(5) a. 跳烦（踊る-飽きる）、跌倒（転ぶ-倒れる）：

$\langle 1 \rangle + \langle 1' \rangle \longrightarrow \langle 1-1' \rangle$

b. 小丑 跳烦 了。

xiǎo chǒu tiào fán le

ピエロ 躍る-飽きる LE

「ピエロは踊り飽きた。」

¹⁵ (i) のような V1 も V2 も他動詞になるタイプである。このタイプは日本語では典型的なものであるが、中国語では、例外的である。申（2007）によれば、V2 になれるのは、“输”（～に負ける）、“赢”（～に勝つ）、“会”（～できる）、“懂”（～が分かる）という 4 つの動詞のみであるため、このタイプの複合動詞はここでは扱わない。

(i) a. 下输（将棋をさす-負ける）：

$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle$ (149 例 7.9%)

b. 宝玉 下输 了 棋。

bǎo yù xià shū le qí

宝玉 (将棋を)さす-負ける LE 将棋

「宝玉は将棋をさして、負けた。」

(ii) のような非能格動詞と他動詞からなる複合動詞については、申（2007）が《汉语动词—结果补语搭配词典》から集めた 1866 例には実例がなく、Li（1990）が挙げる例しか見当たらない。(iib) は、V1 “玩”（遊ぶ）と V2 “忘”（忘れる）の組み合わせで、V1 と V2 の主語は同じであり、V2 の目的語がそのまま複合動詞の目的語になっている。このタイプの複合動詞は例文の数が少ないので、(i) と同様に研究対象外とする。

(ii) a. 玩忘（遊ぶ-忘れる）： $\langle 1 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2' \rangle$

b. 他 玩忘 了 自己 的 职责。

tā wán wàng le zì jǐ de zhí zé

彼 遊ぶ-忘れる LE 自分 の 責任

「彼は遊び過ぎたので、自分の責任を忘れた。」

c. 他 跌倒 了。

tā diē dǎo le

彼 転ぶ - 倒れる LE

「彼は転んで、倒れた。」

(5) と異なり、(6) は「他動詞＋非対格動詞」の組み合わせである。(6b) の“吃”（食べる）は外項「鳳姐」と内項「美味しいもの」という二つの項を持ち、“膩”（飽きる）には内項「鳳姐」しかない。ここで、共通する「鳳姐」は複合動詞の主語に、V1 の目的語「美味しいもの」は複合動詞の目的語になる。

(6) a. 吃膩（食べる－飽きる）：

$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1' \rangle \longrightarrow \langle 1-1', 2 \rangle$

b. 凤姐 吃膩 了 好 东西。

fèng jiě chī nì le hǎo dōng xī

鳳姐 食べる－飽きる LE いい もの

「鳳姐はおいしいものを食べ飽きた。」

(7) の例も (6) と同じ項構造を持ち、V1 の目的語がそのまま複合動詞の目的語となっている。

(7) a. 我 穿慣 了 这 双 鞋。

wǒ chuān guàn le zhè shuāng xié

私 穿く－慣れる LE この 量詞 靴

「私はこの靴に履き慣れた。」

b. 李四 听烦 了 这 首 歌。

lǐ sì tīng fán le zhè shǒu gē

李四 聞く－くたびれる LE この 量詞 歌

「李四はこの歌を聞き飽きた。」

ところが、(8) は (6b) や (7) と同じ組み合わせを持つにもかかわらず、目的語を取る
 とができない。例えば、“吃”（食べる）と“胖”（太る）を複合しても、「食べる」の目的語
 である「肉」は“吃胖”（食べる－太る）の目的語として現れることはできない。

(8) a. 我 吃胖 了 (*肉)。

wǒ chī pàng le (*ròu)

私 食べる－太っている LE 肉

「私は肉を食べて、太った。」

b. 我 坐晕 了 (*车)。

wǒ zuò yūn le (*chē)

私 座る－くらくらする LE 車

「私は車に乗って、くらくらした。」

c. 他 看傻 了 (*电视)。

tā kànshǎ le (*diàn shì)

彼 見る－呆然とする LE テレビ

「彼はテレビを見て、呆然とした。」

では目的語がとれる (6b) (7) と、とれない (8) の違いはどこにあるかといえば、それは
 項構造である。“吃膩”（食べる－飽きる）、“穿慣”（着る－慣れる）と“听烦”（聞く－くた
 びれる）のような目的語を取れる動詞では、V1 の内項と V2 のイベントの参与者を共有して
 おり、V1 の内項がそのまま結果複合動詞の目的語になる。逆に、“吃胖”（食べる－太る）、
 “坐晕”（座る－くらくらする）、“看哭”（見る－泣く）などの目的語を取れない複合動詞で
 は、V1 の内項と共通する V2 の項がなく、目的語も現れることができない。

申（2007）を含めて、今までの先行研究では、“膩”（飽きる）、“慣”（慣れる）、“烦”（く
 たびれる）はそれぞれ「鳳姐」「私」「李四」などのような 1 つの内項を持つと主張している
 が、実は、4.2.2 節でも述べるように、これらの動詞のイベント構造では、常に一つのイベン
 トが必要とされる。例えば、(9) のように、経験者の意味役割である内項のみが現れる文は
 自然な文ではない。「何に飽きたか」「何に慣れたのか」などの情報が足りないのである。

- (9) a. ?凤姐 已经 腻 了。
 fèng jiě yǐ jīng nì le
 鳳姐 すでに 飽きる LE
 「鳳姐さんはすでに飽きた。」
- b. ?我 已经 惯 了。
 wǒ yǐ jīng guàn le
 私 すでに 慣れる LE
 「私はすでに慣れた。」
- c. ?李四 已经 烦 了。
 lǐ sì yǐ jīng fán le
 李四 すでに 飽きる LE
 「李四はすでに飽きた。」
- (10) a. 对于 这些 好 东西, 凤姐 已经 腻 了。
 duì yú zhè xiē hǎo dōng xī fèng jiě yǐ jīng nì le
 について これら 美味しい もの 鳳姐 すでに 飽きる LE
- b. 对于 那 双 鞋, 我 已经 惯 了。
 duì yú nà shuāng xié wǒ yǐ jīng guàn le
 について その 足 靴 私 すでに 慣れる LE
 「その靴について、私もすでに慣れた。」
- c. 对于 那 首 歌, 李四 已经 烦 了。
 duì yú nà shǒu gē lǐ sì yǐ jīng fán le
 について その 曲 歌 李四 すでに くたびれる LE
 「その歌について、李四はすでに飽きた。」

- (11)
$$\left[\begin{array}{l} \text{膩 (飽きる) 慣 (慣れる)、煩 (くたびれる)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{animate_individual} \\ \text{ARG}_2 = z : x, \langle e_1, t \rangle : \text{event function} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

それに対して、(10) で示したように、「美味しいもの」「歌」「靴」など対象物を補充すると、文全体は自然になる。ここでは、上記の名詞のクオリアに関わるイベント¹⁶が読み取られている。つまり物質名詞を事象と結びつけて解釈するのである。具体例で言うと、(10a)の文は文字通りには「美味しいものに飽きた」であるが、実は「美味しいものを食べるのに飽きた」という意味で理解されている。同様に、(10b) (10c) も「その靴を履くことになった」「その歌を聞くのに飽きた」などのように解釈される。したがって、「美味しいもの」「歌」「靴」などは“膩”（飽きる）、“慣”（慣れる）、“烦”（くたびれる）が取るイベントの参与者だと考えられる。さらに、これらの動詞は V1 と複合し、そのイベントの参与者が V1 の内項と同定されることにより、そのまま、結果複合動詞の内項となるのである。

それに対して、(8) にある結果複合動詞の V2 である“胖”（太る）、“晕”（めまいがする）、“傻”（呆然とする）は、“膩”（飽きる）、“慣”（慣れる）、“烦”（くたびれる）と異なり、項を 1 つしか持たず、V1 の内項と共通点がないので、V1 の内項がそのまま複合動詞の内項になることはない。(12) にある動詞は「私」「彼」などの直接内項さえあれば、自然である。

- (12) a. 我 胖 了。
 wǒ pàng le
 私 太る LE
 「私は太った。」
- b. 我 晕 了。
 wǒ yūn le
 私 めまいがする LE
 「私はめまいがした。」
- c. 他 傻 了。
 tā shǎ le
 彼 呆然とする LE
 「彼は呆然とした。」

¹⁶ 文脈により、読み取られるクオリアは主体クオリアでも目的クオリアでもあり得る。例えば、(10c) では、李四が普通の人であれば、歌の目的クオリアである「歌う」、「聞く」が読みとられ、(10c) は李四が歌を聞き飽きた、あるいは歌い飽きたのように解釈できる。しかし、李四が作曲家であれば、歌の主体クオリアである「書く」が読み込まれ、「李四は歌を書き飽きた。」のように理解できる。

しかしそれだけでは説明できない例もある。(13a) (14a) (15a) では、上述の (8) の主語指向型の“吃胖”（食べる－太る）、“坐晕”（座る－くらくらする）、“看傻”（見る－呆然とする）と同様に、V1 は外項と内項を、V2 は内項を一つ持つが、複合動詞の後に任意に目的語を置くことができる。ただし、どのような名詞句でもよいわけではなく、(13a) の“飯”（ご飯）、(14a) の“酒”（お酒）、(15a) の“马”（馬）や“车”（自転車・オートバイ）のような、単音節で一般的な意味の語が最もよく、「このご飯」「うどん」「肉まん」や「そのお酒」「ビール」「葡萄酒」、「その自転車」では容認度が下がる。なお、容認度の判断には個人差が大きいが、具体的になればなるほど、容認する人は減っていく。

- (13) a. 他 吃饱 了 (飯) 了。
 tā chī bǎo le (fàn) le
 彼 食べる－満腹だ LE (ご飯) LE
 「彼はご飯を食べて、満腹だ。」
- b. *他 吃饱 了 {面条／肉包子／这 碗 饭} 了。
 tā chī bǎo le {miàn tiáo／ròu bāo zi／zhè wǎn fàn} le
 彼 食べる－満腹だ LE {うどん／肉まん／この 量詞 ご飯} LE
 「彼はうどん／肉まん／このご飯を食べて、満腹になった。」
- (14) a. 他 喝醉 了 (酒) 了。
 tā hē zuì le (jiǔ) le
 彼 飲む－酔っ払う LE (お酒) LE
 「彼はお酒を飲んで、酔っ払った。」
- b. *他 喝醉 了 {啤酒／葡萄酒／ 那 杯 酒}。
 tā hē zuì le {pí jiǔ／pú táo jiǔ／ nà bēi jiǔ}
 彼 飲む－酔っ払う LE {ビール／葡萄酒／ その 量詞 お酒}
 「彼はビール／葡萄酒／そのお酒を飲んで、酔っ払った。」
- (15) a. 宝玉 骑累 了 {马／车}。
 bǎo yù qí lèi le {mǎ／chē}
 宝玉 乗る－疲れる le {馬／車}
 「宝玉は {馬／車} に乗って、疲れた。」

- b. *他 骑累 了 那辆自行车。
 tā qí lèi le nà liàng zì háng chē
 彼 乗る-疲れる LE その自転車
 「彼はその自転車に乗って、疲れた。」

(13a) (14a) の V2 “饱” (満腹だ) と “醉” (酔っ払う) は一項述語で、“飯” (ご飯) や “酒” (酒) は項ではない。しかし、“饱” (満腹だ) と “醉” (酔っ払う) の語彙的な意味には「ご飯」「酒」が含まれている。“饱” (満腹だ) とはお腹に食べ物がいっぱいになっている状態であり、“醉” (酔っ払う) とは体内にアルコールが充満している状態だからである。これは「踏む」の意味の中に「足」が含まれているのと同様である。「足」が「踏む」の影の項であるならば、“飯” (ご飯) と “酒” (酒) は V2 “饱” (満腹だ) / “醉” (酔っ払う) の影の項であると考えられる。

つまり、(13) (14) の複合動詞が目的語を取れるのは、V1 の内項と V2 の影の項が共通しているからである。第 1 章で説明したように、影の項とは語の意味に含まれているもので、特に新情報を伴わなければ、余剰的で、出現しない項をいう。影の項であるから、“飯” (ご飯)、“酒” (酒) のような一般的な上位語に限られるとするならば、具体性を帯びた「このご飯」「うどん」「肉まん」や「そのお酒」「ビール」「葡萄酒」では容認度が下がるのも頷ける。

では、(15) の “骑累” (乗る-疲れる) の “累” (疲れる) はどうであろうか。まず、“累” (疲れる) の意味の中に “马” (馬) や “车” (車、二輪車) が含まれているとは考えにくい。しかし、4.2.2 節で説明するが、生理的動詞である “累” (疲れる) のクオリア構造には、常に一つの原因イベントが要求される。「馬」「二輪車」は、その原因イベントの参与者だと考えられ、V1 の内項と同定されることにより、結果複合動詞の目的語の位置に現れる。ここでは、漠然とした不特定の原因であると同時に、“骑” (またがって乗る) の目的語でもある。ところが、“累” (疲れる) は “膩” (飽きる) や “慣” (慣れる) と異なり、結果複合動詞の項として現れることができるのは、“马” (馬) のような V1 のプロトタイプだけである。“骑累” (乗る-疲れる) 以外に、“读累” (本を読み疲れた)、“听累” (歌を聴き疲れた)、“切累” (野菜を切り疲れた) などの表現も存在するが、その目的語は “书” (本)、“歌” (歌)、“菜” (野菜) などのようなプロトタイプに限られ、(16) に示すように、具体的な “英语书” (英語の本)、“周杰伦的那首歌” (周杰倫のその曲)、“土豆” (じゃがいも) などに変えると、容認度が下がる。つまり、結果複合動詞の V2 としての “累” (疲れる) は V1 と複合した後、

V1 のプロトタイプの名詞のみが「V1+ “累” (疲れる)」の目的語になれるのである。それだけではなく、V1 のプロトタイプの名詞が現れないと、容認度は下がってしまう。これは V1 の目的語が語用論的に要求されるからである。

- (16) a. 我 看累 了 {?(书) / *英语书}。
 wǒ kàn lèi le {?(shū) / *yīng yǔ shū}
 私 見る-疲れる LE {本 / *英語の本}
 「私は本 / 英語の本を読んで、疲れた。」
- b. 她 听累 了 {?(歌) / *周杰伦的那首歌}。
 tā tīng lèi le {?(gē) / *zhōu jié lún de nà shǒu gē}
 彼 聞く-疲れる LE {歌 / 周杰倫のその曲}
 「彼は歌 / 周杰倫のその曲を聞いて、疲れた。」
- c. 张三 切累 了 {?(菜) / *土豆}。
 zhāng sān qiē lèi le {?(cài) / *tǔ dòu}
 張三 切る-疲れる LE {野菜 / ジャガイモ}
 「張三は野菜 / ジャガイモを切って、疲れた。」

以上をまとめると、主語指向型の結果複合動詞には、目的語をとれるタイプととれないタイプがあり、目的語をとれるものも、目的語に制限のないタイプと、単音節の V2 の影の項に限られるタイプ、そして単音節の V1 のプロトタイプの項に限られるタイプの三つがある。

1) 目的語をとれないタイプ : V1 と V2 の共有項のみが実現

- (17) a. 我 吃胖 了 (*肉)。
 wǒ chī pàng le (*ròu)
 私 食べる-太っている le 肉
 「私は肉を食べて、太った。」
- b. 我 坐晕 了 (*车)。
 wǒ zuò yūn le (*chē)
 私 座る-くらくらする LE 車
 「私は車に乗って、くらくらした。」

$$(18) \left[\begin{array}{l} \text{吃 (食べる)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“我” (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“肉” (肉)} \end{array} \right] \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} \text{坐 (座る)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“我” (私)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“车” (車)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{胖 (太っている) / 晕 (くらくらする)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{“我” (私)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{吃胖 (食べる－太っている) / 坐晕 (座る－くらくらする)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{“我” (私)}] \end{array} \right]$$

(17a) “吃胖”（食べる－太る）と (17b) “坐晕”（座る－くらくらする）の項構造は (18) に示した。(18) では、V1 の外項と V2 の内項が同定され、そのまま複合動詞の主語になる。他方、V1 の内項である“肉”（肉）、“车”（車）は V2 と関連性がないため、結果複合動詞の項構造に現れない。

2) 目的語をとれるタイプ

2－1) 目的語に制限なし：V2＝“膩”（飽きる）、“慣”（慣れる）、“烦”（くたびれる）

V1 の外項および V1 の内項＝V2 の内項イベントの参加者が実現

(V1 が V2 の内項イベントと解釈される。詳細は 4.2.2 節を参照)

- (19) a. 凤姐 吃膩 了 好 东西。
fèng jiě chī nì le hǎo dōng xī
鳳姐 食べる－飽きる LE いい もの
「鳳姐はおいしいものを食べ飽きた。」
- b. 我 穿慣 了 这 双 鞋。
wǒ chuān guàn le zhè shuāng xié
私 穿く－慣れる LE この 量詞 靴
「私はこの靴に履き慣れた。」
- c. 李四 听烦 了 这 首 歌。
lǐ sì tīng fán le zhè shǒu gē
李四 聞く－いらいらする LE この 量詞 歌
「李四はこの歌を聞き飽きた。」

$$\begin{aligned}
(20) \quad & \left[\begin{array}{l} \text{吃 (食べる) / 穿 (履く) / 听 (聞く)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“凤姐” (鳳姐) / “我” (私) / “李四” (李四)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“好东西” (美味しいもの) / “鞋” (靴) / “歌” (歌)} \end{array} \right] \end{array} \right] \\
& \left[\begin{array}{l} \text{膩 (飽きる) / 慣 (慣れる) / 烦 (いらいらする)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“凤姐” (鳳姐) / “我” (私) / “李四” (李四)} \\ \text{ARG}_2 = z : \text{event-function} \end{array} \right] \end{array} \right] \\
& \left[\begin{array}{l} \text{吃膩 (食べる－飽きる) / 穿慣 (履く－慣れる) / 听烦 (聞く－いらいらする)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“凤姐” (鳳姐) / “我” (私) / “李四” (李四)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“好东西” (美味しいもの) / “鞋” (靴) / “歌” (歌)} \end{array} \right] \end{array} \right]
\end{aligned}$$

(19) にある結果複合動詞では、V1 には外項と内項がある。前述したように、V2 の“膩”（飽きる）、“慣”（慣れる）、“烦”（くたびれる）では、経験者項とともに、常に1つのイベントが必要とされる。(20) ではそれを *z* で示す。このイベントの中身は指定されていないため、どういうイベントであるかは V1 で同定される。さらに、そのイベントの参加者は V1 の内項と一致することにより、V1 の項が結果複合動詞で実現することになる。

2－2) 目的語が単音節で V2 の影の項：V2＝“饱”（満腹だ）、“醉”（酔っ払った）

- (21) a. 他 吃饱 了 (饭) 了。
tā chī bǎo le (fàn) le
彼 食べる－満腹だ LE (ご飯) LE
「彼はご飯を食べて、満腹だ。」
- b. 他 喝醉 了 (酒) 了。
tā hē zuì le (jiǔ) le
彼 飲む－酔っ払う LE (お酒) LE
「彼はお酒を飲んで、酔っ払った。」

$$(22) \quad \left[\begin{array}{l} \text{吃 (食べる) / 喝 (飲む)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“他” (彼)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“饭” (ご飯) / “酒” (酒)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{饱 (満腹だ) / 醉 (酔っ払う)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“他” (彼)} \\ \text{S-ARG}_1 = y : \text{“饭” (ご飯) / “酒” (酒)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{吃饱 (食べる-満腹だ) / 喝醉 (飲む-酔っ払う)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{“他” (彼)} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{“饭” (ご飯) / “酒” (酒)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

ここでは、V1 の“吃”（食べる）と“喝”（飲む）は動作主と対象を持つのに対し、V2 の“饱”（満腹だ）、“醉”（酔っ払う）は内項のみを持つ。ご飯、お酒はそれぞれ“饱”（満腹だ）、“醉”（酔っ払う）に語彙的に含意され、この二つの動詞の影の項である。そのため、“吃饱”（食べる-満腹だ）、“喝醉”（飲む-酔っ払う）では、V1 の外項と V2 の内項が同定されて、複合動詞の主語になると共に、V1 の内項と V2 の影の項と一致し、そのまま目的語になる。

2-3) 目的語が単音節で V1 の原型項 : V2 = “累”（疲れた）

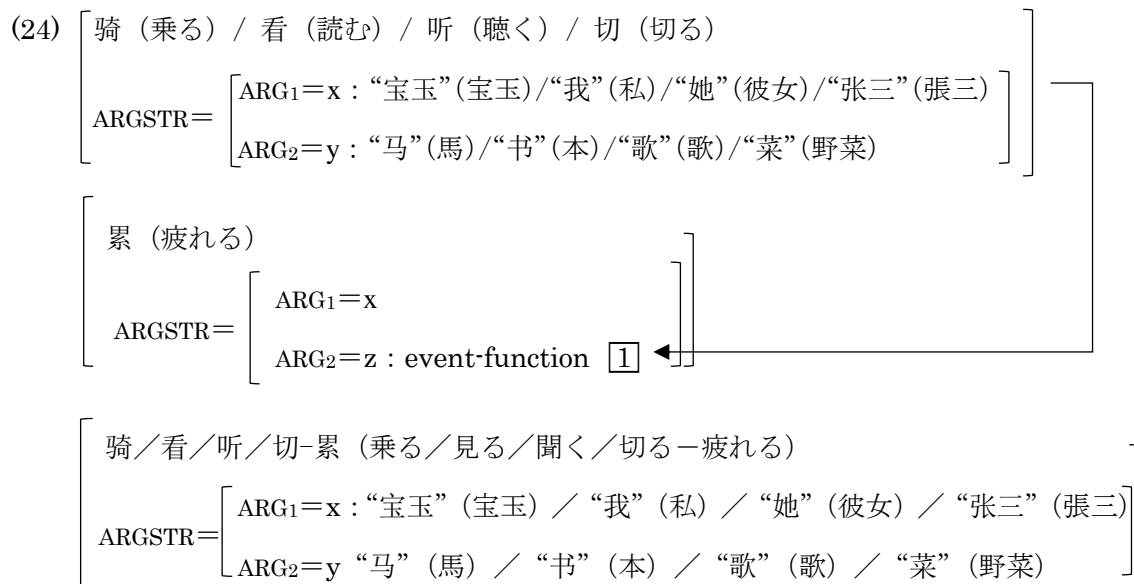
- (23) a. 宝玉 骑累 了 马。
bǎo yù qí lèi le mǎ
宝玉 乗る-疲れる le 馬
「宝玉は馬に乗って、疲れた。」
- b. 我 看累 了 {?(书) / *英语书}。
wǒ kàn lèi le {?(shū) / *yīng yǔ shū}
私 見る-疲れる LE {本 / *英語の本}
「私は本 / 英語の本を読んで、疲れた。」
- c. 她 听累 了 {?(歌) / *周杰伦的那首歌}。
tā tīng lèi le {?(gē) / *zhōu jié lún de nà shǒu gē}
彼 聞く-疲れる LE {歌 / 周杰倫のその曲}
「彼は歌 / 周杰倫のその曲を聞いて、疲れた。」

d. 张三 切累 了 {?(菜) / *土豆}。

zhāng sān qiē lèi le {?(cài) / *tǔ dòu}

張三 切る-疲れる LE {野菜／ジャガイモ}

「張三は野菜／ジャガイモを切って、疲れた。」



V2 “累”（疲れる）の項構造は“膩”（飽きる）などと同じく、内項 x 以外に、イベント項も持っている。ただし、前に述べた“膩”（飽きる）と異なり V2 は“累”（疲れる）を取る結果複合動詞は目的語を自由にとることができず、V1 のプロトタイプの項、すなわち「本」「野菜」のような単音節で V1 の目的語として典型的なものしか取れない。出現が任意で、しかも原型に限られることから、これらは V1 の影の項と考えられる。これらの影の項はイベント z の参加者と同定され、結果複合動詞の目的語の位置に現れる。

なお、崔（2018）によれば、“吃饱”（食べる-満腹だ）、“喝醉”（飲む-酔っ払う）、“骑累”（乗る-疲れる）などのような短い目的語しか取らないはずの複合動詞であっても、非常に長い複雑な名詞句が目的語であれば、文の容認度が上がる。これは、目的語は情報量のほとんど無い単純な影の項でなくても、逆に情報量の非常に多い焦点であれば許されるが、中間的な名詞句では容認度が下がることを示している。つまり、これらの複合動詞の目的語は影の項か談話の焦点という二通りの認可の仕方があることになる。

- (25) 他 走累 了 那 条 泥泞不堪 的 乡间石子路。
 tā zǒu lèi le nà tiáo ní nìng bú kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる LE あの 量詞 泥まみれ の 田舎の砂利道

「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩いて疲れた。」

- (26) 吃饱 了 这 满满 一 大 碗
 chī bǎo le zhè mǎn mǎn yī dà wǎn
 食べる-満腹だ LE この いっぱいの 1つ 大きい 量詞
 香噴噴 的 白米 飯。

xiāng pēn pēn de bái mǐ fàn

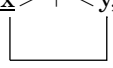
よい香り の 白米 ご飯

「このいっぱい大きな碗に入ったよい香りの白ご飯を食べて、満腹になった。」

(崔 2018 : 110-111)

以上、本研究で扱う中国語の主語指向型の結果複合動詞は、次の通りである。なお、外項には下線を付し、影の項は括弧に入れた。(27a) と (28a,d) にある z は動詞に要求されるイベントを表し、その後の $\langle \rangle$ の中にあるものはそのイベントの参与者である。主語指向型の結果複合動詞では、V1 が 1 項動詞であれば、その項がそのまま結果複合動詞の項になり、V1 は 2 項動詞であれば、その内項が V2 の項またはイベントの参与者と同一の場合に限り、結果複合動詞の項として出現する。ただし、V2 が“累”(疲れる)の時には、V1 のプロトタイプの内項しか結果複合動詞の内項になれない。

- (27) a. 非能格動詞+非対格動詞：跳烦（踊る-飽きる）(5a)

$\langle \underline{x} \rangle + \langle y, z: \langle x \rangle \rangle \rightarrow \langle \underline{x} \rangle$
 同定

- b. 小丑 跳烦 了。

xiǎo chǒu tiào fán le

ピエロ 踊る-飽きる LE

「ピエロは踊り飽きた。」

$$\begin{array}{l}
\text{c.} \quad \left[\begin{array}{l} \text{跳 (踊る)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{小丑}(\text{ピエロ})] \end{array} \right] \\
\left[\begin{array}{l} \text{烦 (飽きる)} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{小丑}(\text{ピエロ}) \\ \text{ARG}_2 = z : [\text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{小丑}(\text{ピエロ})]] \end{array} \right] \end{array} \right] \\
\\
\left[\begin{array}{l} \text{跳烦 (踊る - 飽きる)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = x : \text{小丑}(\text{ピエロ})] \end{array} \right]
\end{array}$$

(28) a. 非対格動詞＋非対格動詞：跌倒（転ぶ・倒れる）(5c)

$$\langle y \rangle + \langle y \rangle \rightarrow \langle y \rangle$$

b. 他 跌倒 了。

tā diē dǎo le

彼 転ぶ - 倒れる LE

「彼は転んで、倒れた。」

$$\begin{array}{l}
\text{c.} \quad \left[\begin{array}{l} \text{跌 (転ぶ)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{他 (彼)}] \end{array} \right] \\
\left[\begin{array}{l} \text{倒 (倒れる)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{他 (彼)}] \end{array} \right] \\
\\
\left[\begin{array}{l} \text{跌倒 (転ぶ - 倒れる)} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{他 (彼)}] \end{array} \right]
\end{array}$$

(29) 他動詞＋非対格動詞

a. 吃膩（食べる－飽きる）(6a)

$$\begin{array}{l}
\langle \underline{x}, y \rangle + \langle w, z : \langle x, y \rangle \rangle \rightarrow \langle \underline{x}, y \rangle \\
\boxed{\quad} \text{ 同定}
\end{array}$$

b. 吃胖（食べる－太る）(8a)

$$\langle \underline{x}, y \rangle + \langle x \rangle \rightarrow \langle \underline{x} \rangle$$

c. 吃饱（食べる－満腹だ）(13a)

$$\begin{array}{l}
\langle \underline{x}, y \rangle + \langle w, (y) \rangle \rightarrow \langle \underline{x} \rangle / \langle \underline{x}, y \rangle \\
\boxed{\quad} \text{ 同定}
\end{array}$$

d. 骑累（乗る－疲れる）（15a）

$$\langle \underline{x}, y \rangle + \langle w, z : \langle x, y \rangle \rangle \rightarrow \langle \underline{x}, y \rangle$$

なお、(29b) の“吃胖”（食べる－太る）では、V1 の内項は V2 に共通する項がないため、そのままでは V1 の内項は実現しないが、動詞コピー構文のなかであれば、V1 の目的語は現れることができる。

- (30) a 他 吃 肉 吃胖 了。
 tā chī ròu chīpàng le
 彼 食べる 肉 食べる－太る LE
 「彼は肉を食べて、太った。」

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{吃（食べる）} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x : \text{他（彼）} \\ \text{ARG}_2 = y : \text{肉} \end{array} \right] \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} \text{胖（太る）} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y : \text{他（彼）}] \end{array} \right]$$

ここまで、主語指向型の結果複合動詞の項構造を見てきたが、目的語指向型と同じく、主語指向型の結果複合動詞にも間接的な因果関係を持つ複合動詞があることから、事象構造も考察しなければならない。具体的には 4.2 節で見るが、例えば次のような文で、普通の状況であれば、酔っ払っただけでは死ぬことはないが、(31) の新聞タイトルでは、“酔”（酔っ払う）と“死”（死ぬ）で一つの結果複合動詞になっている。記事によれば、酔っ払った結果、血圧が上昇し、それが原因で死に至ったとのことである。(31b) の“酔”（酔っ払う）も“死”（死ぬ）も非対格動詞であるから、項構造上は (28) と同じであるが、(28) が直接的な因果関係を持つのに対し、(31) では、V1 と V2 の間にある因果関係は間接的である。

- (31) a. 单位 迎 新 聚餐 酒 后 去
 dān wèi yíng xīn jù cān jiǔ hòu qù
 会社 歓迎 新しい（人） 会食する お酒 後 行く
 K 歌 四旬 壮 汉 醉死 了
 Kē gē sì xún zhuàng hàn zuì sǐ le
 カラオケ 40 代 壮健 男 酔っ払う－死ぬ LE

「会社の歓迎会でお酒を飲んだ後に、カラオケに行った 40 代の健康な男性が
酔っ払って、死んでしまった。」 (=4a)

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{酔 (酔っ払う)} \\ \text{ARGSTR}=[\text{ARG}_1=\text{y} : \text{四旬壮漢 (40 代男)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{死 (死ぬ)} \\ \text{ARGSTR}=[\text{ARG}_1=\text{y} : \text{四旬壮漢 (40 代男)}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{跌倒 (酔っ払う－死ぬ)} \\ \text{ARGSTR}=[\text{ARG}_1=\text{y} : \text{四旬壮漢 (40 代男)}] \end{array} \right]$$

4.1.2 日本語の主語指向型結果複合動詞

第 2 章で述べたように、結果複合動詞の V1 は「手段」と「原因」に分けられる。「手段」複合動詞のほとんどは目的語指向型である。それに対して「原因」複合動詞では、V2 が主語の状態変化を表す主語指向型が多い。松本 (1998) は「原因」複合動詞の V1 は V2 を意図的に引き起こさず、V2 が発生した原因を表すという。具体例を (32) に示す。

- (32) a. 降り積もる、溺れ死ぬ、焼け死ぬ、抜け落ちる
 b. 歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣きぬれる、泣き沈む
 c. 読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食い潰れる、聞きほれる、見惚れる

(松本 1998 : 48)

(32a) の複合動詞は「非対格動詞＋非対格動詞」の組み合わせであり、松本 (1998) の言うとおり、これらの複合動詞は「他動詞調和の原則」「主語一致の原則」を守り、最も典型的な日本語の主語指向型のタイプである。(32b, c) では、V1 はそれぞれ非能格動詞と他動詞であるが、V2 は生理的・心理的な変化を示す非対格動詞である。(32a) と異なり、(32b, c) の「他動詞・非能格動詞＋非対格動詞」という組み合わせは、「他動性調和の原則」には違反するが、「主語一致の原則」は守っている。

申・望月 (2009) は主語叙述型結果複合動詞を (28) のようにまとめている。申・望月 (2009)

によれば、(33a - d) に挙げた結果複合動詞の V2 は生理的・心理的な状態変化を表す。V1 は意図性を持っているが、その意図性が背景化し、結果事象 V2 を意図的に引き起こすわけではない。なお、(33a - d) の結果複合動詞には生産性があるのに対し、(33e - h) の結果複合動詞は限られたものしかなく、本研究では後者を研究対象から外すことにする。

(33) 日本語における生理的・心理的变化を表す主語叙述型結果複合動詞

- a. ～疲れる：じゃべり疲れる、歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる
- b. ～くたびれる：待ちくたびれる、泣きくたびれる、歩きくたびれる
- c. ～飽きる：食べ飽きる、飲み飽きる、遊び飽きる、聞き飽きる、見飽きる
- d. ～慣れる：し慣れる、扱い慣れる、話し慣れる、書き慣れる、履き慣れる
- e. ～ほれる：聞きほれる、見ほれる
- f. ～切れる：擦り切れる
- g. ～潰れる：飲み潰れる、食い潰れる
- h. 着ぶくれる、泣きぬれる、泣き沈む

(申・望月 2009 : 421)

上で述べたように (33a - d) は非常に生産的で、V1 には制限がないように見える。また、由本 (2005) は「見慣れる」は統語的複合動詞であるとし、影山 (1993) は習慣的な意味を表す「～飽きる」「～慣れる」は統語的複合動詞の V2 としてよく使われると述べている。

しかしながら、(33a - d) に挙げた結果複合動詞は統語的複合動詞ではなく、語彙的複合動詞である。「食べ飽きる」「履き慣れる」などの複合動詞は、影山 (1993) の統語的複合動詞のテストにかけると非文になってしまうからである。

(34) I. 複合動詞の V1 は、代用形「そうする」によって代用できるかどうか

- a. 統語的複合動詞：走り続ける—そうし続ける
- b. 語彙的複合動詞：押し開ける—*そうし開ける
- c. 結果複合動詞：走り疲れる—*そうし疲れる
 歩きくたびれる—*そうしくたびれる
 食べ飽きる—*そうし飽きる
 聞き慣れる—*そうし慣れる

- (35) II. 主語尊敬語「お～になる」による挿入ができるかどうか
- a. 統語的複合動詞：歌い始める－お歌いになり始める
 - b. 語彙的複合動詞：書き込む－*お書きになり込む
 - c. 結果複合動詞：走り疲れる－*お走りになり疲れる
 歩きくたびれる－*お歩きになりくたびれる
 食べ飽きる－*お食べになり飽きる
 聞き慣れる－*お聞きになり慣れる
- (36) III. 複合動詞の V1 は、受身形にできるかどうか
- a. 統語的複合動詞：呼び始める－呼ばれ始める
 - b. 語彙的複合動詞：押し開ける－*押され開く
 - c. 結果複合動詞：呼び疲れる－*呼ばれ疲れる
 押しくたびれる－*押されくたびれる
 食べ飽きる－*食べられ飽きる
 聞き慣れる－*聞かれ慣れる
- (37) IV. 複合動詞の V1 は、サ変動詞によって置換できるかどうか
- a. 統語的複合動詞：見続ける－見物し続ける
 - b. 語彙的複合動詞：貼り付ける－*接着し付ける
 - c. 結果複合動詞：泳ぎ疲れる－*水泳し疲れる
 歩きくたびれる－*歩行しくたびれる
 食べ飽きる－*食事し飽きる
 見慣れる－*見物し慣れる
- (38) V. 複合動詞の V1 は、動詞重複を許すかどうか。
- a. 統語的複合動詞：走りに走り込んだ
 - b. 語彙的複合動詞：*探しに探し歩いた
 - c. 結果複合動詞：泳ぎ疲れる－*泳ぎに泳ぎ疲れる
 歩きくたびれる－*歩きに歩きくたびれる
 食べ飽きる－*食べに食べ飽きた
 聞き慣れる－*聞きに聞き慣れた

以上の結果から本論文では、(33a - d) も語彙的複合動詞だと主張する。

ここで、上述の内容を改めて整理すると、本研究で研究対象として扱う日本語の主語指向型の結果複合動詞は (39) のようになる。4.1.1 節の中国語の結果複合動詞と同様に、外項には下線を付し、影の項は括弧に入れた。(39a) は最も典型的なもので、(39b,c) の V2 は生理的・心理的な動詞である。また、上記のタイプにある日本語の結果複合動詞では V1 と V2 の項がすべて共通している。

- (39) a. 非対格動詞＋非対格動詞：降り積もる
 $\langle y \rangle + \langle y \rangle \rightarrow \langle y \rangle$
- b. 非能格動詞＋非対格動詞（生理的・心理的变化）：走り疲れる
 $\langle \underline{x} \rangle + \langle y, z: \langle \underline{x} \rangle \rangle \rightarrow \langle \underline{x} \rangle$
- c. 他動詞＋非対格動詞（生理的・心理的变化）：食べ飽きる
 $\langle \underline{x}, y \rangle + \langle y, z: \langle \underline{x}, y \rangle \rangle \rightarrow \langle \underline{x}, y \rangle$

これら語の項構造は (40) から (42) のように示すことができる。

- (40) 非対格動詞＋非対格動詞：降り積もる

- a. 着いたのは9月終わりごろで、既に雪が降り積もっていた。

(毎日新聞 2018.8.20)

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{降る} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \underline{x} : \text{雪}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{積もる} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \underline{x} : \text{雪}] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{降り積もる} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \underline{x} : \text{雪}] \end{array} \right]$$

(40) では、「降る」も「積もる」も「雪」という項しか持たず、その唯一の項である「雪」は共有され、そのまま複合動詞の主語となる。

「疲れる」や「飽きる」のような生理的・心理的变化を表す非対格動詞は、4.2.2 節で詳しく述べるが、中国語の“累”（疲れる）と同様に、経験者以外にその変化の原因となるイベントを要求する。

さらに、V1 が非能格動詞であれば、V1 の外項と V2 の経験者内項、および原因イベントの参加者がすべて一致し、その項が主語として実現する。V1 が他動詞であれば、V1 の外項と V2 の経験者と原因イベントの参加者の一つが一致して主語となり、V1 の内項と原因イベントのもう一つの参加者が一致して目的語として実現する。

(41) a. 私は走り疲れた。

$$\begin{aligned}
 &\text{b.} \quad \left[\begin{array}{l} \text{走る} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私}] \end{array} \right] \\
 &\quad \left[\begin{array}{l} \text{疲れる} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私} \\ \text{ARG}_2 = \text{z} : [\text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私}]] \end{array} \right] \end{array} \right] \\
 &\quad \left[\begin{array}{l} \text{走り疲れる} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私}] \end{array} \right]
 \end{aligned}$$

(41) にある「走り疲れる」では、「私」は「走る」の外項であると共に、「疲れる」の内項と原因イベント z の項にもなっている。さらに、この三つの項を同定することにより、「私」は「走り疲れる」の主語として現れる。

(42) a. 私はケーキを食べ飽きた。

$$\begin{aligned}
 &\text{b.} \quad \left[\begin{array}{l} \text{食べる} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私} \\ \text{ARG}_2 = \text{y} : \text{ケーキ} \end{array} \right] \end{array} \right] \\
 &\quad \left[\begin{array}{l} \text{飽きる} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私} \\ \text{ARG}_2 = \text{z} : \left[\text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私} \\ \text{ARG}_2 = \text{y} : \text{ケーキ} \end{array} \right] \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \\
 &\quad \left[\begin{array}{l} \text{食べ飽きる} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \text{x} : \text{私} \\ \text{ARG}_2 = \text{y} : \text{ケーキ} \end{array} \right] \end{array} \right]
 \end{aligned}$$

「走り疲れる」と異なり、「食べる」は 2 項動詞で、V1 の外項である「私」は「飽きる」の内項及び要求されるイベント z の外項と同定したうえで、複合動詞の主語になる。それと共に、「食べる」の内項の「ケーキ」は z の内項と一致し、そのまま目的語となる。

ここまで、主語指向型の複合動詞の項構造の特徴を考察した。最後に、例外的なタイプを見ておきたい。(32) 以外に、松本 (1998) は (43a) のような原因複合動詞を挙げている。

(43a) の結果複合動詞は「他動性調和の原則」だけでなく「主語一致の原則」にも違反しているように見えるが、これらの例は (43b) にある他動詞から派生されたものである。後者はもちろん、「他動性調和の原則」「主語一致の原則」に従っている。この複合動詞の自動詞化という現象を考察する前に、単純動詞の自動詞化をみよう。

- (43) a. 打ち上がる、持ち上がる、吸い上がる、吹き上がる、つり下がる、折り曲がる、
吹き飛ぶ、積み重なる、覆いかぶさる、突き刺さる、引きちぎれる、張り付く、
焼き付く、吸い付く、巻き付く、踏み固まる、焼き上がる、炊き上がる、ちぎ
り取れる、擦り切れる、擦りむける、突き出る
- b. 打ち上げる、持ち上げる、吸い上げる、吹き上げる、つり下げる、折り曲げる、
吹き飛ばす、積み重ねる、覆いかぶせる、突き刺す、引きちぎる、張り付ける、
焼ける、吸い付ける、巻き付ける、踏み固める、焼き上げる、炊き上げる、
ちぎり取る、擦り切る、擦りむく、突き出す

(松本 1998 : 57-58)

日本語では、他動詞から自動詞へ転換するという自動詞化は珍しくない。影山 (1996) は「自動詞化」に関する接尾辞に -e- と -ar- の 2 種類あるとした上で、それぞれの意味機能の相違点も指摘している。

- (44) a. 他動詞 + -e- → 自動詞
割る／割れる、抜く／抜ける、砕く／砕ける、折る／折れる、ほどく／ほどけ
る、切る／切れる、取る／取れる、織る／織れる、破る／破れる、崩す／崩れ
る、煮る／煮える、離す／離れる、もぐ／もげる
- b. 反使役化：自動詞化接辞 -e- は、使役主を変化対象と同定することで自動詞化
する。

(45) a. 他動詞+**-ar**→自動詞

植える／植わる、集める／集まる、詰める／詰まる、まぜる／まざる、いためる／いたまる、掛ける／掛かる、ふさぐ／ふさがる、つなぐ／つながる、儲ける／儲かる、決める／決まる、助ける／助かる、(値段を) まける／まかる、薄める／薄まる

- b. 脱使役化：自動詞化接辞**-ar**は、使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動化する。

(影山 1996 : 183-184 をもとに作成)

次に、「上がる」「破れる」を用い、(46) と (47) の区別を説明する。(46b) では、統語的には動作主が現れていないが、内的要因による状態変化が起こることを示す副詞「自然に」と共起できないことから、動作主が抑制はされているものの、存在していると考えられる。それに対して (47b) では「自然に」と共起できることから、使役主が変化対象と同定される内的要因による状態変化である。「反使役化」と「脱使役化」の違いを生成語彙論の枠組みで表すと、(48, 49) のようになる。

- (46) a. 彼らは花火を上げた。

- b. 花火が (*自然に) 上がった。

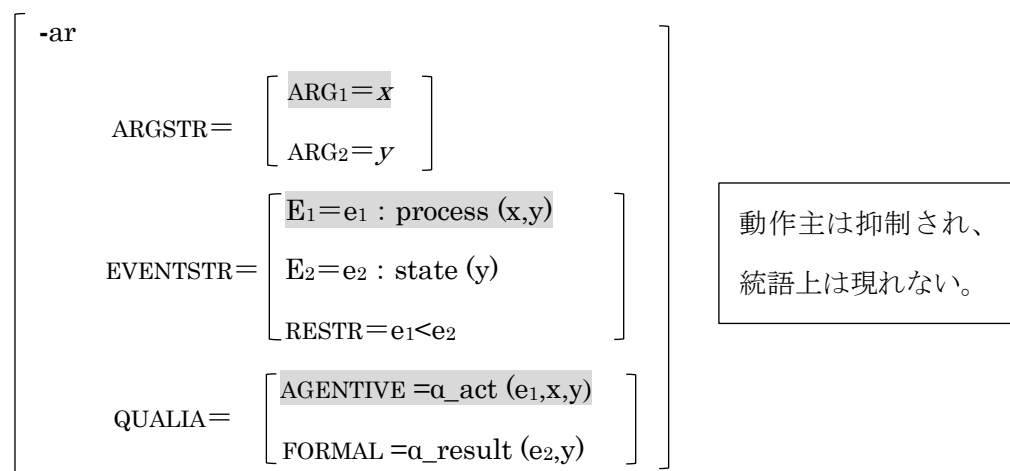
- (47) a. はさみで紐を切った。

- b. 紐が (自然に) 切れた。

(48) 反使役化

$\left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = y \\ (\text{ARG}_1 = x = y) \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process } (y) \\ E_2 = e_2 : \text{state } (y) \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \alpha_{\text{act}}(e_1, y) \\ \text{FORMAL} = \alpha_{\text{result}}(e_2, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content;"> 動作主 x と対象 y が同定され、y の内在的な力で、状態変化が起きる。 </div>
---	--	---

(49) 脱使役化



反使役化によって生じた自動詞では、対象である y が動作主も兼ねているため、統語的にも意味の上でも項は一つしかない。イベント構造とクオリア構造では、 y がその内在的な力により、自発的に変化することが表示されている。一方、脱使役化では、動作主 x は抑制されるため、存在はしていても現れない。同時に、 x と関わる動作イベントと主体クオリアも抑制される。(49) では、抑制される部分に網掛けをしている。

結果複合動詞でも、単純動詞と同じ自動化現象が見られる。(50a) は反使役化の、(50b) は脱使役化の例である。

- (50) a. 打ち上がる、持ち上がる、吸い上がる、吹き上がる、つり下がる、折り曲がる、吹き飛ぶ、積み重なる、突き刺さる、張り付く、焼き付く、踏み固まる、焼き上がる、炊き上がる、引きちぎれる、突き出る、ちぎり取れる、擦り切れる、擦りむける
- b. 巻き付く、覆いかぶさる、吸い付く

先に述べたように、反使役化操作によって生じた単純動詞は、「自然に」と馴染むのに対し、脱使役化の場合はそうではない。(51a) の「打ち上げる」から自動詞化を経て形成される(51b) の「打ち上げる」は、動作主が抑制はされているものの、存在はしているので、「自然に」と共起しにくい。(52b) の「覆い被さる」は桜の木が自らの力で成長して、屋根を覆ったので、「自然に」と共起可能である。このことから、(51b) は脱使役化により、(52b) は反使役化により生じたと考えられる。

- (51) a. 花火を打ち上げる。
 b. *花火が自然に打ち上がった。
- (52) a. 鳥かごに布を被せた。
 b. 大きな桜の木が屋根に自然に覆い被さっている。

「打ち上がる」と「覆い被さる」は自動化される前の複合動詞では、「他動性調和の原則」や「主語一致の原則」に則し、V1 と V2 がそれぞれに項を持つ。さらに V1 と V2 が項を同定することにより、結果複合動詞の項を構成する。しかしながら、「打ち上げる」、「覆い被せる」の自動詞化に伴い、V1 と V2 がすでに一つの動詞に融合し、V1 の項もなくなっている。

(53) と (54) では、複合動詞の項構造のみ提示する。(53) では、花火を打ち上げる動作主は統語上で抑制されるため、網掛けをしている。(54) では、木自身の内在的原因で、状態変化を起こし、動作主と対象が同定される。

(53) 打ち上がる

$$\left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = x \\ \text{ARG}_2 = y : \text{花火} \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E}_1 = e_1 : \text{process}(x, y) \\ \text{E}_2 = e_2 : \text{state}(y) \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \text{打つ_act}(e_1, x, y) \\ \text{FORMAL} = \text{上がる_result}(e_2, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(54) 覆い被さる

$$\left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = y : \text{桜の木} \\ (\text{ARG}_1 = x = y) \end{array} \right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E}_1 = e_1 : \text{process}(y) \\ \text{E}_2 = e_2 : \text{state}(y) \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \text{覆う_act}(e_1, y) \\ \text{FORMAL} = \text{被さる_result}(e_2, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

ここまで、反使役化および脱使役化による自動詞の形成が、単純動詞だけでなく複合動詞にもあることを見てきた。あたかも V2 が自動詞化したかのように見えるが、実際には複合動詞全体の自動詞化なのである。さて、他動詞の結果複合動詞と異なり、反使役化や脱使役化が適用された複合動詞は「他動性調和の原則」「主語一致の原則」に違反してしまう。このことから、「他動性調和の原則」「主語一致の原則」は他動詞複合動詞の形成時には従わなければならないが、その後は適用されないと言える。つまり、一旦、複合動詞が形成されてしまえば、そのあとで自動詞化されても、これらの原則は無関係なのである。

次に、反対方向への変化、すなわち自動詞から他動詞への転換もみてみたい。日本語の複合動詞には、自動詞から他動詞へ転換、つまり他動詞化の現象も存在する。影山（1996）は他動詞化を行う自動詞を接辞により *-e*-他動詞と *-as-*, *-os-*他動詞に分類している。*-e*-他動詞の動作主は必ず意図的なものでなければならないが、*-as-*, *-os-*他動詞の動作主は特に限定されてない。(56) に示すように、*-e*-他動詞の動作主は動作の発生を直接コントロールするのに対して、*-as-*, *-os-*他動詞の動作主はただその動作が発生する原因にすぎない。

(55) *-e* : 建つ→建てる、進む→進める、並ぶ→並べる、整う→整える

-as-, *-os-* : 鳴る→鳴らす、飛ぶ→飛ばす、ずれる→ずらす、減る→減らす、

乾く→乾かす、動く→動かす、枯れる→枯らす、蒸れる→蒸らす、起きる→起こす

(影山 1996 : 195)

(56) a. {大工さんが／*彼の持ち家願望が} 家を建てた。

b. {子供が／突風が} ブランコを揺らした。

(影山 1996 : 196)

同様に、(57) の複合動詞も二つに分けることができる。(58) から分かるように、単純動詞と同じく、(57a) では、他動詞の主語は動作の発生を直接コントロールする動作主に限られるのに対して、(57b) にある他動詞の主語はただその動作が発生する原因にすぎない。

(57) a. 絡み付く→絡みつける、酔い潰れる→酔い潰す

b. 滑り落ちる→滑り落とす、揺れ動く→揺れ動かす、沸き起こる→沸き起こす

(58) a. {彼が／*突風が} つるを棒に絡み付けた。

b. {彼は／突風が} 雪を滑り落とした。

「絡み付く」の他動詞化に際しては、項構造に動作主が新たに加えられる。ここでは、加えられる動作主及びそのイベントを太字で示す。(59a) では、**x** は動作主と対象という二つの意味役割を持つ。そのため、**x** が外力を借りられず、自らの力で絡んだ結果として、**x** がどこかに付くことになる。それと異なり、(59b) の「絡み付ける」では、動作主が付け加えられ、**x** が **y** に作用した原因により、**y** があるものに絡み付くことを表す。

- (59) a.
$$\left[\begin{array}{l} \text{絡み付く} \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \mathbf{x=y} \\ \text{ARG}_2 = \mathbf{z} \end{array} \right] \\ \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E}_1 = \mathbf{e_1 : process (x/y)} \\ \text{E}_2 = \mathbf{e_2 : state (y)} \\ \text{RESTR} = \mathbf{e_1 < e_2} \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \alpha_{\text{act}} (\mathbf{e_1, x/y}) \\ \text{FORMAL} = \beta_{\text{result}} (\mathbf{e_2, x/y, z}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{絡み付ける} \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \mathbf{ARG}_1 = \mathbf{x} \\ \text{ARG}_2 = \mathbf{y} \\ \text{ARG}_3 = \mathbf{z} \end{array} \right] \\ \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \mathbf{E}_1 = \mathbf{e_1 : process (x, y)} \\ \text{E}_2 = \mathbf{e_2 : state (y, z)} \\ \text{RESTR} = \mathbf{e_1 < e_2} \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \mathbf{AGENTIVE} = \alpha_{\text{act}} (\mathbf{e_1, x, y}) \\ \text{FORMAL} = \beta_{\text{result}} (\mathbf{e_2, y, z}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

「滑り落ちる」の他動詞化の場合、項構造に関しては(59)と変わらない。ただ、**-as-**, **-os-** 他動詞の主語はタイプ強制による解釈を許す点が異なる。例えば(58b)の場合、「突風」は「吹く」というクオリアと結びつけられ、個体ではなくイベントとして解釈される。これにより、主語は有生物である必要はなくなる。

「打ち上がる」「絡み付ける」のような結果複合動詞は「他動性調和の原則」「主語一致

の原則」に違反しているように見えるが、実際はそうではない。これらの原則は最初の複合語形成の際にのみ適用されるもので、一旦、「打ち上げる」「絡みつく」のような動詞ができてしまえば、それは単一動詞なのであって、その後の語形成規則によって自動詞や他動詞が生じて、それらに「他動性調和の原則」「主語一致の原則」は適用されない。従って、これらの結果複合動詞はこの二つの原則に対する真の反例ではないのである。

4.2 主語指向型結果複合動詞のクオリア構造

前節の分析によれば、主語指向型の日中結果複合動詞は三つに分類できる。第一のタイプは V2 が生理的・心理的な動詞を取る日中結果複合動詞である。第二のタイプは「他動詞／非能格動詞＋非対格動詞（生理的・心理的動詞を除く）」の組み合わせである。第三は「非対格動詞＋非対格動詞」の結果複合動詞である。本節は 4.2.1 節で最初に、第二と第三のタイプの日中結果複合動詞におけるイベント構造とクオリア構造の融合過程を分析し、その後 4.2.2 節で、V2 が生理的・心理的動詞のタイプの考察を行う。

4.2.1 主語指向型日中結果複合動詞におけるイベントとクオリアの融合

初めに、前章で見た目的語指向型の結果複合動詞のイベントとクオリア構造の融合を振り返っておこう。

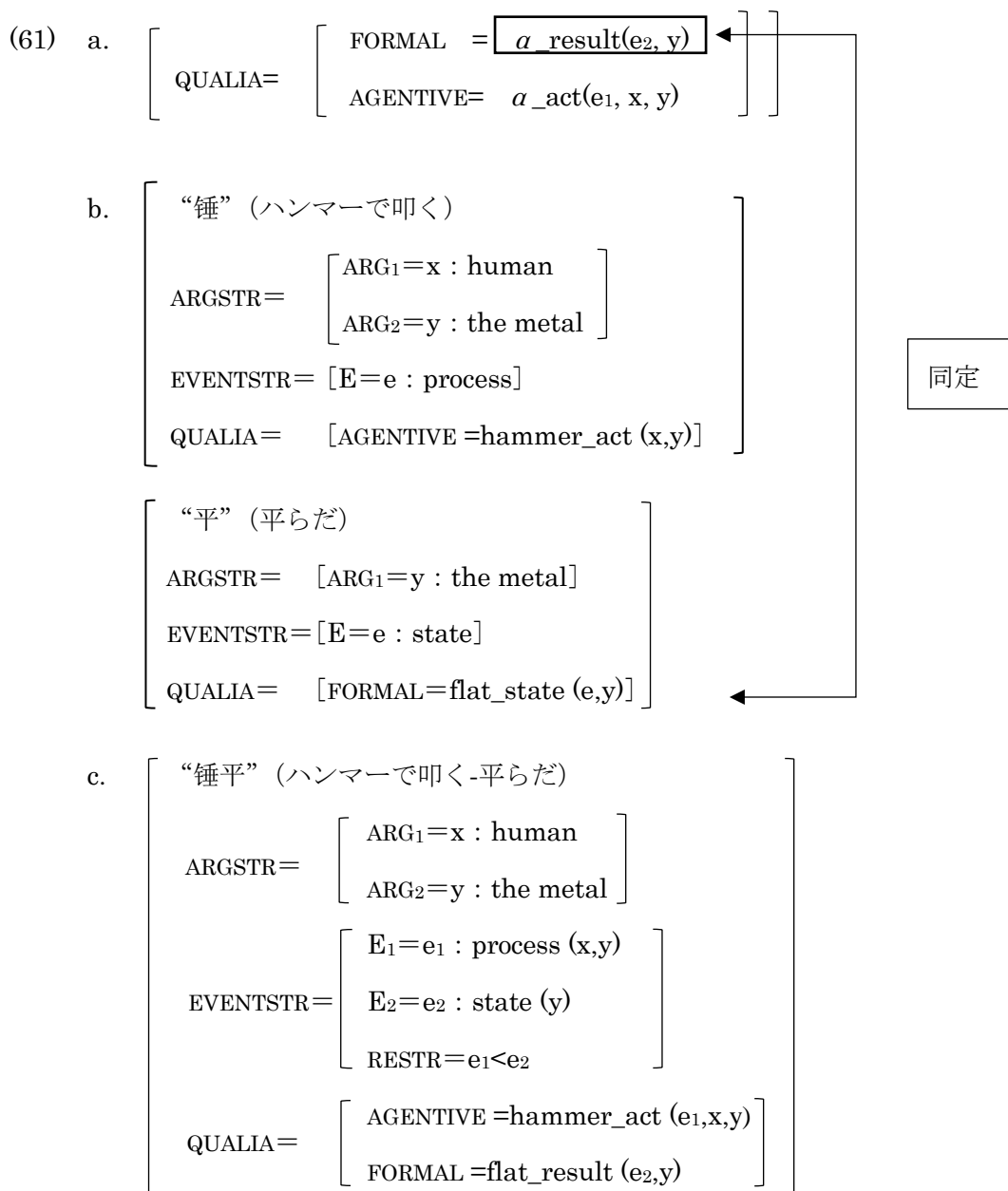
目的語指向型の日中結果複合動詞において、プロトタイプであれば、V1 と V2 の間に必ず (60) の使役スキーマによる直接因果関係がある。その詳細については、(61) と (62) の例を通して説明する。

$$(60) \quad \left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ E_2 = e_2 : \text{state} \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \alpha_result(e_2, y) \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act(e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

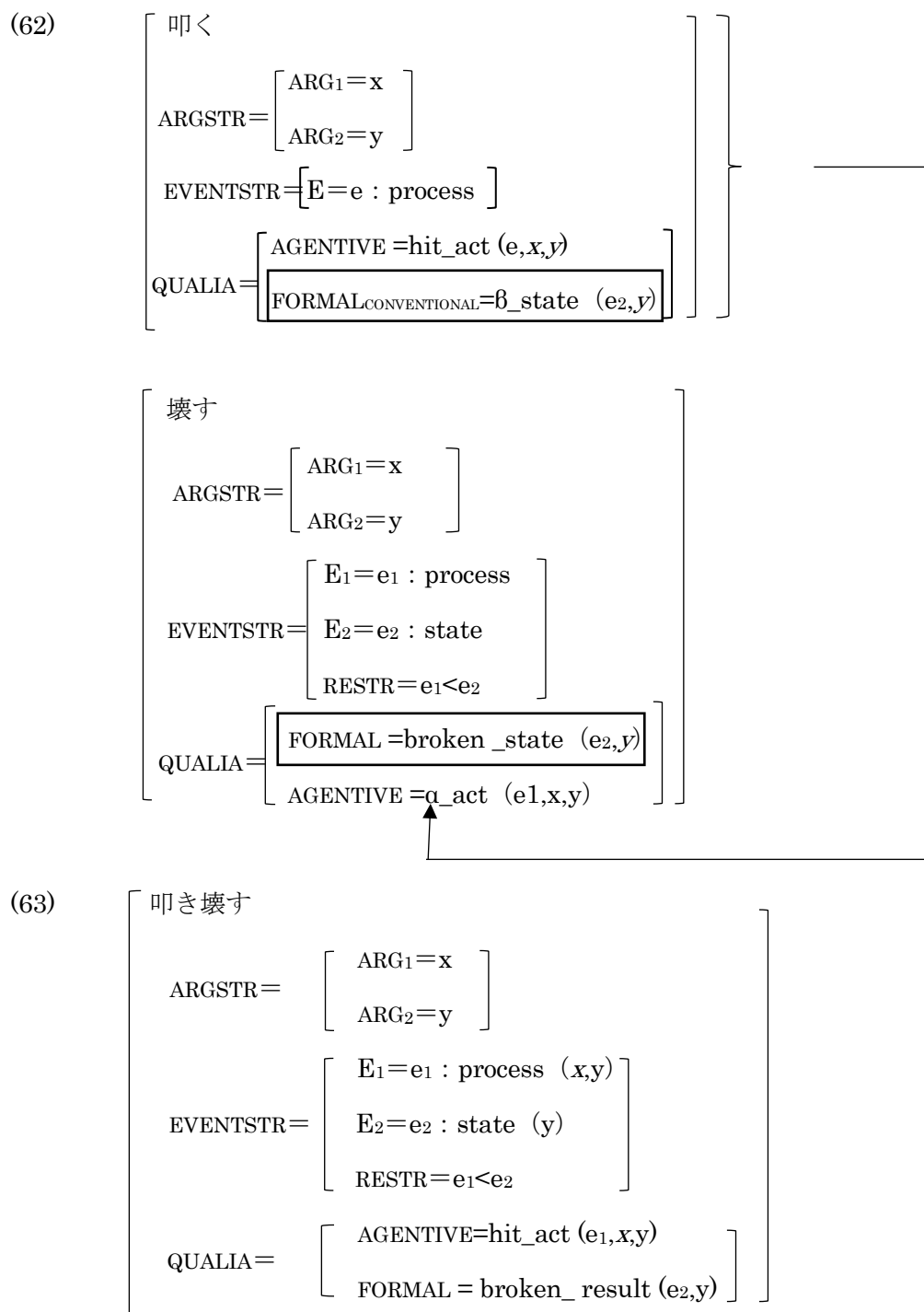
(小野 2005 : 111)

小野 (2005) によれば、英語の結果構文では、動詞のクオリアと結果述語のクオリアとの共合成により、動詞は構文に組み込まれる。(61) に示す目的語指向型の中国語の結果複合動

詞の形成過程は英語の結果構文の形成過程と全く同じである。まず V2 “平”（平らだ）は使役スキーマの形式クオリアと同定され、その後、V1 “锤”（ハンマーで叩く）と V2 “平”（平らだ）で共合成を行うことにより、V1 をその結果複合動詞に組み込む。



一方、他動詞＋非対格動詞の組み合わせである中国語と異なり、他動詞＋他動詞で結果複合動詞が形成される日本語では、使役スキーマに入れるだけでは不十分である。まず、項構造が一致し、さらに V1 の慣習的な結果が V2 であると同時に、V2 の様態として、V1 が挿入されなければならない。



「叩き壊す」のような目的語指向型の日本語の結果複合動詞では、(62) が示すように、V1 「叩く」の項構造は内項と外項を持ち、イベント構造は *process* で、主体クオリアは *x* が *y* を叩くことである。しかし、中国語と異なり、V2 である「壊す」がすでに使役関係を持つ。したがって、日本語では「叩く」の主体クオリアをそのまま「壊す」の主体クオリアと同定

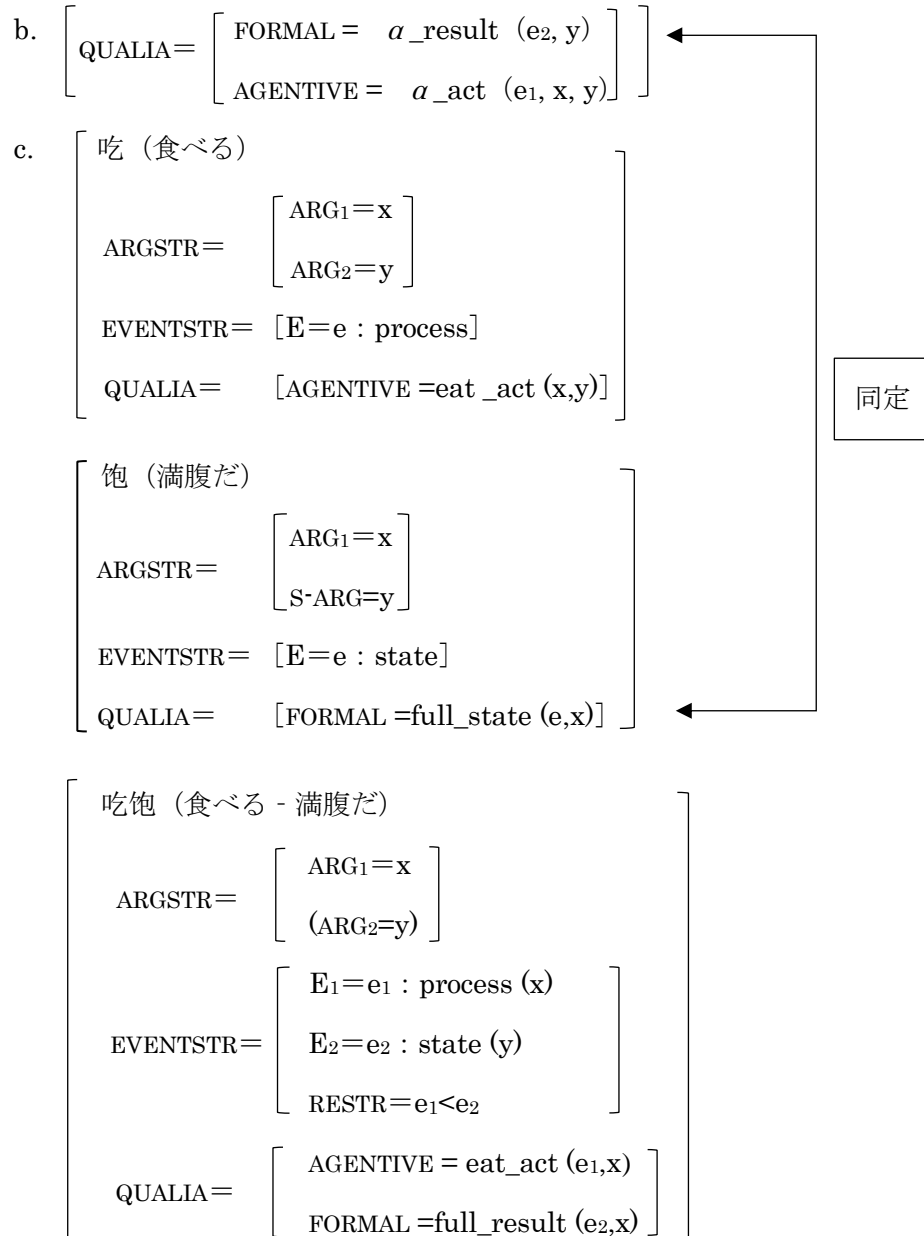
したうえで、V1 と V2 を複合することができる。言い換えれば、V2「壊す」の様態は指定されておらず、どのような手段・方法で壊すかはあらかじめ決まっていない。ここで無指定の様態（ α で表す）に V1 が様態として指定されるのである。つまり V1 が原因で V2 が結果となる。ただし同定に際して、1 つの条件を満たさなければならない。同定される V1 の慣習的な結果の一つが V2 の形式クオリアと一致しなければならないのである。前章で考察したように、「叩く」の慣習的な結果の一つは「物の形を変化させる」であり、これは「壊す」の形式クオリアと矛盾しないため、「叩く」は「壊す」と複合することができる。

では、主語指向型の結果複合動詞はどうであろうか。

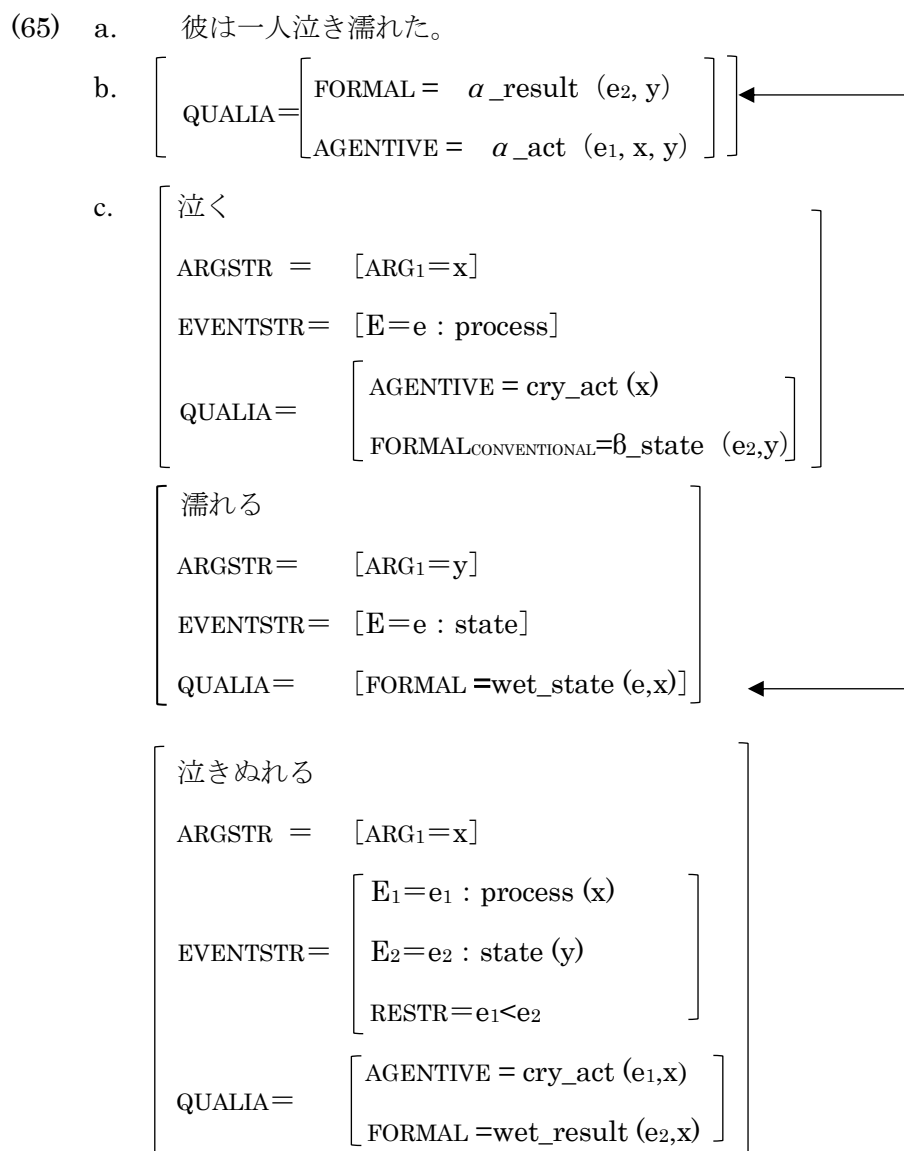
まず、前に述べた (61) の目的語指向型の結果複合動詞と同じく、「他動詞または非能格動詞＋非対格動詞」の場合、V2 の形式クオリアと使役スキーマの形式クオリアを同定することにより、主語指向型の日中結果複合動詞がコード化される。具体的に、“吃饱”（食べる－満腹だ）、「泣きぬれる」の意味構造を見て見よう。

(64a) に挙げている“吃饱”（食べる－満腹だ）の意味構造は (64c) で示している。(64c) では、スキーマ核である“饱”（満腹だ）の形式クオリアは (64b) の使役事象スキーマの形式クオリアと同定され、主語指向型の結果複合動詞は使役事象スキーマにコード化される。その後、スキーマ核である V2 は V1 と共合成が行われる。また、起因事象である V1 の項である“他”（彼）と結果事象 V2 の項は共通しているので、この二つの事象の間にある使役関係を保証することができる。

- (64) a. 他 吃饱 了 (飯)。
 tā chī bǎo le (fàn)
 彼 食べる - 満腹だ LE (ご飯)
 「彼はご飯を食べて、満腹になった。」



他方、「泣きぬれる」では、「濡れる」は非対格動詞であり、使役意味を持つ他動詞ではなく、(64)の“吃饱”(食べる－満腹だ)とほぼ同じ過程で融合するが、“吃饱”(食べる－満腹だ)と相違点がひとつある。日本語では、中国語と異なり、V1がV2と共合成する時に、V1の慣習的な結果(下では $\text{FORMAL}_{\text{CONVENTIONAL}} = \beta$ で示す)は必ずV2の形式クオリアを含まなければならないという条件がある。(65)の「泣きぬれる」では泣いた後に涙が出るので、この意味から「濡れる」という結果が予測される。「泣く」の慣習的な結果に「濡れる」が含まれていると考えられ、「泣く」と「濡れる」の共合成が行われる。



次に、複合動詞の V1 と V2 が共に状態変化を表す非対格動詞では、V1 が示す状態変化が V2 の示す状態変化を引き起こすことを表す。これは因果関係であり、使役関係であるとも言える。使役スキーマにおいては、主体クオリアと形式クオリアが原因と結果を表すから、ここでもやはり、上と同じ構造を持つと考えられる。Pustejovsky (1995) に従えば、(66d) において、到達動詞である「崩れる」も「落ちる」もイベント構造は transition であるが、この transition は process と state を組み合わせた複合事象である。また、「崩れる」は「落ちる」より先に発生するので、「崩れる」は原因で、「落ちる」は結果だと考えられる。

- (66) a. 大きな岩が道路に崩れ落ちた。
- b. 巨大 的 岩石 崩落 到 了 道路 上。
 jù dà de yán shí bēng luò dào le dào lù shàng
 巨大 の 岩 崩れる－落ちる に LE 道路 上
- c.
$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \alpha_result(e_2, y) \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_act(e_1, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- d.
$$\left[\begin{array}{l} \text{崩れる／“崩”} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y] \\ \text{EVENTSTR} = [\text{E} = e : \text{transition}] \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{collapse_state}(y)] \end{array} \right]$$
- $$\left[\begin{array}{l} \text{落ちる／“落”} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y] \\ \text{EVENTSTR} = [\text{E} = e : \text{transition}] \\ \text{QUALIA} = [\text{FORMAL} = \text{fall down_state}(e, y)] \end{array} \right]$$
- $$\left[\begin{array}{l} \text{崩れ落ちる／“崩落”} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG}_1 = y] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{E}_1 = e_1 : \text{transition}(y) \\ \text{E}_2 = e_2 : \text{transition}(y) \\ \text{RESTR} = e_1 < e_2 \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{AGENTIVE} = \text{collapse_thechange of state}(e_1, y) \\ \text{FORMAL} = \text{fall down_result}(e_2, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

「他動詞／非能格動詞＋非対格動詞（心理・生理的動詞を除く）」の組み合わせを持つ主語指向型の日本語の結果複合動詞は目的語指向型と同じく、V1 の慣習的な結果は V2 の形式クオリアを含まなければならないが、同タイプの中国語結果複合動詞にそのような制約はない。主語指向型の「非対格動詞＋非対格動詞（心理的・生理的動詞を除く）」結果複合動詞では、V1 の状態変化をきっかけとして、V2 の状態変化が起こる。

次節では、V2 が心理的・生理的変化を表す非対格動詞の日中結果複合動詞を取り上げ、その特徴を詳しく論述する。

4.2.2 V1+心理的・生理的变化の非対格動詞

(67) にある日中結果複合動詞では、V2 の位置にある「疲れる」「累」、「飽きる」「膩」、「なれる」「慣」はすべて生理的・心理的な動詞である。

- (67) 走り飽きる－跑膩（走る－飽きる）、
走り疲れる、走りくたびれる－跑累（走る－疲れる）、
走り慣れる－跑慣（走る－慣れる）

「日本語の結果複合リスト」と「中国語の結果複合動詞リスト」で、V2 に「～疲れる」 / “～累”、「～飽きる」 / “～膩”、「～慣れる」 / “～慣” を取る複合動詞を検索すると、次のような結果複合動詞があった。

- (68) a. 遊び疲れる、歩き疲れる、泣き疲れる
b. 聞き飽きる、食い飽きる、食べ飽きる、見飽きる
- (69) a. 抄累（書き写す－疲れる）、记累（覚える－疲れる）、烧累（燃やす－疲れる）、
删累（削る－疲れる）、哭累（泣く－疲れる）、吵累（喧嘩する－疲れる）、
喂累（食べさせる－疲れる）、弯累（屈める－疲れる）
吹累（吹く－疲れる）、煎累（焼く－疲れる）、搓累（こする－疲れる）、
怨累（恨む－疲れる）、游累（泳ぐ－疲れる）、运累（運ぶ－疲れる）、
背累（背負う－疲れる）、架累（架設する－疲れる）、洗累（洗う－疲れる）、
缠累（つきまとう－疲れる）、骑累（乗る－疲れる）、走累（歩く－疲れる）、
读累（読む－疲れる）、敲累（叩く－疲れる）、杀累（殺す－疲れる）、
唱累（歌う－疲れる）、扇累（扇ぐ－疲れる）、编累（編む－疲れる）、
晒累（干す－疲れる）、扫累（掃く－疲れる）、拣累（拾う－疲れる）、
挤累（割り込む－疲れる）、念累（読む－疲れる）、剪累（切る－疲れる）、
搬累（運ぶ－疲れる）、筛累（ふるう－疲れる）、扔累（捨てる－疲れる）、
画累（描く－疲れる）、织累（織る－疲れる）、
挖累（掘る－疲れる）、挑累（担ぐ－疲れる）、听累（聞く－疲れる）、
拔累（抜き取る－疲れる）、打累（殴る－疲れる）、飞累（飛ぶ－疲れる）、
铲累（すくい取る－疲れる）、举累（持つ上げる－疲れる）、

拿累（持つ－疲れる）、跑累（走る－疲れる）、抬累（持つ上げる－疲れる）、
踢累（蹴る－疲れる）、提累（持つ－疲れる）、玩累（遊ぶ－疲れる）、
翻累（めくる－疲れる）、教累（教える－疲れる）、蹲累（しゃがむ－疲れる）、
锤累（（ハンマーで）叩く－疲れる）、刷累（塗る－疲れる）、
绕累（回り道をする－疲れる）、划累（漕ぐ－疲れる）、问累（聞く－疲れる）、
跪累（ひざまずく－疲れる）、站累（立つ－疲れる）、看累（見る－疲れる）、
逛累（街をぶらぶらする－疲れる）、照累（撮る－疲れる）、
揉累（揉む－疲れる）、嚼累（噛み砕く－疲れる）、染累（染める－疲れる）、
撬累（こじる－疲れる）、蹦累（跳ぶ－疲れる）、擦累（拭く－疲れる）、
嚷累（大きな声で叫ぶ－疲れる）、坐累（座る－疲れる）

- b. 喝赋（飲む－飽きる）、剥赋（剥く－飽きる）、跳赋（跳ぶ－飽きる）、
唱赋（歌う－飽きる）、抱赋（抱く－飽きる）、染赋（染める－飽きる）、
挖赋（掘る－飽きる）、吃赋（食べる－飽きる）、讲赋（話す－飽きる）、
吹赋（吹く－飽きる）、学赋（学ぶ－飽きる）、演赋（演じる－疲れる）、
抄赋（書き写す－疲れる）、呆赋（住む－飽きる）、去赋（行く－飽きる）、
骑赋（乗る－飽きる）、画赋（描く－飽きる）、擦赋（拭く－飽きる）、
看赋（見る－飽きる）、养赋（飼う－飽きる）、写赋（書く－飽きる）、
闻赋（嗅ぐ－飽きる）、玩赋（遊ぶ－飽きる）、听赋（聞く－飽きる）、
踢赋（蹴る－飽きる）、躺赋（横になる－飽きる）、弹赋（弾く－飽きる）、
抽赋（吸う－飽きる）、爬赋（のぼる－飽きる）、穿赋（着る／履く－飽きる）、
教赋（教える－飽きる）、过赋（過ごす－飽きる）、住赋（住む－飽きる）
逛赋（街をぶらぶらする－飽きる）、管赋（面倒を見る－飽きる）、
干赋（やる－飽きる）、等赋（待つ－飽きる）、打赋（をする－飽きる）、
- c. 喝惯（飲む－慣れる）、挤惯（絞り出す－慣れる）、看惯（見る－慣れる）、
求惯（頼む－慣れる）、偷惯（盗む－慣れる）、花惯（払う－慣れる）、
走惯（歩く－慣れる）、站惯（立つ－慣れる）、望惯（見る－慣れる）、
当惯（務める－慣れる）、苦惯（苦しい生活を過ごす－慣れる）、
握惯（握る－慣れる）、说惯（話す－慣れる）、叫惯（叫ぶ－慣れる）、
跪惯（ひざまずく－慣れる）、混惯（まじる－慣れる）、跳惯（跳ぶ－慣れる）、
听惯（聞く－慣れる）、过惯（暮らす－慣れる）、睡惯（寝る－慣れる）、

編慣（書く－慣れる）、用慣（使う－慣れる）、砸慣（打ち付ける－慣れる）、
 游慣（泳ぐ－慣れる）、怨慣（責める－慣れる）、吃慣（食べる－慣れる）、
 賒慣（掛け買いする－慣れる）、比慣（比較する－慣れる）、
 养慣（飼う－慣れる）、蹲慣（しゃがむ－慣れる）、使慣（使う－慣れる）、
 挖慣（掘る－慣れる）
 让慣（譲る－慣れる）、扎慣（縛る－慣れる）、问慣（聞く－慣れる）、
 占慣（自分の物にする－慣れる）、闻慣（嗅ぐ－慣れる）、
 唱慣（歌う－慣れる）、咬慣（噛む－慣れる）、熬慣（徹夜する－慣れる）、
 缠慣（付きまとう－慣れる）、戴慣（掛ける－慣れる）、挨慣（遭う－慣れる）、
 穿慣（着る／履く－慣れる）、欠慣（掛け買いする－慣れる）
 骑慣（乗る－慣れる）、嚷慣（叫ぶ－慣れる）、抽慣（吸う－慣れる）
 切慣（切る－慣れる）、演慣（演じる－慣れる）、呆慣（住む－慣れる）、
 抄慣（書き写す－慣れる）、耍慣（遊ぶ－慣れる）、
 见慣（見る－慣れる）、拿慣（持つ－慣れる）、种慣（植える－慣れる）、
 做慣（する－慣れる）、吹慣（吹く－慣れる）、打慣（打つ－慣れる）、
 读慣（読む－慣れる）、冻慣（冷える－慣れる）、飞慣（飛ぶ－慣れる）、
 讲慣（話す－慣れる）、练慣（練習する－慣れる）、
 淋慣（ぬられる－慣れる）、骂慣（叱る－慣れる）、摸慣（触る－慣れる）、
 上慣（働く－慣れる）、摇慣（ゆする－慣れる）、坐慣（座る－慣れる）、
 照慣（撮る－慣れる）、弯慣（曲げる－慣れる）、围慣（取り巻く－慣れる）、
 染慣（染める－慣れる）、喂慣（餌を遣る／食べさせる－慣れる）、
 饿慣（お腹が空く－慣れる）、燃慣（燃やす－慣れる）、写慣（書く－慣れる）、
 住慣（住む－慣れる）、找慣（探す－慣れる）、争慣（争う－慣れる）、
 挽慣（手に手を取る－慣れる）、端慣（料理を出す－慣れる）

(69) が示しているように、V2に“～累”“～膩”“～慣”を取る中国語の結果複合動詞の数は、(68)に示したV2に「～疲れる」「～飽きる」「～慣れる」を取る日本語の結果複合動詞の数と比べ、遥かに多い。しかしながら、(70)の中国語結果複合動詞はそのまま日

本語に直訳することができ、容認度も高い¹⁷。申・望月（2009）によれば、V2 が生理的・心理的な動詞の場合、日本語も中国語も結果複合動詞の生産性が高くなる。

表 1～3 に挙げたのは V2 にそれぞれ “～累” / 「疲れる」、「～膩」「飽きる」、「～慣」「～慣れる」を取る日中結果複合動詞が実際に対応している例である。

表 1 「V1+ “累”」と「V1+疲れる」が対応する複合動詞

V1+ “累”	V1+疲れる	V1+ “累”	V1+疲れる
记累（覚える－疲れる）	覚え疲れる	画累（描く－疲れる）	描き疲れる
烧累（焼く－疲れる）	焼き疲れる	织累（織る－疲れる）	織り疲れる
煎累（焼く－疲れる）			
删累（削る－疲れる）	削り疲れる	挖累（掘る－疲れる）	掘り疲れる
哭累（泣く－疲れる）	泣き疲れる	弯累（屈める－疲れる）	屈め疲れる
吹累（吹く－疲れる）	吹き疲れる	挑累（担ぐ－疲れる）	担ぎ疲れる
搓累（擦る－疲れる）	擦り疲れる	玩累（遊ぶ－疲れる）	遊び疲れる
怨累（恨む－疲れる）	恨み疲れる	打累（戦う－疲れる）	戦い疲れる
游累（泳ぐ－疲れる）	泳ぎ疲れる	飞累（飛ぶ－疲れる）	飛び疲れる
运累（運ぶ－疲れる）	運び疲れる	拿累（持つ－疲れる）	持ち疲れる
洗累（洗う－疲れる）	洗い疲れる	跑累（走る－疲れる）	走り疲れる
骑累（乗る－疲れる）	乗り疲れる	踢累（蹴る－疲れる）	蹴り疲れる
走累（歩く－疲れる）	歩き疲れる	提累（持つ－疲れる）	持ち疲れる
读累（読む－疲れる）	読み疲れる	听累（聴く－疲れる）	聞き疲れる
念累（読む－疲れる）		问累（聞く－疲れる）	
看累（見る－疲れる）			
敲累（叩く－疲れる）	叩き疲れる	翻累（めくる－疲れる）	捲り疲れる
杀累（殺す－疲れる）	殺し疲れる	教累（教える－疲れる）	教え疲れる
唱累（歌う－疲れる）	歌い疲れる	蹲累（しゃがむ－疲れる）	しゃがみ疲れる
扇累（扇ぐ－疲れる）	扇ぎ疲れる	锤累（叩く－疲れる）	叩き疲れる

¹⁷ 日本語に V1 に対応する単純動詞がなければ、もちろん直訳することはできない。例えば、“躺膩”（横になる－疲れる），“逛累”（街をぶらぶらする－疲れる），“抄慣”（書き写す－慣れる）などに対応する日本語の結果複合動詞はないが、それは意味構造とは無関係である。

編累（編む－疲れる）	編み疲れる	刷累（塗る－疲れる）	塗り疲れる
晒累（干す－疲れる）	干し疲れる	划累（漕ぐ－疲れる）	漕ぎ疲れる
扫累（掃く－疲れる）	掃き疲れる	跪累（跪く－疲れる）	跪き疲れる
拣累（拾う－疲れる）	拾い疲れる	站累（立つ－疲れる）	立ち疲れる
念累（読む－疲れる）	読み疲れる	照累（撮る－疲れる）	撮り疲れる
剪累（切る－疲れる）	切り疲れる	擦累（拭く－疲れる）	拭き疲れる
搬累（運む－疲れる）	運び疲れる	揉累（揉む－疲れる）	揉み疲れる
篩累（ふるう－疲れる）	振るい疲れる	嚼累（噛む－疲れる）	噛み疲れる
扔累（捨てる－疲れる）	捨て疲れる	染累（染める－疲れる）	染め疲れる
坐累（座る－疲れる）	座り疲れる	撬累（こじる－疲れる）	こじり疲れる
嚷累（叫ぶ－疲れる）	叫び疲れる	蹦累（跳ぶ－疲れる）	跳び疲れる

表2 「V1+“膩”」と「V1+飽きる」が対応する複合動詞

V1+膩	V1+飽きる	V1+膩	V1+飽きる
喝膩（飲む－飽きる）	飲み飽きる	骑膩（乗る－飽きる）	乗り飽きる
剥膩（剥く－飽きる）	剥き飽きる	画膩（描く－飽きる）	描き飽きる
跳膩（跳ぶ－飽きる）	跳び飽きる	擦膩（拭く－飽きる）	拭き飽きる
唱膩（歌う－飽きる）	歌い飽きる	看膩（見る－飽きる）	見飽きる
抱膩（抱く－飽きる）	抱き飽きる	养膩（飼う－飽きる）	飼い飽きる
染膩（染める－飽きる）	染め飽きる	写膩（書く－飽きる）	書き飽きる
挖膩（掘る－飽きる）	掘り飽きる	闻膩（嗅ぐ－飽きる）	嗅ぎ飽きる
吃膩（食べる－飽きる）	食べ飽きる	玩膩（遊ぶ－飽きる）	遊び飽きる
讲膩（話す－飽きる）	話し飽きる	听膩（聞く－飽きる）	聞き飽きる
吹膩（吹く－飽きる）	吹き飽きる	踢膩（蹴る－飽きる）	蹴り飽きる
学膩（学ぶ－飽きる）	学び飽きる	弹膩（弾く－飽きる）	弾き飽きる
演膩（演じる－飽きる）	演じ飽きる	抽膩（吸う－飽きる）	吸い飽きる
教膩（教える－飽きる）	教え飽きる	爬膩（のぼる－飽きる）	登り飽きる
呆膩（住む－飽きる）	住み飽きる	穿膩（着る／履く－飽きる）	着飽きる 履き飽きる

去膩（行く－飽きる）	行き飽きる	等膩（待つ－飽きる）	待ち飽きる
過膩（過ぐす－飽きる）	過ぐし飽きる	住膩（住む－飽きる）	住み飽きる

表 3 「V1+ “慣”」と「V1+慣れる」が対応する複合動詞

V1+慣	V1+慣れる	V1+慣	V1+慣れる
喝慣（飲む－慣れる）	飲み慣れる	游慣（泳ぐ－慣れる）	泳ぎ慣れる
看慣（見る－慣れる）	見慣れる	怨慣（責める－慣れる）	責め慣れる
求慣（頼む－慣れる）	頼み慣れる	养慣（飼う－慣れる）	飼い慣れる
偷慣（盗む－慣れる）	盗み慣れる	蹲慣（しゃがむ－慣れる）	しゃがみ慣れる
花慣（使う－慣れる）	使い慣れる	使慣（使う－慣れる）	使い慣れる
走慣（歩く－慣れる）	歩き慣れる	让慣（譲る－慣れる）	譲り慣れる
站慣（立つ－慣れる）	立ち慣れる	扎慣（縛る－慣れる）	縛り慣れる
望慣（見る－慣れる）	見慣れる	问慣（聞く－慣れる）	聞き慣れる
当慣（務める－慣れる）	務め慣れる	闻慣（嗅ぐ－慣れる）	嗅ぎ慣れる
握慣（握る－慣れる）	握り慣れる	唱慣（歌う－慣れる）	歌い慣れる
说慣（話す－慣れる）	話し慣れる	咬慣（噛む－慣れる）	噛み慣れる
叫慣（叫ぶ－慣れる）	叫び慣れる	戴慣（掛ける－慣れる）	掛け慣れる
跪慣（跪く－慣れる）	跪き慣れる	穿慣（着る／履く－慣れる）	着慣れる 履き慣れる
混慣（まじる－慣れる）	まじり慣れる	骑慣（乗る－慣れる）	乗り慣れる
跳慣（跳ぶ－慣れる）	跳び慣れる	嚷慣（叫ぶ－慣れる）	叫び慣れる
听慣（聞く－慣れる）	聞き慣れる	切慣（切る－慣れる）	切り慣れる
过慣（暮らす－慣れる）	暮らし慣れる	演慣（演じる－慣れる）	演じり慣れる
睡慣（寝る－慣れる）	寝慣れる	呆慣（住む－慣れる）	住み慣れる
编慣（書く－慣れる）	書き慣れる	耍慣（遊ぶ－慣れる）	遊び慣れる
用慣（使う－慣れる）	使い慣れる	见慣（見る－慣れる）	見慣れる
吹慣（吹く－慣れる）	吹き慣れる	拿慣（持つ－慣れる）	持ち慣れる
打慣（打つ－慣れる）	打ち慣れる	种慣（植える－慣れる）	植え慣れる

读惯（読む－慣れる）	読む慣れる	燃惯（燃やす－慣れる）	燃やし慣れる
冻惯（冷える－慣れる）	冷え慣れる	写惯（書く－慣れる）	書き慣れる
飞惯（飛ぶ－慣れる）	飛び慣れる	住惯（住む－慣れる）	住み慣れる
讲惯（話す－慣れる）	話し慣れる	找惯（探す－慣れる）	探し慣れる
骂惯（叱る－慣れる）	叱り慣れる	争惯（争う－慣れる）	争い慣れる
摸惯（触る－慣れる）	触り慣れる	挖惯（掘る－慣れる）	掘り慣れる
摇惯（ゆする－慣れる）	揺すり慣れる	抽惯（吸う－慣れる）	吸い慣れる
坐惯（座る－慣れる）	座り慣れる	染惯（染める－慣れる）	染め慣れる
照惯（撮る－慣れる）	撮り慣れる	吃惯（食べる－慣れる）	食べ慣れる
弯惯（屈める－慣れる）	屈め慣れる		

上記の三つの表から分かるように、中国語はもちろん、日本語でも V2 に生理的・心理的状態変化を表す「飽きる」／“膩”（飽きる）や「疲れる」／“累”（疲れる）、「慣れる」／“慣”（慣れる）をとる結果複合動詞は生産的である。これはなぜであろうか。この問題を説明するため、まず英語の心理的な述語の特徴を見ておこう。

Pustejovsky (1995) によると、bore や anger のような心理的な述語は、ある人が直接にあることを経験し、その結果として、その人が bored または angry の状態へ変わることを表す。すなわち、英語では、bore または anger のような心理的述語のクオリア構造には、形式クオリア以外に、状態を引き起こす主体クオリアまでが含まれている。その意味構造は (71) のようになる。具体的に、anger を例に構造を見よう。

(70) EXPERIENCED CAUSTATION:

$$\left[\text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \alpha_{\text{result}} (e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \alpha_{\text{act}} (e_1, x, \dots) \end{array} \right] \right]$$

(Pustejovsky 1995 : 210)

(71) a. The newspaper angered John. (Pustejovsky 1995 : 209)

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{anger} \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1 : \text{process} \\ E_2 = e_2 : \text{state} \\ \text{RESTR} = <_{\circ} \infty \\ \text{HEAD} = e_1 \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG}_1 = \boxed{1} \left[<\boxed{2}, <e_1, t>> \right] \\ \text{ARG}_2 = \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \text{animate_ind} \\ \text{FORMAL} = \text{physobj} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{experiencer_lcp} \\ \text{FORMAL} = \text{angry} (e_2, \boxed{2}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{exp_act}(e_1, \boxed{2}) \end{array} \right] \end{array} \right]$$
 (Pustejovsky 1995 : 211)

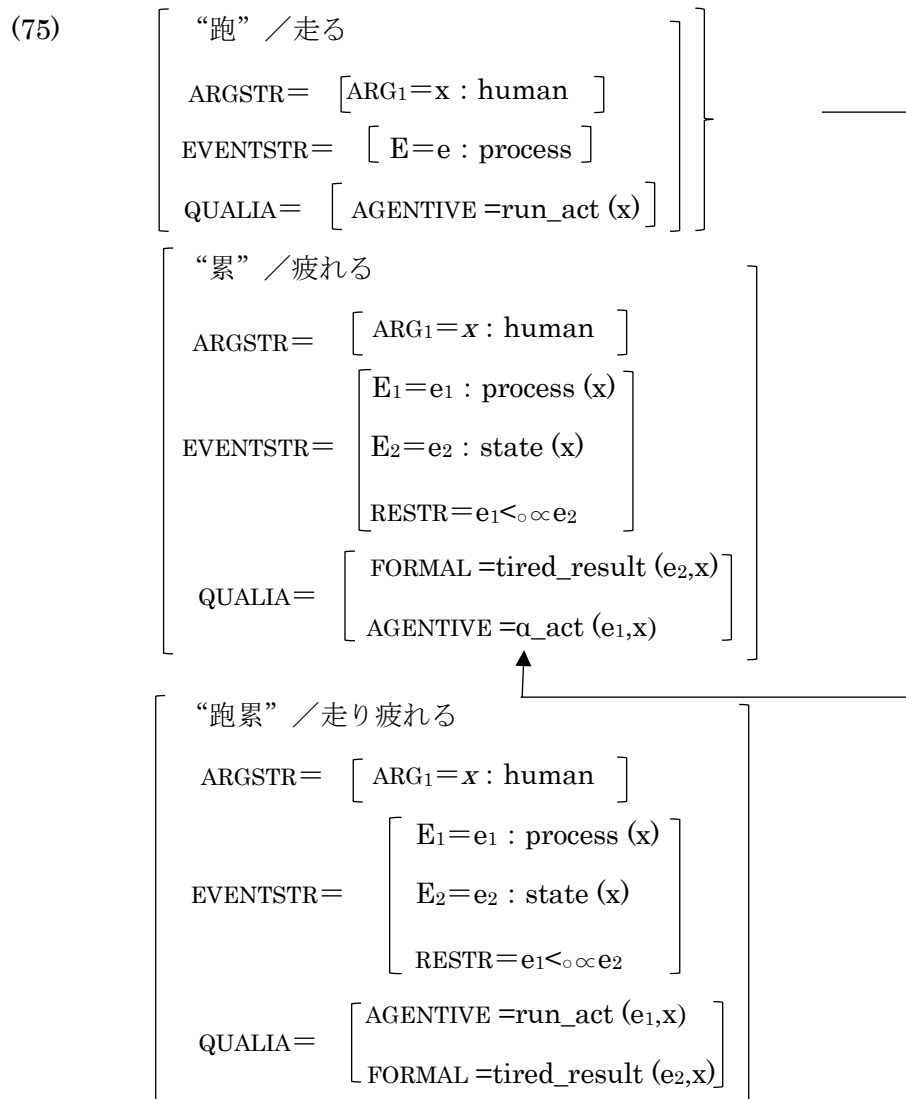
(71b) では、**anger** のような心理的な述語のクオリア構造は形式クオリアのみならず、状態を引き起こした主体クオリアまで含んでいる。それと同時に、**anger** の主語の位置にイベント機能 (event function) を持つ項も必要となる。(71a) で主語の位置に現れているのは **newspaper** という物質名詞であるが、この文は **John** が新聞紙を読むことにより、怒るという意味である。なぜこのような解釈ができるのか。それは **newspaper** の目的クオリアの **read** は **anger** が要求するイベントになり得るので、タイプ強制により、「新聞を読む」という解釈が生じる。そして、 e_1 と e_2 の間にある時間順については、Pustejovsky (1995) は **anger** のような述語では、 e_1 は e_2 より先に起こり、かつ、そのイベントが終わらないうちに、 e_2 が起こるという。

日本語や中国語では、人の生理・心理的な変化を表している動詞「飽きる」／“膩” (飽きる) や「疲れる」／“累” (疲れる)、「慣れる」／“慣” (慣れる) も上述の **anger** や **bore** などの英語の心理動詞と同じクオリア構造を持つと思われる。日本語と中国語に、(71a) と似た現象が観察されるからである。

- (72) a. そのカレーに、私はもう飽きた。
 b. 那 種 咖喱, 我 已经 膩 了。
 nà zhǒng kā lí wǒ yǐ jīng nì le
 その 種類 カレー 私すでに 飽きる LE
- (73) a. 彼女の声に、私はもう慣れた。
 b. 她 的 声音, 我 已经 慣 了。
 tā de shēng yīn wǒ yǐ jīng guàn le
 彼女 の 声 私すでに 慣れる LE
- (74) a. この仕事で、私は疲れた。
 b. 这个 工作 真是 累 人。
 zhè gè gōng zuò zhēn shì lèi rén
 この 仕事 本当に 疲れる 人
 「この仕事は本当に人を疲れさせた。」

(72) と (73) では、私が「飽きた」または「慣れた」のはカレーや彼女の声のように見えるが、実際には「カレーを食べる」ことに飽き、「彼女の声を聞く」ことに慣れたことを表している。ここではタイプ強制により、カレーや声の目的クオリアが動詞に読み取られているのである。同様に、(74) では疲れた原因は仕事ではなく、仕事をするにある。

そのため、これらの語のクオリア構造では、形式クオリア以外に、その状態が変化する原因を示す主体クオリアまでも含まれる。例えば「走り疲れる」／“走累”（走る－疲れる）の意味構造は (75) で示すことができる。V2「疲れる」、「累」（疲れる）の意味構造では、主語 *x* があるイベントを行った結果、*x* が疲れた状態になることは表されているものの、どのようなイベントかは指定されていない（これを α で示した）ので、文脈などからそこに代入することができる。(75) では、V1 である「走る」が α の位置に挿入されることにより、V1 と V2 が 1 つの複合動詞になる。「走り疲れる」では、「疲れる」という状態変化が「走る」というイベントから引き起こされている。ただし日本語では、V2 が「疲れる」「慣れる」「飽きる」以外の心理的・生理的变化を表す動詞では、複合動詞の生産性は非常に低い。例えば、「*聞き怒る」「*食べ喜ぶ」のような複合動詞は成立しない。



(75) の“走累”／「走り疲れる」と同様に、(76) の“吃膩”（食べる－飽きる）／「食べ飽きる」も同じく、V1 を V2 の語彙構造に挿入することにより、イベントやクオリア構造の融合が行われる。(76c) の「飽きる」のクオリア構造では、主体クオリアが原因イベントを表しているが、そのイベントは明示されないので、 α で示す。

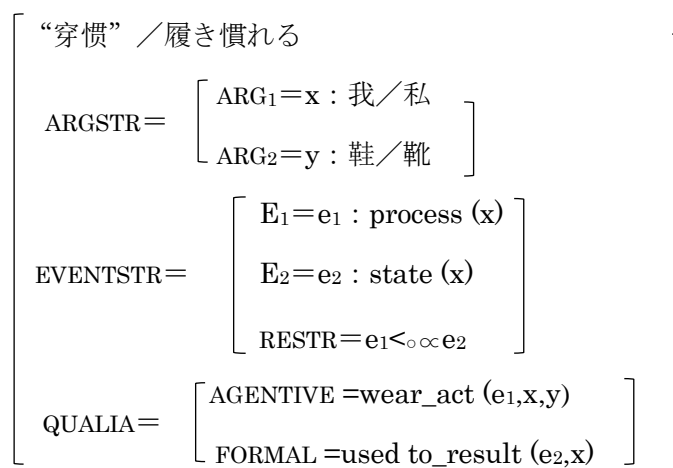
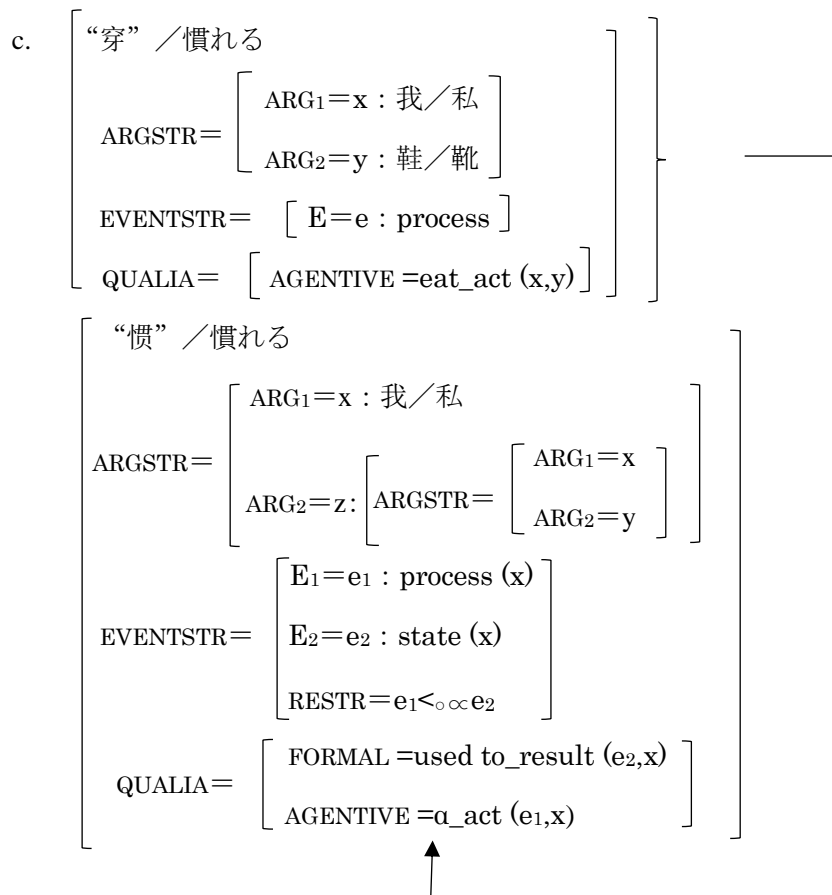
- (76) a. 约翰 吃膩 了 馒头。 (=1)
 yuē hàn chī nì le mán tóu
 ジョー 食べる－飽きる LE マントウ
- b. ジョーはマントウを食べ飽きた。

(77) a. 我 穿惯 了 那 双 鞋。

wǒ chuān guàn le nà shuāng xié

私 穿く－慣れる LE その 量詞 靴

b. その靴を履き慣れた。



4.2.3 「*走る+V2」／“跑”+V2

ここまで、主語指向型結果複合動詞の三つのタイプを見てきた。第一のタイプは前節で見た V2 が生理的・心理的な動詞を取る日中結果複合動詞である。第二のタイプは「他動詞／非能格動詞＋非対格動詞（生理的・心理的動詞を除く）」の組み合わせである。第三は「非対格動詞＋非対格動詞」の結果複合動詞である。ここでは「走る」「跑」（走る）を例に、日中で対応しない例を考察し、日本語で「*走り痩せる」と言えないのに、中国語では“跑瘦”（走る－痩せる）が成立する理由を分析する。

V1 が他動詞か非能格動詞である日本語の結果複合動詞では、V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果の一つと一致すれば、V1 と V2 が複合動詞を作られるが、一致しなければ作られない。一方、中国語の結果複合動詞では、このような制約がなく、V2 は V1 に引き起こされる結果だと考えるにくい場合でも、百科事典的な知識や文脈情報の力を借りることにより、V1 と V2 の間の関係を繋ぐことができる。

(78) は、中国語では可能だが、対応する日本語の結果複合動詞が存在しない。“跑热”（走る－熱い）、“跑饿”（走る－空腹だ）および“跑渴”（走る－喉が渇く）では、V2 の“热”（熱い）、“饿”（ひもじい）、“渴”（喉が渇く）に相当する単純動詞が日本語にないからという理由で説明できる。しかし、“瘦”には対応する単純動詞「痩せる」があるにもかかわらず、日本語では「*走り痩せる」とは言えない。これはなぜであろうか。

(78) 跑热（走る－熱い）

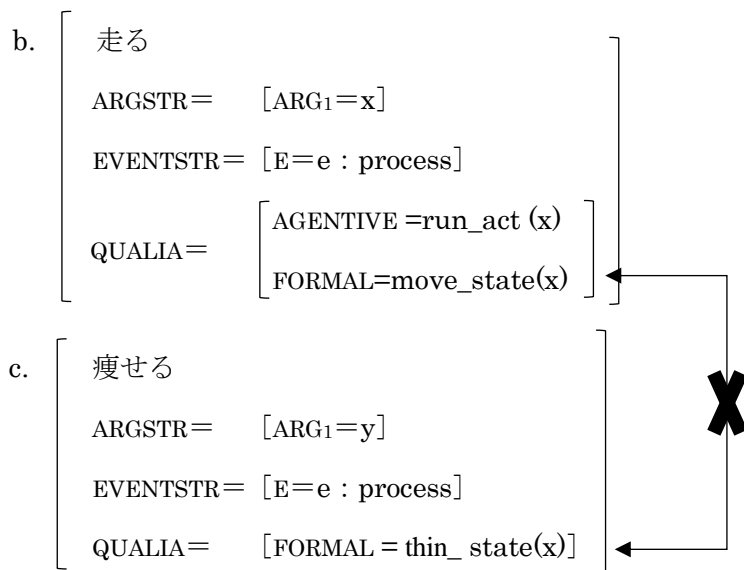
跑饿（走る－お腹が空いた）

跑渴（走る－喉が渇く）

跑瘦（走る－痩せる）

日本語の「走る」には「足をすばやく動かして移動する」という意味がある。すなわち、「彼が走った」と言うと、特殊な情況を除き、「彼は移動した」と解釈される。また史 (2013) は、「走る」は移動を伴う様態動詞で、その語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) は (79a) のようになるとする。これを語彙構造で表すと (79b) のようになる。それに対して、(79c)「痩せる」の形式クオリアは移動と関係なく、体が細くなるという状態を表しているだけであるので、「走る」とは複合しにくい。

(79) a. [[x ACT<manner>] CAUSE [x MOVE]] (史 2013 : 53)



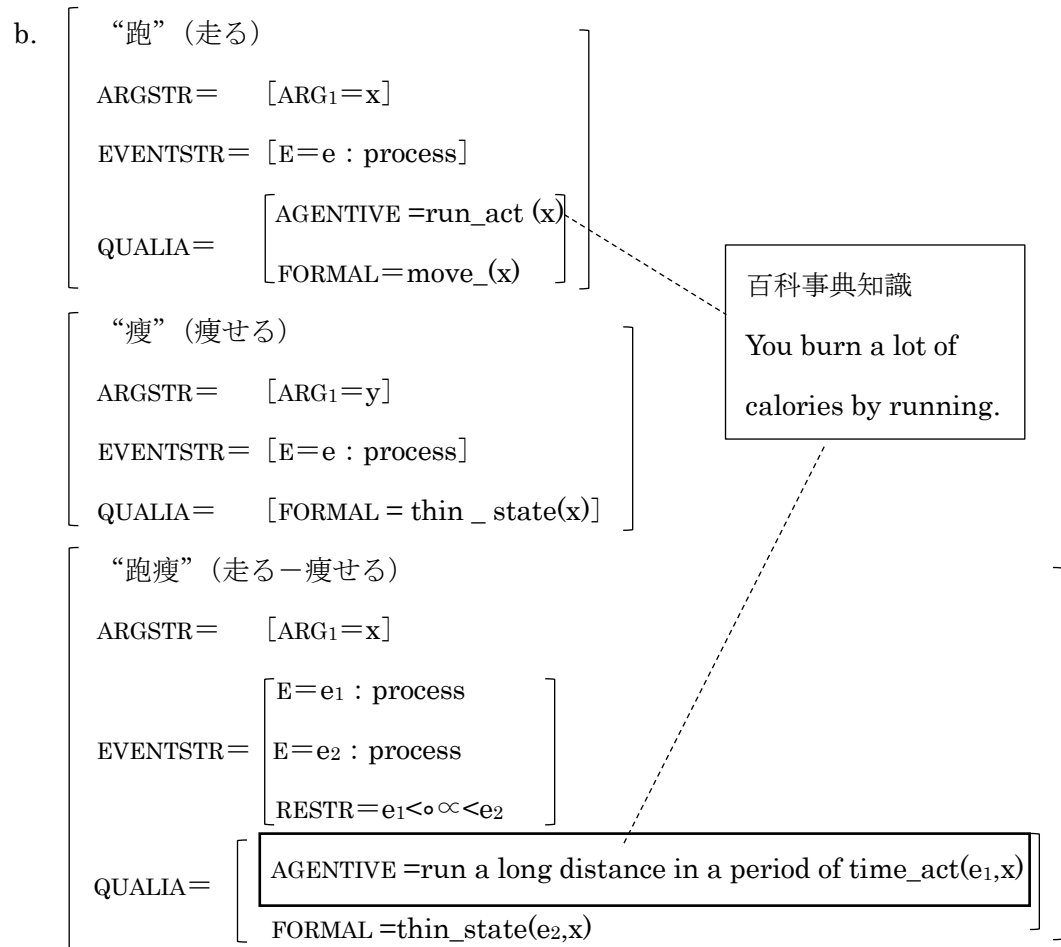
他方、中国語の“跑瘦”（走る－痩せる）は目的語指向型と同じく、百科事典的な知識や文脈を通じて、この二つのイベントを繋ぐことができる。(80b) が示しているように、“跑”（走る）と“瘦”（痩せる）の間に、カロリーが消費されるという百科事典的な知識が働くことにより、“跑瘦”（走る－痩せる）と言えるようになる。

(80) a. 他 跑瘦 了 10 斤。 (=3a)

tā pǎoshòu le shí jīn。

彼 走る－痩せる LE 10 量詞

「彼は走って、5 キロ痩せた。」



4.2.4 「V1+落ちる」／V1+“落”

前節では V1 が「走る」「跑」（走る）の結果複合動詞を見た。本節では V2 が「落ちる」「落」（落ちる）を取る結果複合動詞を比較する。日本語の結果複合動詞の中で、「落ちる」を V2 に取るものの数が一番多く、中国語と対応する自動詞もあるからである。

(81) にある日中複合動詞はそれぞれの言語の結果複合動詞リストから取ったものである。これまでは、中国語の複合動詞の数が日本語より多かったが、今回は逆転しており、日本語では 20 例見つかったのに対し、中国語には 1 例しかない。ただし、中国語では、V2 に“落”（落ちる）を取る主語指向型の結果複合動詞は (81b) 以外に、(81c) のような例も存在する。また、(81b) と (81c) の例を合わせて、(81a) と比較すると、対応するもの (82a) と対応しないもの (82b) がある。

- (81) a. あふれ落ちる、崩れ落ちる、こぼれ落ちる、転がり落ちる、したたり落ちる、滑り落ちる、ずり落ちる、ちぎれ落ちる、散り落ちる、流れ落ちる、なだれ落ちる、抜け落ちる、脱げ落ちる、外れ落ちる、離れ落ちる、降り落ちる、燃え落ちる、漏れ落ちる、焼け落ちる、剥げ落ちる
 (日本語結果複合動詞リスト)
- b. 崩落 (崩れる－落ちる) (中国語結果複合動詞リスト)
- c. 洒落 (こぼれる－落ちる)、滴落 (滴る－落ちる)、
 滚落 (転がる－落ちる)、滑落 (滑る－落ちる)、凋落 (散る－落ちる)、
 脱落 (抜ける／外れる／脱げる－落ちる)、剥落 (はげる－落ちる)

(82a) と (82b) の例は日中対応するものであるが、(82b) では「燃え落ちる」と「焼け落ちる」の V2 は“落” (落ちる) ではなく、“塌” (倒れる) と対応する。

- (82) a. 崩れ落ちる－崩落 (崩れる－落ちる)
 こぼれ落ちる－洒落 (こぼれる－落ちる)、
 したたり落ちる－滴落 (滴る－落ちる)
 転がり落ちる、転げ落ちる－滚落 (転がる－落ちる)
 滑り落ちる、ずり落ちる－滑落 (滑る－落ちる)
 散り落ちる－凋落 (散る－落ちる)、
 抜け落ちる、脱げ落ちる、外れ落ちる－脱落 (抜ける／外れる／脱げる－落ちる)
 剥げ落ちる－剥落 (はげる－落ちる)
- b. 燃え落ちる、焼け落ちる－烧塌 (焼ける－倒れる)

次に、(81) にある日中結果複合動詞の対応しない原因を考えよう。(83a) から (83c) の中国語では、日本語複合動詞の V1 と対応する自動詞がないためである。例えば、「なだれ落ちる」は、中国語には“像雪崩一样落下来” (なだれのように落ちてくる) という文で対応する。(83d) から (83f) では、日本語の結果複合動詞に対し、中国語では結果複合動詞ではなく、「動詞＋方向補語」という形になっている。「あふれ落ちる」の V1 「溢れる」は中国語の“溢” と対応するが、中国語では、“溢” (溢れる) という言い方がなく、その後に“出来” が付けられ、「溢れ落ちる」と対応している。

- (83) a. なだれ落ちる－像雪崩一样落下来（なだれのように落ちる）、
 b. 離れ落ちる－被分离落下来（離されて、落ちる）
 c. ちぎれ落ちる－被扭下来（捻られて落ちる）
 d. あふれ落ちる－溢出来（溢れてくる）
 e. 漏れ落ちる－漏出来（漏れてくる）
 f. 流れ落ちる－流下来（流れてくる）

(81a) に示したように、「V1+落ちる」の複合動詞には 20 個ある。次に多い「非対格動詞+非対格動詞（心理的・生理的な動詞を除く）」という組み合わせは、V2 に「落ちる」／“落”（落ちる）を取るものであった。ただし、日本語では他の組み合わせはほとんど無い。例えば、“跌倒”（転ぶ - 倒れる）は中国語では問題なく言えるが、「*転び倒れる」は言えない。この理由については今後の課題としたい。

4.3 まとめ

主語指向型の日中結果複合動詞は、対応しやすいタイプと対応しにくいタイプに分けることができる。それぞれのタイプの具体的な特徴は下記の 2 点にまとめられる。

1) V2 が「～疲れる」／“～累”、「～飽きる」／“～膩”、「～慣れる」／“～慣”のような生理的・心理的な動詞を取るときには、日中結果複合動詞の生産性も対応率もともに高い。生理的・心理的動詞の語彙構造では、状態を示すイベント以外に、その状態変化を引き起こすもう一つのイベントが要求される。また、そのイベントに関する具体的なことが指定されていないため、様々な動詞をそこに挿入することができる。「～疲れる」／“～累”、「～飽きる」／“～膩”、「～慣れる」／“～慣”は日本語と中国語で共通性が高いと言える。

2) 日本語では、V1 は他動詞、非能格動詞または非対格動詞を取り、V2 は生理的・心理的以外の非能格動詞を取る主語指向型の結果複合動詞は少ない。特に、V1 に他動詞また非能格動詞を取る例は非常に少なく、中国語の結果複合動詞とも対応しにくい。その原因は日本語では、目的語指向型と同様に、V1 が V2 と共合成する時に、V1 の慣習的な結果は V2 の形式クオリアを含まなければならないのに対し、中国語の結果複合動詞ではそのような制約がないためである。中国語では、V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果の一つであると考えられない場合は、文脈や百科事典的な知識を通じて、V1 と V2 を繋ぐことができる。

上記の内容を図 4 にまとめる。

図 4

因果関係	クオリア	項	中国語	日本語
直接的 因果関係		一致	走累（走る－疲れる） 走膩（走る－飽きる）	走り疲れる 走り飽きる 走り飽きる
	一致	一致	崩落（崩れる－落ちる） 吃饱（食べる－満腹だ）	崩れ落ちる 泣きぬれる
	不一致	一致	跑瘦（走る－痩せる）	*走り痩せる
間接的 因果関係	不一致	一致	醉死（酔っ払う－死ぬ）	*酔い死ぬ

表 4 にあるように、主語指向型の日中結果複合動詞において、対応するタイプも対応しないタイプも、V1 と V2 の間に、項の共有がある。そのため、日本語の複合動詞は成立するかどうかは、クオリア構造の一致にかかっている。

“跑累”（走る－疲れる）／「走り疲れる」、 “跑膩”（走る－飽きる）／「走り飽きる」、 “跑慣”（走る－慣れる）／「走り慣れる」では、V2 が生理的・心理的な動詞を表し、その語彙構造では、常に一つの原因イベントが要求される。このとき、V1 の“跑”（走る）／「走る」は動作動詞であり、上記の“累”／「疲れる」、 “膩”／「飽きる」、 “慣”／「慣れる」の要求するものと合致し、V1 を V2 の語彙構造にそのままに入れることができる。

日本語では、「泣き濡れる」や「崩れ落ちる」などのような組み合わせを持つ複合動詞はそれほど多くないが、これらの複合動詞において、V1 は V2 と複合する際に、V1 の慣習的な結果が V2 と一致すること、あるいは V1 から V2 を簡単に推測できなければならない。「*走り痩せる」のような V1 の慣習的な結果と V2 の形式クオリアが一致しなければ、項が共通しても V1 と V2 を複合することができない。

最後に、“醉死”（酔っ払う－死ぬ）と「*酔っ払い死ぬ」では、V1 は V2 の直接的な原因ではなく、「発病する」というイベントが「死ぬ」の直接的な原因であると考えられるため、日本語では、「*酔っ払い死ぬ」は成立しない。

第 5 章 結論

5.1 論文内容のまとめ

本研究は生成語彙論の枠組に基づき、英語の結果構文を参考にしながら、日中結果複合動詞のリストを作成したうえで、日中結果複合動詞における意味制約、また対応するタイプと対応しないタイプの原因及び特徴を体系的に考察し、その結果、中国語の結果複合動詞と日本語の結果複合動詞の生起条件が異なっていることを発見した。

以下、5.1.1 節では語彙情報と文脈情報などと複合動詞の形成の関係についてまとめる。

5.1.2 節では、目的語指向型の日中結果複合動詞を、5.1.3 節では主語指向型の日中結果複合動詞についてふりかえる。

5.1.1 直接的な因果関係と間接的な因果関係

第 2 章では、様々な先行研究に基づき、英語の結果構文、日中結果複合動詞の分類およびそれらの意味制約を検討した。その上で、日中結果複合動詞を「主語指向型」と「目的語指向型」に分け、それぞれの対応状況及び特徴を第 3 章と第 4 章で述べた。

まず、英語の結果構文にある「直接的な因果関係」という意味制約について、日中結果複合動詞にも適用されるかどうかを考察した。Goldberg (1991) や Rappaport Hovav & Levin (2001) は、英語の結果構文では行為と状態の間に直接的な因果関係がなければならず、V1 と V2 の間にもう一つのイベントを挿入することをできないと述べている。例えば Goldberg (1995) は *He ate himself sick*. という文において、彼女が *sick* になる直接的な原因は *sick* になるまでずっと食べ続けることだとしている。しかしながら、中国語の結果複合動詞において、“洗破”（洗う－破れる）のような直接因果関係を持たない例が多い。“洗破”（洗う－破れる）では、「洗っている間にねじが服に当たったので、服が破れた」という意味解釈を取る場合は、V1 の“洗”（洗う）と V2 の“破”（破れる）の間にはもう一つのイベント「ねじが服に当たる」が挿入されることになる。そのため、中国語では、英語の結果構文に働いている「直接的な因果関係」制約を満たす必要がないと考えられる。これを図 1 と図 2 で示す。

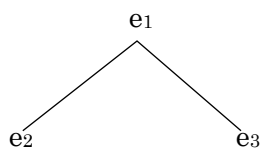


図 1 直接因的な因果関係：動作自体の力で結果を引き起こす

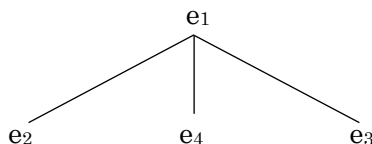


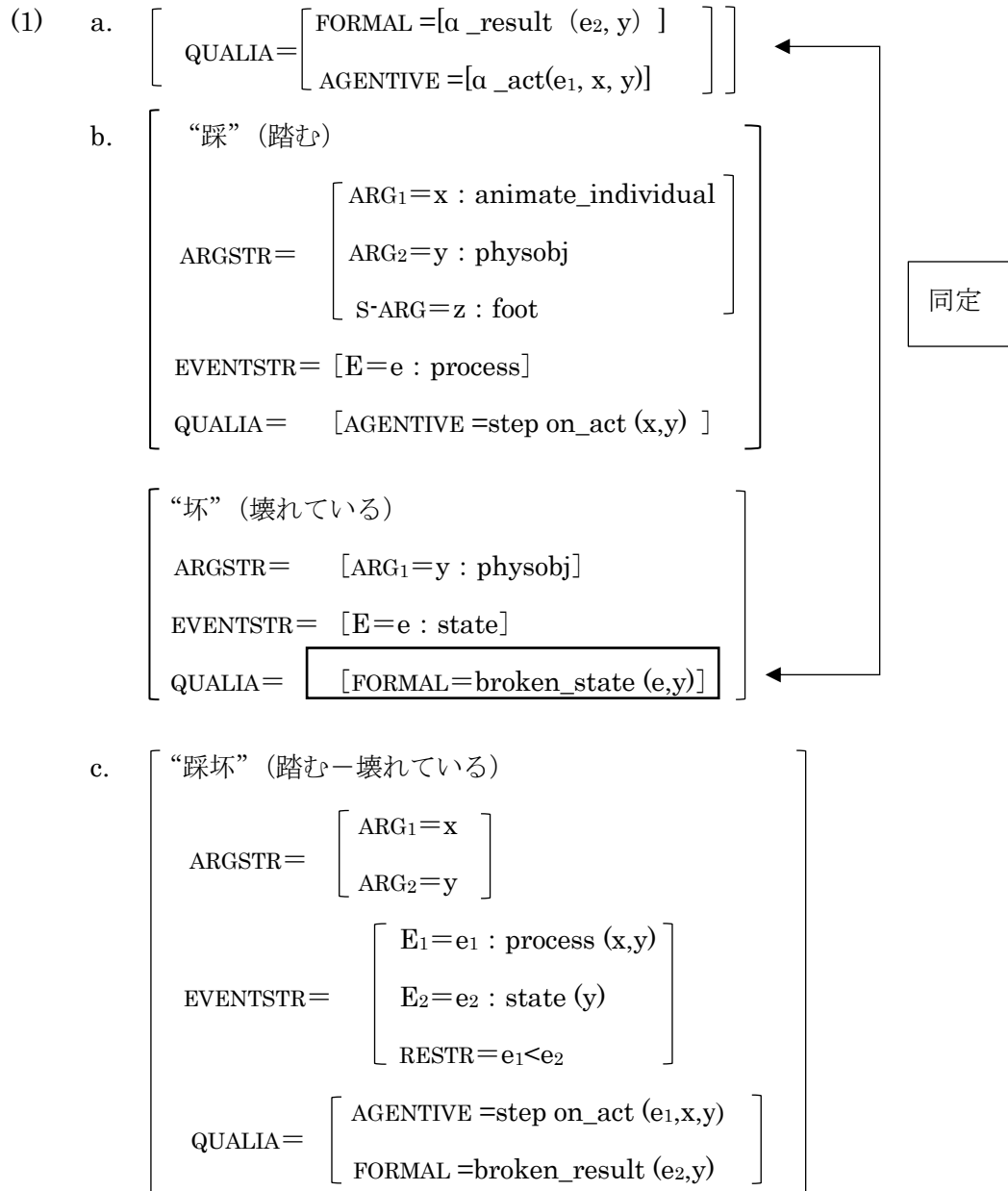
図 2 間接的な関係

一方、日本語では、V1 と V2 の間にもう一つのイベントを挿入することができず、「*洗い破る」のような例は成り立たない。したがって、中国語の結果複合動詞とは異なり、日本語の結果複合動詞は英語の結果構文と同様に、V1 と V2 の間に、直接的な因果関係がなければならない。

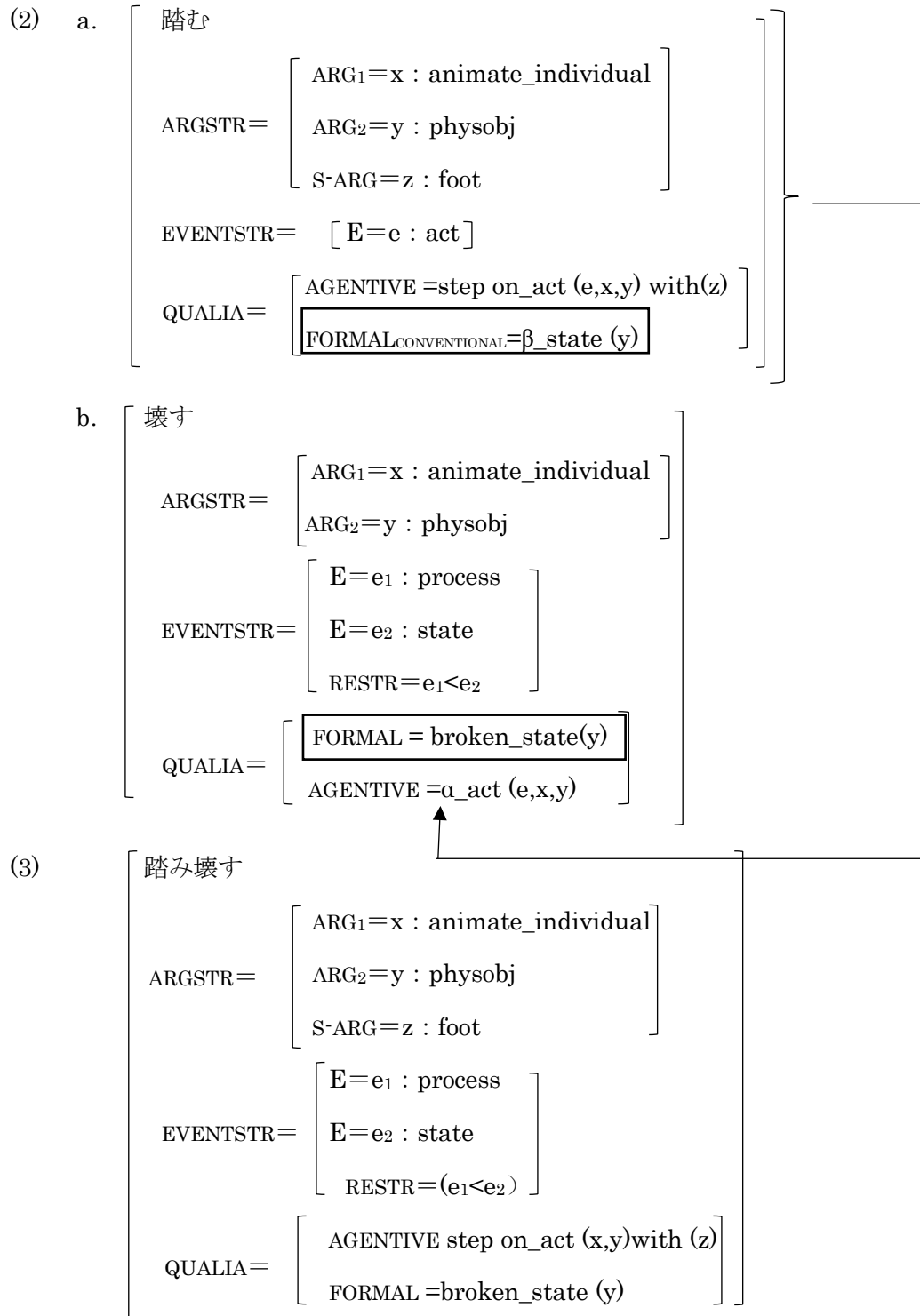
5.1.2 目的語指向型の日中結果複合動詞

第 3 章では、V2 が目的語の状態を叙述する「目的語指向型」の日中結果複合動詞について、項構造・イベント構造・クオリア構造の視点から、「目的語指向型」の日中結果複合動詞の対応するタイプと対応しないタイプの特徴を分析した。まず、「踩坏」（踏む－壊れている）、「踏み壊す」のようなものはプロトタイプである。なぜならば、これらの結果複合動詞では、V1 と V2 の間に、内項が共有され、またクオリア構造も一致するという二つの特徴を持ち、日中の結果複合動詞と英語の結果構文のほとんどが対応するからである。

(1) では、V1 “踩”（踏む）は動作主と被動作主の二つの項を持ち、事象構造は **process** で、主体クオリアは **x** が **y** を足で踏むことを表す。V2 “坏”（壊れている）の構造を見ると、項が 1 つしかなく、事象構造は **state** であるとともに、形式クオリアは被動作主が壊れた状態にあることを示している。中国語の複合動詞の形成過程は英語の結果構文と同じで、まず使役事象スキーマの形式クオリアは“坏”（壊れている）と同定される。それにより、V1 のクオリアと V2 のクオリアの間に共合成が行われた後、V1 がその複合動詞に組み込まれる。



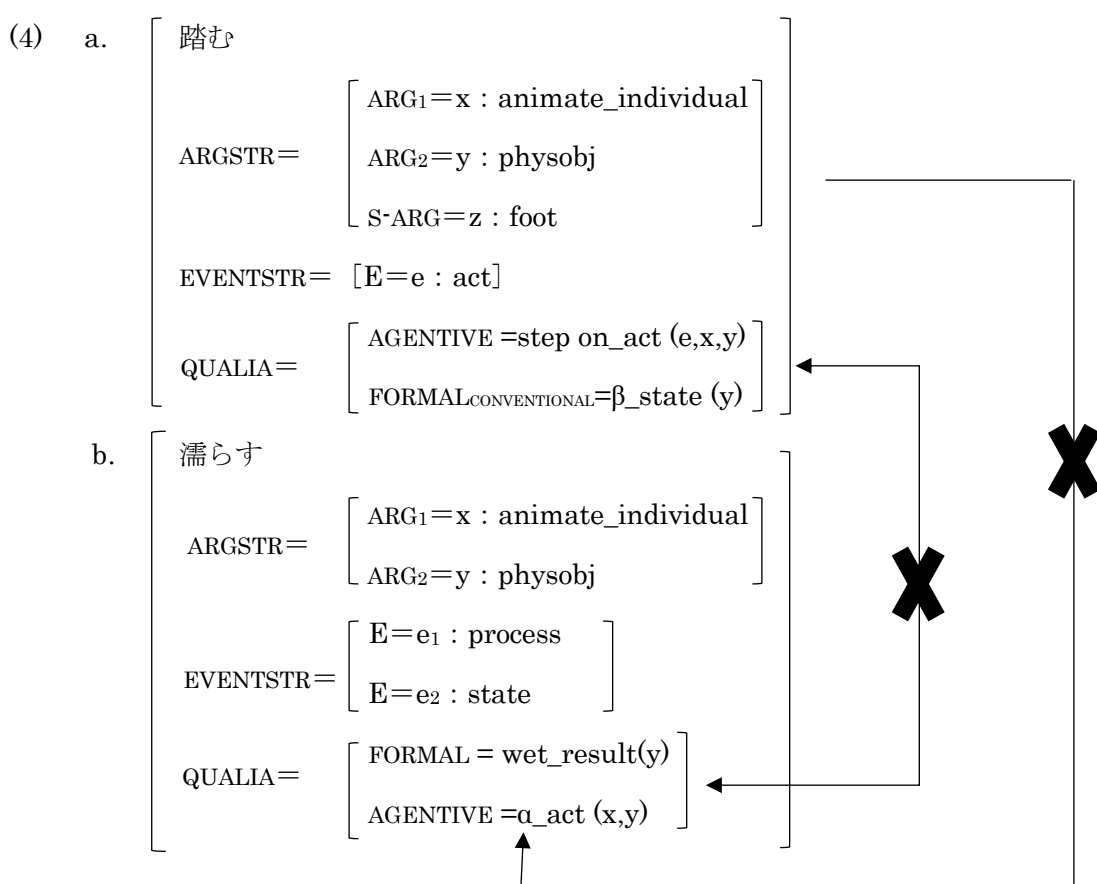
それに対して、目的語指向型の日本語の結果複合動詞では、V2 自身がすでに使役関係を持つ。したがって、中国語の結果複合動詞や英語の結果構文と異なり、日本語の結果複合動詞のクオリア構造は V1 のクオリア構造と V2 のクオリア構造を合成するのではなく、V1 の主体クオリアをそのまま V2 の主体クオリアと同定することになる。ただし、同定に際して、英語の結果構文と同様に、同定される V1 の慣習的な結果の一つが V2 の形式クオリアと一致しなければならないという条件を満たさなければならない。



(2) では、V1「踏む」と V2「壊す」は外項も内項も共通する。さらに、「足からの強い力の作用で生じた形または状態の変化」（それを $\text{FORMAL}_{\text{CONVENTIONAL}} = \beta$ で示す）は「踏む」の慣習的な結果だと考えられると同時に、「壊す」の形式クオリアは y が **broken** の状態になることを示す。これは「踏む」の慣習的な結果として矛盾しない。すなわち、ある物が動作

主の足から力を受け、形などを崩すことは推測できるので、「踏む」と「壊す」を組み合わせることができる。(3)はその語彙構造を表示している。

日中結果複合動詞では対応しない例もある。一つには、日本語では「関節的な因果関係」は許されないという制約が適用されるためであるが、それ以外に、日本語ではクオリア構造が一致しなければならないという条件も関わっている。すなわち、V1はV2の直接的な原因であっても、V1の慣習的な結果または形式クオリアがV2と一致しなければ、V1とV2を複合することはできないのである。(4)はその具体例である。



(4)の「*踏み濡らす」のような複合動詞では、V1とV2の外項と内項が共有され、「踏む」は「濡らす」を直接引き起こしている。しかし、「濡らす」は、xがyに作用することによって、yが濡れた状態に変化することを意味するが、これは「踏む」ことから予想される結果、つまり「足からの強い力の作用で行われた形また状態の変化」と一致していないから、「踏む」と「濡らす」を複合することはできない。

次に、中国語の結果複合動詞が疑似目的語を取る条件を、3つの場合に分けて検討した。まず V1 が他動詞または非能格動詞で、直接的な因果関係を表す場合、疑似目的語の目的クオリアに V1 が含まれている必要がある。第二に V1 が非対格動詞である場合は、疑似目的語は主語の部分でなければならない。第三に、間接的な因果関係を持つ複合動詞では、挿入されるイベントにより、疑似目的語として認可される。それぞれの例は以下のようになる。

- (5) a. 跑步者 跑-薄 了 路面。
 pǎo bù zhě pǎo-báo le lù miàn
 ジョギングする人 走る-薄い LE 路面
 「ジョギングする人が走って、路面が薄くなった。」

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{路面 (路面)} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{constit_of}(x : \text{pavement}, y : \text{stones}) \\ \text{FORMAL} = \text{road}(x) \\ \text{TELIC} = \text{walk/run on}(x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{pave_act}(z : \text{human}, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

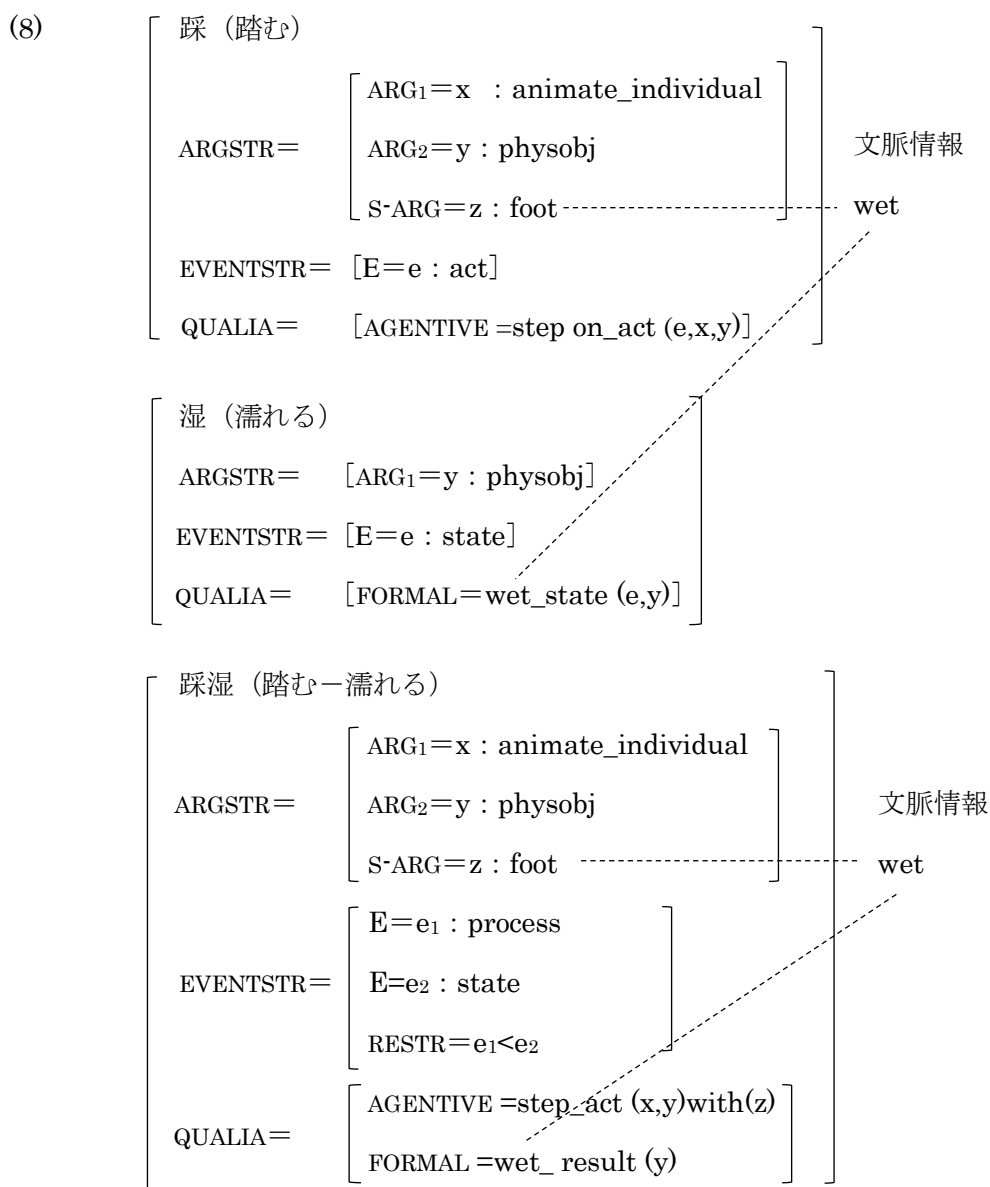
- (6) a. 西瓜 滚破 了 皮
 xī guā gǔn pò le pí
 スイカ 転がる-割れる LE 皮
 「スイカが転がって皮が割れた。」

- b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{皮} \\ \text{QUALIA} = [\text{CONST} = \text{part_of}(x : \text{rind}, y : \text{watermelon})] \end{array} \right]$$

- (7) a. 他 从 山 上 跑 下来 时, 挂 到 了
 tā cóng shān shàng pǎo xià-lái shí guà dào le
 彼 から 山 上 走る XIALAI 時に 引っかかる DAO LE
 树枝, 跑-烂 了 他 的 裤子。
 shù zhī pǎo-làn le tā de kùzi
 枝 走る-ボロボロ LE 彼 の ズボン

「彼は山の上から走ってきた時に、枝に引っかかったので、ズボンがボロボロになった。」

最後に、英語の結果構文と日本語の結果複合動詞は直接的な因果関係を持たなければならないが、V2 は V1 の慣習的な結果の一つとして考えられず、かつ V1 と V2 の間に直接的な因果関係を持たない場合でも、中国語では百科事典知識や文脈を通して、結果複合動詞を作ることができることを示した。

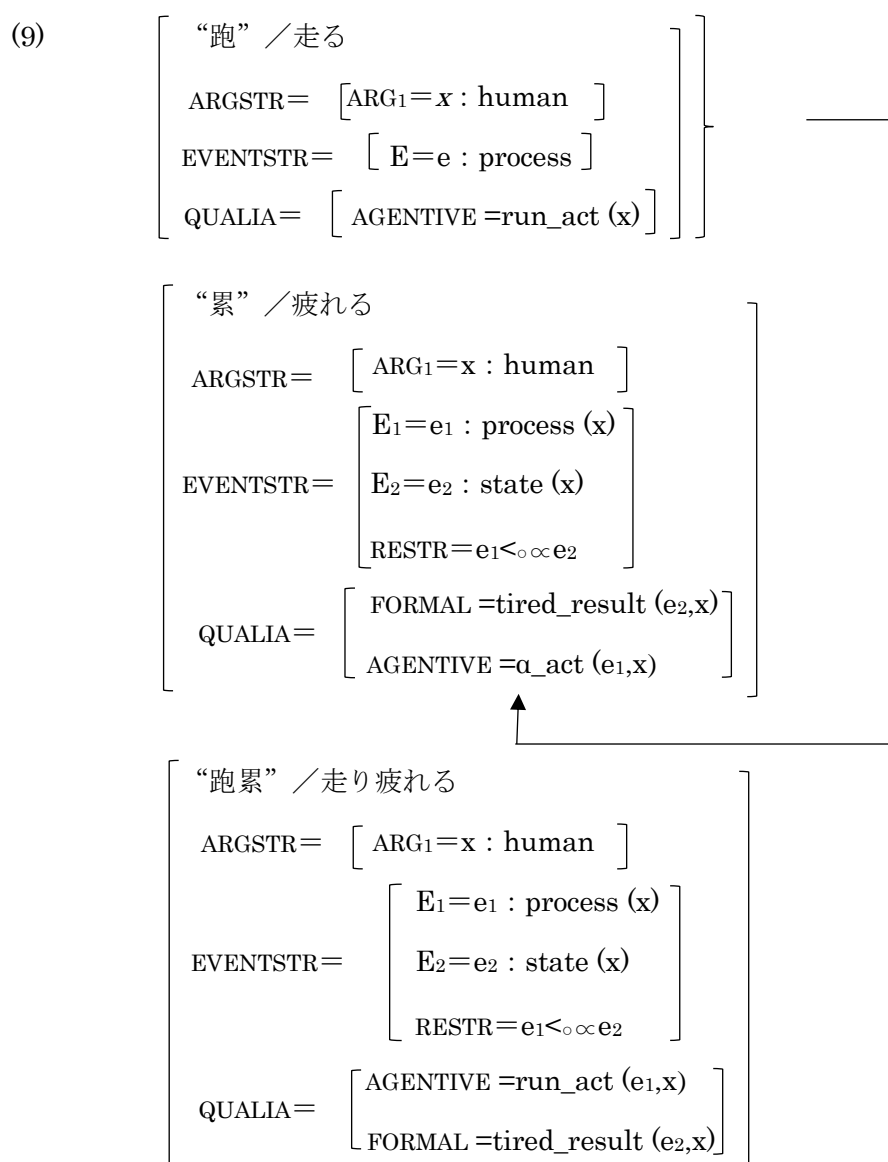


普通の状況では、何かを踏んで、それが濡れることはない。ただし、(8) が示しているように影の項である「足」に文脈情報から推論される「濡れている」という状況を“蹂湿”（踏む－濡れる）の項構造に挿入すると、V1 と V2 を繋ぐことができ、“蹂湿”（踏む－濡れる）は問題なく言えるようになる。

5.1.3 主語指向型の結果複合動詞

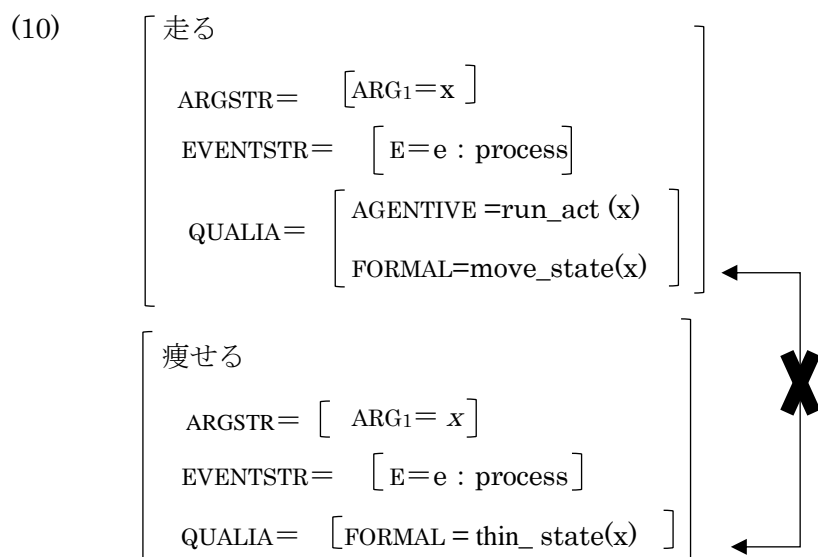
第4章では、主語指向型の日中結果複合動詞の対応状況を分析した。目的語指向型と同様に、主語指向型の日中結果複合動詞にも対応しやすいタイプと対応しにくいタイプがある。

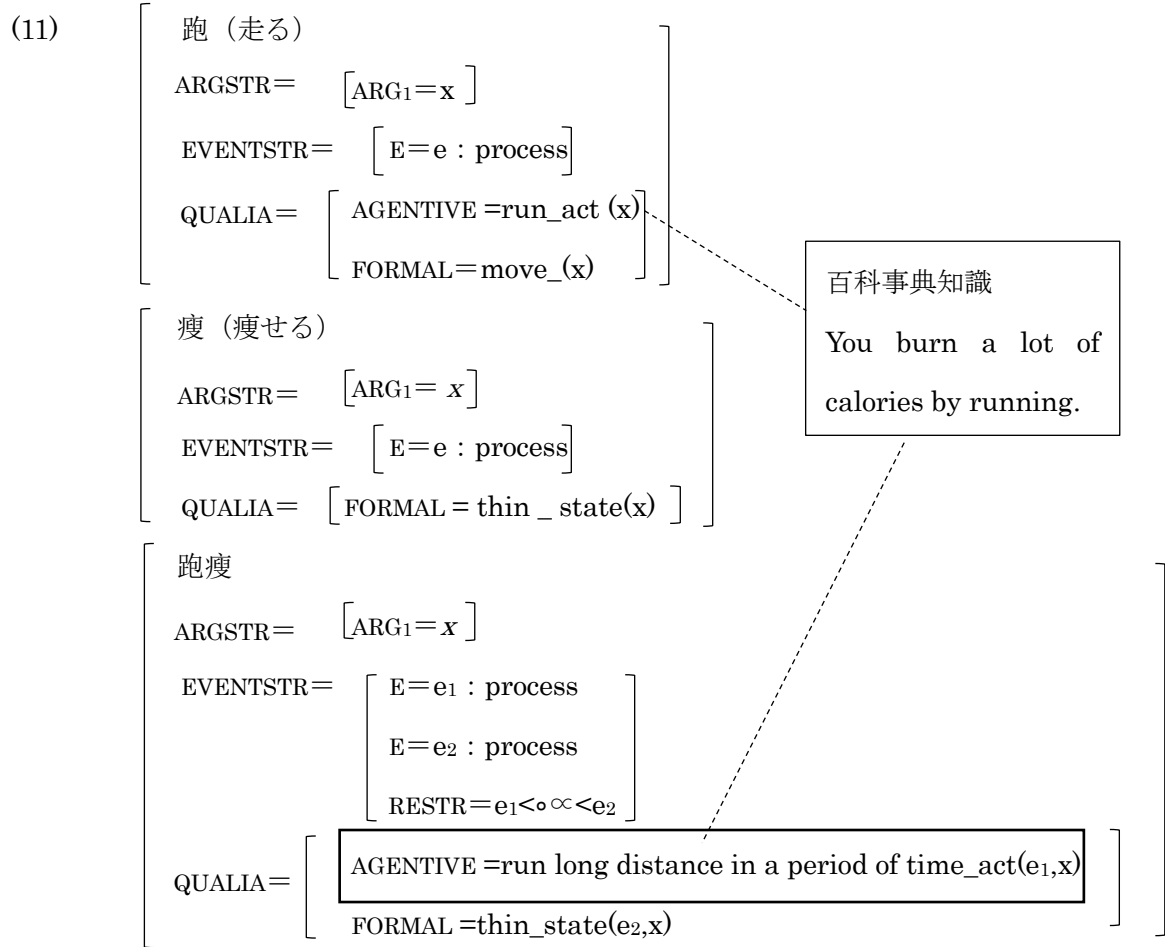
V2が「～疲れる」 / “～累”、「～飽きる」 / “～膩”、「～慣れる」 / “～慣”のような生理的・心理的な変化を表す動詞の場合、日中結果複合動詞は対応しやすい。生理的・心理的変化動詞の語彙構造では、状態変化を表すイベント以外に、その状態変化を引き起こすもう一つのイベントが要求されるからである。また、そのイベントに関する具体的なことは指定されていないため、様々な動詞をそこに挿入することができる。したがって、日中で結果複合動詞が対応しやすい。



(9) の“跑累”（走る－疲れる）／「走り疲れる」では、V1 の外項と V2 の内項を共有している。また V2 「疲れる」、「累」（疲れる）のクオリア構造において、主語 x があるイベントを行った結果、 x が疲れた状態になることが表されている。どのようなイベントかは無指定である（これを α で示した）が、文脈などからそこに挿入することができる。(9) では、V1 である「走る」が α の位置に挿入されることにより、V1 と V2 を組み合わせることができる。

続いて、日本語では成立せず、中国語でのみ結果複合動詞として成立する例を見て見よう。日本語では、V1 は他動詞、非能格動詞または非対格動詞を取り、V2 は生理的・心理的变化以外の非対格動詞を取る主語指向型の結果複合動詞は多くない。特に、V1 が他動詞または非能格動詞の例は非常に少ない。目的語指向型と同様に、日本語では V1 が V2 と共合成する時に、V1 の慣習的な結果に V2 の形式クオリアが含まれていなければならないからである。それに対して中国語の結果複合動詞ではこのような制約がない。V2 の形式クオリアが V1 の慣習的な結果の一つであると考えられない場合は、文脈や百科事典的な知識を通じて、V1 と V2 を繋ぐことができる。





(10) で示したように、移動様態動詞である「走る」の形式クオリアは移動であり、これは「痩せる」の形式クオリアと一致しないので、「*走り痩せる」は成立しない。一方、(11) の“跑瘦”（走る－痩せる）は目的語指向型と同じく、百科事典的な知識や文脈を通じて、この二つのイベントを繋ぐことができる。“跑”（走る）と“瘦”（痩せる）の間に、カロリーが消費されるという百科事典的な知識が働くことにより、“跑瘦”（走る－痩せる）と言えるようになる。

5.2 今後の課題

本研究は日中結果複合動詞を体系的に考察したが、一部の日中結果複合動詞については、分析がまだ不十分である。例えば、第4章で述べたように、V2は“累”／「疲れる」、 “膩”／「飽きる」、 “慣”／「慣れる」などの心理的・生理的な結果複合動詞について、V2のクオリア構造には常に一つのイベントが要求されているから、V1は動作動詞であれば、その語のイベント構造に差し込むことができる。ところが、V2を上述した以外の“怒”／「怒る」、

“乐”／「喜ぶ」などの心理的・生理的の動詞に変えると、中国語では可能であるが、日本語では成立しない。

(12) a. 这 场 电影 把 观众 都 看怒 了。

zhè chǎng diàn yǐng bǎ guān zhòng dōu kàn nù le

この 量詞 映画 BAI 観客 すでに 見る－怒る LE

「観客がこの映画を見て、怒った。」

b. *観客はその映画を見怒った。

(13) a. 我 听 这 个 故事 听乐 了。

wǒ tīng zhè gè gù shì tīng lè le

私 聞く この 量詞 物語 聞く－喜ぶ LE

「私はこの物語を聞いて、喜んだ。」

b. *私はその物語を聞き喜んだ。

(12) (13) にある“怒”／「怒る」と“乐”／「喜ぶ」では、“膩”／「飽きる」、「慣」／「慣れる」と同じくその語のクオリア構造にも常に怒る、喜ぶなどの状態変化を引き起こすイベントが必要となる。そのため、動作動詞である“看”（見る）と“听”（聞く）はそれぞれに“怒”（怒る）と“乐”（喜ぶ）と複合できるが、日本語では「*見怒る」や「*聞き喜ぶ」などは成立しない。これはなぜなのか。同じ心理的・生理的動詞である“累”／「疲れる」、「膩」／「飽きる」、「慣」／「慣れる」は“怒”／「怒る」、「乐」／「喜ぶ」との間にどのような違いがあるのだろうか。これらの問題に関しては、今後の課題としたい。

参考文献

- 石村 広 (2011) 『中国語結果構文の研究ー動詞連続構造の観点からー』 白帝社.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 67-101, ひつじ書房.
- 小野尚之 (2009) 「結果構文のタイポロジー序説」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 1-42, ひつじ書房.
- 小野尚之 (2012) 「結果構文の意味論」 澤田治美 (編) 『構文と意味』 89-106, ひつじ書房.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点』 くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形と語彙概念構造』 研究社出版.
- 影山太郎 (2004) 「英語結果構文と日本語結果複合動詞における force dynamics」 関西学院大学『人文論究』 54 (1) : 26-40
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識ー語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけてー」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 65-101
- 崔ハンハン (2018) 『構文文法に基づく中国語結果構文の分析』 東北大学博士論文
- 史 曼 (2013) 『事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析』 東北大学博士論文
- 申 亜敏 (2007) 「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラムⅢ』 : 195-229.
- 申 亜敏・望月圭子 (2009) 「中国語の結果複合動詞：日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 407 - 450. ひつじ書房.
- 陳 奕庭 (2015) 『日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムー中国語との比較対照と合わせてー』 神戸大学博士論文
- 陳奕庭・松本曜 (2018) 『日本語語彙的結果複合動詞の意味と体系』 ひつじ書房
- 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄 (2015) 『英語学・言語学用語辞典』 開拓社
- 松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114 : 37-83.
- 三原健一 (2009) 「スケール構造から見る結果構文」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』

- 一』141-170, ひつじ書房.
- 望月圭子 (1990) 「動補動詞の形成」『中国語学』237号: 128-137.
- 望月圭子・申亜敏 (2011) 「日本語と中国語の複合動詞の語形成」『汉日语言对比研究论丛第二辑』2卷: 46-72.
- 森藤庄平 (2011) 「動詞の意味だけでは説明できない英語の結果構文」『愛知工業大学研究報告』46号: 1-11.
- 山口昌也 (2013) 「複合動詞用例データベースの構築と活用」『国語研プロジェクトレビュー』Vol.4, No.1: 61-69
- 山口直人 (1991) 「動補動詞の類型と形成について」『中国語学』238: 115-124.
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」『言語と文化の諸相 —奥田博之教授退官記念論文集—』105-118, 英宝社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房.
- 梁 银峰 (2006) 『汉语动补结构的产生与演变』上海: 学林出版社
- 沈 力 (1993) 「关于汉语结果复合动词中参项结构的问题」『语文研究』第3期: 12-21
- 湯 廷池 (1989) 「词法与句法的相关性: 汉、英、日三种语言复合动词的对比分析」『汉语词法语法续集』147-211 台北: 台湾学生书局.
- 朱 德熙 (1981) 『语法讲义』北京: 商务印书馆.
- 詹 卫东 (2010) 「复合事件的语义结构与现代汉语述结式的成立条件分析」『词-语界面 - 前沿研究及应用』北京: 北京大学出版社.
- Baroni, Marco, Silvia Bernardini, Adriano Ferraresi, and Eros Zanchetta. (2009) The WaCky Wide Web: A Collection of very Large Linguistically Processed Web-crawled Corpora. *Language Resources and Evaluation* 43(3): 209-226.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Boas, Hans C. (2005) Determining the Productivity of Resultative Constructions: A Reply to Goldberg & Jackendoff. *Language* 81(2): 448-464.
- Boas, Hans C. (2011) Coercion and Leaking Argument Structures in Construction Grammar. *Linguistics* 49(6): 1271-1303

- Cheng, Lisa Lai-she and C.-T James, Huang. (1994) On the Argument Structure of Resultative Compounds. In Matthew Y. Chen and Ovid J. L. Tzeng (eds.), *In Honor of William S.Y Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, 187-221. Taipei: Pyramid Press.
- Dowty, David R. (1979) *Word meaning and Montague grammar*. Reidel.Dordrecht.
- Goldberg, Adele E. (1991) A Semantic Account of Resultatives. *Linguistic Analysis* 21(1-2): 66-96.
- Goldberg, Adele E.(1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. and Ray, Jackendoff. (2004) The English Resultative as a Family of Constructions. *Language* 80: 532–568.
- Gu Yang. (1992) *The Syntax of Resultative and Causative Compounds in Chinese*. Docotal dissertation, Cornell University.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy, and Beth Levin. (1999) Scalar Structure Underlies Telicity in ‘Degree Achievement’ *Semantics and Linguistic Theory* 9:127-144.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Shuppan.
- Kennedy, Christopher. (1999) Projecting the Adjectives: *The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*. New York: Garland.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. (2005) Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language* 81, 345-381.
- Klein, Ewan. (1980) A Semantics for Positive and Comparative Adjectives. *Linguistics and Philosophy*, 4:1-45
- Langacker Ronald W. (1987) Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I: *Theoretical Prerequisites*. Stanford CA: Stanford University Press.
- Lee, Ik-Hwan. (2009) Information and Computation: Resultatives as Causal Relations between Events. Proceedings of the 23rd Pacific Asia Conference on. Language, City University of Hong Kong, 29-39.
- Levin, Beth and Malka. Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical*

- Semantics Interface*. Cambridge: MIT Press.
- Levin, Beth. and Malka. Rappaport Hovav. (2013) Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity. In B. Arsenijević, B. Gehrke, and R. Marín (eds.), *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, 49–70. Dordrecht: Springer.
- Li, Yafei. (1990) On VV Compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 177-207.
- Li, Yafei. (1993) Structural Heads and Aspectuality. *Language* 69: 480-504.
- Li, Yafei. (1995) The Thematic Hierarchy and Causativity. *Natural Language and Linguistic Theory* 13: 255-282.
- Pustejovsky, James. (1991) The Syntax of Event Structure. In Beth Levin and Steven Pinker, (eds.) *Lexical and Conceptual Semantics*. 47-81. Cambridge, MA: Blackwell
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press
- Rappaport Hovav, Malka and Beth, Levin. (2001) An Event Structure Account of English Resultatives. *Language* 77(4): 766-797.
- Shi Yuzhi. (2002) *The Establishment of Modern Chinese Grammar: The formation of the resultative construction and its effects*. John Benjamins Publishing Company.
- Shibagaki, Ryosuke. (2013) *Analysing Secondary Predication in East Asian Languages*. Cambridge Scholars Publishing
- Thompson, Sandra A. (1973) Resultative Verb Compounds in Mandarin Chinese. *Language* 49(2): 361-379.
- Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell: Cornell University Press.
- Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.
- Wechsler, Stephen. (2005) Resultatives under the ‘Event-Argument Homomorphism’. In Nomi Erteschik-Shir and Rova Rapoport. (eds.) *The Syntax of Aspect*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.
- Xu Dan. (2006) *Typological Change in Chinese Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Zhang, Yi. (2011) *Compound and Transitivity: A Cognitive Exploration of Chinese Transitive Resultative Construction*. Ph.D. Dissertation, Nanjing University.

用例出典

朝日新聞データベース (<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>)

河北新報データベース (<https://t21.nikkei.co.jp/g3/CMNDF11.do>)

小泉 保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

中華数字苑 (<http://www.apabi.com/cec?pid=about&cult=TW>)

複合動詞レキシコン (<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>)

毎日データベース (https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html)

読売新聞データベース（1986～2018.9.18）(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

王硯农・焦群・庞颀（編）（1987）『汉语动词-结果补语搭配词典』北京语言学院出版社

现代汉语述补结构用法数据库（現代中国語動補構造用法データベース）(<http://ccl.pku.edu.cn/vc/>)

謝辞

本論文は筆者が東北大学国際文化研究科に在籍中の研究成果をまとめたものです。多くの方々からの支えのお陰で、本論文を書き上げることができました。ご指導ご支援を賜った方々に心から感謝申し上げます。

まず主指導教員として、常に優しく、時に厳しくご指導くださった東北大学大学院国際文化研究科言語科学講座教授・小野尚之先生に衷心よりお礼を申し上げます。小野先生には、筆者が日本に留学し、大学院で研究を始めるにあたり、日中の結果複合動詞の意味の相違を探求するという方向を示して頂きました。さらに、論文を執筆する際に、論文の構成や展開の仕方はもちろん、論文作成にあたっての姿勢など、細部にわたり、貴重なご指導や温かい励ましの言葉を頂きました。これらは筆者にとって大きな支えとなりました。

次に、貴重なご教示とご指導を賜りました同講座の中本武志准教授に心より感謝申し上げます。中本先生からは副指導教員として日本語の修正のみならず、本研究で最も重要な部分である中国語の結果複合動詞の論述の妥当性に関して、貴重な御指摘をいただきました。さらに、丁寧なご指導とご助言を頂いた同講座の川平芳夫教授、上原聡教授、高橋大厚教授、江藤裕之教授、副島健作准教授、中山真里子准教授、そして東北大学大学院文学研究科ナロック・ハイコ教授に厚くお礼を申し上げます。

また、学位論文審査において、東北大学国際文化研究科応用言語研究講座教授・吉本啓先生と滋賀大学教育学部准教授・于一楽先生にも貴重なご指摘やアドバイスを賜りました。今後の研究にぜひ生かしたいと思います。

東北大学大学院国際文化研究科言語コミュニケーション論講座、及び言語科学研究講座の方々にも大変お世話になりました。李楠、袁青、崔ハンハン、檜山翔太、曾曾の諸氏をはじめ、多くの友人たちに支えて頂きました。皆さん、本当にありがとう。

最後に、いつも暖かく見守ってくれている両親、並びに夫の徐站強に心より感謝いたします。本論文を書き上げることができたのは、生活だけでなく精神的な面からも家族が支援してくれたおかげです。心からの感謝の意をここに記します。

付録：日本語の結果複合動詞リストと中国語の結果複合動詞リスト

日本語の結果複合動詞リスト

遊び疲れる	窺いしれる	生まれ出る
歩き疲れる	浮かび上がる	埋め殺す
炙り出す	浮かび出る	埋め立てる
あふれ落ちる	浮き上がる	うりさばく
あふれ出る	打ち上がる	えぐり出す
編み合わせる	打ち上げる	えぐり取る
編み入れる	打ち落とす	追い返す
編み付ける	打ち返す	追い越す
編みつなぐ	打ち固める	追い出す
洗い落す	打ち勝つ	追い散らかす
洗い清める	打ち砕く	追いつく
洗い出す	打ち殺す	追い抜く
洗い流す	打ち壊す	覆い隠す
射当てる	打ち倒す	覆い被さる
射落とす	打ち出す	覆い被せる
射ぬく	打ち付ける	起き上る
射殺す	打ち飛ばす	送り返す
射通す	打ち鳴らす	送り出す
いじめ殺す	打ち抜く	送り届ける
いじり壊す	打ち延ばす	押さえつける
鑄つぶす	打ち負かす	押し開ける
いびり殺す	打ち破る	押し当てる
いびり出す	打ち割る	押し入れる
燻し出す	奪い取る	押し固める
窺い知る	生れ落ちる	押し下げる

押し沈める	降り立つ	絡まり付く
推し進める	折れ曲がる	絡め捕る
押し倒す	買い集める	刈り落とす
押し出す	買い揃える	刈り取る
押し縮める	買い溜める	刈り倒す
押し付ける	買い取る	刈り揃える
押し潰す	飼い殺す	狩り殺す
押し流す	帰り着く	狩り取る
押しのける	抱え上げる	枯れ落ちる
押し開く	抱え出す	枯れ果てる
押し曲げる	掻き上げる	消え失せる
押し戻す	かき集める	消え去る
押し破る	掻き落とす	聞き飽きる
押し分ける	掻き出す	聴きつかれる
脅し取る	書き潰す	着膨れる
躍り上がる	かじり取る	切り落とす
踊り明かす	かすめ取る	切り下ろす
驚き呆れる	勝ち進む	切り刻む
溺れ死ぬ	勝ち誇る	切り崩す
思い乱れる	担ぎ上げる	切り殺す
泳ぎ着く	担ぎ下ろす	切り裂く
泳ぎ出る	担ぎ出す	切り捨てる
折り返す	噛み切る	切り揃える
折り重なる	噛み砕く	切り倒す
折り重ねる	噛み殺す	切り出す
折り下げる	噛み倒す	切り縮める
折り取る	噛みちぎる	切り詰める
折り曲げる	噛み潰す	切り取る
織り交ぜる	噛み破る	切り整える

切り離す	蹴落とす	こぼれ出る
切り開く	蹴散らす	凝り固まる
切り分ける	蹴飛ばす	転がり出す
切り落ちる	蹴破る	探し当てる
食い飽きる	蹴り開ける	探し出す
食い荒らす	蹴り上げる	咲き薫る
食い殺す	蹴り入れる	咲き出る
食い散らかす	蹴り落とす	咲き開く
食い付く	蹴り下ろす	咲き広がる
食い破る	蹴り砕く	探し当てる
くぐり抜ける	蹴り転がす	探し出す
くぐり出す	蹴り殺す	刺し穿つ
崩れ落ちる	蹴り壊す	刺し貫く
崩れ折れる	蹴り倒す	刺し通す
砕き割る	蹴り出す	刺し殺す
砕け落ちる	蹴り潰す	差し立てる
砕け散る	蹴り飛ばす	しごき出す
汲み上げる	蹴り破る	慕い寄る
汲み入れる	漕ぎ上がる	滴り落ちる
汲み出す	漕ぎ出す	死に絶える
汲み取る	漕ぎ着ける	死に果てる
汲み干す	焦げ付く	死に別れる
狂い死ぬ	凍え死ぬ	縛り付ける
消し飛ぶ	漉し出す	絞り入れる
消し止める	こし取る	絞り出す
削り落とす	こすり落とす	絞りとる
削り取る	こすり付ける	染み付く
削り殺す	こすり取る	染み出る
削り飛ばす	こぼれ落ちる	締め固める

締めくくる	擦り減らす	叩き落とす
絞め落とす	擦り減る	叩き壊す
絞め殺す	擦りむく	叩き出す
しゃぶり付く	擦りむける	叩き直す
しゃべりつかれる	せびり取る	叩きのばす
吸い殺す	攻め落とす	叩き伏せる
吸い出す	攻め崩す	叩き分ける
吸いつく	攻め殺す	叩き割る
吸い付ける	責め殺す	漂い出る
吸い取る	責め倒す	たち落とす
吸い寄せる	攻め倒す	断ち切る
据え付ける	攻め潰す	立ちふさがる
透かし見る	攻め取る	断ち割る
掬いあげる	攻め滅ぼす	立て掛ける
掬い入れる	競り上げる	食べ飽きる
掬い出す	煎じ出す	騙し取る
掬い取る	削ぎ落とす	垂れ落ちる
救い上げる	削ぎ取る	ちぎり取る
救い出す	注ぎ入れる	ちぎれ落ちる
滑り落ちる	注ぎたす	ちぎれ飛ぶ
滑り落とす	染め付ける	散り落ちる
擦り落とす	剃り落とす	使い潰す
擦り下ろす	反り上げる	使い慣らす
擦り切る	反り返る	使い減らす
擦り切れる	耐え凌ぐ	掴み出す
刷り出す	耐え忍ぶ	突き開ける
擦りつける	倒れ落ちる	突き当てる
すり潰す	抱き上げる	突き入る
擦り取る	叩き入れる	突き入れる

突き落とす	溶き混ぜる	殴り壊す
突き固める	溶け出る	投げ上げる
突き切る	飛び上がる	投げ与える
突き崩す	飛び移る	投げ入れる
突き砕く	飛び降りる	投げ落とす
突き殺す	飛び落ちる	投げ勝つ
突き刺さる	飛び越す	投げ殺す
突き倒す	飛び出る	投げ捨てる
突き出す	飛び離れる	投げ倒す
突き立てる	留め付ける	投げ飛ばす
突き通す	取り出す	なだれ落ちる
突き通る	取り除く	なぶり殺す
突き飛ばす	取り除ける	習い覚える
突き破る	取り外す	煮絡める
突き割る	取り離す	煮崩れる
包み隠す	流しいれる	煮こぼれる
繋ぎ止める	流し出す	煮殺す
摘み取る	流れ落ちる	煮出す
吊り上げる	流れ来る	煮溶かす
吊り下ろす	流れ着く	煮溶ける
吊り下がる	流れ出る	握り潰す
釣り落とす	泣き崩れる	逃げうせる
照り映える	泣き疲れる	逃げ出る
照り輝く	泣き濡れる	縫い繕う
通り抜ける	泣き腫らす	縫いつける
溶かしいれる	泣き伏す	縫い閉じる
溶かし出す	殴り勝つ	縫い止める
溶き入れる	殴り殺す	脱ぎ散らす
溶きほぐす	殴り倒す	抜き取る

拭い取る	掃き入れる	跳ね上げる
抜け落ちる	掃き清める	はめ殺す
抜け出る	掃き出す	払い落とす
盗み出す	掃き取る	払いのける
盗み取る	剥ぎ落とす	貼り付ける
塗り隠す	掃き捨てる	張り裂ける
塗り固める	履き古す	張り出す
塗り消す	履き捨てる	張り付ける
塗りつける	吐き捨てる	冷え固まる
塗り広げる	吐き出す	弾きならす
寝落ちる	剥ぎ取る	ひき殺す
寝静まる	剥げ落ちる	引き上げる
ねじり切る	運び上げる	引き落とす
練り固める	運び入れる	引き下ろす
練り混ぜる	運び下ろす	引き切る
伸び上がる	運び去る	引き裂く
伸び広がる	運び出す	引き下げる
飲み飽きる	挟み上げる	引き倒す
飲みつかれる	挟み入れる	引き出す
飲み干す	挟み切る	引きちぎる
乗り越える	挟み潰す	引き延ばす
生え茂る	挟み出す	引き剥がす
生え揃う	弾き出す	引き剥ぐ
生え出る	弾き飛ばす	引き破る
剥がし取る	外れ落ちる	引っ張る
量り入れる	はたき落とす	ひねり上げる
量り取る	離れ落ちる	ひねり入れる
剥がれ落ちる	離れ去る	ひねり殺す
掃き集める	跳ね上がる	ひねり潰す

冷やし固める	踏み潰す	掘り抜く
拾い集める	踏みならす	掘り出す
封じ込める	踏み鳴らす	曲がりくねる
吹きあがる	踏みにじる	巻き上がる
拭き荒らす	踏み抜く	巻き揚げる
吹き上げる	踏み破る	巻き入れる
吹き入れる	踏み割る	見飽きる
吹き落とす	降り落ちる	磨き落とす
吹き消す	降り積もる	蒸し殺す
吹き出る	振り上げる	燃え落ちる
吹き倒す	振り入れる	燃え死ぬ
吹き出す	振り動かす	萌え死ぬ
噴き出す	振り落ちる	燃え尽きる
拭き散らかす	振り落とす	持ち上げる
拭き散る	振り下ろす	持ち出す
吹き付ける	振りかける	揉み入れる
吹き飛ばす	振り飛ばす	揉み消す
吹き飛ぶ	振り乱す	揉み潰す
吹き鳴らす	振りほどく	揉み出す
拭き落とす	振り混ぜる	漏れ落ちる
拭き取る	塗り消す	漏れ出る
拭き清める	ふるい落とす	焼き落とす
踏み荒らす	放り落とす	焼き固める
踏み固める	放りだす	焼き捨てる
踏み砕く	放り投げる	焼き切る
踏み消す	掘り当てる	焼き焦がす
踏み殺す	掘り崩す	焼き殺す
踏み壊す	掘り倒す	焼け落ちる
踏み倒す	掘り取る	焼け焦げる

焼け死ぬ	破り捨てる	ゆでこぼれる
痩せ衰える	破り取る	
痩せ細る	ゆすり落とす	

合計：604 語

中国語の結果複合動詞リスト

按破（押す－破れる）	掰折（割る－折れる）	崩落（破裂する－落ちる）
按动（押す－動く）	扳动（引く－動く）	崩坏（破裂する－壊れる）
按扁（押す－平らだ）	扳掉（引っ張る－落ちる）	崩瞎（破裂する－失明する）
按响（押す－鳴る）	扳倒（引っ張る－倒れる）	崩碎（破裂する－砕ける）
按碎（押す－砕ける）	扳断（引っ張る－折れる）	崩死（破裂する－死ぬ）
按掉（押す－落ちる）	扳直（引っ張る－まっすぐ）	崩伤（破裂する－傷つける）
按裂（押す－裂ける）	扳弯（引っ張る－曲がる）	绷破（引っ張る－破れる）
熬化（煮る－溶ける）	扳开（引っ張る－開く）	绷断（引っ張る－折れる）
熬尖（堪える－尖る）	搬乱（運ぶ－乱れる）	绷坏（引っ張る－壊れる）
熬熟（煮る－煮える）	搬累（運ぶ－疲れる）	绷飞（引っ張る－飛ぶ）
熬糊（煮る－焦げる）	搬空（運ぶ－空く）	蹦疼（跳ぶ－痛い）
熬透（煮る－込む）	搬动（運ぶ－動く）	蹦坏（跳ぶ－壊れる）
熬肿（堪える－腫れる）	搬倒（運ぶ－倒れる）	蹦累（跳ぶ－疲れる）
熬烂（煮る－柔らかだ）	搬坏（運ぶ－壊れる）	逼死（迫る－死ぬ）
熬稠（煮る－濃い）	搬掉（運ぶ－落ちる）	逼急（迫る－焦る）
熬干（煮る－乾く）	拌匀（混ぜる－均等にする）	逼哭（迫る－泣く）
熬黑（堪える－黒い）	绊疼（つまづく－痛い）	逼跑（迫る－逃げる）
熬白（堪える－白い）	绊倒（つまづく）	逼疯（迫る－発狂する）
熬透（堪える－徹する）	剥开（剥く－開く）	编累（編集する－疲れる）
熬伤（堪える－病気になる）	剥掉（剥く－落ちる）	裱坏（表装する－壊れる）
熬瘦（堪える－痩せうる）	剥肿（剥く－腫れる）	憋紫（気が塞ぐ－紫になる）
熬怕（堪える－恐れる）	剥腻（剥く－飽きる）	憋红（気が塞ぐ－赤い）
熬垮（堪える－壊れる）	剥疼（剥く－痛い）	憋（閉じ込む－病気になる）
熬病（堪える－病気になる）	爆碎（破裂する－砕ける）	憋醒（我慢する－目覚める）
熬红（堪える－赤い）	爆断（破裂する－折れる）	憋疯（我慢する－気が狂う）
熬坏（堪える－壊れる）	爆掉（破裂する－落ちる）	憋晕（気が塞ぐ－めまいがする）

扒豁（捕まえる－裂ける）	抱坏（抱く－壊れる）	憋死（気が塞ぐ－死ぬ）
扒坏（掘る－壊れる）	抱累（抱く－疲れる）	憋昏（気が塞ぐ－気を失う）
拔净（抜く－きれいだ）	抱烦（抱く－飽きる）	憋急（気が塞ぐ－焦る）
拔断（抜く－折れる）	抱动（抱く－動く）	别坏（差し込む－壊れる）
拔掉（抜く－落ちる）	抱腻（抱く－飽きる）	别断（差し込む－折れる）
拔累（抜く－疲れる）	背累（背負う－疲れる）	冰坏（冷やす－傷む）
拔坏（抜く－壊れる）	背烦（背負う－飽きる）	病死（病気になる－死ぬ）
掰裂（割る－裂ける）	背累（覚える－疲れる）	拨折（動かす－折れる）
掰疼（割る－痛い）	崩破（破裂する－破れる）	拨翻（動かす－ひっくり返る）
掰动（割る－動く）	崩断（破裂する－折れる）	拨坏（動かす－壊れる）
掰断（割る－折れる）	崩掉（破裂する－落ちる）	拨响（動かす－響く）
拨亮（動かす－光る）	踩爆（踏む－爆発する）	铲倒（こすり取る－倒れる）
擦累（拭く－疲れる）	踩黑（踏む－黒い）	铲断（こすり取る－倒れる）
擦黑（拭く－黒い）	踩裂（踏む－裂ける）	铲平（こすり取る－平らだ）
擦亮（拭く－ピカピカだ）	踩翻（踏む－覆す）	铲累（こすり取る－疲れる）
擦腻（拭く－飽きる）	踩漏（踏む－漏れる）	铲倒（こすり取る－倒れる）
擦破（拭く－破れる）	踩劈（踏む－分ける）	唱累（歌う－疲れる）
擦伤（拭く－傷つく）	踩动（踏む－動く）	唱哑（歌う－掠れる）
擦湿（拭く－濡れる）	踩垮（踏む－崩れる）	唱腻（歌う－飽きる）
擦脏（拭く－汚れる）	踩硬（踏む－硬い）	抄烦（書き写す－飽きる）
擦掉（拭く－落ちる）	踩痛（踏む－痛い）	抄酸（書き写す－疲労して痛い）
擦热（拭く－熱い）	踩散（踏む－散らす）	抄疼（書き写す－痛い）
擦疼（拭く－痛い）	踩伤（踏む－傷つく）	抄腻（書き写す－飽きる）
擦薄（拭く－薄い）	蹭倒（擦る－倒れる）	抄累（書き写す－疲れる）
擦白（拭く－白い）	蹭脏（擦る－汚れる）	抄惯（書き写す－慣れる）
擦净（拭く－きれい）	蹭破（擦る－破れる）	抄坏（書き写す－壊れる）
擦干（拭く－乾く）	蹭掉（擦る－落ちる）	吵昏（騒ぐ－気を失う）
裁坏（裁つ－壊れる）	蹭黑（擦る－黒い）	吵晕（騒ぐ－めまいがする）
裁断（裁つ－折れる）	蹭断（擦る－折れる）	吵烦（騒ぐ－いらいらする）

裁掉（裁つー落ちる）	蹭开（擦るー開く）	吵累（騒ぐー疲れる）
踩断（踏むー折れる）	蹭白（擦るー白い）	炒焦（炒めるー焦げる）
踩坏（踏むー壊れる）	叉穿（刺すーあける）	炒热（炒めるー熱い）
踩扁（踏むー平らだ）	叉中（刺すー当てる）	炒碎（炒めるー砕ける）
踩破（踏むー破れる）	叉掉（刺すー落ちる）	炒糊（炒めるー焦げる）
踩折（踏むー折れる）	插折（挿すー折れる）	炒熟（炒めるー食べれる）
踩死（踏むー死ぬ）	插穿（挿すーあける）	炒烂（炒めるー砕く田になる）
踩瘪（踏むー凹む）	插中（挿すー当てる）	扯破（引っ張るー破れる）
踩倒（踏むー倒れる）	插透（挿すー破れる）	扯烂（引っ張るーボロボロだ）
踩断（踏むー折れる）	拆开（解くー開く）	扯开（引っ張るー離れる）
踩烂（踏むーボロボロになる）	拆碎（バラバラにするー砕ける）	扯掉（引っ張るー落ちる）
踩碎（踏むー砕ける）	拆平（解くー平だ）	扯断（引っ張るー折れる）
踩疼（踏むー痛い）	拆掉（解くー落ちる）	扯裂（引っ張るー裂ける）
踩脏（踏むー汚れる）	馋疯（食い意地が張っている）	抻细（伸ばすー細い）
踩掉（踏むー落ちる）	馋倒（口が卑しいー倒れる）	抻直（伸ばすーまっすぐだ）
踩肿（踏むー腫れる）	缠疼（巻き付ける）	抻平（伸ばすー平だ）
踩塌（踏むー倒れる）	缠倒（巻き付ける）	抻长（伸ばすー長い）
踩灭（踏むー消す）	缠病（巻き付けるー病気になる）	撑破（はちきれー破れる）
踩湿（踏むー濡れる）	缠累（巻き付けるー疲れる）	撑病（はち切れー病気になる）
踩空（踏むー外れる）	铲掉（こすり取るー落ちる）	撑坏（はち切れー壊れる）
撑断（はち切れー折れる）	抽倒（抜き出すー倒れる）	穿烂（穿くーボロボロになる）
撑炸（はちきれー割れる）	抽折（抜き出すー折れる）	穿惯（穿くー慣れる）
撑裂（はちきれー裂ける）	抽瞎（抜き出すー失明になる）	穿坏（穿くー壊れる）
撑死（はちきれー死ぬ）	抽掉（抜き出すー落ちる）	穿破（穿くー破れる）
吃坏（食べるーお腹が壊れる）	抽空（抜き出すーなくなる）	穿脏（穿くー汚れる）
吃腻（食べるー飽きる）	抽晕（たたくーめまいがする）	吹爆（吹くー爆発する）
吃瘦（食べるー痩せる）	抽腻（吸うー飽きる）	吹病（吹くー病気になる）
吃穷（食べるー貧乏になる）	抽断（たたくー折れる）	吹倒（吹くー倒れる）
吃疼（食べるー痛い）	抽惯（吸うー慣れる）	吹灭（吹くー消す）

吃死（食べる－死ぬ）	愁病（悩む－病む）	吹破（吹く－破れる）
吃饱（食べる－満腹だ）	除掉（取りぬく－落ちる）	吹开（吹く－開く）
吃垮（食べる－潰れる）	除净（取りぬく－きれいだ）	吹净（吹く－きれいだ）
吃胀（食べる－満腹だ）	锄坏（削り取る－壊れる）	吹疼（吹く－痛い）
吃伤（食べる－嫌になる）	锄断削り取る－切れる）	吹醒（吹く－覚める）
吃倒（食べる－倒れる）	锄倒削り取る－倒れる）	吹凉（吹く－冷める）
吃惯（食べる－慣れる）	锄净（削り取る－きれいだ）	吹掉（吹く－落ちる）
吃胖（食べる－太る）	?锄落（削り取る－落ちる）	吹干（吹く－乾く）
吃够（食べる－飽きる）	揣皱（突っ込む－シワになる）	吹裂（吹く－裂ける）
吃烦（食べる－飽きる）	揣卷（突っ込む－巻く）	吹累（吹く－疲れる）
吃渴（食べる－渴く）	踹倒（蹴る－倒れる）	吹乱（吹く－乱れる）
吃鼓（食べる－膨らむ）	踹死（蹴る－死ぬ）	吹跑（吹く－飛ぶ）
吃傻（食べる－頭がおかしい）	踹碎（蹴る－砕ける）	吹坏（吹く－破れる）
冲翻（押し流す－ひっくり返す）	踹晕（蹴る－気を失う）	吹散（吹く－散らす）
冲烂（押し流す－ボロボロだ）	踹伤（蹴る－傷つく）	吹皱（吹く－爆発する）
冲垮（押し流す－崩れる）	踹垮（蹴る－崩れる）	吹断（吹く－切れる）
冲开（押し流す－離れる）	踹破（蹴る－破れる）	吹翻（吹く－ひっくり返る）
冲走（押し流す－離れる）	踹开（蹴る－開く）	吹弯（吹く－曲がる）
冲跑（押し流す－離れる）	踹翻（蹴る－ひっくり返る）	吹鼓（吹く－膨らむ）
冲净（押し流す－きれいだ）	踹掉（蹴る－落ちる）	吹坏（吹く－壊れる）
冲断（押し流す－折れる）	踹扁（蹴る－平らだ）	吹崩（吹く－崩れる）
冲掉（押し流す－落ちる）	踹坏（蹴る－壊れる）	吹皱（吹く－シワになる）
冲散（押し流す－ばらばらだ）	踹烂（蹴る－ボロボロになる）	吹响（吹く－響く）
冲倒（押し流す－倒れる）	踹断（蹴る－切れる）	吹酸（吹く－怠い）
冲破（押し流す－破れる）	踹塌（蹴る－崩れる）	吹干（吹く－（乾く）
冲坏（押し流す－壊れる）	穿透（穿く－通る）	吹疼（吹く－痛い）
冲开（押し流す－溶ける）	穿破（穿く－破れる）	捶累（叩く－疲れる）
冲塌（押し流す－倒れる）	穿腻（穿く－飽きる）	捶松（叩く－疲れる）
春碎（粉にする－砕ける）	穿皱（穿く－シワシワだ）	捶累（叩く－疲れる）

捶破（叩く－破れる）	搭坏（組み立てる－壊れる）	打瞎（打つ－失明する）
捶扁（叩く－平らだ）	打开（打つ－開く）	呆膩（滞在する－飽きる）
捶坏（叩く－壊れる）	打疼（打つ－痛い）	呆烦（滞在する－飽きる）
捶裂（叩く－裂ける）	打痛（打つ－痛い）	呆惯（滞在する－慣れる）
捶碎（叩く－砕ける）	打碎（打つ－砕ける）	呆够（滞在する－飽きる）
捶烂（叩く－ぐちゃぐちゃだ）	打残（打つ－損なう）	呆胖（滞在する－太る）
捶死（叩く－死ぬ）	打坏（打つ－壊れる）	戴脏（着用する－汚れる）
锤断（叩く－切れる）	打昏（打つ－気を失う）	戴破（着用する－破れる）
锤破（鍛える－破れる）	打折（打つ－折れる）	戴烂（着用する－損なう）
锤扁（鍛える－平らだ）	打哭（打つ－泣く）	戴惯（着用する－慣れる）
锤坏（鍛える－壊れる）	打累（打つ－疲れる）	戴旧（着用する－古い）
锤裂（鍛える－裂ける）	打膩（打つ－飽きる）	戴坏（着用する－壊れる）
锤死（鍛える－死ぬ）	打怕（打つ－怖がる）	戴够（着用する－飽きる）
戳破（突く－破れる）	打青（打つ－青い）	戴折（着用する－折れる）
戳烂（突く－ぐちゃぐちゃだ）	打癍（打つ－跛になる）	掸坏（払う－壊れる）
刺死（刺す－死ぬ）	打热（打つ－熱い）	掸掉（払う－落ちる）
刺疼（刺す－痛い）	打散（打つ－散る）	掸净（払う－きれいだ）
刺中（刺す－当たる）	打伤（打つ－怪我する）	弹响（弾く－きれいだ）
刺穿（刺す－抜ける）	打穿（打つ－抜ける）	弹膩（弾く－飽きる）
刺伤（刺す－怪我する）	打掉（打つ－落ちる）	捣破（搗く－破れる）
刺破（刺す－破れる）	打爆（打つ－破裂する）	捣烂（搗く－ボロボロだ）
刺断（刺す－切れる）	打沉（打つ－沈む）	捣坏（搗く－壊れる）
刺倒（刺す－倒れる）	打翻（打つ－ひっくり返る）	捣扁（搗く－平らだ）
刺透（刺す－通る）	打飞（打つ－飛ぶ）	捣碎（搗く－砕ける）
搓坏（揉む－壊れる）	打烂（ボロボロになる）	蹬洒（漕ぐ－溢れる）
搓圆（揉む－丸い）	打哑（打つ－掠れる）	蹬酸（漕ぐ－怠い）
搓细（揉む－細い）	打酸（打つ－痛い）	蹬倒（漕ぐ－倒れる）
搓净（揉む－きれいだ）	打透（打つ－抜ける）	等困（待つ－眠い）
搓皱（揉む－シワになる）	打湿（打つ－濡れる）	等急（待つ－焦る）

搓碎（揉む－砕ける）	打灭（打つ－消える）	瞪圆（見開く－丸い）
搓红（揉む－赤い）	打醒（打つ－覚める）	瞪大（見開く－大きい）
搓肿（揉む－腫れる）	打死（打つ－死ぬ）	滴穿（滴る－抜ける）
搓热（揉む－熱い）	打跑（打つ－逃げる）	颠碎（揺れる－砕ける）
搓疼（揉む－痛い）	打蒙（打つ－暈ける）	颠坏（揺れる－壊れる）
搓破（揉む－破れる）	打愣（打つ－ぼうっとする）	颠晕（揺れる－気を失う）
搓烂（揉む－ボロボロになる）	打聋（打つ－耳が聞こえない）	颠掉（揺れる－離れ落ちる）
搓累（揉む－疲れる）	打肿（打つ－腫れる）	颠醒（揺れる－覚める）
搓白（揉む－白い）	打倒（打つ－倒れる）	颠洒（揺れる－溢れる）
颠开（揺れる－開く）	冻醒（凍る－覚める）	剁折（勢いよく切る－折れる）
点响（軽く押す－響く）	冻昏（凍る－気を失う）	剁开（勢いよく切る－開く）
电死（感電する－死ぬ）	冻紫（凍る－紫になる）	跺肿（強く踏む－腫れる）
电傻（感電する－愚かになる）	冻坏（凍る－壊れる）	跺疼（強く踏む－痛くなる）
电倒（感電する－倒れる）	冻木（凍る－痺れる）	跺碎（強く踏む－砕ける）
电晕（感電する－気を失う）	冻疼（凍る－痛くなる）	跺死（強く踏む－死ぬ）
电死（感電する－死ぬ）	冻僵（凍る－硬直する）	跺坏（強く踏む－破れる）
雕坏（彫刻する－壊れる）	冻裂（凍る－裂ける）	跺瘪（強く踏む－凹む）
吊死（吊るす－死ぬ）	冻青（凍る－青い）	饿毙（空く－死ぬ）
跌倒（転ぶ－倒れる）	冻死（凍る－死ぬ）	饿瘦（空く－痩せる）
跌断（転ぶ－折れる）	逗笑（からかう－笑う）	饿跑（空く－逃げる）
跌伤（転ぶ－傷つく）	逗哭（からかう－泣く）	饿怕（空く－怖がる）
叠坏（重ねる－壊れる）	逗急（からかう－怒る）	饿急（空く－焦る）
叮肿（刺す－腫れる）	毒死（毒を使う－死ぬ）	饿昏（空く－くらくらする）
叮怕（刺す－怖がる）	毒残（毒を使う－障害が残る）	饿慌（空く－慌てる）
叮红（刺す－赤い）	毒倒（毒を使う－倒れる）	饿晕（空く－気を失う）
钉穿（打ち付ける－通り抜ける）	毒瞎（毒を使う－失明する）	饿弯（空く－曲がる）
钉透（打ち付ける－抜ける）	毒哑（毒を使う－かすれる）	饿疼（空く－痛い）
钉折（打ち付ける－折れる）	毒死（毒を使う－死ぬ）	饿瘫（空く－動けない）
钉劈（打ち付ける－逸れる）	读累（読む－疲れる）	饿死（空く－死ぬ）

钉弯（打ち付ける－曲がる）	读哑（読む－掠れる）	饿倒（空く－倒れる）
钉开（打ち付ける－開く）	读惯（読む－慣れる）	饿病（空く－病気になる）
顶翻（突く－ひっくり返る）	读傻（読む－愚かになる）	饿瘪（空く－凹む）
顶折（突く－折れる）	读昏（読む－くらくらする）	饿扁（空く－凹む）
顶伤（突く－傷つく）	读疯（読む－気が狂う）	饿哭（空く－泣く）
顶疼（突く－痛い）	赌穷（賭ける－貧しい）	饿疯（空く－気が狂う）
顶破（突く－破れる）	断掉（切れる－落ちる）	饿醒（空く－覚める）
顶出（突く－出る）	蹲累（しゃがむ－疲れる）	饿瘦（空く－痩せる）
顶裂（突く－裂ける）	蹲惯（しゃがむ－慣れる）	摠倒（押す－倒れる）
顶死（突く－死ぬ）	蹲麻（しゃがむ－痺れる）	摠断（押す－折れる）
顶折（突く－折れる）	炖熟（煮込む－炊ける）	摠熄（押す－消える）
丢怕（なくす－怖がる）	炖烂（煮込む－柔らかく煮える）	摠响（押す－響く）
动坏（操る－壊れる）	剁烂（勢いよく切る－碎ける）	摠动（押す－動く）
冻硬（凍る－硬い）	剁酸（勢いよく切る－怠い）	摠瘪（押す－凹む）
冻透（凍る－通る）	剁碎（勢いよく切る－碎ける）	摠灭（押す－消える）
冻实（凍る－硬い）	剁掉（勢いよく切る－取れる）	翻破（捲る－破れる）
冻病（凍る－病気になる）	剁断（勢いよく切る－切れる）	翻脏（捲る－汚れる）
冻脆（凍る－パリパリする）	剁坏（勢いよく切る－破れる）	翻坏（捲る－壊れる）
翻倒（捲る－倒れる）	刮动（引っ掛かる－動く）	喝倒（飲む－倒れる）
翻烂（捲る－破れる）	刮伤（引っ掛かる－傷つく）	喝死（飲む－死ぬ）
翻旧（捲る－古びる）	刮净（引っ掛かる－きれいだ）	轰破（破壊する－壊れる）
翻累（捲る－疲れる）	刮破（引っ掛かる－破れる）	轰塌（破壊する－崩れる）
放凉（飛ぶ－冷める）	刮烂（引っ掛かる－破れる）	轰倒（破壊する－倒れる）
放跑（飛ぶ－逃げる）	刮烂（引っ掛かる－破れる）	轰碎（破壊する－碎ける）
放烂（飛ぶ－破れる）	刚撕（引っ掛かる－裂く）	轰死（破壊する－死ぬ）
放臭（飛ぶ－腐る）	刚折（引っ掛かる－折れる）	轰垮（破壊する－崩れる）
放硬（飛ぶ－硬い）	刚破（引っ掛かる－破れる）	轰坏（破壊する－壊れる）
放馊（飛ぶ－腐る）	刚坏（引っ掛かる－壊れる）	轰散（破壊する－ばらばらだ）
飞累（飛ぶ－疲れる）	刚脏（引っ掛かる－汚れる）	轰跑（破壊する－逃げる）

飞动（飛ぶ－動く）	剛破（引っ掛かる－破れる）	哄睡（あやす－眠る）
縫折（切る－折れる）	管膩（しつける－飽きる）	哄跑（あやす－逃げる）
改煩（直す－飽きる）	灌醉（酒をたくさ注ぐ－酔う）	哄笑（あやす－笑う）
割断（切る－折れる）	逛膩（ぶらぶらする－飽きる）	划累（漕ぐ－疲れる）
割破（切る－破れる）	逛累（跪く－疲れる）	划断（漕ぐ－折れる）
割伤（切る－傷つく）	跪累（跪く－疲れる）	划跑（漕ぐ－離れる）
割掉（切る－落ちる）	跪红（跪く－赤い）	划烂（擦る－ボロボロだ）
割开（切る－離れる）	跪断（跪く－折れる）	划裂（擦る－裂ける）
割倒（切る－倒れる）	跪肿（跪く－腫れる）	划破（擦る－破れる）
搁坏（置く－壊れる）	喊肿（叫ぶ－腫れる）	划断（擦る－折れる）
搁烂（置く－破れる）	喊醒（叫ぶ－目覚める）	划伤（擦る－傷つく）
硌破（突起物に当たる－破れる）	喊干（叫ぶ－渴く）	画累（描く－疲れる）
硌伤（突起物に当たる－傷つく）	喊坏（叫ぶ－悪くなる）	画酸（描く－疲労して痛い）
硌坏（突起物に当たる－壊れる）	喊疼（叫ぶ－痛い）	画疼（描く－痛い）
刮倒（引っ掛かる－倒れる）	喊哑（叫ぶ－掠れる）	画坏（描く－壊れる）
刮断（引っ掛かる－折れる）	旱死（旱魃－死ぬ）	画膩（描く－飽きる）
刮碎（引っ掛かる－砕ける）	喝穷（飲む－貧乏になる）	画肿（描く－腫れる）
刮弯（引っ掛かる－曲がる）	喝饱（飲む－お腹いっぱい）	画烦（描く－嫌う）
刮脏（引っ掛かる－汚れる）	喝惯（飲む－慣れる）	划累（漕ぐ－疲れる）
刮折（引っ掛かる－折れる）	喝坏（飲む－お腹が壊れる）	划断（漕ぐ－折れる）
刮翻（引っ掛かる－捲る）	喝晕（飲む－くらくらする）	晃倒（揺れる－倒れる）
刮塌（引っ掛かる－倒れる）	喝红（飲む－赤い）	毁坏（壊れる－悪い）
刮歪（引っ掛かる－歪む）	喝醉（飲む－酔う）	昏倒（壊れる－倒れる）
刮破（引っ掛かる－破れる）	喝胀（飲む－膨れる）	击穿（打つ－抜ける）
刮掉（引っ掛かる－落ちる）	喝热（飲む－熱い）	击伤（打つ－傷つく）
刮坏（引っ掛かる－壊れる）	喝膩（飲む－飽きる）	击落（打つ－落ちる）
击溃（打つ－敗れる）	挤扁（絞る－平らだ）	剪碎（切る－砕ける）
击毁（打つ－壊れる）	挤伤（詰め込む－傷つく）	剪疼（切る－痛める）
击沉（打つ－沈む）	挤落（込み合う－落ちる）	剪裂（切る－裂ける）

击倒（打つ－倒れる）	挤青（込み合う－黒い）	剪伤（切る－傷つく）
激病（刺激する－病む）	记累（覚える－疲れる）	剪痛（切る－痛める）
急晕（焦る－くらくらする）	记晕（覚える－くらくらする）	剪烂（切る－ボロボロだ）
急哭（焦る－泣かせる）	夹疼（挟む－痛い）	剪开（切る－開ける）
急哑（焦る－かすれる）	夹碎（挟む－砕ける）	剪破（切る－破れる）
急病（焦る－病む）	夹裂（挟む－裂ける）	剪酸（切る－疲労して痛い）
急傻（焦る－頭がおかしくなる）	夹烂（挟む－ぐちゃぐちゃだ）	剪断（切る－折れる）
急醒（焦る－目覚める）	夹紫（挟む－紫色になる）	剪折（切る－折れる）
急红（焦る－赤い）	夹青（挟む－黒い）	剪弯（切る－曲がる）
急白（焦る－白い）	夹红（挟む－赤い）	溅黑（跳ねる－黒い）
急瞎（焦る－失明する）	夹断（挟む－折れる）	溅红（跳ねる－赤い）
挤破（詰め込む－破れる）	夹扁（挟む－平らだ）	溅脏（跳ねる－汚れる）
挤碎（詰め込む－破れる）	夹弯（挟む－曲がる）	讲烦（跳ねる－煩わしい）
挤疼（絞る－痛い）	夹痛（挟む－痛い）	讲腻（跳ねる－飽きる）
挤累（詰め込む－疲れる）	夹麻（挟む－痺れる）	讲渴（話す－乾く）
挤开（絞る－開ける）	夹肿（挟む－腫れる）	浇病（雨に濡れる－病む）
挤倒（込み合う－倒れる）	架累（架ける－疲れる）	浇灭（かける－消える）
挤坏（込み合う－壊れる）	架晕（架ける－くらくらする）	浇熄（かける－消える）
挤塌（込み合う－崩れる）	架酸（架ける－疲労して痛い）	浇湿（かける－湿らす）
挤哭（込み合う－泣かせる）	架痛（架ける－痛い）	浇湿（水をかける－湿れる）
挤死（詰め込む－死ぬ）	架疼（架ける－痛い）	浇坏（水をかける－壊れる）
挤干（詰め込む－乾く）	煎黄（煎る－黄色になる）	绞坏（切る－壊れる）
挤烂（絞る－破ボロボロだ）	煎累（煎る－疲れる）	绞碎（切る－砕ける）
挤晕（込み合う－くらくらする）	煎硬（煎る－硬い）	绞裂（切る－裂ける）
挤烂（詰め込む－ボロボロだ）	煎脆（煎る－サクサクになる）	绞断（切る－折れる）
挤破（込み合う－破れる）	煎黑（煎る－黒い）	绞烂（切る－ボロボロだ）
挤碎（込み合う－破れる）	煎红（煎る－黄赤い）	绞死（切る－死ぬ）
挤怕（込み合う－怖がる）	煎焦（煎る－焦げる）	绞开（切る－開く）
挤断（込み合う－折れる）	煎糊（煎る－焦げる）	绞破（切る－破れる）

挤裂（込み合う－裂ける）	煎黑（煎る－黒い）	铰碎（切る－砕ける）
挤动（詰め込む－動く）	煎累（煎る－疲れる）	铰折（切る－折れる）
挤爆（絞る－爆発する）	拣累（拾う－疲れる）	铰烂（切る－ボロボロになる）
挤瘪（絞る－凹む）	剪开（切る－開ける）	铰坏（切る－壊れる）
挤扁（絞る－平らだ）	剪累（切る－疲れる）	铰断（切る－折れる）
挤伤（詰め込む－傷つく）	剪肿（切る－腫れる）	搅破（かき混ぜる－割れる）
搅稠（かき混ぜる－濃い）	卷坏（巻く－壊れる）	烤化（焼く－溶ける）
搅混（かき混ぜる－混ざる）	掀折（折る－折れる）	烤坏（焼く－壊れる）
搅溶（かき混ぜる－溶ける）	掀坏（折る－壊れる）	烤焦（焼く－焦げる）
搅碎（かき混ぜる－砕ける）	掀断（折る－折れる）	烤裂（焼く－裂ける）
搅酸（かき混ぜる－疲れて痛い）	嚼碎（噛む－砕ける）	烤伤（焼く－傷つく）
搅坏（かき混ぜる－悪い）	嚼烂（噛む－ボロボロだ）	靠脏（靠れる－汚れる）
搅疼（かき混ぜる－痛める）	嚼疼（噛む－痛い）	靠倒（靠れる－倒れる）
搅痛（かき混ぜる－痛める）	嚼痛（噛む－痛い）	磕伤（ぶつかる－傷つく）
搅浑（かき混ぜる－濁る）	嚼酸（噛む－砕疲労して痛い）	磕掉（ぶつかる－落ちる）
叫哑（叫ぶ－枯れる）	嚼累（噛む－疲れる）	磕瘪（ぶつかる－凹む）
叫痛（叫ぶ－痛める）	卡坏（引っ掛かる－壊れる）	磕红（ぶつかる－赤い）
叫醒（叫ぶ－目覚める）	砍开（切る－開く）	磕坏（ぶつかる－壊れる）
叫惯（叫ぶ－慣れる）	砍坏（切る－壊れる）	磕青（ぶつかる－黒い）
教腻（教える－飽きる）	砍碎（切る－砕ける）	磕碎（ぶつかる－砕ける）
教坏（教える－悪い）	砍穿（切る－抜ける）	磕疼（ぶつかる－痛い）
教累（教える－疲れる）	砍裂（切る－裂ける）	磕烂（ぶつかる－ボロボロだ）
揭坏（剥がす－壊れる）	砍烂（切る－ボロボロになる）	磕残（ぶつかる－壊れる）
揭开（開ける－開ける）	砍死（切る－死ぬ）	渴疯（乾く－狂う）
揭撕（剥がす－破く）	砍倒（切る－倒れる）	渴晕（乾く－くらくらする）
揭掉（剥がす－落とす）	砍断（切る－折れる）	刻伤（刻む－傷つく）
截断（断ち切る－折れる）	砍伤（切る－傷つく）	啃烂（かじる－ボロボロになる）
浸烂（しみる－ボロボロだ）	砍散（切る－バラバラになる）	啃坏（かじる－壊れる）
浸肿（漬ける－腫れる）	砍折（切る－折れる）	抠开（ほじる－開く）

浸灭（漬ける－消える）	砍破（切る－傷つく）	抠烂（ほじる－ボロボロになる）
浸坏（しみる－壊れる）	砍落（切る－落ちる）	抠破（ほじる－傷つく）
浸湿（しみる－濡らす）	砍钝（切る－鈍い）	抠裂（ほじる－裂ける）
惊醒（驚く－目覚める）	看晕（見る－くらくらする）	抠坏（ほじる－壊れる）
惊走（驚く－逃げる）	看酸（見る－疲労して痛い）	抠脏（ほじる－汚れる）
揪断（掴む－逃折れる）	看累（見る－疲れる）	枯死（枯れる－死ぬ）
救醒（救う－目覚める）	看困（見る－眠れる）	哭肿（泣く－腫れる）
举酸（持ち上げる－痛い）	看腻（見る－飽きる）	哭瞎（泣く－失明する）
举累（持ち上げる－疲れる）	看烦（見る－嫌う）	哭坏（泣く－壊れる）
锯碎（切る－砕ける）	扛累（担ぐ－疲れる）	哭哑（泣く－かすれる）
锯折（切る－砕ける）	扛肿（担ぐ－腫れる）	哭病（泣く－病む）
锯断（切る－折れる）	烤糊（焼く－焦げる）	哭红（泣く－赤い）
锯倒（切る－倒れる）	烤红（焼く－赤い）	哭醒（泣く－目覚める）
锯酸（切る－怠い）	烤热（焼く－熱い）	哭倒（泣く－倒れる）
烤肿（焼く－腫れる）	烤软（焼く－柔らかい）	碾灭（押し潰す－消える）
哭干（泣く－乾く）	骂晕（叱る－くらくらする）	碾死（押しつぶす－死ぬ）
哭昏（泣く－気を失う）	闷死（むっとする－死ぬ）	碾坏（押しつぶす－壊れる）
哭湿（泣く－湿れる）	闷坏（むっとする－悪い）	碾扁（押しつぶす－平らだ）
哭累（泣く－疲れる）	摸破（触る－破れる）	碾碎（押しつぶす－粉々になる）
拉断（引く－折れる）	摸黑（触る－黒い）	念累（読む－疲れる）
拉倒（引く－倒れる）	摸脏（触る－汚れる）	尿湿（小便をする－濡れる）
拉酸（引く－疲労して痛い）	摸亮（触る－光る）	捏扁（握る－濡れる）
拉响（引く－響ける）	磨钝（磨く－鈍い）	捏坏（握る－壊れる）
拉破（引く－破れる）	磨快（磨く－鋭い）	捏瘪（握る－凹む）
拉疼（引く－痛い）	磨亮（磨く－光る）	捏死（握る－死ぬ）
拉伤（引く－傷つく）	磨旧（磨く－古い）	拧青（つねる－青い）
拉破（引く－傷つく）	磨破（磨く－破れる）	拧干（つねる－乾く）
勒肿（締める－腫れる）	磨烂（磨く－ボロボロになる）	拧断（つねる－折れる）
勒断（締める－折れる）	磨断（磨く－折れる）	拧伤（つねる－傷つく）

勒疼（締める－痛める）	磨碎（磨く－砕ける）	拧痛（つねる－痛い）
勒折（締める－折れる）	磨圆（磨く－丸い）	拧裂（つねる－裂ける）
勒坏（締める－壊れる）	磨细（磨く－細かい）	拧坏（つねる－壊れる）
勒红（締める－赤い）	磨肿（磨く－腫れる）	拧动（つねる－動く）
勒破（締める－破れる）	磨红（磨く－赤い）	扭断（ねじる－折れる）
勒死（締める－死ぬ）	磨滑（磨く－滑る）	扭倒（ねじる－倒れる）
累晕（疲れる－くらくらする）	磨疼（磨く－痛い）	扭折（ねじる－折れる）
累病（疲れる－病む）	磨尖（磨く－尖る）	扭歪（ねじる－歪む）
累垮（疲れる－倒れる）	磨坏（磨く－壊れる）	扭坏（ねじる－壊れる）
累瘦（疲れる－痩せる）	拿累（持つ－疲れる）	扭伤（捻挫する－傷つく）
累弯（疲れる－曲げる）	拿惯（持つ－慣れる）	沤烂（漬ける－腐る）
累昏（疲れる－気を失う）	挠伤（搔く－傷つく）	沤坏（漬ける－壊れる）
冷怕（寒くなる－恐れる）	挠烂（搔く－傷つく）	爬腻（のぼる－飽きる）
练破（鍛える－傷つく）	挠破（搔く－傷つく）	怕死（怖がる－ひどく）
练疼（鍛える－痛い）	挠红（搔く－赤い）	拍红（たたく－赤い）
晾蔫（干す－萎れる）	捻死（捻る－死ぬ）	拍疼（たたく－痛い）
裂破（裂ける－破れる）	捻灭（捻る－消える）	拍坏（たたく－壊れる）
淋病（雨に降られる－病む）	捻暗（捻る－暗い）	拍醒（たたく－覚める）
淋醒（雨に降られる－目覚める）	捻断（捻る－折れる）	拍肿（たたく－腫れる）
淋湿（雨に降られる－湿らす）	捻碎（捻る－砕ける）	拍死（たたく－死ぬ）
骂哭（叱る－泣く）	撵跑（追い出す－逃げる）	刨坏（掘る－壊れる）
骂惯（叱る－慣れる）	碾碎（押し潰す－砕ける）	跑累（走る－疲れる）
骂怕（叱る－怖がる）	碾烂（押し潰す－ボロボロだ）	跑断（走る－切れる）
跑烂（走る－ボロボロになる）	碾平（押し潰す－平らだ）	撬断（こじる－折れる）
跑肿（走る－腫れる）	泼湿（ぶかっける－濡れる）	撬坏（こじる－壊れる）
跑热（走る－熱い）	扑伤（飛び掛かる－傷つく）	撬折（こじる－折れる）
跑酸（走る－だるい）	铺脏（敷く－汚れる）	切酸（切る－だるい）
跑渴（走る－のどが乾く）	骑累（乗る－疲れる）	切碎（切る－みじん切りになる）
泡白（漬ける－白い）	骑惯（乗る－慣れる）	切断（切る－切れる）

泡坏（潰ける-壊れる）	骑坏（乗る-壊れる）	切坏（切る-壊れる）
泡臭（潰ける-臭い）	骑酸（乗る-だるい）	切破（切る-破れる）
泡烂（潰ける-傷つく）	骑膩（乗る-飽きる）	燃秃（燃やす-木がない）
泡软（潰ける-軟らかい）	骑脏（乗る-汚れる）	燃焦（燃やす-焦げる）
泡瘦（潰ける-すえる）	气病（怒る-病気になる）	燃坏（燃やす-壊れる）
泡肿（潰ける-腫れる）	气跑（怒る-出かける）	燃黑（燃やす-黒い）
泡裂（潰ける-裂ける）	气歪（怒る-歪む）	染黑（染める-黒い）
泡塌（潰ける-倒れる）	气红（怒る-赤い）	染烦（染める-うんざりする）
泡胀（潰ける-膨れる）	砌塌（築く-倒れる）	染红（染める-赤い）
喷潮（噴く-締める）	掐断（つねる-折れる）	染膩（染める-飽きる）
碰残（ぶつかる-障害になる）	掐灭（つねる-消える）	染蓝（染める-青い）
碰碎（ぶつかる-砕ける）	掐青（つねる-青くなる）	染膩（染める-飽きる）
碰伤（ぶつかる-傷つく）	掐断（つねる-折れる）	染累（染める-疲れる）
碰响（ぶつかる-音がする）	掐伤（つねる-傷つく）	染青（染める-青い）
碰倒（ぶつかる-倒れる）	掐死（つねる-死ぬ）	嚷烦（叫ぶ-うんざりする）
碰破（ぶつかる-破れる）	掐肿（つねる-腫れる）	嚷跑（叫ぶ-逃げる）
碰掉（ぶつかる-落ちる）	掐紫（つねる-紫色になる）	嚷哑（叫ぶ-掠れる）
碰坏（ぶつかる-壊れる）	掐红（つねる-赤い）	嚷累（叫ぶ-疲れる）
碰洒（ぶつかる-こぼれる）	呛晕（むせる-気を失う）	嚷惯（叫ぶ-慣れる）
碰疼（ぶつかる-痛む）	呛死（むせる-死ぬ）	嚷怕（叫ぶ-怖がる）
碰折（ぶつかる-折れる）	敲晕（叩く-気絶する）	嚷哭（叫ぶ-泣く）
碰乱（ぶつかる-乱れる）	敲折（叩く-折れる）	嚷破（叫ぶ-破れる）
碰肿（ぶつかる-腫れる）	敲累（叩く-疲れる）	绕累（回り道をする-疲れる）
碰断（ぶつかる-折れる）	敲坏（叩く-壊れる）	惹哭（怒りを買う-泣く）
劈碎（割る-砕ける）	敲断（叩く-折れる）	惹急（怒りを買う-焦る）
劈死（割る-死ぬ）	敲醒（叩く-覚める）	扔累（捨てる-疲れる）
劈折（割る-折れる）	敲碎（叩く-砕ける）	扔断（捨てる-折れる）
劈断（割る-折れる）	敲痛（叩く-痛い）	扔坏（捨てる-壊れる）
劈烂（割る-ばらばらになる）	敲疼（叩く-痛い）	扔烦（捨てる-うんざりする）

劈坏 (割る-壊れる)	敲碎 (叩く-砕ける)	融断 (解ける-折れる)
劈断 (割る-折れる)	敲裂 (叩く-裂ける)	揉累 (揉む-疲れる)
劈死 (割る-死ぬ)	敲昏 (叩く-気を失う)	揉酸 (揉む-だるい)
揉疼 (揉む-痛む)	敲破 (叩く-破れる)	烧歪 (燃やす-歪む)
揉碎 (揉む-壊れる)	晒蔫 (干す-死ぬ)	烧秃 (燃やす-はげる)
揉烂 (揉む-ボロボロになる)	晒红 (干す-赤い)	烧痛 (燃やす-痛む)
揉红 (揉む-赤い)	晒烂 (干す-ボロボロになる)	烧裂 (燃やす-裂ける)
揉痛 (揉む-痛い)	晒烦 (干す-飽きる)	烧损 (燃やす-壊れる)
揉皱 (揉む-しわになる)	晒裂 (干す-裂ける)	烧脆 (燃やす-もろい)
洒湿 (こぼれる-濡れる)	晒黑 (日焼けする-黒い)	烧穿 (燃やす-突き通る)
塞饱 (詰め込む-満腹する)	晒醒 (干す-覚める)	烧疼 (燃やす-痛い)
臊红 (恥をかかす-赤い)	晒脱 (日焼けする-脱皮する)	烧化 (燃やす-溶ける)
扫坏 (掃く-壊れる)	晒塌 (干す-倒れる)	烧断 (燃やす-折れる)
扫疼 (掃く-痛む)	晒死 (干す-死ぬ)	烧暖 (燃やす-暖まる)
扫伤 (掃く-傷つく)	删累 (削る-疲れる)	烧伤 (燃やす-傷つく)
扫断 (掃く-折れる)	删烦 (削る-うんざりする)	烧垮 (燃やす-崩れる)
扫累 (掃く-疲れる)	扇累 (扇ぐ-疲れる)	烧枯 (燃やす-枯れる)
杀死 (殺す-死ぬ)	扇烦 (扇ぐ-うんざりする)	烧空 (燃やす-空っぽだ)
? 杀红 (殺す-赤い)	扇醒 (扇ぐ-覚める)	烧毁 (燃やす-壊れる)
杀累 (殺す-疲れる)	扇跑 (扇ぐ-逃げる)	烧糊 (燃やす-焦げる)
筛脏 (ふるう-疲れる)	扇破 (扇ぐ-破れる)	烧红 (燃やす-赤い)
筛累 (ふるう-疲れる)	扇坏 (扇ぐ-壊れる)	烧坏 (燃やす-壊れる)
筛伤 (ふるう-傷つく)	扇断 (扇ぐ-折れる)	烧倒 (燃やす-倒れる)
筛坏 (ふるう-壊れる)	扇凉 (扇ぐ-冷める)	烧死 (燃やす-死ぬ)
筛疼 (ふるう-痛む)	扇倒 (扇ぐ-倒れる)	烧黑 (燃やす-黒い)
晒累 (干す-疲れる)	扇干 (扇ぐ-乾く)	烧糊 (燃やす-焦げる)
晒破 (干す-破れる)	扇晕 (扇ぐ-くらくらする)	烧傻 (燃やす-愚かだ)
晒晕 (干す-くらくらする)	扇伤 (扇ぐ-傷つく)	烧醒 (燃やす-覚める)
晒干 (干す-乾く)	扇退 (扇ぐ-退く)	烧残 (燃やす-壊れる)

晒跑（干す-逃げる）	扇破（扇ぐ-破れる）	烧硬（燃やす-硬い）
晒白（干す-白い）	扇累（扇ぐ-疲れる）	烧累（燃やす-疲れる）
晒倒（干す-倒れる）	扇死（扇ぐ-死ぬ）	烧烦（燃やす-うんざりする）
晒软（干す-軟らかい）	扇倒（扇ぐ-倒れる）	烧死（燃やす-死ぬ）
晒伤（干す-傷つく）	扇断（扇ぐ-折れる）	烧熔（燃やす-溶ける）
晒热（干す-熱い）	扇跑（扇ぐ-走る）	烧沸（燃やす-沸く）
晒黄（干す-黄色い）	烧烂（燃やす-壊れる）	烧漏（燃やす-漏れる）
晒坏（干す-悪い）	烧焦（燃やす-焦げる）	烧聋（燃やす-聞こえない）
晒化（干す-解ける）	烧破（燃やす-破れる）	射死（射る-死ぬ）
晒卷（干す-巻く）	烧平（燃やす-平だ）	盛酒（盛る-こぼれる）
晒昏（干す-気を失う）	烧残（燃やす-障害になる）	数烦（数える-うんざりする）
晒困（干す-眠い）	烧塌（燃やす-倒れる）	刷净（掃く-きれいだ）
刷累（掃く-疲れる）	烧炸（燃やす-爆発する）	踢瞎（蹴る-失明する）
刷掉（掃く-落ちる）	撕烂（裂く-ボロボロになる）	踢洒（蹴る-こぼれる）
刷亮（掃く-ピカピカになる）	撕碎（裂く-壊れる）	踢瘸（蹴る-びっこを引く）
刷白（掃く-白い）	撕破（裂く-破れる）	踢膩（蹴る-飽きる）
摔伤（転ぶ-傷つく）	送病（送る-病気になる）	踢累（蹴る-疲れる）
摔死（転ぶ-死ぬ）	锁坏（鍵をかける-壊れる）	踢碎（蹴る-砕ける）
摔疼（転ぶ-痛い）	踏破（踏む-破れる）	提累（蹴る-壊れる）
摔晕（転ぶ-くらくらする）	踏断（踏む-折れる）	挑累（担ぐ-疲れる）
摔坏（転ぶ-壊れる）	踏坏（踏む-壊れる）	挑断（担ぐ-折れる）
摔折（転ぶ-折れる）	踏残（踏む-壊れる）	跳断（跳ぶ-折れる）
摔歪（転ぶ-歪む）	踏瘪（踏む-凹む）	跳热（跳ぶ-熱い）
摔残（転ぶ-障害になる）	踏伤（踏む-傷つく）	跳酸（跳ぶ-だるい）
摔碎（転ぶ-壊れる）	踏响（踏む-音がする）	听膩（聞く-飽きる）
摔裂（転ぶ-裂ける）	抬累（持ち上げる-疲れる）	听烦（聞く-うんざりする）
摔破（転ぶ-破れる）	躺晕（横になる-くらくらする）	听惯（聞く-慣れる）
摔烂（転ぶ-ぐちゃぐちゃだ）	躺膩（横になる-飽きる）	听累（聞く-疲れる）
摔响（転ぶ-音がする）	烫直（ねっする-まっすぐだ）	听愣（聞く-ぼんやりする）

摔青（転ぶ-青い）	烫弯（ねっする-曲がる）	听困（聞く-眠る）
摔散（転ぶ-ばらばらになる）	烫穿（ねっする-突き通る）	听懂（聞く-わかる）
摔断（転ぶ-折れる）	烫死（ねっする-死ぬ）	捅开（突く-開く）
摔瘸（転ぶ-びっこを引く）	烫卷（ねっする-巻く）	捅瞎（突く-失明する）
摔倒（転ぶ-倒れる）	烫焦（やけどする-焦げる）	捅死（突く-死ぬ）
摔瘪（転ぶ-凹む）	烫红（やけどする-赤い）	痛醒（痛い-醒める）
摔扁（転ぶ-平らだ）	烫坏（やけどする-壊れる）	痛晕（痛い-くらくらする）
甩干（転ぶ-白い）	烫伤（やけどする-傷つく）	痛死（痛い-死ぬ）
甩脏（転ぶ-白い）	疼醒（痛む-覚める）	偷怕（盗む-怖がる）
涮净（すすぐ-きれいだ）	疼死（痛む-覚める）	偷惯（盗む-慣れる）
睡惯（寝る-慣れる）	踢坏（蹴る-壊れる）	涂红（塗る-赤い）
睡塌（寝る-倒れる）	踢翻（蹴る-ひっくり返る）	涂绿（塗る-青い）
说烦（話す-うんざりする）	踢倒（蹴る-倒れる）	推倒（押す-倒れる）
说哑（話す-うんざりする）	踢肿（蹴る-腫れる）	推平（押す-平らだ）
说渴（話す-のどが乾く）	踢破（蹴る-破れる）	推醒（押す-覚める）
说惯（話す-慣れる）	踢开（蹴る-離れる）	拖死（引く-死ぬ）
说哭（話す-泣く）	踢歪（蹴る-歪む）	拖烂（引く-ボロボロになる）
说困（話す-眠る）	踢伤（蹴る-傷つく）	拖断（引く-折れる）
说恼（話す-怒る）	踢断（蹴る-折れる）	拖脏（引く-汚れる）
撕断（裂く-折れる）	踢紫（蹴る-紫色になる）	挖折（掘る-折れる）
撕坏（裂く-壊れる）	踢飞（蹴る-飛ぶ）	挖穿（掘る-突き通る）
挖腻（掘る-飽きる）	踢死（蹴る-死ぬ）	吓昏（驚く-気が遠くなる）
挖倒（掘る-倒れる）	问烦（聞く-うんざりする）	吓呆（驚く-ぼうぜんとする）
挖垮（掘る-崩れる）	问累（聞く-疲れる）	吓病（驚く-病気になる）
挖宽（掘る-広い）	问哭（聞く-泣く）	削尖（削る-尖がる）
挖烂（掘る-ボロボロになる）	问惯（聞く-慣れる）	削断（削る-切れる）
挖累（掘る-疲れる）	窝弯（折り曲げる-曲がる）	笑疼（笑う-痛む）
挖裂（掘る-裂ける）	窝圆（折り曲げる-丸い）	笑醒（笑う-覚める）
挖破（掘る-破れる）	握暖（握る-暖まる）	笑弯（笑う-曲がる）

挖伤（掘る-傷つく）	握惯（握る-慣れる）	写疼（笑う-痛む）
挖碎（掘る-砕ける）	捂酸（かぶせる-酸っぱい）	写膩（笑う-飽きる）
挖塌（掘る-倒れる）	捂熟（かぶせる-炊ける）	写酸（笑う-だるい）
挖疼（掘る-痛い）	捂病（かぶせる-病気になる）	擤疼（鼻をかむ-痛む）
挖平（掘る-平らだ）	捂胀（かぶせる-膨れる）	修坏（修理する-壊れる）
挖钝（掘る-鈍い）	捂坏（かぶせる-腐る）	羞红（恥ずかしが-赤い）
挖弯（掘る-曲がる）	捂疼（かぶせる-酸っぱい）	学膩（学ぶ-飽きる）
挖断（掘る-折れる）	捂死（かぶせる-死ぬ）	学猾（学ぶ-狡い）
挖烦（掘る-うんざりする）	捂灭（かぶせる-消える）	熏黑（熏す-黒い）
挖惯（掘る-慣れる）	捂惯（かぶせる-慣れる）	熏跑（熏す-逃げる）
挖歪（掘る-歪む）	捂红（かぶせる-赤い）	熏疼（熏す-痛い）
弯累（屈める-疲れる）	捂傻（かぶせる-すえる）	熏死（熏す-死ぬ）
弯僵（屈める-こわばる）	捂烂（かぶせる-ボロボロだ）	熏晕（熏す-くらくらする）
玩膩（遊ぶ-飽きる）	捂热（かぶせる-熱い）	熏肿（熏す-腫れる）
玩累（遊ぶ-疲れる）	捂臭（かぶせる-臭い）	熏黄（熏す-黄色い）
玩困（遊ぶ-眠る）	捂皱（かぶせる-しわになる）	熏白（熏す-白い）
玩坏（遊ぶ-壊れる）	吸净（吸う-きれいだ）	熏糊（熏す-焦げる）
望惯（見る-慣れる）	洗净（洗う-きれいだ）	熏臭（熏す-臭い）
煨热（蒸し焼きにする-熱い）	洗累（洗う-疲れる）	压平（押さえつける-平らだ）
煨干（蒸し焼きにする-乾く）	洗白（洗う-白い）	压破（押さえつける-破れる）
围惯（取り巻く-慣れる）	洗破（洗う-破れる）	压弯（押さえつける-曲がる）
喂累（餌をやる-疲れる）	洗病（洗う-病気になる）	压疼（押さえつける-痛い）
喂圆（餌をやる-丸い）	洗湿（洗う-濡れる）	压薄（押さえつける-薄い）
喂饱（餌をやる-満腹する）	洗脏（洗う-汚れる）	压倒（押さえつける-倒れる）
喂惯（餌をやる-慣れる）	吓醒（驚く-覚める）	吓呆（驚く-ぼうぜんとする）
喂瘦（餌をやる-やせる）	吓跑（驚く-走る）	吓病（驚く-病気になる）
喂肥（餌をやる-太る）	吓晕（驚く-気を失う）	笑疼（笑う-痛む）
闻惯（嗅ぐ-慣れる）	吓白（驚く-白い）	笑醒（笑う-覚める）
闻膩（嗅ぐ-飽きる）	吓傻（驚く-ぼうぜんとする）	笑弯（笑う-曲がる）

削尖（削る-尖がる）	演煩（演じる-うんざりする）	咬坏（噛む-壊れる）
削断（削る-切れる）	演慣（演じる-慣れる）	咬破（噛む-破れる）
吓怕（驚く-怖がる）	演膩（演じる-疲れる）	咬跑（噛む-逃げる）
吓哭（驚く-泣く）	仰酸（あおむける-だるい）	咬怕（噛む-怖がる）
闻饱（嗅ぐ-飽きる）	养胖（飼う-太る）	摇断（ゆする-折れる）
压碎（押さえつける-壊れる）	养懶（飼う-けだるい）	咬裂（噛む-裂ける）
压平（押さえつける-平らだ）	养瘦（飼う-やせる）	咬烂（噛む-傷つく）
压折（押さえつける-折れる）	养肥（飼う-肥える）	摇慣（ゆする-慣れる）
压灭（押さえつける-消える）	养傻（飼う-ぼうぜんとする）	摇醒（ゆする-覚める）
压麻（押さえつける-しびれる）	养膩（飼う-飽きる）	咬穿（噛む-突き通る）
压烂（押す-ぐちゃぐちゃだ）	养慣（飼う-慣れる）	咬伤（噛む-傷つく）
压沉（押さえつける-沈む）	咬瞎（噛む-失明する）	摇碎（ゆする-砕ける）
压瘪（押さえつける-凹む）	咬疼（噛む-痛い）	药死（毒殺する-死ぬ）
压塌（押さえつける-倒れる）	咬塌（噛む-倒れる）	噎死（喉に詰まる-死ぬ）
压歪（押さえつける-歪む）	咬死（噛む-死ぬ）	医瞎（治療する-失明する）
压坏（押さえつける-壊れる）	咬肿（噛む-腫れる）	医死（治療する-死ぬ）
压断（押さえつける-切れる）	咬碎（噛む-壊れる）	溢湿（こぼれる-濡れる）
压伤（押さえつける-傷つく）	咬慣（噛む-慣れる）	游慣（泳ぐ-慣れる）
压裂（押さえつける-裂ける）	咬断（噛む-切れる）	游累（泳ぐ-疲れる）
压皱（押さえつける-皺になる）	咬醒（噛む-覚める）	熨坏（アイロンをかける-壊れる）
腌咸（漬ける-しょっぱい）	咬折（噛む-切れる）	

合計：1532 語